

# 基地内埋蔵文化財調査報告書 V

平成18・19年度 基地内遺跡ほか発掘調査事業

－ 普 天 間 飛 行 場 基 地 内 －

遺跡発掘事前総合調査  
(第5・6期試掘調査)

2009年(平成21年)3月

沖縄県宜野湾市教育委員会

# 基地内埋蔵文化財調査報告書 V

平成18・19年度 基地内遺跡ほか発掘調査事業

－ 普 天 間 飛 行 場 基 地 内 －

遺跡発掘事前総合調査  
(第5・6期試掘調査)

2009年(平成21年)3月  
沖縄県宜野湾市教育委員会



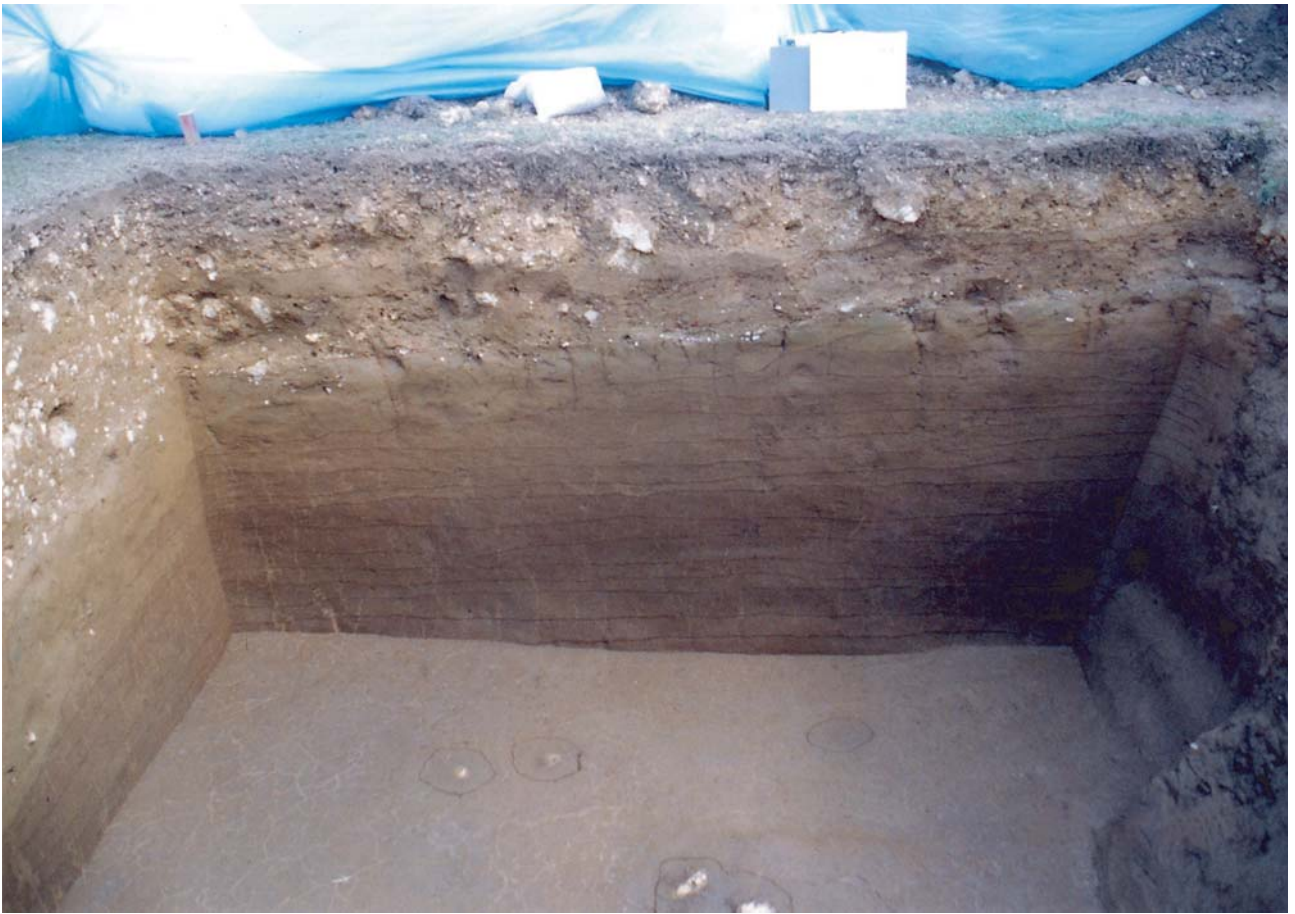
巻頭図版 1 調査区全体



巻頭図版2 フテ 10-G10-ス (東壁)



巻頭図版3 フテ 10-G10-ス (遺構検出状況)



巻頭図版4 フテ 11-G1-ス (東壁)



巻頭図版5 フテ 11-G1-ス (遺構検出状況)



巻頭図版6 フテ 6-I4-A (北壁)



巻頭図版7 フテ 6-I4-A (遺構検出状況)



巻頭図版8 フテ6-I4-ア (遺構検出状況)



巻頭図版9 フテ6-I4-ア (遺構半截状況)



卷頭図版 10 フテ 6-J5-ア (東壁)



卷頭図版 11 フテ 6-J5-ア (遺物出土状況)





卷頭図版 12 フテ 6-J6-ア (東壁)



卷頭図版 13 フテ 6-J6-ア (遺構検出状況)

## 序

本報告書は平成18～19年度にかけて宜野湾市教育委員会が実施した、普天間飛行場基地内における基地内埋蔵文化財の遺跡発掘事前総合調査の成果をまとめたものであります。本調査は宜野湾市に所在する在沖米軍海兵隊基地内の埋蔵文化財の分布状況及びその範囲を把握するために、文化庁の補助を受け平成13年度から実施している継続事業であります。

平成21年3月現在、普天間飛行場基地内の北～南東域において、試掘調査による遺跡発掘事前総合調査を732箇所、範囲確認調査を8箇所実施しており、今回の報告では平成18～19年度に実施した遺跡発掘事前総合調査の概要について掲載しています。

今回報告する遺跡発掘事前総合調査においては、本事業において詳細な試掘調査が未着手な地域である新城古集落遺跡の西側地域や上原濡原遺跡一帯の調査を実施しており、これまでの調査成果を補完する成果が得られております。

この遺跡発掘事前総合調査の成果が、普天間飛行場基地内における開行為の事前協議等の資料としてではなく、広く市民の歴史的教材ないしは文化財の保護・活用資料として生かされ、歴史学等の学術資料として御検討いただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、調査を実施するにあたり多大な御協力を賜りました文化庁文化財部と沖縄県教育庁文化課、沖縄県立埋蔵文化財センター、並びに貴重な御指導・御助言を賜りました文化財保護審議会の先生方を初めとする諸先生方と関係各位に対して厚く御礼申し上げます。さらに、普天間飛行場基地内への立入手続きや現地調査の円滑化に多大なる御協力を賜りました軍用土地等地主会の皆様、並びに在沖米軍海兵隊環境保全課と関係各位に対しまして心から感謝申し上げます。

2009年（平成21年）3月

沖縄県宜野湾市教育委員会  
教育長職務代行者  
教育部長 新田 和夫

## 例 言

1. 本報告書は平成 13 年度から文化庁の補助を受け、宜野湾市教育委員会が実施している宜野湾市内における在沖米軍海兵隊基地の埋蔵文化財調査の報告として、普天間飛行場基地内にて平成 18～19 年度に実施した試掘調査を中心とした遺跡発掘事前総合調査の概要を記したものである。
2. 普天間飛行場基地内における現地調査の実施にあたっては、在沖米軍海兵隊環境保全課と沖縄県教育庁文化課並びに沖縄県立埋蔵文化財センターの協力を得た。
3. 本書に掲載した地形図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図 1 / 2500 を使用しているが、調査範囲内については、平成 15 年度に沖縄中央エンジニアリングに委託した地形測量図 1 / 500 をもとに加筆修正をして使用している。また、調査壁面及び遺構面については、特に調査員による実測作業を必要とするものを除き、財団法人 京都市埋蔵文化財研究所にオルソ画像作成及びデジタルトレースを委託した。その他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営している GIS データを使用している。
4. 本書に掲載した地形図及び範囲確認調査・試掘調査地点の座標軸は、国土座標軸（旧座標系）第 XV 座標系を使用した。
5. 本書の土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』2005 年度版を使用した。
6. 本書の執筆は、仲村 健・城間 肇・伊藤 圭・上田圭一・橋本真紀夫・斎藤崇人があたり、執筆分担は下記する一覧に記してある。なお、本書の編集は翁長和佳子・宮里みどり・稲嶺恵利奈の協力を得て仲村 健が行った。

仲村 健（宜野湾市教育委員会 文化課 文化財保護係 主任主事）  
第 I 章、第 V 章 第 1 節・第 2 節・第 4 節、第 VI 章

城間 肇（宜野湾市教育委員会 文化課 文化財保護係 主事）  
第 II 章、第 III 章

伊藤 圭（宜野湾市教育委員会 文化課 文化財保護係 嘱託職員）  
第 I 章 第 3 節、第 IV 章 第 1 節・第 2 節・第 4 節

上田圭一・橋本真紀夫・斎藤崇人（以上、パリノ・サーヴェイ株式会社）  
第 IV 章 第 3 節、第 V 章 第 3 節

7. 現地調査で得られた遺物及び実測図・写真・画像デジタルデータ・地形測量図等の各種調査記録はすべて宜野湾市教育委員会文化課において保管している。

## 目次

巻頭図版

序

例言

第I章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	4
第II章 位置と環境	7
第1節 宜野湾市の位置	7
第2節 自然的環境	12
第3節 歴史的環境	16
第4節 普天間飛行場基地内の埋蔵文化財	18
第III章 調査方法	22
第1節 試掘調査の前に	22
第2節 調査区の設定	22
第3節 調査方法	24
第IV章 第5期試掘調査報告	27
第1節 敷地分析と周知の遺跡	27
第2節 調査の成果	28
〔1〕基本層序	28
〔2〕調査の概要	30
第3節 自然科学分析の成果	64
第4節 小結	73
第V章 第6期試掘調査報告	79
第1節 敷地分析と周知の遺跡	79
第2節 調査の成果	80
〔1〕調査概要	80
〔2〕基本層序	82
〔3〕各試掘調査坑	84
第3節 自然科学分析の成果	108
第4節 小結	115
第VI章 結語	119
参考文献	120

報告書抄録

# 巻頭図版目次

巻頭図版 1	調査区全体	巻頭図版 8	第 6 期試掘調査区フテ 6-I4-A (遺構検出状況)
巻頭図版 2	第 5 期試掘調査区フテ 10-G10-ス (東壁)	巻頭図版 9	第 6 期試掘調査区フテ 6-I4-A (遺構半截状況)
巻頭図版 3	第 5 期試掘調査区フテ 10-G10-ス (遺構検出状況)	巻頭図版 10	第 6 期試掘調査区フテ 6-J5-A (東壁)
巻頭図版 4	第 5 期試掘調査区フテ 11-G1-ス (東壁)	巻頭図版 11	第 6 期試掘調査区フテ 6-J5-A (遺物出土状況)
巻頭図版 5	第 5 期試掘調査区フテ 11-G1-ス (遺構検出状況)	巻頭図版 12	第 6 期試掘調査区フテ 6-J6-A (東壁)
巻頭図版 6	第 6 期試掘調査区フテ 6-I4-A (北壁)	巻頭図版 13	第 6 期試掘調査区フテ 6-J6-A (遺構検出状況)
巻頭図版 7	第 6 期試掘調査区フテ 6-I4-A (遺構検出状況)		

# 図目次

第 1 図	宜野湾市の位置図	第 41 図	万 10-A4-タ試掘坑の位置と第 5 期試掘調査の主な遺構分布状況
第 2 図	宜野湾市の土地利用図	第 42 図	各試掘坑断面図⑩万 11-G1-ス (東)
第 3 図	宜野湾市地形利用図 1	第 43 図	各試掘坑断面図⑪万 20-C2-ア
第 4 図	宜野湾市地形利用図 2	第 44 図	各試掘坑断面図⑫万 11-G1-ナ・万 11-I1-ナ
第 5 図	宜野湾市の地形断面モデル A～F ライン設定図	第 45 図	各試掘坑断面図⑬万 10-E7-イ・万 10-E8-イ
第 6 図	宜野湾市の地形断面モデル	第 46 図	各試掘坑断面図⑭万 10-E9-ス・万 10-H10-ノ
第 7 図	宜野湾市地形分布図	第 47 図	各試掘坑断面図⑮万 10-I9-ア
第 8 図	宜野湾市の植生図	第 48 図	第 5 期調査区 米軍接收後における大規模土地改変推定範囲
第 9 図	宜野湾市遺跡変遷図	第 49 図	各試掘坑断面図⑯万 10-I9-オ・万 10-J10-ア
第 10 図	宜野湾市の埋蔵文化財	第 50 図	各試掘坑断面図⑰万 11-G1-コ・万 11-I2-ア
第 11 図	普天間飛行場基地内試掘・確認調査フローチャート	第 51 図	各試掘坑断面図⑱万 11-I2-オ～万 11-I3-ア
第 12 図	普天間飛行場基地内グリッド設定図	第 52 図	各試掘坑断面図⑲万 11-J3-ア・万 19-A10-ア
第 13 図	第 5 期・6 期調査区 試掘調査箇所	第 53 図	各試掘坑断面図⑳万 20-A1-ア・万 20-A2-ア
第 14 図	第 5 期試掘調査範囲 (昭和 20 年)	第 54 図	各試掘坑断面図㉑万 20-B1-ア・万 20-B2-ア
第 15 図	第 5 期調査区 周辺遺跡分布図	第 55 図	各試掘坑断面図㉒万 20-B2-ヌ・万 20-B3-ア
第 16 図	基本層序 (合成画像柱状図)	第 56 図	試掘坑の基底および累重様式の平面分布
第 17 図	第 5 期調査区における堆積状況画像柱状図	第 57 図	調査範囲の地形と各地点の状況
第 18 図	第 5 期調査区 試掘調査実施箇所	第 58 図	第 5 期試掘調査区におけるⅧ層の標高と傾斜方向
第 19 図	第 5 期調査区 遺構検出状況	第 59 図	第 5 期試掘調査区における基盤層 (Ⅷ層) 及びマージの堆積状況
第 20 図	Ⅱ層ユニット①の分布状況	第 60 図	第 5 期試掘調査区におけるⅧ層推定コンター
第 21 図	Ⅱ層ユニット②の分布状況	第 61 図	上原東原遺跡南側における基盤層 (Ⅷ層) 及びマージの堆積状況
第 22 図	Ⅱ層ユニット③・④の分布状況	第 62 図	第 6 期調査区 試掘箇所と周辺遺跡分布図
第 23 図	第 5 期 Ⅱ層検出状況	第 63 図	第 6 期調査区 試掘調査箇所
第 24 図	各試掘坑断面図①万 10-D8-ア・万 10-E9-ア	第 64 図	第 6 期調査区試掘調査 遺構検出状況
第 25 図	各試掘坑断面図②万 10-F7-ス	第 65 図	第 6 期調査区試掘調査 遺物出土状況
第 26 図	各試掘坑断面図③万 10-F9-カ	第 66 図	第 6 期調査区試掘調査箇所 (背景は昭和 20 年)
第 27 図	各試掘坑断面図④万 10-F8-イ・万 10-F8-ク	第 67 図	第 6 期調査区試掘調査 Ⅱ層検出状況
第 28 図	各試掘坑断面図⑤万 10-F10-ス	第 68 図	第 6 期調査区における堆積状況画像柱状図①、②
第 29 図	各試掘坑断面図⑥万 10-F9-ス・万 10-F10-ア	第 69 図	第 6 期試掘調査 第一地区
第 30 図	各試掘坑断面図⑦万 10-G8-ケ	第 70 図	各試掘坑断面図①万 5-H3-ナ
第 31 図	各試掘坑断面図⑧万 10-G7-ノ・万 10-G8-ア	第 71 図	各試掘坑断面図②万 5-I4-ア
第 32 図	各試掘坑断面図⑨万 10-H9-ア	第 72 図	各試掘坑断面図③万 5-I6-ア
第 33 図	各試掘坑断面図⑩万 10-G9-ア・万 10-G9-オ	第 73 図	各試掘坑断面図④万 5-J5-ア
第 34 図	迫地周辺の試掘坑	第 74 図	各試掘坑断面図⑤万 5-J6-コ
第 35 図	各試掘坑断面図・平面図⑪万 10-G10-ス (北・東・平面)	第 75 図	各試掘坑断面図・平面図⑥万 5-I6-リ
第 36 図	各試掘坑断面図⑫万 10-H10-ア・万 10-G10-ス (南)	第 76 図	各試掘坑断面図⑦万 5-J9-サ
第 37 図	各試掘坑断面図⑬万 11-G1-ア (西・北)	第 77 図	各試掘坑断面図⑧万 11-A5-オ
第 38 図	各試掘坑断面図・平面図⑭万 10-H10-ス・万 11-G1-ア (東・平面)	第 78 図	各試掘坑断面図⑨万 11-A6-コ・万 11-A7-オ
第 39 図	各試掘坑断面図・平面図⑮万 11-G1-ス (西・北・平面)	第 79 図	第 6 期試掘調査 第二地区
第 40 図	フテ 10-A4-タ遺構検出状況	第 80 図	各試掘坑断面図・平面図⑩万 5-I10-ノ

第 81 図	各試掘坑断面図⑪㍿ 6-H2-イ	94	第 89 図	各試掘坑断面図⑲㍿ 6-J6-ア (北・東)	102
第 82 図	各試掘坑断面図⑫㍿ 6-H3-ア・㍿ 6-I2-ウ	95	第 90 図	各試掘坑断面図・平面図⑳㍿ 6-J6-ア (南・西・平面)	103
第 83 図	各試掘坑断面図・平面図⑬㍿ 6-I4-ア (遺構断面・平面)	96	第 91 図	各試掘坑断面図⑳㍿ 6-J1-ナ・㍿ 6-J2-ア・㍿ 6-J2-オ	104
第 84 図	各試掘坑断面図⑭㍿ 6-I4-ア (北・東・南)	97	第 92 図	第 6 期試掘坑の基底および累重様式の平面分布	113
第 85 図	各試掘坑断面図⑮㍿ 6-I5-イ	98	第 93 図	調査範囲の地形と各地点の状況 (1)	113
第 86 図	各試掘坑断面図⑯㍿ 6-I6-カ・㍿ 6-J4-ア	99	第 94 図	明治 36 年土地利用図と試掘箇所	115
第 87 図	各試掘坑断面図⑰㍿ 6-J5-ア	100	第 95 図	地形分類図と試掘箇所	116
第 88 図	各試掘坑断面図⑱㍿ 6-J7-イ・㍿ 6-J8-ア	101	第 96 図	検出遺構配置図 (1992 年と 2007 年試掘)	116

## 図版目次

図版 1	昭和 20 年の空中写真 (普天間飛行場全景)	6	図版 9	第 5 期調査区 作業状況	77
図版 2	昭和 20 年 宜野湾市全景	10	図版 10	第 5 期調査区 遺構検出状況	78
図版 3	平成 14 年 宜野湾市全景	10	図版 11	㍿ 6-A6-㍿ 出土遺物	89
図版 4	普天間基地内の主な遺跡	19	図版 12	土器 (㍿ 6-J5-ア II n 層出土)	89
図版 5	試掘調査作業工程イメージ	25	図版 13	石器 (㍿ 6-J4-ア II i 層出土)	89
図版 6	遺物検出状況	44	図版 14	調査範囲の地形と各地点の状況 (2)	114
図版 7	岩石顕微鏡写真	70	図版 15	第 6 期調査区 遠景・近景	117
図版 8	第 5 期調査区 遠景・近景	76	図版 16	作業状況	118

## 表目次

第 1 表	文献資料にみる宜野湾の村名一覧	9	第 12 表	微細物分析結果	67
第 2 表	宜野湾市の埋蔵文化財一覧	21	第 13 表	土壌理化学分析結果	68
第 3 表	基本層序の土色一覧	29	第 14 表	第 6 期試掘調査データ一覧 a	105
第 4 表	第 5 期試掘調査データ一覧 a	60	第 15 表	第 6 期試掘調査データ一覧 b	106
第 5 表	第 5 期試掘調査データ一覧 b	61	第 16 表	第 6 期試掘調査データ一覧 c	107
第 6 表	第 5 期試掘調査データ一覧 c	62	第 17 表	分析試料及び分析項目一覧	108
第 7 表	第 5 期試掘調査データ一覧 d	63	第 18 表	放射性炭素年代測定結果	109
第 8 表	18 年度基地内調査の分析試料及び分析項目一覧	64	第 19 表	暦年較正結果	109
第 9 表	放射性炭素年代測定結果	65	第 20 表	花粉分析・微分炭分析結果	110
第 10 表	暦年較正結果	66	第 21 表	微細物分析結果	111
第 11 表	花粉分析・微粒炭分析結果	66	第 22 表	土壌理化学分析結果	111

# 第 I 章 調査に至る経緯

## 第 1 節 調査に至る経緯

本県は第二次世界大戦において、1945（昭和 20）年 4 月の渡嘉敷、座間味及び嘉手納・北谷・読谷方面の米軍上陸に始まり、6 月 23 日の牛島中将の自決まで地上戦が行われ、日米軍属のみならず沖縄県民をも巻き込み多くの尊い命が失われた。本市宜野湾でも、嘉数高地での激戦があり多数の死者を出している。

米軍はこの大戦中であって占領した地域に基地建設を次々に行い、広大な土地を占有していった。本書の調査対象にしている普天間飛行場基地もそれまでは田園風景が続くのどかな一村落であったが、1945 年（昭和 20）12 月には既に基地建設を行っている様子が空中写真でも確認できる。その範囲は現在の基地とほぼ同じ規模で、その後何回かの造成等があり、現在に至っている。

その後、沖縄は日本の独立後も米軍の施政下に置かれ 1972 年に本土復帰を果たしたものの、戦後 60 余年が経過した今日に至っても、この状況は変わらず、これに起因する諸問題が市民生活に深刻な影響を及ぼしており、基地内に所在する文化財についてもその保護と活用が恒常的な問題となっている。

1996（平成 8）年日米合同委員会における S A C O 最終報告で普天間飛行場基地を含む 11 施設・区域の返還が合意されたのを契機に、返還跡地利用における再開発事業と文化財保護の円滑な推進を図るための具体的協議が本格的に取り組みられることとなった。

普天間飛行場基地内における埋蔵文化財の所在状況に係る調査については、沖縄県が中心となりつつ、宜野湾市も共同（支援）してこれに取り組むことが「跡地対策準備委員会」において確認されており、これを受けて平成 13 年度より文化庁の補助を受けて国庫補助事業として予算化し、「基地内遺跡発掘事前総合調査事業」として着手させ、平成 15 年度からは市内遺跡調査事業と予算を一本化して「基地内遺跡ほか発掘調査事業」として事業名を変更し、より効率的に事業を進捗させている。

基地内遺跡ほか発掘調査事業の事業目的としては、大規模な開発が予想される普天間飛行場基地内の埋蔵文化財の所在・範囲・性格を明らかにするために、試掘・確認調査を実施し、当該地域における埋蔵文化財の保存のための資料とすることを大きな目的にしている。これにより、試掘調査によって埋蔵文化財の基本的な所在が把握でき、遺跡地図（分布図）の作成ほか、範囲確認調査により再開発事業を円滑に実施する上で非常に重要となる、より精緻な遺跡地図の作成ならびに遺跡の範囲・正確の把握が可能となる。

調査を実施するに際しては、調査支援を目的として民間調査機関の活用を積極的に図ることも「跡地対策準備委員会」において確認されており、宜野湾市における具体的な導入例としては、地形測量、危険物・埋設物確認のための磁気探査、バックホー等の重機による機械掘削、デジタル画像解析、デジタルトレース、各種写真・図面のデジタル保存、地中レーダー・電気探査等の物理探査などがある。

なお、これまでの事業経過として、平成 13・14 年度にかけて普天間飛行場基地内の北東から南東域において 589 箇所を試掘調査成果の概略をまとめた「基地内埋蔵文化財調査報告書 I」を平成 16 年度に試掘調査 74 箇所、範囲確認調査 2 箇所の調査成果をまとめた「基地内埋蔵文化財調査報告書 II」を報告し、「基地内 III」では平成 15 から 18 年度にかけて行った野嵩タマタ原遺跡西側平坦地、宜野湾・神山シリガーラ流域古墓群、赤道渡呂寒原屋取古集落跡、赤道渡呂寒原洞穴遺跡の範囲確認調査及び分布調査を報告し、「基地内 IV」では平成 15 から 19 年度にかけて行った神山テラガマ洞穴遺跡、神山原遺跡、神山後原ウシナー闘牛場跡の範囲確認調査を報告した。今回は平成 18・19 年度に実施した試掘調査の報告をする。

尚、上記に挙げた遺跡のほかにもこれまで実施した調査は資料整理が終え次第、順次報告する予定である。

## 第2節 調査体制

本書に記載している第5期、第6期試掘調査については、平成18・19年度にかけて実施し、資料整理および報告書作成に係る整理業務は、平成20年度にかけて実施した。なお、調査体制は下記のとおりである。

事業主体	沖縄県宜野湾市教育委員会		
事業責任者	教育長		普天間朝光（平成18～20年度）
	教育長職務代行者		新田 和夫（平成20年度）
事業総括	教育部 教育部長		外間 伸儀（平成18年度）
	“ “		新田 和夫（平成18・19年度）
	“ 教育次長		新田 和夫（平成18年度）
	“ “		伊佐 友孝（平成18～20年度）
	文化課 課長		城間 盛久（平成18年度）
	“ “		和田 敬悟（平成19・20年度）
事業事務	文化課 文化財保護係長		呉屋 義勝（平成18年度）
	“ “		豊里 友哉（平成19・20年度）
	“ 文化財保護係主任主事		仲村 健（平成18～20年度）
	“ “ 主事		城間 肇（平成18～20年度）
	“ “ 主事		森田 直哉（平成18年度）
	“ 臨時職員		西銘 五月（平成18・19年度）
	“ “		野原 美幸（平成20年度）
調査業務	“ 文化財保護係主任主事		仲村 健（平成18～20年度）
	“ “ 主事		城間 肇（平成18～20年度）
	“ “ 主事		森田 直哉（平成18年度）
	“ 嘱託職員		伊藤 圭（平成19・20年度）
調査作業員	“ 臨時職員		上里やよい、仲松光子、米須富士江、伊波晴美、比嘉ムツ子（平成18年度）、宮城常正、津波古美津江、德里末子、伊佐美幸、町田弘美、宮里みどり（平成18年度）、友利久美子、岸本静子、伊波加代子、渡久地美江子、上運天賢、村越克己、崎山幸子、宮城和江、宮城真由美、比嘉武也（平成18～20年度）
資料整理業務	“ 文化財保護係主任主事		仲村 健（平成18～20年度）
	“ “ 主事		城間 肇（平成18～20年度）
	“ “ 主事		森田 直哉（平成18年度）
	“ 嘱託職員		仲田 初枝（平成19年度）
	“ “		伊藤 圭（平成19・20年度）
	“ “		杉村千重美（平成19・20年度）



資料整理業務	//	嘱託職員	許田 栄美 (平成 20 年度)
	//	//	伊禮さおり (平成 20 年度)
	//	//	古謝 和美 (平成 20 年度)
資料整理作業員	//	臨時職員	新田政江、伊波晴美 (平成 18 年度)、田盛謹代、古謝和美、喜名ひとみ、杉村千重美(平成 18 年度)、平川邦子、池田一美、真志喜正枝、山田葉月、原田円、伊佐祐姫、翁長和佳子、比嘉ムツ子、宮里みどり、宮平優子、新垣綾子、比嘉美香、稲嶺恵利奈 (平成 18～20 年度)
委託業務	オルソ画像作成等 (第 5 期・第 6 期)		(財)京都市埋蔵文化財研究所 (平成 18～20 年度)
	自然科学分析調査 (第 5 期・第 6 期)		パリノ・サーヴェイ株式会社 (平成 18・19 年度)
	磁気探査・測量・土工 (第 5 期)		新開技研 (平成 18 年度)
	// (第 6 期)		新藤土質調査 (平成 19 年度)
	物理探査 (第 5 期)		応用地質株式会社 (平成 18 年度)

調査指導及び調査協力 (職名等は当時)

調査指導および調査協力 (職名等は当時) 調査指導および調査協力者として以下の方々に指導を仰いだ。

坂井 秀弥	文化庁文化財部記念物課	主任文化財調査官
禰宜田佳男	//	文化財調査官
清野 孝之	//	文化財調査官
渡辺 丈彦	//	文化財調査官
島袋 洋	沖縄県教育庁文化課	記念物班長
瀬戸 哲也	//	主任
久高 健	//	指導主事
金城 亀信	沖縄県立埋蔵文化財センター	調査課 主幹
中山 晋	//	// 主任
知念 隆博	//	// 主任
又吉 信一	宜野湾市軍用土地等地主	会長
嵩元 政秀	宜野湾市文化財保護審議会	会長
宮城 邦治	沖縄国際大学	教授
池田 榮史	琉球大学	教授

### 第3節 調査経過

今回の報告書には第5期と第6期の試掘調査の成果を掲載している。第5期は平成18年度、第6期は平成19年度それぞれ実施している。調査許可は1年ごとの更新で、第5期・第6期ともに年度初頭に在沖米海兵隊の外交政策部（G-5）へ調査許可申請をし、その許可後は米海兵隊環境保全課をとおして、普天間飛行場基地司令へ基地への立ち入り申請を行い、その許可を経て基地への立ち入りが可能となる。試掘・確認調査等の掘削を伴う調査は手堀、重機掘削ともに事前の磁気探査を義務づけられており、また、水道管・電気・電話線等の地中配管の確認のため米海兵隊不動産管理事務所のユーティリティークリアランス許可後に掘削・調査を行った。

#### 第5期試掘調査（平成18年度）

第5期試掘調査は、2007年2月13日から同年2月26日にかけて普天間飛行場基地内東側地域の緑地帯部分並びに芝地部分（野嵩・新城地区）の43箇所を実施した。

調査はG-5より調査許可後に、基地内司令官よりの普天間飛行場立ち入り許可申請を行い、その受理後に調査個所の選定と実施計画書の作成後に指名入札を行い、磁気探査・測量・土工を有限会社新開技研に委託、また、オルソ画像での図面作成で（財）京都市埋蔵文化財研究所、自然科学分析でパリノ・サーヴェイ株式会社、物理探査で応用地質株式会社との契約締結を行った。試掘調査個所の位置出し、調査個所表層の磁気探査の後に、ユーティリティークリアランス許可を経て、2月13日にバックホーでの掘削を開始した。調査は本市の文化財担当者を筆頭に、臨時職員14名、図面作成2名、自然科学分析の担当者2名と上記磁気探査、重機オペレーター等で行っている。調査方法の詳細は調査方法を参照されたい。調査終了後は木々の移植や芝張り替え等の現状復旧を行った。調査経過は以下のとおりである。

2月13日（調査1日目）フテ20-B2-ア、フテ20-C2-ア、フテ20-B1-アの3箇所を掘削する。フテ20-C2-アでは、沖縄産の陶器が出土。この試掘坑の一部を除いていずれも戦後の埋土であった。3箇所とも壁面図作成。また、フテ20-C2-アで検出されたⅡ層中から自然化学分析用の試料を採取する。

2月14日（調査2日目）雨天のため、作業中止。

2月15日（調査3日目）フテ20-B3-ア、フテ19-A10-ア、フテ20-A1-ア、フテ20-A2-ア、フテ20-B2-ヌ、フテ10-J10-アの6箇所を掘削する。いずれも戦後の埋土。壁面図を作成。

2月16日（調査4日目）フテ10-I8-ノ、フテ10-I9-ア、フテ10-I9-オ、フテ11-I1-ナ、フテ10-G8-ア、フテ10-G9-ア、フテ10-F8-イ、フテ10-F9-カの8箇所を掘削する。フテ11-I1-ナでは、東壁面に溝状遺構を検出。遺構覆土から自然科学分析用の資料を採取する。フテ10-I8-ノ南壁は崩落の恐れがあるため分層を中止。その他は、いずれも壁面図を作成する。

2月19日（調査5日目）フテ10-H10-ア、フテ10-H9-ア、フテ10-E8-イ、フテ10-H10-ノ、フテ11-G1-ナ、フテ10-E9-ア、フテ10-G7-ノの7箇所を掘削する。いずれも壁面図を作成。フテ11-G1-ナ、フテ10-H10-アからそれぞれ自然化学分析用資料を採取する。

2月20日（調査6日目）フテ11-G1-ア、フテ10-F10-ア、フテ11-G1-コ、フテ11-H2-ア、フテ11-I2-ア、フテ10-G9-オの6箇所を掘削する。フテ11-G1-アにおいて、沖縄産の陶器が出土。また、西壁面Ⅱ層中と標高約79mの平面上で遺構が検出される。遺構の覆土や基本層序から理化学分析用試料を採取する。フテ11-H2-アは崩落の危険があるため、記録はスナップ写真のみに止める。フテ11-G1-アは3壁面を作図して、フテ11-H2-アを除く試掘坑はそれぞれ2壁面を作図する。

2月21日（調査7日目）フテ11-J3-ア、フテ10-D8-ア、フテ10-F9-ス、フテ10-F8-ク、フテ10-G8-ケ、フテ10-F10-スの6箇所を掘削する。いずれも壁面図を作成。

2月22日（調査8日目）フテ10-G10-ス、フテ10-F7-スの2箇所を掘削する。フテ10-G10-スにおいて、

標高約 79 m の地点で遺構を検出。3 壁面を作図し、基本層序から理化学分析用試料を採取する。フテ 10-F7-ス は 2 壁面を作図。

2 月 23 日（調査 9 日目）フテ 10-E7-イ、フテ 10-E9-ス、フテ 10-H10-スの 3 箇所を掘削する。いずれも壁面図作成。

2 月 26 日（調査 10 日目）フテ 11-G1-ス、フテ 11-I2-オ、フテ 11-I3-アの 3 箇所を掘削する。フテ 11-G1-スにおいて、標高約 79 m の地点で遺構を検出。3 壁面を作図し、基本層序から理化学分析用試料を採取する。フテ 11-I2-オは 2 壁面を、フテ 11-I3-アは 1 壁面をそれぞれ作図。

#### 第 6 期試掘調査（平成 19 年度）

第 6 期試掘調査は 2007 年 10 月 1 日から同年 10 月 12 日にかけて普天間飛行場基地内北側にある黙認耕作地東側の緑地帯から芝地部分の 26 箇所を実施した。

調査は G - 5 より調査許可後に、基地内司令官よりの普天間飛行場立ち入り許可申請を行い、その受理後に調査個所の選定と実施計画書の作成後に指名入札を行い、磁気探査・測量・土工を新藤土質調査に委託、また、オルソ画像での図面作成で（財）京都市埋蔵文化財研究所、自然科学分析でパリノ・サーヴェイ株式会社との契約締結を行った。試掘調査個所の位置出し、調査個所表層の磁気探査の後に、ユーティリティークリアランス許可を経て、10 月 1 日にバックホーでの掘削を開始した。調査は本市の文化財担当者を筆頭に、臨時職員 12 名、図面作成 2 名、自然科学分析の担当者 2 名と上記磁気探査、重機オペレーター等で行っている。調査方法の詳細は調査方法を参照されたい。調査終了後は木々の移植や芝張り替え等の現状復旧を行った。調査経過は以下のとおりである。

10 月 1 日（調査 1 日目）フテ 6-I3-ア、フテ 6-I2-ウ、フテ 5-I10-ノの 3 箇所を掘削する。いずれも 2 壁面図を作成し、フテ 5-I10-ノからはピットを検出し、平面とその断面図を作成する。また、自然科学分析用の試料を採取する。

10 月 2 日（調査 2 日目）フテ 6-I4-ア、フテ 6-I3-ア、フテ 6-H2-イを掘削する。フテ 6-I4-アにて標高約 64 m にて階段状遺構を検出し一部掘削し、その下層の標高約 62.5 m にて炭溜り遺構を検出する。平面及び断面図を作成し、自然科学分析用の試料を採取する。その他は壁面図を作成する。

10 月 3 日（調査 3 日目）フテ 6-J8-ア、フテ 6-J7-イ、フテ 6-I6-カ、フテ 6-I5-イを掘削する。フテ 6-J8-アとフテ 6-J7-イでは溝が検出される。いずれも壁面図を作成する。

10 月 4 日（調査 4 日目）フテ 6-J5-ア、フテ 6-J4-アを掘削する。フテ 6-J5-アでは東壁面の黄褐色土より石皿が出土し、自然科学分析用の試料も採取する。フテ 6-J4-アでは黄褐色土の最下層より、貝塚時代中期頃の土器が破片ではあるが 10 点ほど出土した。いずれも壁面図を作成する。

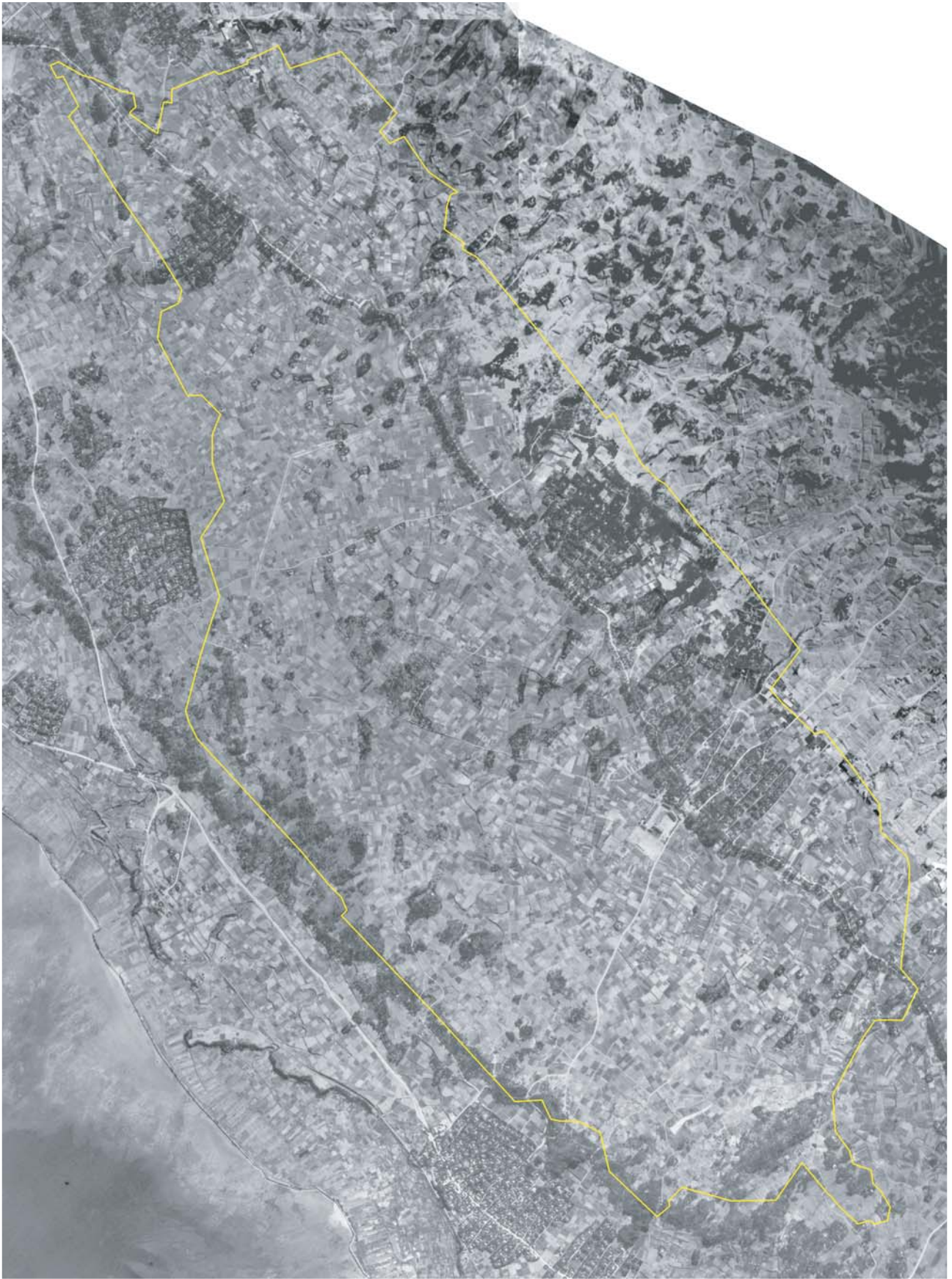
10 月 5 日（調査 5 日目）フテ 6-J2-オ、フテ 6-J2-アを掘削する。いずれも戦後の埋土であった。壁面図を作成する。

10 月 9 日（調査 6 日目）フテ 6-J1-ナ埋め、フテ 5-J9-サ埋め、フテ 11-A7-オ、フテ 5-J6-コ、フテ 11-A6-コを掘削する。フテ 6-J1-ナ、フテ 5-J9-サは埋土のみであったが、フテ 11-A7-オは近代の層序がみられ、フテ 5-J6-コ、フテ 11-A6-コは溝が検出される。いずれも壁面図を作成する。

10 月 10 日（調査 7 日目）フテ 5-I6-ソ、フテ 11-A5-オ、フテ 5-J5-ア、フテ 5-I6-アを掘削する。フテ 5-I6-ソではピットが 3 基検出される。フテ 11-A5-オでは溝が検出される。いずれも壁面図を作成する。

10 月 11 日（調査 8 日目）フテ 5-I4-ア、フテ 5-H3-ナを掘削する。いずれも壁面図を作成する。

10 月 12 日（調査 9 日目）フテ 6-J6-アを掘削する。耕作痕と思われる不定形なピット群が検出され、3 壁面と平面図作成を作成する。



図版 1 昭和 20 年の空中写真（普天間飛行場全景）

## 第Ⅱ章 位置と環境

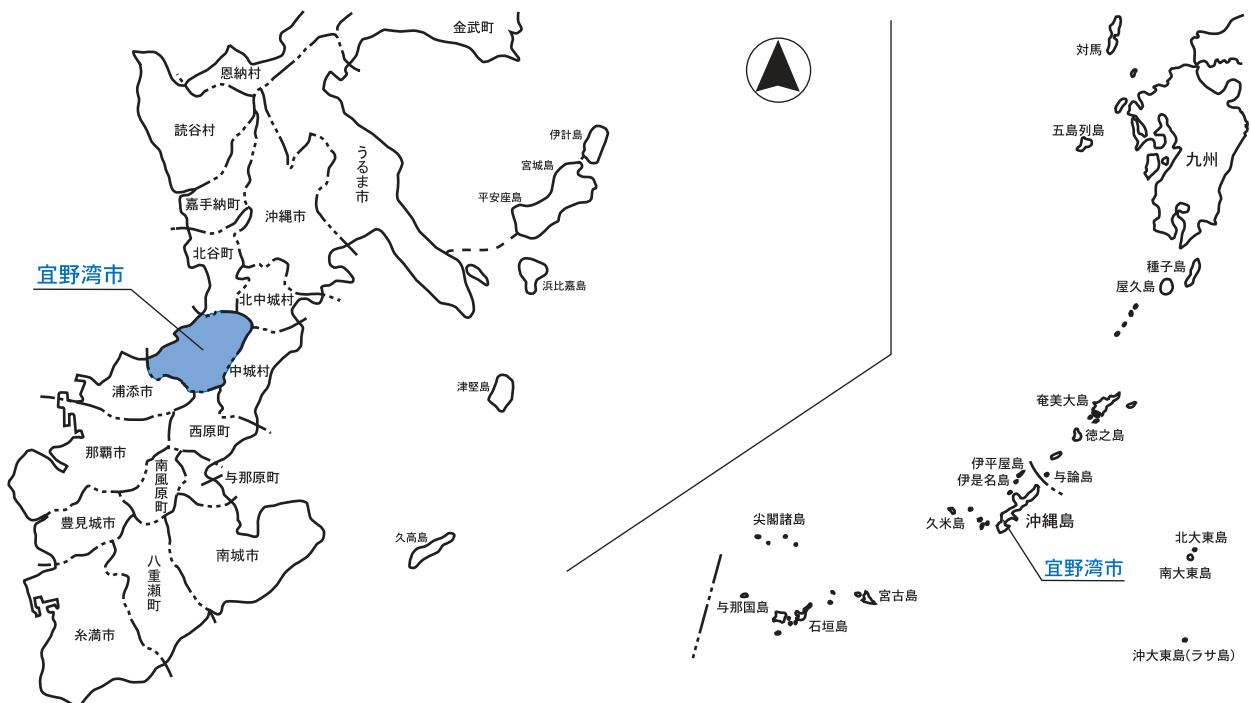
### 第1節 宜野湾市の位置

#### 宜野湾市の位置

宜野湾市は、沖縄本島中部西海岸にあって東シナ海に面し、周辺市町村は北谷町・北中城村・中城村・西原町・浦添市が隣接する。県庁所在地の那覇市からは北に 12.4 km離れた地点に位置しており、市域には国道 58 号線、330 号線等の主要幹線が、市民の居住区域の展開とともに普天間飛行場基地の外縁部に廻っている。さらには、沖縄自動車道北中城 IC・西原 IC へのアクセス道路として、県道宜野湾北中城線や 34 号線などの県内主要幹線道路も市域を縦横に展開し、沖縄本島中南部と北部地域を結ぶ要所となっている。

本市の総面積は 19.37k m<sup>2</sup>を占めており、略東西 6.1 km、略南東 5.2 kmの略長方形を呈している。市域の北側にはキャンプ瑞慶覧、中央には普天間飛行場基地が占拠し、市民の居住区域は普天間飛行場基地の外縁部にいびつに展開するドーナツ状をなしている。本市を地目比率から見た場合、米軍基地が 33.3%を占め民間地の宅地が 36.3%、田畑が 8.5%、原野が 2.1%、その他 19.8%となっている（1992 現在）。

地形からみた宜野湾市は、ひな壇状の 4つの段丘面を形成しており、海岸沿いの沖積低地のほか、内陸側の 3つの段丘面は大半が琉球石灰岩層で成り立っている。琉球石灰岩層の段丘縁には多くの洞穴と湧泉が点在しており、宜野湾市の自然及び人文的景観の特徴となっている。また、中城と接する東側の一部の範囲では琉球古来の名称でクチャと称される泥岩の島尻層群を見ることができる。海拔高度から見た市域の最高位は中城村と西原町と本市の 3市町村界にあたるサンカホージリと称する 146 mの地点である。河川は浦添市と西原町の境に比屋良川、北谷町・北中城村・中城村との境に普天間川が流れている。気候は亜熱帯性で年間平均気温は 22.4℃と四季を通じて温暖である。雨量は春から夏にかけて多く、梅雨明けとともに猛暑が続く。夏から秋にかけては台風の来襲が多い。年間降水量は 1800～2500 mm程である。



第1図 宜野湾市の位置図

## 宜野湾市の沿革

宜野湾市の前身である「宜野湾間切」は、1671年に浦添・中城・北谷の三間切から13村を割き、新たに1つの村を設けて、都合14村をもって新設されたとされる。

1649年編纂の『絵図郷村帳』の中には、宜野湾間切新設以降の史料に散見する“村名”として、浦添間切に「かよく・宜湾・かミ山・加数・志やな・大志やな・内ミな・喜友名・あら城・いさ」のほか、中城間切に「前ふてま・寺ふてま」、北谷間切に「あきな」が記されている。先の三間切から割かれた“村”がそれらの“村々”に相当し、「真志喜」村が新たに設けられた“村”に相当するということになる。

そして、1908年（明治41年）の「沖縄県及島嶼町村制」の施行により、従来の間切は町・村に、村は字に改められることとなった。これに伴い、宜野湾間切は宜野湾村となる。その年の戸籍調査によると宜野湾村の戸数は2,401戸、人口は11,184人を数えたとされる。

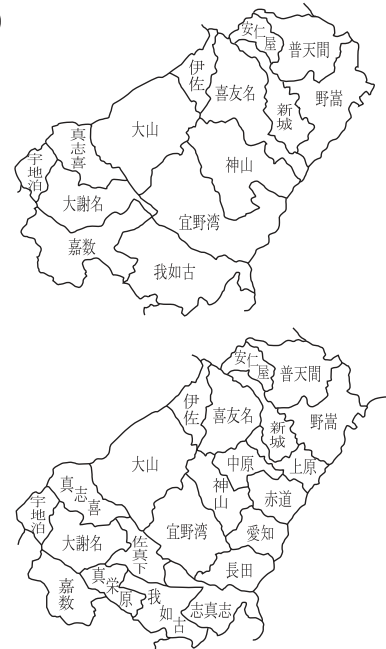
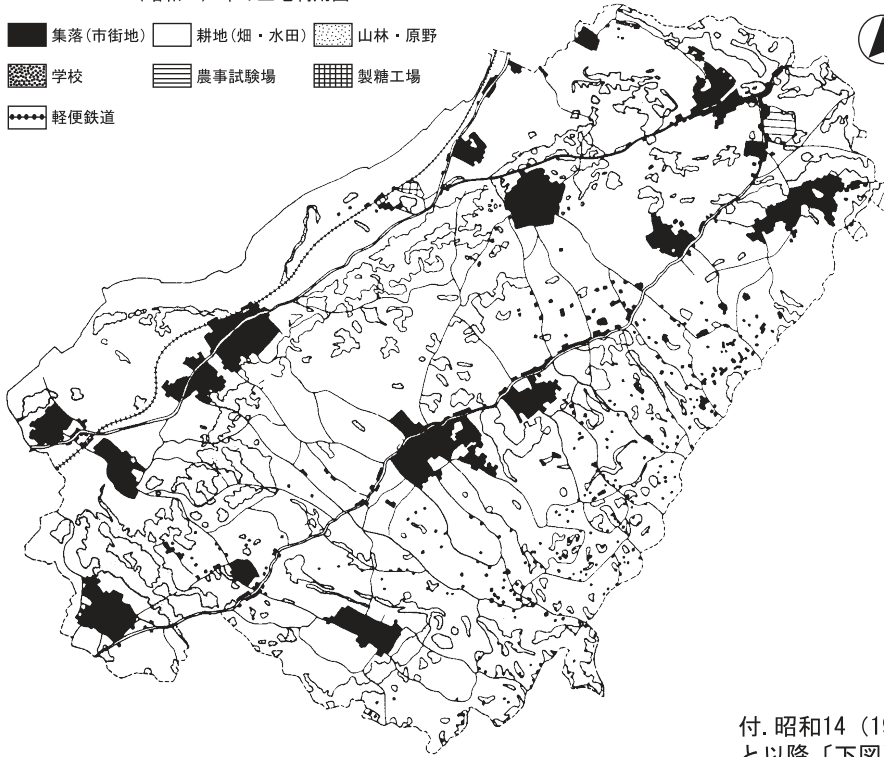
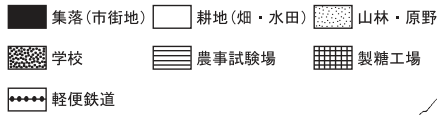
その後、1939年（昭和14年）には、志真志・長田・愛知・赤道・中原・上原・真栄原の7つの屋取集落が新たな“字”として設置されている。次いで、1943年（昭和18年）には真栄原から佐真下が分離して新たな“字”が設置されることとなった。

“鉄の暴風”と称される今次の世界大戦を経て、1955年の段階では18,469人を数えた村人口も1960年3月には3万人を越え、1962年7月1日には宜野湾市として“市”に昇格した。次いで、1964年2月には戦後の混乱期の産物である対人的行政区を、地域を明確にした20の行政区に分割統合している。

市制施行後も市域の市街化傾向は急激をきわめ、嘉数ハイツ・大謝名団地・上大謝名区の自治会が新設されるにおよび、宜野湾市は都合23自治会20行政区によって編成されるようになった。さらに、「那覇広域都市計画圏」において軍用地を除く市全域が市街化区域に指定されることとなった。これに併せて、西海岸の公有水面埋め立てに伴うコンベンションセンター・市営球場などの公共施設の整備により、宜野湾市は新しい市街地として発達している状況にある。宜野湾市の総世帯数は、2009年12月31日現在、38,163世帯、人口は92,294人となっている状況で年々増加傾向にある。

現在、宜野湾市は将来の都市像“ねたての都市(まち)ぎのわん”の実現に向けて、経済の自立＝コンベンション・リゾート都市の形成、生活・居住の自立＝ハイアメニティ都市の形成、文化の自立＝国際学園文化都市の形成を柱とする諸公共事業が推進されている。

1944（昭和19）年の土地利用図



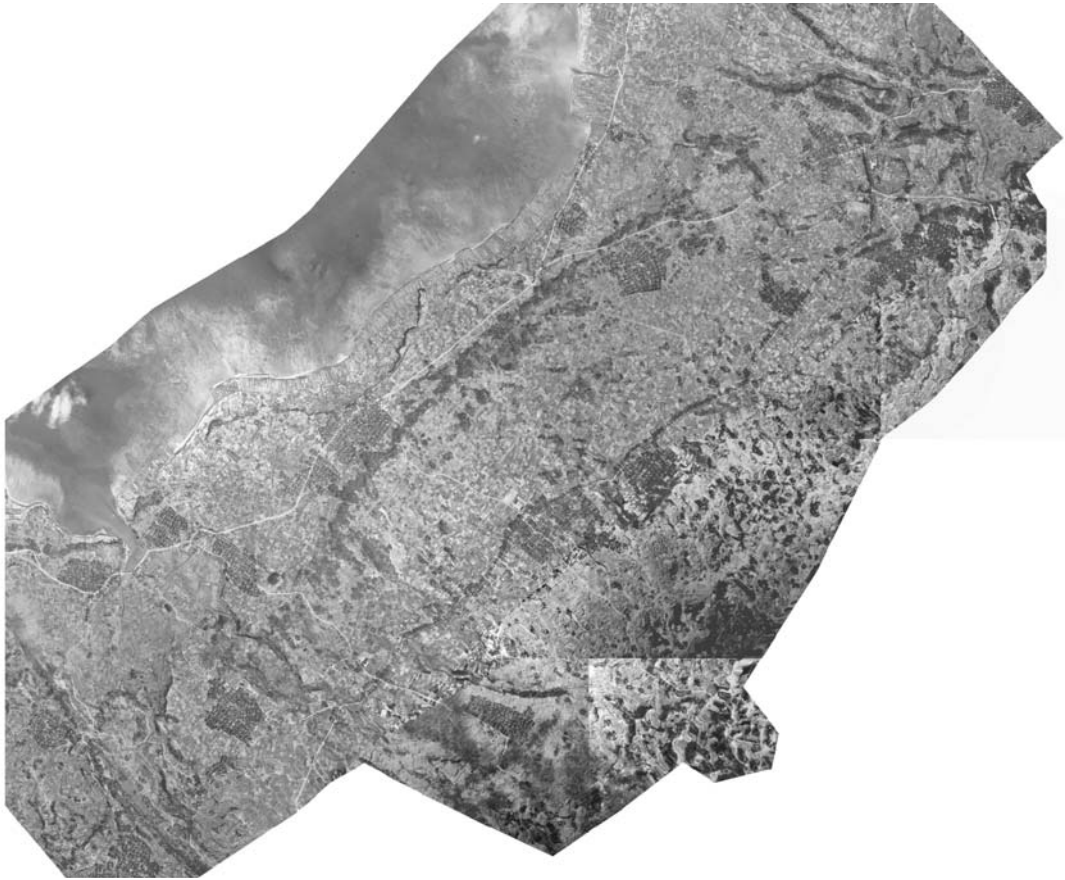
付. 昭和14（1939）年屋取の行政区新設以前〔上図〕と以降〔下図〕の近代宜野湾

第2図 宜野湾市の土地利用図 1994年〔上原、1994報告〕

第1表 文献資料にみる宜野湾の村名一覧

時代	古琉球→1609年←	近世	→18079年←	近世	→1945年←	現代							
文献名	絵図郷村帳 1649年	琉球国高究帳 1635～1664年	琉球国由来記 1713年 (年中祭祀)	中山伝言録 1721年	琉球国旧記 1731年 (郡邑)	琉球一件帳 1821年頃	琉球藩雜記 1873年 (職分・戸籍)	郡区區画 1896年	各調切村原名 1903年	（仲村春勝） 1939年 (字)	町村区画 1940年 (字)	村誌編纂資料 1955年 (行政区)	市政要覧 1993年 (行政区)
村名	<ul style="list-style-type: none"> <li>宜湾</li> <li>かやく</li> <li>加数</li> <li>志やな</li> <li>浦添間切</li> <li>志やな</li> <li>内ミ</li> <li>喜友名</li> <li>い</li> <li>あら城</li> <li>あきな</li> <li>前ふてま</li> <li>寺</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宜湾</li> <li>かやく</li> <li>加数</li> <li>謝名</li> <li>浦添間切</li> <li>喜友名</li> <li>い</li> <li>あきな</li> <li>前普天間</li> <li>寺</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宜野湾</li> <li>神山</li> <li>我如古</li> <li>嘉数</li> <li>大謝名</li> <li>真志喜</li> <li>謝名具志川</li> <li>宇地泊</li> <li>喜友名</li> <li>伊佐</li> <li>新城</li> <li>安仁屋</li> <li>野嵩</li> <li>普天間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宜野湾</li> <li>神山</li> <li>我如古</li> <li>嘉数</li> <li>大謝名</li> <li>真志喜</li> <li>謝名具志川</li> <li>内湊</li> <li>喜友名</li> <li>伊佐</li> <li>新城</li> <li>安仁屋</li> <li>野嵩</li> <li>普天間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宜野湾</li> <li>神山</li> <li>我如古</li> <li>嘉数</li> <li>大謝名</li> <li>大川</li> <li>謝名具志川</li> <li>宇地泊</li> <li>喜友名</li> <li>伊佐</li> <li>新城</li> <li>安仁屋</li> <li>野嵩</li> <li>普天間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宜野湾</li> <li>神山</li> <li>我如古</li> <li>嘉数</li> <li>大謝名</li> <li>真志喜</li> <li>大山</li> <li>大川</li> <li>宇地泊</li> <li>喜友名</li> <li>伊佐</li> <li>新城</li> <li>安仁屋</li> <li>野嵩</li> <li>普天間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宜野湾</li> <li>神山</li> <li>我如古</li> <li>嘉数</li> <li>大謝名</li> <li>真志喜</li> <li>大山</li> <li>大川</li> <li>宇地泊</li> <li>喜友名</li> <li>伊佐</li> <li>新城</li> <li>安仁屋</li> <li>野嵩</li> <li>普天間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宜野湾</li> <li>神山</li> <li>我如古</li> <li>嘉数</li> <li>大謝名</li> <li>真志喜</li> <li>大山</li> <li>大川</li> <li>宇地泊</li> <li>喜友名</li> <li>伊佐</li> <li>新城</li> <li>安仁屋</li> <li>野嵩</li> <li>普天間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宜野湾</li> <li>神山</li> <li>我如古</li> <li>嘉数</li> <li>大謝名</li> <li>真志喜</li> <li>大山</li> <li>大川</li> <li>宇地泊</li> <li>喜友名</li> <li>伊佐</li> <li>新城</li> <li>安仁屋</li> <li>野嵩</li> <li>普天間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宜野湾</li> <li>我如古</li> <li>嘉数</li> <li>大謝名</li> <li>真志喜</li> <li>大山</li> <li>大川</li> <li>宇地泊</li> <li>喜友名</li> <li>伊佐</li> <li>新城</li> <li>安仁屋</li> <li>野嵩</li> <li>普天間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宜野湾</li> <li>我如古</li> <li>嘉数</li> <li>大謝名</li> <li>真志喜</li> <li>大山</li> <li>大川</li> <li>宇地泊</li> <li>喜友名</li> <li>伊佐</li> <li>新城</li> <li>安仁屋</li> <li>野嵩</li> <li>普天間</li> </ul>		

凡例 1. 本表は『宜野湾市史』第4巻所収「家譜史料にみる宜野湾」・「文献にみる宜野湾の村名」を基に加筆作成した。  
 2. 1623年編纂の『おもろさうし』には、「ぎのわん・かかす・ちやな・きとむなわ・いさ」の名辭がみえる。なお、喜友名区在の呉屋盛春氏宅に「ききとも奈原」銘の印部土手石が保管される。土手石の出所は現キャンプ瑞慶覧基地内のバンガー湧泉の前庭とされる。  
 3. 『琉球国由来記』に記される宜野湾間切の25カ所の殿には、「大ヒヤ殿」が11カ所記載される。真志喜村に「大川・奥間・石川・呉屋・小国」の5カ所、大山村に「中間・新里・上具志川・大山」の4カ所、宜野湾村に「キチラセ・大里」の2カ所である。  
 4. 『おもろ主取家元祖由来記』に「此元祖、成化年中に伊平屋島より被罷渡、真志喜村石川村に屋敷取仕、(中略)元祖謝名具志川親雲上は、最前は真志喜村之内石川と申村地頭職被成下、後謝名具志川之地頭所被成下候。其の時此元屋敷取仕、引移申候。」と記される。文中の留意点として、①真志喜村内に「石川村」の存在が記されていること。②成化年中(1465～87年)に伊平屋島から来られた謝名具志川親雲上は「石川村」の「地頭職」となり、後に「謝名具志川之地頭」になったとされる。しかし、成化年中(1465～87年)の年代観は、本文に別記される謝名具志川親雲上の死(1655年)などと符合しないとされる〔池宮、1985〕。  
 5. 1700年代の家譜史料や『中山世譜』等に「仲松親雲上」や「宜野湾間切仲松地頭職」が記される。同地頭職の設置「村」は不明である。  
 6. 現在、宜野湾市は本20行政区と嘉数ハイツ・大謝名団地・上大謝名を合わせた23自治会により編成される。



図版2 昭和20年 宜野湾市全景

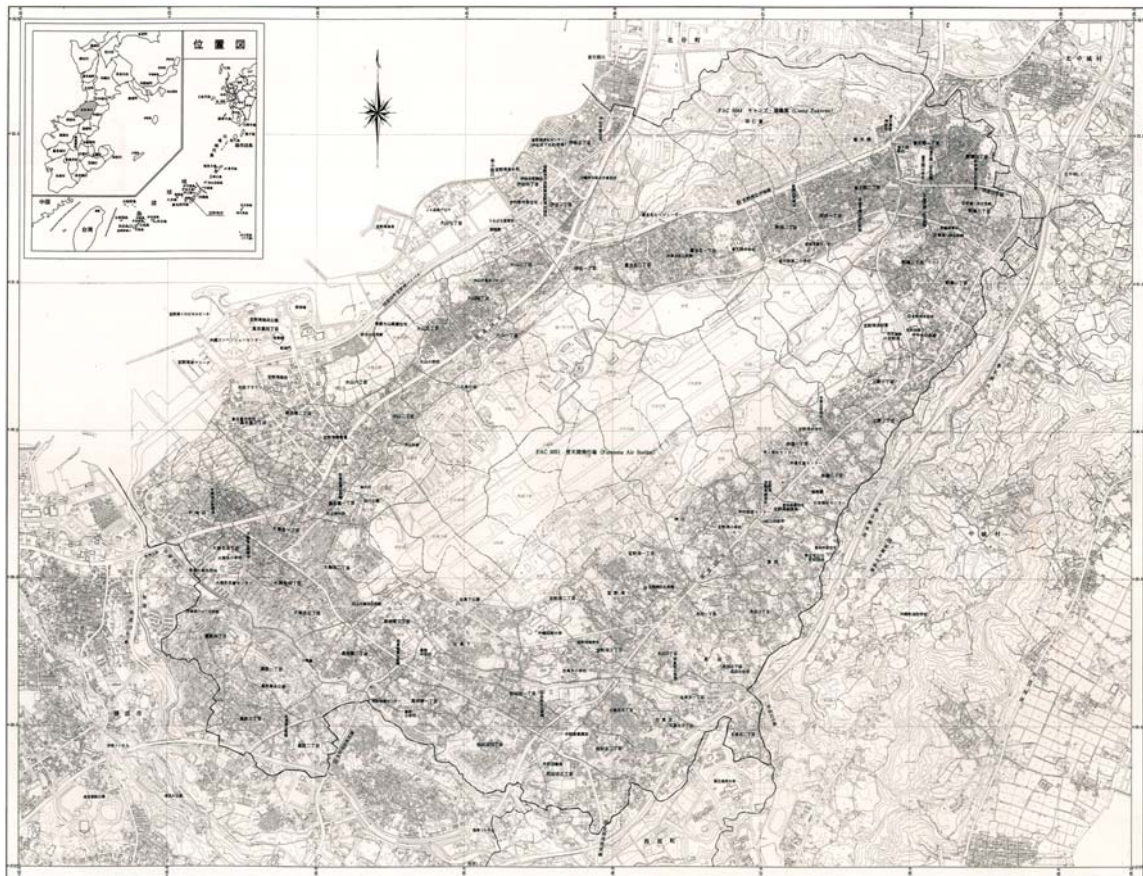


図版3 平成14年 宜野湾市全景





第3図 宜野湾市地形利用図1 (昭和19年 旧陸軍参謀本部地形測量部作成地形図)



第4図 宜野湾市地形利用図2 (平成12年 宜野湾市都市計画課作成)

## 第2節 自然的環境

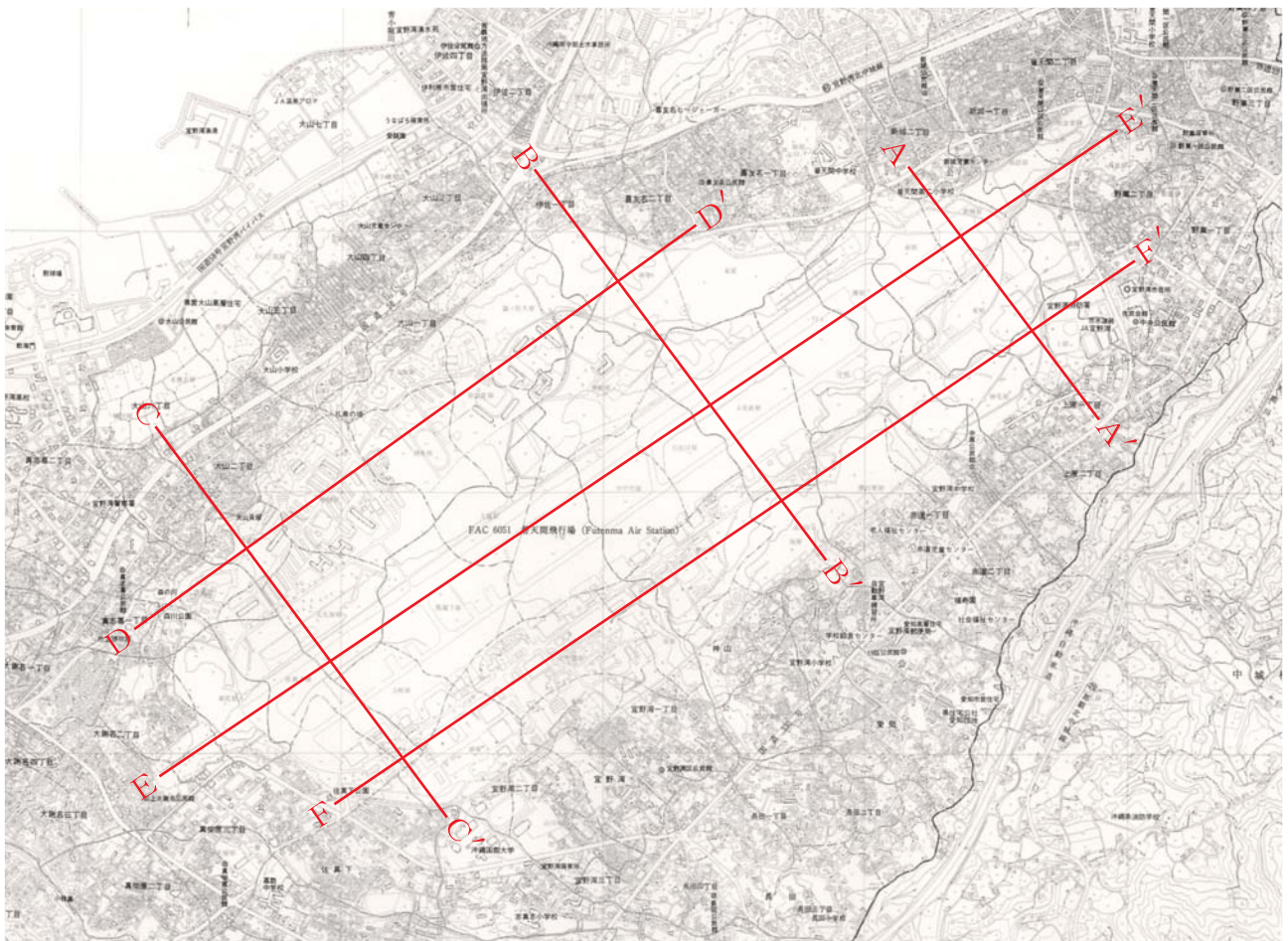
### 宜野湾市の地形

宜野湾市の地形は、典型的なひな壇状の4つの明瞭な海岸段丘が形成されていると言える。第1面は、比屋良川の河口右岸から宇地泊・大山・伊佐に連なる標高3～30m（低位段丘下位面）の海岸低地である。

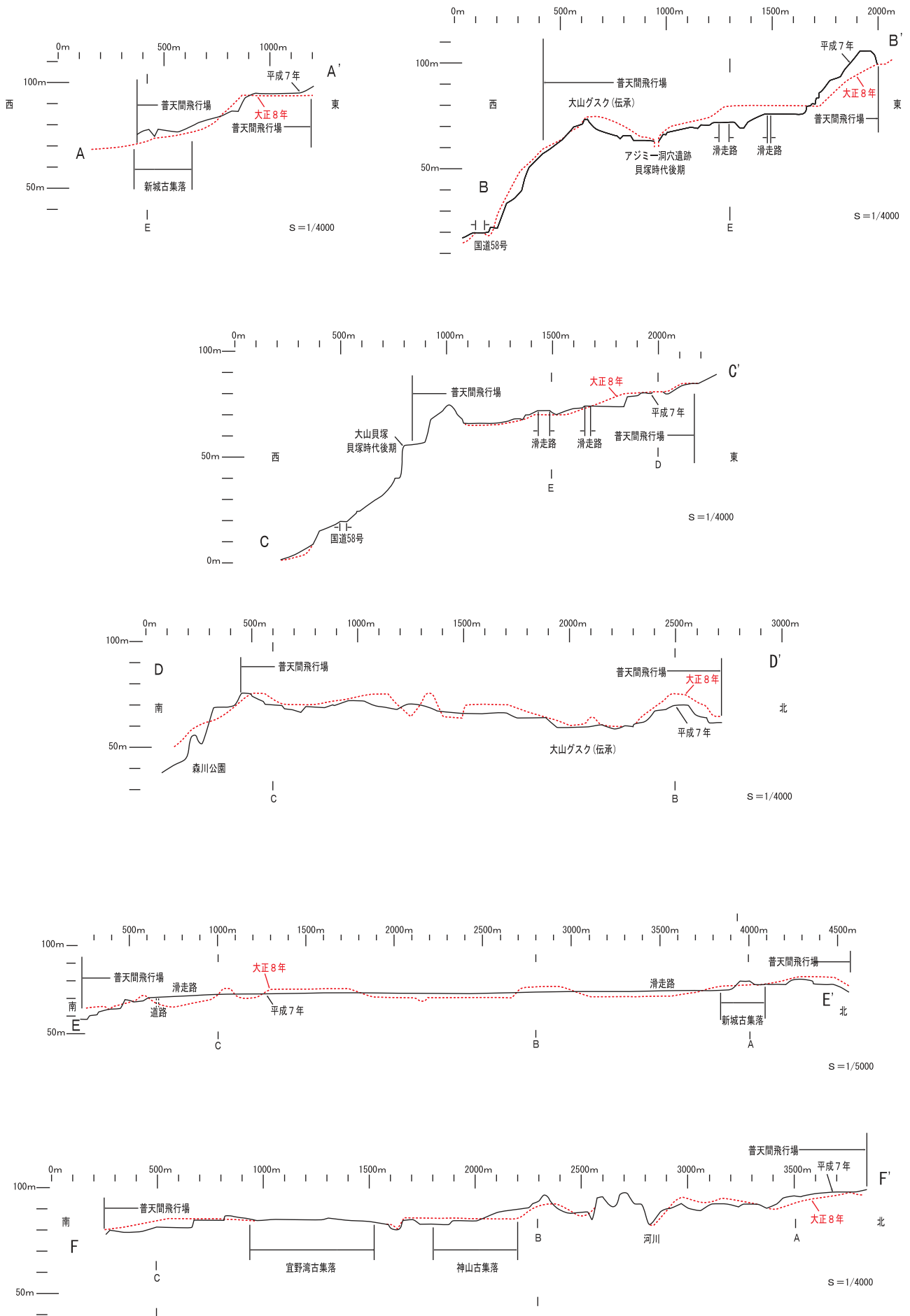
第2面は、海岸低地から崖や急斜面となって比高5～10m程上方に位置する大山・真志喜・宇地泊・伊佐の住宅地が密集する一帯で、標高にすると30～40m（低位段丘上位面）の石灰岩段丘であり、その主要な場所は国道58号線である。当該地域の住宅地は国道を挟んで形成される。

第3面は、キャンプ瑞慶覧から普天間飛行場基地へと延びる標高50～90m（中位段丘下位面）の石灰岩段丘である。普天間飛行場基地の滑走路建設の際に地形の大部分が改変されているが、1950年の米軍作成地形図からは、標高60～80mの地形が500mの幅で延々と続いていたのが見て取れる。

第4面は、標高90m以上（中位段丘上位面）の高位置にあり、野嵩のヒージャーバンタから沖縄国際大学を結ぶ線の以東によく残存しており、代表的な箇所が赤道から宜野湾にかけて展開する緑地帯である。またこのような石灰岩段丘の縁辺部を中心とする一帯には、多くの洞穴・湧泉が発達し、特に洞穴は第3段丘や第4段丘の周縁に点在しており、湧泉は第2段丘や第4段丘の麓部に多いと言える。



第5図 宜野湾市地形断面モデルA～Fライン設定図『普天間飛行場内埋蔵文化財調査実施計画(中間報告)』(沖縄県教育委員会2002年を一部加筆修正)



第6図 宜野湾市の地形断面モデル 『普天間飛行場内埋蔵文化財調査実施計画(中間報告)』  
(沖縄県教育委員会2002年を一部加筆修正)

## 宜野湾市の地質

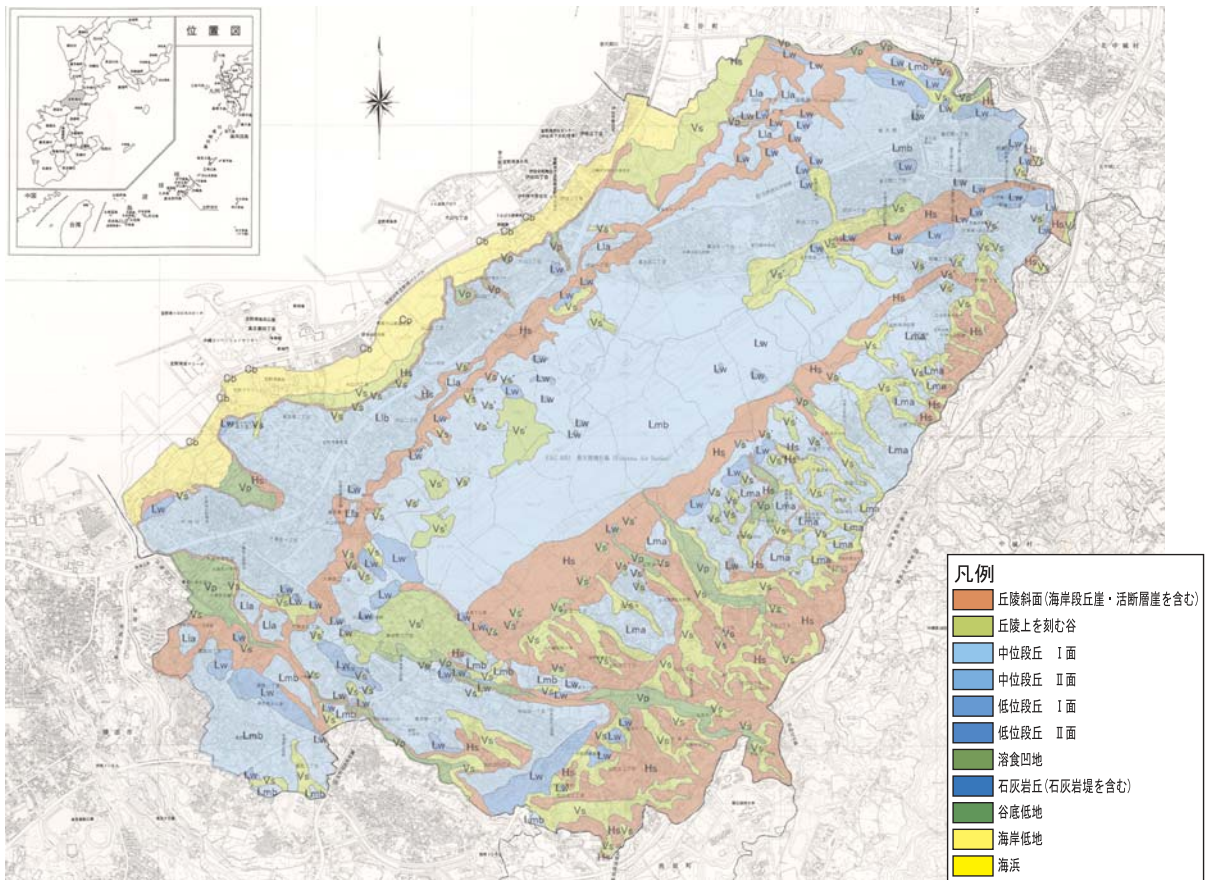
地質は、青灰色のシルト質粘土である泥岩（クチャ）の島尻層群と、これを不整合に覆う琉球石灰岩層、そして海岸低地に見られる沖積層が形成されている。島尻層群は、宜野湾市役所から沖縄国際大学を経て、嘉数のバイパス入口を結ぶラインの以東、標高 80～120 m の位置の丘陵地に発達しており、その上層には肥沃なジャーガルが被さっている。琉球石灰岩層は、先述のライン以西の東シナ海に面する一帯、つまりは普天間飛行場基地が展開する第3面以下に広く発達している。石灰岩層の上部にはマージが厚く堆積している。なお、これら島尻層群と石灰岩層を界するライン一帯は、地質及び地形ともに湾入・起伏が著しく、シマシガーやシリガーラなどの小河川によっていくつかのブロックに分かれている。

## 宜野湾市の植生

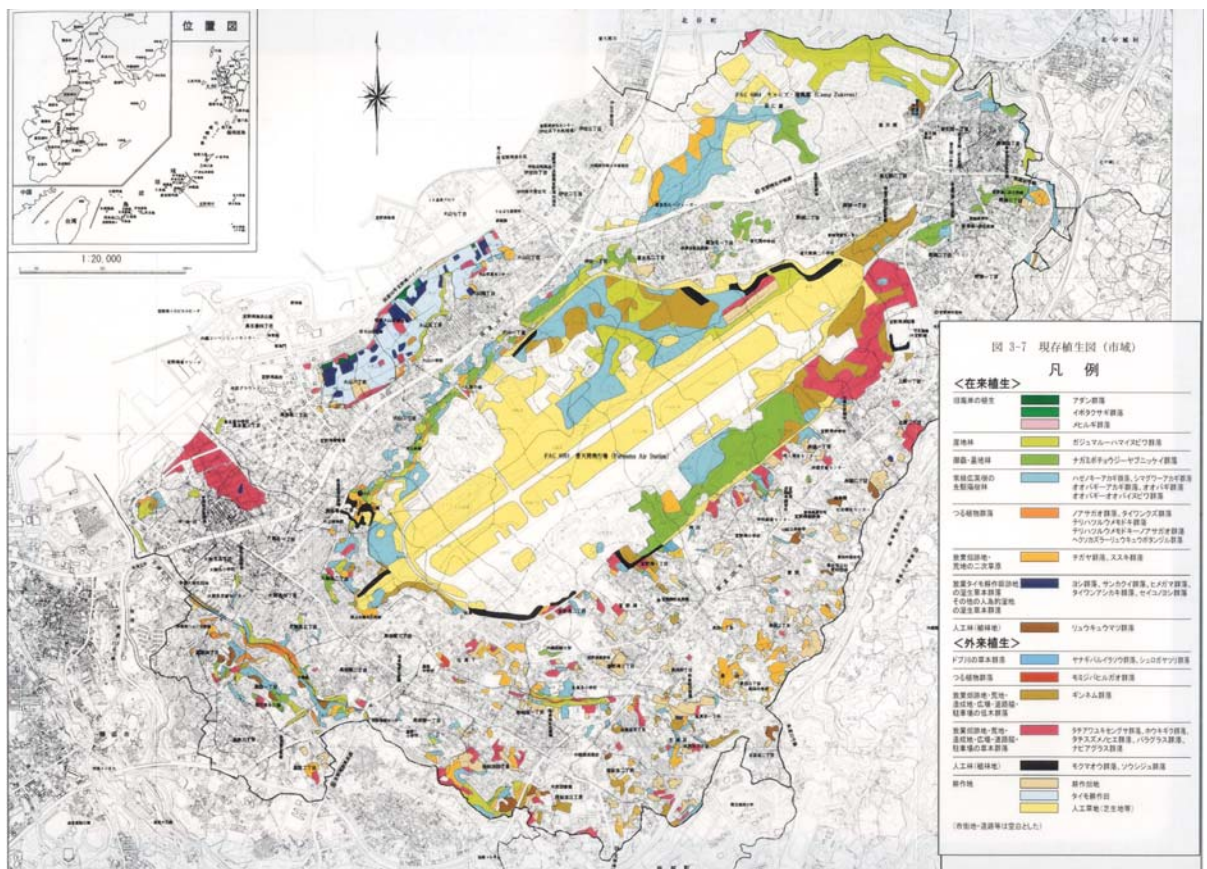
現在の宜野湾市内に展開する植生の大部分は、今次大戦後の二次的植生とみなされ、本来の自然植生は僅かであると言える。それらの植生は、市内のほとんどの地域で琉球石灰岩を母岩としており、沖縄本島の中南部、本部半島北部、宜野座村、金武町や周辺離島及び先島諸島に広く見られる琉球石灰岩地域の植生と同質の植生であると考えられる。市内における植物生育分布を見ると、市の北側は普天間川、南側で比屋良川が浸食した丘陵崖に沿って展開している。また、西側は普天間飛行場基地の台地縁にある段丘崖に比較的良好に発達している。一方で、宇地泊・大山海岸緑の沖積低地平坦部には田芋の耕作地が広がっており、田畑の植生群が見られるほか、水草や糸状藻なども確認されており、特異な植生景観を残している。

## 普天間飛行場基地の敷地分析

普天間飛行場基地は、琉球石灰岩層からなる第3段丘面上をほぼ全域にわたり占有している状況で、今回の基地内遺跡発掘事前総合調査の調査対象となっているのは、第3段丘（中位段丘上位面）から段丘崖に相当する区域である。当該地域には新城・野嵩・上原・赤道・中原・神山・宜野湾の旧集落が基地建設時に接収されており、接収前の状態で現地形が良好に保存されている範囲も確認されている。当該地域内には、琉球石灰岩地域の植生が略南北に広範囲にわたり発達しており、洞穴や湧泉も数多く点在している状況で、代表的な洞穴としては赤道渡呂寒原洞穴や神山ウクマバカ洞穴、神山テラガマ洞穴・神山マーカーガマ洞穴群等があるほか、代表的な湧泉としては新城のアラグスクガーや宜野湾のクシヌカー（産泉）があげられる。また、同地域内には島尻層群と石灰岩層を界するラインが存在し、地質及び地形ともに湾入・起伏が著しい小河川が発達しており、代表的なものとして宜野湾・神山シリガーラや赤道シキルガー・シキローがあり、これらが同地域内を略東西に横断している状況である。これまでに上げた洞穴・湧泉・小河川には、これに伴う拜所や埋蔵文化財、古墓群が集中しているほか、周辺には集落跡や生産遺跡等も確認されていることから、同調査範囲に含まれる緑地帯は、自然的景観からだけでなく、当該地域の文化財保護の観点はもちろんのこと、歴史的な観点からも将来に保全されたい範囲であると言える。



第7図 宜野湾市地形分布図



第8図 宜野湾市の植生図

### 第3節 歴史的環境

沖縄諸島に人類が初めて住み着いたのは、現在から約3万年前とされ、宜野湾市では大山の名利瀬原に位置した大山洞穴から「大山洞人」と称される20歳前後の男性の下顎骨片が発見されている。このほかにも、普天満宮洞穴遺跡等においてリュウキュウムカシキョンやムカシキョン等の化石動物が発見されている。

現在から6,000～7,000年前より、沖縄諸島には土器や石器などの新しい技術を用いた生活文化が登場する。以後数千年にも及ぶこの文化は、日本列島に形成された文化の中でも沖縄固有の独自性が強いことから、九州や本州の縄文・弥生等の時代区分とは個別に取り扱われており、沖縄貝塚時代と称されている。同時代は遺跡の立地・出土遺物等の違いから早期・前期・後期に大別されている。前期は市域を含め、沖縄諸島域に当時の土器形式が広く分布していることから、定着的な集団が各地域に形成される時期と考えられる。中期は市域の西部琉球石灰岩地帯で顕著であるように、拠点的な大規模集落が平地帯に展開し、小規模遺跡が周縁に点在している。後期は、前述の西部琉球石灰岩地帯に加えて、海岸低地の砂地にも居住域が拡散しており、その規模も一律的に大きくなっていくようである。

12世紀から15世紀に及ぶグスク時代は、沖縄において初めて農耕を基礎とする社会が形成・発達した時期である。生産的農耕社会を基盤とした社会が展開されていったのと同時に、東アジア世界の歴史の変動をあたかも古琉球時代の胎動として捉えていく中で、社会構造は劇的に変化していく。農耕の基盤である土地・その生産を支える道具の入手や製作・同時期に展開された日本や中国・朝鮮・東アジア地域との交易などを通して各地域の集団は共同化したと考えられ、その中から“按司”と称される在地支配者層が出現する。按司を中心とした各地域の集団は、互いの在地の権益を守り、且つ、それを拡大させるために相互に抗争を繰り返しながら淘汰していき、14世紀頃には中山・山北・山南の3つの勢力が拮抗するようになる。市域のグスク時代の遺跡は、迫地や河川流域の谷底低地を控える平地・丘陵斜面・段丘縁の高所に立地しており、市域の伝統的集落である近世の“村”の形態がこの時期に端緒が求められる。

市域のグスク時代以降における遺跡の展開としては、尚巴志による三山統一、第二尚氏王統の尚真による中央集権的古代国家の確立、1609年の薩摩藩島津氏の侵攻等、紆余曲折的な歴史背景の下、幾通りかの過程を経て近世基盤型集落へと形態を変化させながら市域の伝統的村落が形成されていき、さらに、18世紀以降になると、首里や那覇系の土族の移住により“屋取集落”が形成されていくことになる。

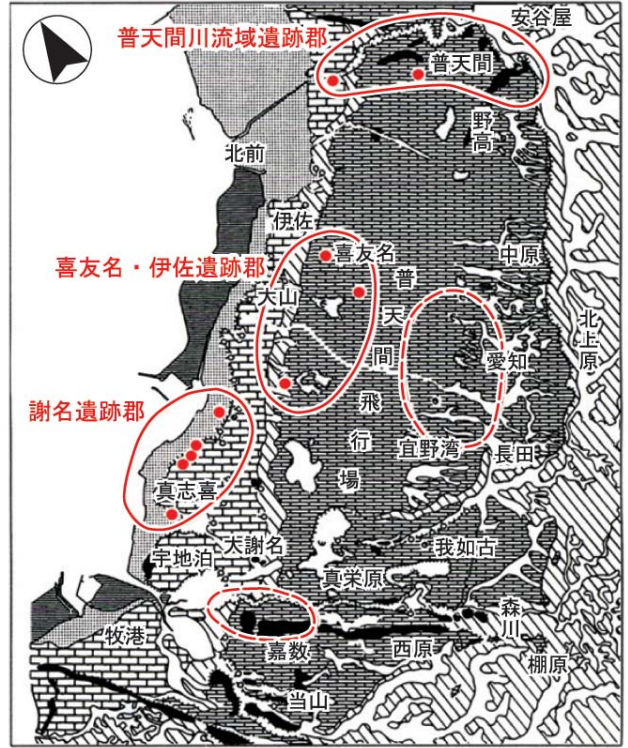
近代以降の宜野湾市は、1872年に琉球藩、1879年には沖縄県の設置が強行され、1881年（明治14）6月には沖縄県庁の中部支所として中頭郡役所が普天間に移設された。併せて中頭郡教育事務所、中頭郡組合農事試験場などの官公署が相次いで設置されたことにより、市域は本島中部地域の政治・経済・教育の中心となる。さらに1902年（明治35）には首里から普天間に至る普天間街道、1922年（大正11）には県営鉄道嘉手納線（軽便鉄道）が開通することにより、利便性は一層高まりをみせた。さて、1908年（明治41）の「沖縄県及び島嶼町村制」の施行により従来の間切は町・村に、村は字に改められ宜野湾村となる。また、旧土族の移入による屋取人口の社会的増加等もあり、新たな字が分離・新設された。

ところが、1945年4月1日、中部西海岸に上陸した米軍に対する日本軍の前線基地として本市域も壊滅的な打撃を被り、さらには、戦後の軍用地接収と度重なる基地造成によって市域の景観は大きく変貌することとなった。他地域に比べ、僅かに焼失を免れた野嵩地区が市域の住民をはじめ以南の戦闘地域住民の収用所の一つとなった。その後、1946年9月以降、故地ないしはその近傍に帰住が許可され、社会基盤の復活が果たされると米軍基地関連産業の活況により市域の人口も急増した。1962年7月1日には市に昇格し、次いで1964年2月には対人的行政区の地域を明確にした20行政区に分割統合された。

① 沖縄貝塚時代前期～中期の遺跡分布



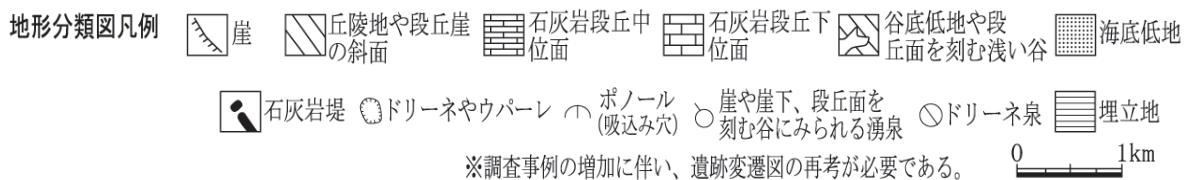
② 沖縄貝塚時代後期前半の遺跡分布



③ 沖縄貝塚時代後期後半の遺跡分布



④ グスク時代の遺跡分布



第9図 宜野湾市遺跡変遷図

#### 第4節 普天間飛行場基地内の埋蔵文化財

宜野湾市教育委員会が、これまでに普天間飛行場基地内において実施してきた各種文化財調査の結果、平成18年3月現在で、同基地内には83箇所（箇所）の埋蔵文化財が確認されており、その周知が図られている。

代表的な遺跡としては、野嵩タマタ原遺跡、新城古集落遺跡、喜友名アジミー洞穴遺跡、伊佐上原遺跡群、大山岳之佐久原洞穴遺跡、大山岳之佐久原第一・第二遺跡、真志喜富盛原第一遺跡、宜野湾クシヌウタキ遺跡、神山マーカ―遺跡、神山ウクマバカ洞穴遺跡、神山テラガマ洞穴遺跡、宜野湾・神山シリガーラ流域古墓群、赤道渡呂寒原洞穴遺跡、上原遺跡、上原濡原遺跡が上げられる。中でも上原濡原遺跡は、畝間状の溝が複数検出されており、遺構の状態や遺構覆土の自然科学分析調査の結果から、日本最古の原始農耕的な生産遺跡の可能性があるとされており、特に注目されている遺跡である。また、沖縄のロゼッタストーンとも称される“線刻石版”が発見された神山テラガマ洞穴遺跡についても、今後の調査の成果に期待がなされる遺跡である。なお、平成13年度から平成14年度にかけて実施された試掘調査や那覇防衛施設局や在沖米軍海兵隊の文化財の有無照会に係る試掘調査等により、あらたに追加された遺跡は、上原東原遺跡・上原仲毛原遺跡・中原同原遺跡・佐真下同原遺跡の4つが上げられる。

確認されている埋蔵文化財を時期別に見た場合、貝塚時代前期・中期・後期・グスク時代・古琉球・近世琉球・近代～基地接收以前へと時系列的な連続を見せながら、古より居住地域として適していたことが窺い知れる。遺跡の性格としては、貝塚・古集落跡・生産遺跡・拝所・古墓群・遺物散布地が上げられる。また、埋蔵文化財以外にも、拝所・湧泉・洞穴・古墓群・古闘牛場跡なども確認されており、口伝・伝承も加えた普天間飛行場基地内の埋蔵文化財の総数は83余箇所にも上る。

そのほかに、戦後の基地接收以前の原地形が比較的に良好な状態で残されている地域についても確認されている。しかしながら、その多くが基地建設・拡張や度重なる施設増改築の際に、大規模な土地造成が繰り返されており、接收以前の地形や植生は大きく改変されている状況である。改変以前の地形の状況については、旧日本軍陸軍参謀本部測量部作成地形図や米軍作成の地形図等により見て取れるほか、土地利用状況についても戦前の米軍撮影による空中写真や土地利用台帳等により把握することができるのみである。このような状況から、多くの貴重な文化財が消失したものと考えられるが、基地内での開発から免れて、作戦エリア外に緑地帯として残されている地域や、基地造成が盛土によってなされた場所、基地縁辺部の段丘崖、迫地や開析谷地内の谷底低地、湾入・起伏が著しい小河川などの地域については、埋蔵文化財やその他の文化財が良好な状態で保存されていることも予想されている。

現在機能している滑走路部分や既存施設等が敷設されている作戦エリア内及びフライトゾーンに面した地域、作戦エリア外（通称 二重フェンス内）の黙認耕作地等についても、その大部分の地域が未調査となっている状況であるため、基地内での開発行為や今後予想される基地返還後の大規模開発に伴う各種文化財調査の成果によっては、現在までに普天間飛行場基地内で確認されている前述の83遺跡を遥かに上回る数の遺跡が確認されることも容易に予測できると言える。また、普天間飛行場基地外の周縁部地域においても、貝塚時代前期・中期・後期や古琉球以降の各時期に相当する遺跡が密集して分布している状況にあり、普天間飛行場基地内及びキャンプ瑞慶覧と市内民間地域を含めた宜野湾市内全域で確認されている埋蔵文化財の総計も299箇所を数えている。





上原濡原遺跡



上原濡原遺跡



野嵩タマタ原遺跡



野嵩タマタ原遺跡



宜野湾クシヌウタキ



赤道屋取古集落跡

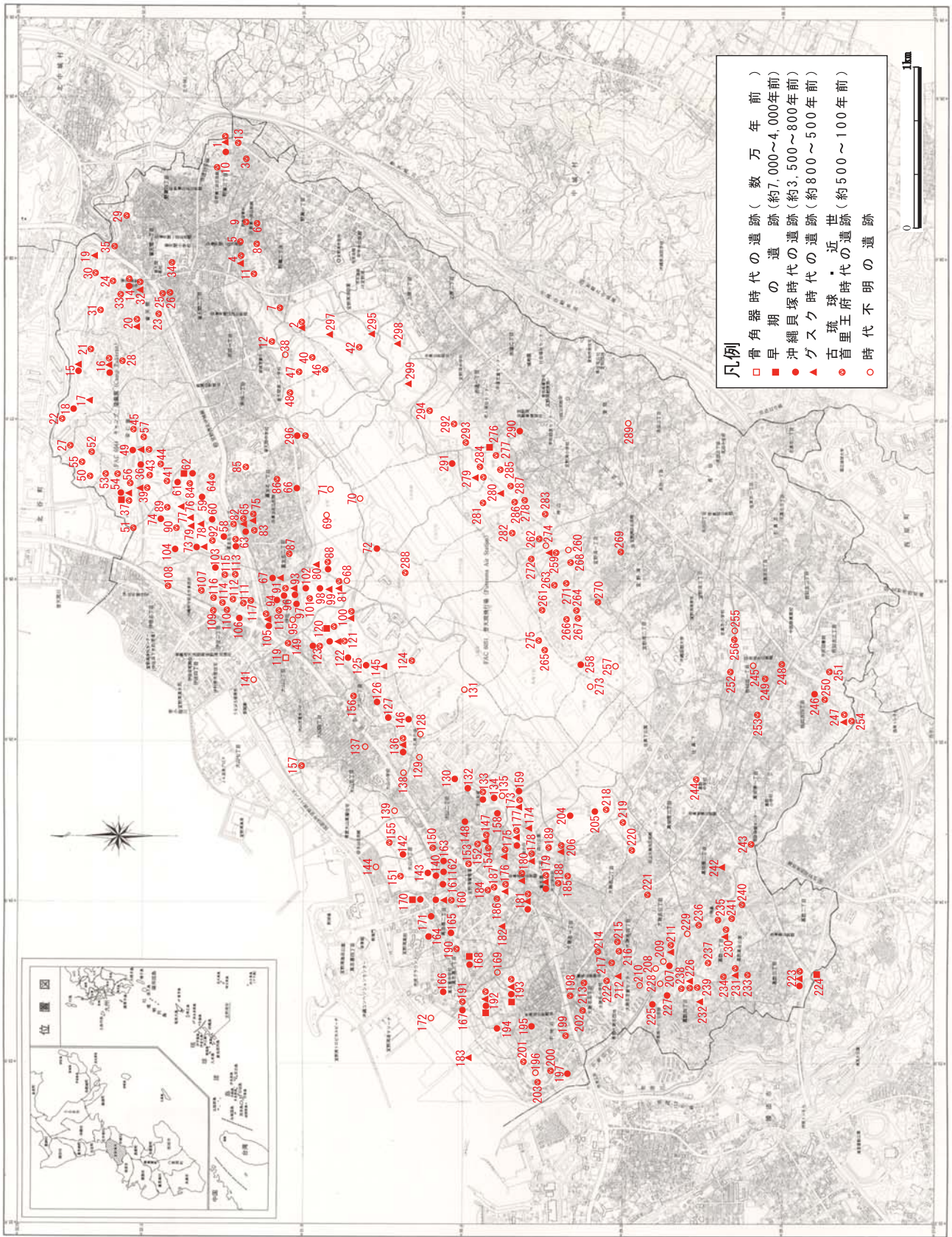


神山テラガマ遺跡



神山テラガマ遺跡出土 線刻石板

図版 4 普天間基地内の主な遺跡



第10図 宜野湾市の埋蔵文化財

第2表 宜野湾市の埋蔵文化財一覧

大字	遺跡名	遺跡名	大字	遺跡名	遺跡名	大字	遺跡名	遺跡名	大字	遺跡名	遺跡名	大字	遺跡名	遺跡名	大字	遺跡名
野島	001	ウグンズスカタ遺跡	002	山川原第五遺跡	123	岳之尻第三遺跡	184	春行島跡	245	後原遺物散布地	表 白	185	カンガー洞古墳跡	246	後原遺物散布地	
	002	タマカ原遺跡	003	マヤヤーブ洞穴遺跡	124	加良当原第一遺跡 (旧称南方遺物散布地)	185	カンガー洞古墳跡	246	ヤクシガタ洞穴遺跡		186	ムサヒセキスガ原祭壇跡	247	我如古ツクスガ遺跡	
	003	ムラガール古湧泉	004	フトウキヤア	125	加良当原第二遺跡 (仮称)	126	ウオーニア遺物散布地	186	ムサヒセキスガ原祭壇跡		187	カンガー洞穴遺跡	248	ウグンズグラー祭壇跡	
	004	ウオーニスタキ祭壇跡	005	喜友名貝塚	127	ウオーニア遺物散布地	128	ウオーニア遺物散布地	187	カンガー洞穴遺跡		188	カンガー洞穴遺跡	249	ジトウヒヒスタカ原祭壇跡	
	005	トクニスタキ祭壇跡	006	東原ヌスタキ遺跡	128	ウオーニア遺物散布地	129	ウオーニア遺物散布地	188	カンガー洞穴遺跡		189	野上原古墳群	250	前原古墳群	
	006	トクニスタキ祭壇跡	007	前原第一遺跡	129	ウオーニア遺物散布地	130	ウオーニア遺物散布地	189	野上原古墳群		190	野上原古墳群	251	我如古第二洞穴遺跡 (仮称)	
	007	ペンジユルモ一祭壇跡	008	前原第二遺跡	130	ウオーニア遺物散布地	131	ウオーニア遺物散布地	190	野上原古墳群		191	ウオーニア遺物散布地	252	ウオーニア遺物散布地	
	008	ジトウヒヒスタカ原祭壇跡	009	前原第三遺跡	131	ウオーニア遺物散布地	132	ウオーニア遺物散布地	191	ウオーニア遺物散布地		192	ウオーニア遺物散布地	253	ウオーニア遺物散布地	
	009	セントノスタキ祭壇跡	010	東原第三遺跡	132	ウオーニア遺物散布地	133	ウオーニア遺物散布地	192	ウオーニア遺物散布地		193	ウオーニア遺物散布地	254	ウオーニア遺物散布地	
	010	上後原・下後原古墳群	011	東原第四遺跡	133	ウオーニア遺物散布地	134	ウオーニア遺物散布地	193	ウオーニア遺物散布地		194	ウオーニア遺物散布地	255	ウオーニア遺物散布地	
	011	西後原古墳群	012	長短原古墳群	073	下原第一遺跡	134	ウオーニア遺物散布地	194	ウオーニア遺物散布地		195	ウオーニア遺物散布地	256	ウオーニア遺物散布地	
普天間	012	長短原古墳群	074	下原第二遺跡	135	ウオーニア遺物散布地	135	ウオーニア遺物散布地	195	ウオーニア遺物散布地	257	ウオーニア遺物散布地	257	ウオーニア遺物散布地		
	013	スズバシタ石炭遺跡	075	下原第三遺跡	136	ウオーニア遺物散布地	136	ウオーニア遺物散布地	196	ウオーニア遺物散布地	258	ウオーニア遺物散布地	258	ウオーニア遺物散布地		
	014	普天間古墳群	076	喜友名ツクスガ遺跡	137	ウオーニア遺物散布地	137	ウオーニア遺物散布地	197	ウオーニア遺物散布地	259	ウオーニア遺物散布地	259	ウオーニア遺物散布地		
	015	天澤宮洞穴遺跡	077	山川原第六遺跡	138	ウオーニア遺物散布地	138	ウオーニア遺物散布地	198	ウオーニア遺物散布地	260	ウオーニア遺物散布地	260	ウオーニア遺物散布地		
	016	石川原遺跡	078	山川原第七遺跡	139	ウオーニア遺物散布地	139	ウオーニア遺物散布地	199	ウオーニア遺物散布地	261	ウオーニア遺物散布地	261	ウオーニア遺物散布地		
	017	下原遺跡	079	西原遺跡	140	ウオーニア遺物散布地	140	ウオーニア遺物散布地	200	ウオーニア遺物散布地	262	ウオーニア遺物散布地	262	ウオーニア遺物散布地		
	018	下原第四遺跡	080	ウフシ遺跡	141	ウオーニア遺物散布地	141	ウオーニア遺物散布地	201	ウオーニア遺物散布地	263	ウオーニア遺物散布地	263	ウオーニア遺物散布地		
	019	後原遺跡	081	ウフシ遺跡	142	ウオーニア遺物散布地	142	ウオーニア遺物散布地	202	ウオーニア遺物散布地	264	ウオーニア遺物散布地	264	ウオーニア遺物散布地		
	020	普天間古墳群	082	ウフシ遺跡	143	ウオーニア遺物散布地	143	ウオーニア遺物散布地	203	ウオーニア遺物散布地	265	ウオーニア遺物散布地	265	ウオーニア遺物散布地		
	021	楊柳原古墳群	083	ウフシ遺跡	144	ウオーニア遺物散布地	144	ウオーニア遺物散布地	204	ウオーニア遺物散布地	266	ウオーニア遺物散布地	266	ウオーニア遺物散布地		
	022	楊柳原古墳群	084	ウフシ遺跡	145	ウオーニア遺物散布地	145	ウオーニア遺物散布地	205	ウオーニア遺物散布地	267	ウオーニア遺物散布地	267	ウオーニア遺物散布地		
	023	ムラガール古湧泉	085	ウフシ遺跡	146	ウオーニア遺物散布地	146	ウオーニア遺物散布地	206	ウオーニア遺物散布地	268	ウオーニア遺物散布地	268	ウオーニア遺物散布地		
024	ヒューター古湧泉	086	ウフシ遺跡	147	ウオーニア遺物散布地	147	ウオーニア遺物散布地	207	ウオーニア遺物散布地	269	ウオーニア遺物散布地	269	ウオーニア遺物散布地			
025	楊柳原古墳群	087	ウフシ遺跡	148	ウオーニア遺物散布地	148	ウオーニア遺物散布地	208	ウオーニア遺物散布地	270	ウオーニア遺物散布地	270	ウオーニア遺物散布地			
026	カンキヤ祭壇跡	088	ウフシ遺跡	149	ウオーニア遺物散布地	149	ウオーニア遺物散布地	209	ウオーニア遺物散布地	271	ウオーニア遺物散布地	271	ウオーニア遺物散布地			
027	ヒューター古湧泉	089	ウフシ遺跡	150	ウオーニア遺物散布地	150	ウオーニア遺物散布地	210	ウオーニア遺物散布地	272	ウオーニア遺物散布地	272	ウオーニア遺物散布地			
028	ジトウヒヒスタカ原祭壇跡	090	ウフシ遺跡	151	ウオーニア遺物散布地	151	ウオーニア遺物散布地	211	ウオーニア遺物散布地	273	ウオーニア遺物散布地	273	ウオーニア遺物散布地			
029	東原古墳群	091	ウフシ遺跡	152	ウオーニア遺物散布地	152	ウオーニア遺物散布地	212	ウオーニア遺物散布地	274	ウオーニア遺物散布地	274	ウオーニア遺物散布地			
030	カンキヤ祭壇跡	092	ウフシ遺跡	153	ウオーニア遺物散布地	153	ウオーニア遺物散布地	213	ウオーニア遺物散布地	275	ウオーニア遺物散布地	275	ウオーニア遺物散布地			
031	フイーラー一古墳群	093	ウフシ遺跡	154	ウオーニア遺物散布地	154	ウオーニア遺物散布地	214	ウオーニア遺物散布地	276	ウオーニア遺物散布地	276	ウオーニア遺物散布地			
032	普天間宮	094	ウフシ遺跡	155	ウオーニア遺物散布地	155	ウオーニア遺物散布地	215	ウオーニア遺物散布地	277	ウオーニア遺物散布地	277	ウオーニア遺物散布地			
033	神宮寺	095	ウフシ遺跡	156	ウオーニア遺物散布地	156	ウオーニア遺物散布地	216	ウオーニア遺物散布地	278	ウオーニア遺物散布地	278	ウオーニア遺物散布地			
034	神宮寺	096	ウフシ遺跡	157	ウオーニア遺物散布地	157	ウオーニア遺物散布地	217	ウオーニア遺物散布地	279	ウオーニア遺物散布地	279	ウオーニア遺物散布地			
035	普天間	097	ウフシ遺跡	158	ウオーニア遺物散布地	158	ウオーニア遺物散布地	218	ウオーニア遺物散布地	280	ウオーニア遺物散布地	280	ウオーニア遺物散布地			
036	下原第一遺跡	098	ウフシ遺跡	159	ウオーニア遺物散布地	159	ウオーニア遺物散布地	219	ウオーニア遺物散布地	281	ウオーニア遺物散布地	281	ウオーニア遺物散布地			
037	下原第二遺跡	099	ウフシ遺跡	160	ウオーニア遺物散布地	160	ウオーニア遺物散布地	220	ウオーニア遺物散布地	282	ウオーニア遺物散布地	282	ウオーニア遺物散布地			
038	新成原石器散布地 (仮称)	100	ウフシ遺跡	161	ウオーニア遺物散布地	161	ウオーニア遺物散布地	221	ウオーニア遺物散布地	283	ウオーニア遺物散布地	283	ウオーニア遺物散布地			
039	下原遺跡	101	ウフシ遺跡	162	ウオーニア遺物散布地	162	ウオーニア遺物散布地	222	ウオーニア遺物散布地	284	ウオーニア遺物散布地	284	ウオーニア遺物散布地			
040	新成原古墳群	102	ウフシ遺跡	163	ウオーニア遺物散布地	163	ウオーニア遺物散布地	223	ウオーニア遺物散布地	285	ウオーニア遺物散布地	285	ウオーニア遺物散布地			
041	シムバハル古湧泉	103	ウフシ遺跡	164	ウオーニア遺物散布地	164	ウオーニア遺物散布地	224	ウオーニア遺物散布地	286	ウオーニア遺物散布地	286	ウオーニア遺物散布地			
042	シマヌカ古湧泉	104	ウフシ遺跡	165	ウオーニア遺物散布地	165	ウオーニア遺物散布地	225	ウオーニア遺物散布地	287	ウオーニア遺物散布地	287	ウオーニア遺物散布地			
043	ウオーニスタキ祭壇跡	105	ウフシ遺跡	166	ウオーニア遺物散布地	166	ウオーニア遺物散布地	226	ウオーニア遺物散布地	288	ウオーニア遺物散布地	288	ウオーニア遺物散布地			
044	シマヌカ古湧泉	106	ウフシ遺跡	167	ウオーニア遺物散布地	167	ウオーニア遺物散布地	227	ウオーニア遺物散布地	289	ウオーニア遺物散布地	289	ウオーニア遺物散布地			
045	トクニスタキ祭壇跡	107	ウフシ遺跡	168	ウオーニア遺物散布地	168	ウオーニア遺物散布地	228	ウオーニア遺物散布地	290	ウオーニア遺物散布地	290	ウオーニア遺物散布地			
046	ウオーニスタキ祭壇跡	108	ウフシ遺跡	169	ウオーニア遺物散布地	169	ウオーニア遺物散布地	229	ウオーニア遺物散布地	291	ウオーニア遺物散布地	291	ウオーニア遺物散布地			
047	トクニスタキ祭壇跡	109	ウフシ遺跡	170	ウオーニア遺物散布地	170	ウオーニア遺物散布地	230	ウオーニア遺物散布地	292	ウオーニア遺物散布地	292	ウオーニア遺物散布地			
048	ジトウヒヒスタカ原祭壇跡	110	ウフシ遺跡	171	ウオーニア遺物散布地	171	ウオーニア遺物散布地	231	ウオーニア遺物散布地	293	ウオーニア遺物散布地	293	ウオーニア遺物散布地			
049	ウフシ遺跡	111	ウフシ遺跡	172	ウオーニア遺物散布地	172	ウオーニア遺物散布地	232	ウオーニア遺物散布地	294	ウオーニア遺物散布地	294	ウオーニア遺物散布地			
050	安仁原古墳群	112	ウフシ遺跡	173	ウオーニア遺物散布地	173	ウオーニア遺物散布地	233	ウオーニア遺物散布地	295	ウオーニア遺物散布地	295	ウオーニア遺物散布地			
051	北谷・前原古墳群	113	ウフシ遺跡	174	ウオーニア遺物散布地	174	ウオーニア遺物散布地	234	ウオーニア遺物散布地	296	ウオーニア遺物散布地	296	ウオーニア遺物散布地			
052	アンケール古湧泉	114	ウフシ遺跡	175	ウオーニア遺物散布地	175	ウオーニア遺物散布地	235	ウオーニア遺物散布地	297	ウオーニア遺物散布地	297	ウオーニア遺物散布地			
053	カークター古湧泉	115	ウフシ遺跡	176	ウオーニア遺物散布地	176	ウオーニア遺物散布地	236	ウオーニア遺物散布地	298	ウオーニア遺物散布地	298	ウオーニア遺物散布地			
054	ヒューター古湧泉	116	ウフシ遺跡	177	ウオーニア遺物散布地	177	ウオーニア遺物散布地	237	ウオーニア遺物散布地	299	ウオーニア遺物散布地	299	ウオーニア遺物散布地			
055	インシヤモ一古墳群	117	ウフシ遺跡	178	ウオーニア遺物散布地	178	ウオーニア遺物散布地	238	ウオーニア遺物散布地	300	ウオーニア遺物散布地	300	ウオーニア遺物散布地			
056	イリーニスタキ祭壇跡	118	ウフシ遺跡	179	ウオーニア遺物散布地	179	ウオーニア遺物散布地	239	ウオーニア遺物散布地	301	ウオーニア遺物散布地	301	ウオーニア遺物散布地			
057	イリーニスタキ祭壇跡	119	ウフシ遺跡	180	ウオーニア遺物散布地	180	ウオーニア遺物散布地	240	ウオーニア遺物散布地	302	ウオーニア遺物散布地	302	ウオーニア遺物散布地			
058	山川原第一遺跡	120	ウフシ遺跡	181	ウオーニア遺物散布地	181	ウオーニア遺物散布地	241	ウオーニア遺物散布地	303	ウオーニア遺物散布地	303	ウオーニア遺物散布地			
059	山川原第二遺跡	121	ウフシ遺跡	182	ウオーニア遺物散布地	182	ウオーニア遺物散布地	242	ウオーニア遺物散布地	304	ウオーニア遺物散布地	304	ウオーニア遺物散布地			
060	山川原第三遺跡	122	ウフシ遺跡	183	ウオーニア遺物散布地	183	ウオーニア遺物散布地	243	ウオーニア遺物散布地	305	ウオーニア遺物散布地	305	ウオーニア遺物散布地			
061	山川原第四遺跡			184	ウオーニア遺物散布地	184	ウオーニア遺物散布地	244	ウオーニア遺物散布地	306	ウオーニア遺物散布地	306	ウオーニア遺物散布地			

は普天間飛行場基地内にて  
確認されている埋蔵文化財  
2006年3月末現在

# 第Ⅲ章 調査方法

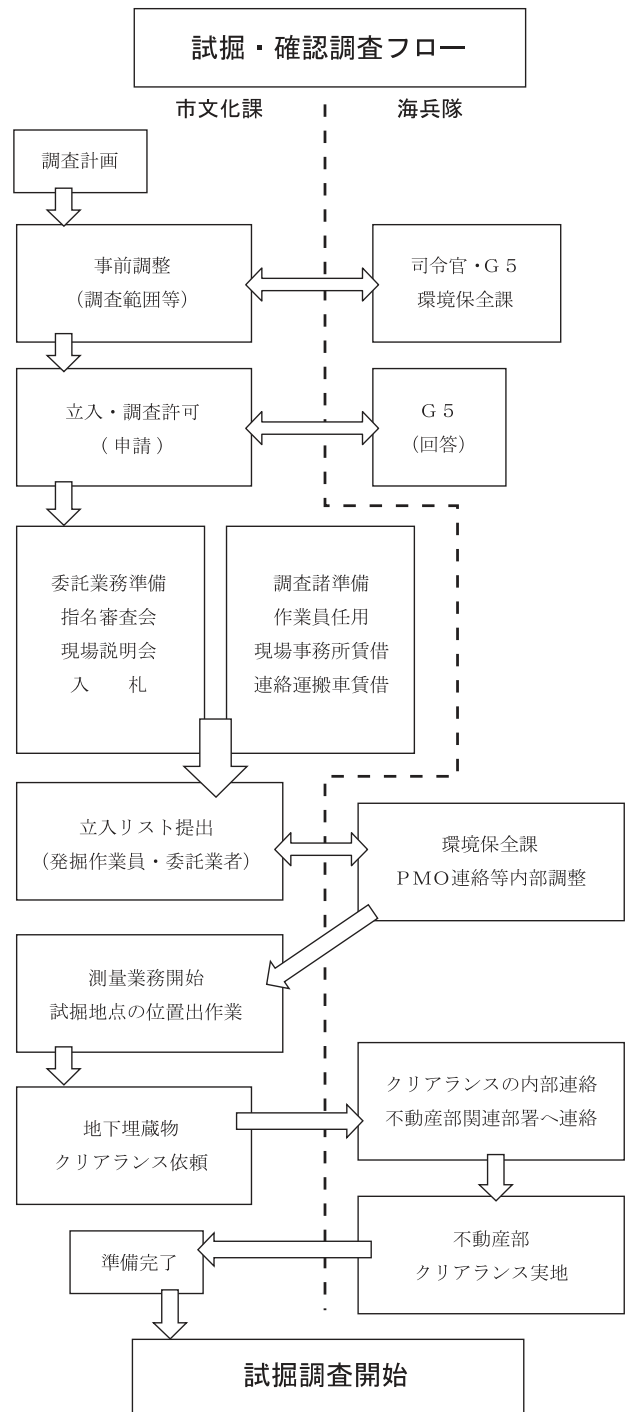
## 第1節 試掘調査の前に

基地内遺跡ほか発掘調査事業は、大規模な開発が予想される普天間飛行場基地内の埋蔵文化財の所在・範囲・性格を明らかにするために、試掘・確認調査を実施し、当該地域における埋蔵文化財の保存のための資料を作成することを大きな目的としている。これにより、試掘調査によって埋蔵文化財の基本的な所在状況が把握でき、遺跡の所在状況の概略を示す遺跡地図（分布図）の作成が可能となるほか、試掘調査と一部並行させながら実施する範囲確認調査により、再開発事業を円滑に実施する上で重要となる、より精緻な遺跡地図の作成並びに遺跡の性格・範囲の把握等が可能となるわけである。調査の実施に際しては、在沖米軍海兵隊との間で調査範囲の事前調整を実施し、G5に対して許可申請を行っている。米軍との調整を含めた調査実施までの流れについては、右記フローチャートを参照されたい。

## 第2節 調査区の設定

調査区の設定は、普天間飛行場基地内において同時に試掘・確認調査を実施する県文化課・県埋文センターとの間で普天間飛行場基地内全域を対象とした調査区割りを行っている。今回の試掘調査においても、まず、基準点をX = 31000、Y = 26500の位置に設定して、そこからX・Y軸を300mメッシュ毎に区切り第Ⅰ区画とした。それを30mメッシュ毎に区切り10分割した第Ⅱ区画を設け、さらにそれを6m四方の25分割にした第Ⅲ区画の3段階に区割りした(第12図参照)。

実際の調査区の設定は、これまでの試掘調査成果に基づき、調査地域内の現地形と旧地形、埋蔵文化財包蔵地の占地条件や口伝・伝承等についても考慮して試掘調査箇所を設定したほか、野嵩タマタ原遺跡及び上原同原遺跡の範囲確認調査成果を補完する目的で設定した。基本的には第Ⅱ区画の区割りを使用して、試掘坑の四辺が第Ⅱ区画ラインと重なるように各交点を基点とした。当該計画箇所に障害物があり、試掘調査に支障が生じると判断された場合には、適宜、第Ⅲ区画の区割りを使用して、第Ⅱ区画ラインと重なる当該地点に近い区画に平行移動させて設定することとした。



第11図 普天間飛行場基地内試掘・確認調査フローチャート



### 第3節 調査方法

調査区を設定した後は、前回の試掘調査を実施した際と同様に、掘削作業に先行して不発弾等の危険物や地下埋設物の有無を確認し、安全に調査を進行させるための磁気探査を実施した。探査方法としては、経層探査により深度1m毎に探査を実施しており、重機による掘削作業を1m毎に停止して異常反応がないことを確認した上で掘削作業を再開するという手順になる。逆に、異常反応が得られた場合は確認探査をその都度実施する。確認探査とは、異常反応があった箇所を手掘りにより確認し、除去後、再度探査を行い異常反応がないことを確認して掘削作業を再開するわけである。検出された異常物が不発弾等の危険物である場合は、通常、地域の警察に通報して警察もしくは自衛隊が処理を行うが、調査地域が米軍施設内であるため、検出された危険物は、まず市教委及び市役所に通報し、併せて海兵隊環境保全課に連絡を行い、その後は海兵隊所属の爆発物処理班が撤去・処理を行っている。

地下埋設物は、電気・水道・通信・下水道等が敷設されており、これらは調査の大きな障害物である。これらの中には軍事上重要なラインも存在しており、破損した場合は、試掘調査の中止命令に止まらず、日米両国間の外交問題や安全保障体制を揺るがすような問題に発展しかねない。埋設物の対処としては、調査許可地域に試掘箇所を設定し、埋設物を管理する不動産部署に対し地下埋設物の敷設状況を照会して、現地での確認作業を依頼する。埋設物があると判断された場合は、前述の調査区設定に従い、試掘坑の位置を移動するが、実際は米軍側も把握できていない埋設物等も確認される。幸いにもこれまでの調査では、事故に至るような埋設物の破損はないが、不時発見の埋設物により作業が中断することも少なくなかった。

磁気探査をクリアした後は、重機による掘削作業へと移行する。宜野湾市の場合、基地内の試掘調査では原則として、表層から基盤層（岩盤または泥岩等の基盤層）まで掘削することとしている。その際、重機掘削による堆積層及び遺構等の破壊を最小限に止めるために、数cm単位で掘削を行っている。堆積状況や遺物の出土状況に細心の注意を払いながら掘削を進行させ、遺物包含層や遺構が検出された時点で壁面及び床面の清掃を行う。その後は調査対象壁面の記録写真を撮影し、壁面図を作成するという流れになる。また、状況に応じて、確認された遺構を調査・記録後、サブトレンチ状に掘り下げる形で掘削作業を継続して、下層の堆積状況や基盤層の検出を確認する場合もある。これは、本試掘調査が埋蔵文化財の有無確認のみを目的としているものではなく、琉球石灰岩を基盤層とするマージ層を層位的に把握して旧地形の復元を行うことで、最終的に埋蔵文化財包蔵地を推定することも目的として位置付けているためである。

琉球石灰岩や島尻層群（クチャ - 泥岩 -）等の基盤層の検出あるいは包含層及び遺構等の検出により、掘削作業が終了と判断されると、調査対象壁面及び遺構検出面の清掃を経て分層作業へと移行する。市担当職員による堆積状況の観察・分層・略図作成・所見記載・記録写真撮影後は、試掘調査の支援を目的とした委託業務として画像解析図化作業と自然科学分析調査を実施している。画像解析図化作業はオルソ画像を作成するための測量作業を行い、それをもとにしたデジタルトレースを実施している。また、自然科学分析調査業務は、市担当職員による前段の作業を踏まえて、堆積状況を土壌学的・地質学的・考古学的な側面から補完しながら、土壌調査や理化学的分析等の各種自然科学分析に必要な試料採取を行い、これらを基にして年代測定等の作業を実施している。そのほかにも、今回の第4期試掘調査からは、物理探査による検証作業も併せて実施している。これまでは、広域的な調査に際して事前に文化財の有無を確認する有効的な手法として採用される例がほとんどであったと思われるが、今回の場合、これまでの試掘・確認調査という限られた範囲内において確認された埋蔵文化財の範囲や性格について、試掘坑やトレンチ外側の調査が実施されなかった範囲において実施しており、より具体的な成果を得ることを目的とした。



計画された試掘坑の設定を行うために  
伐採作業を実施する。

測量により試掘位置が確定された後で  
磁気探査による異常物や地下埋設物の  
有無確認を実施する。



磁気探査により異常物や地下埋設物が  
無いことを確認した後は、重機掘削に  
より試掘調査を開始する。  
※磁気探査は1m掘削ごとに実施。



基盤層である石灰岩等を確認後、作業  
員により調査壁面の清掃を実施する。  
調査対象壁面の清掃終了後は、調査員  
により、分層・層相観察所見の記載や  
調査壁面・遺構検出状況・遺物出土状  
況等の記録写真撮影を実施する。



調査員による各種記録作業が終了した  
後は、デジタルオルソ画像作成・デジ  
タルトレースの作業に必要となる調査  
壁面の画像の撮影と座標の標定作業を  
実施する。



オルソ関連作業が終了した後は、旧地  
形及び遺跡の立地環境、堆積状況等  
の観察を行い、調査区全体の考察を行  
うための各種作業を実施する。  
また、年代測定や各種分析調査に必要  
となる試料の採取も実施する。



調査に係る全工程が終了した後は、即  
日復旧の原則に従い、赤土流出等に配  
慮しながら、埋め戻し作業を実施して  
原状回復措置をとる。

図版5 試掘調査作業工程イメージ





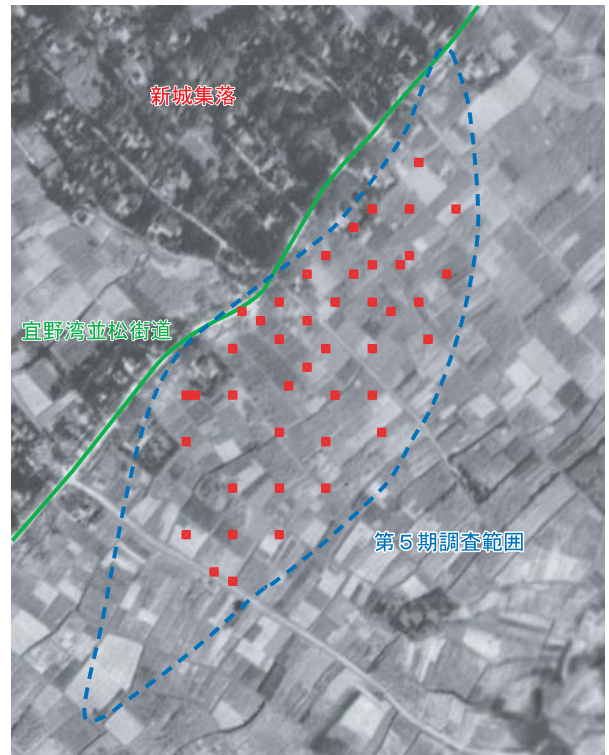
## 第IV章 第5期試掘調査報告

### 第1節 敷地分析と周知の遺跡

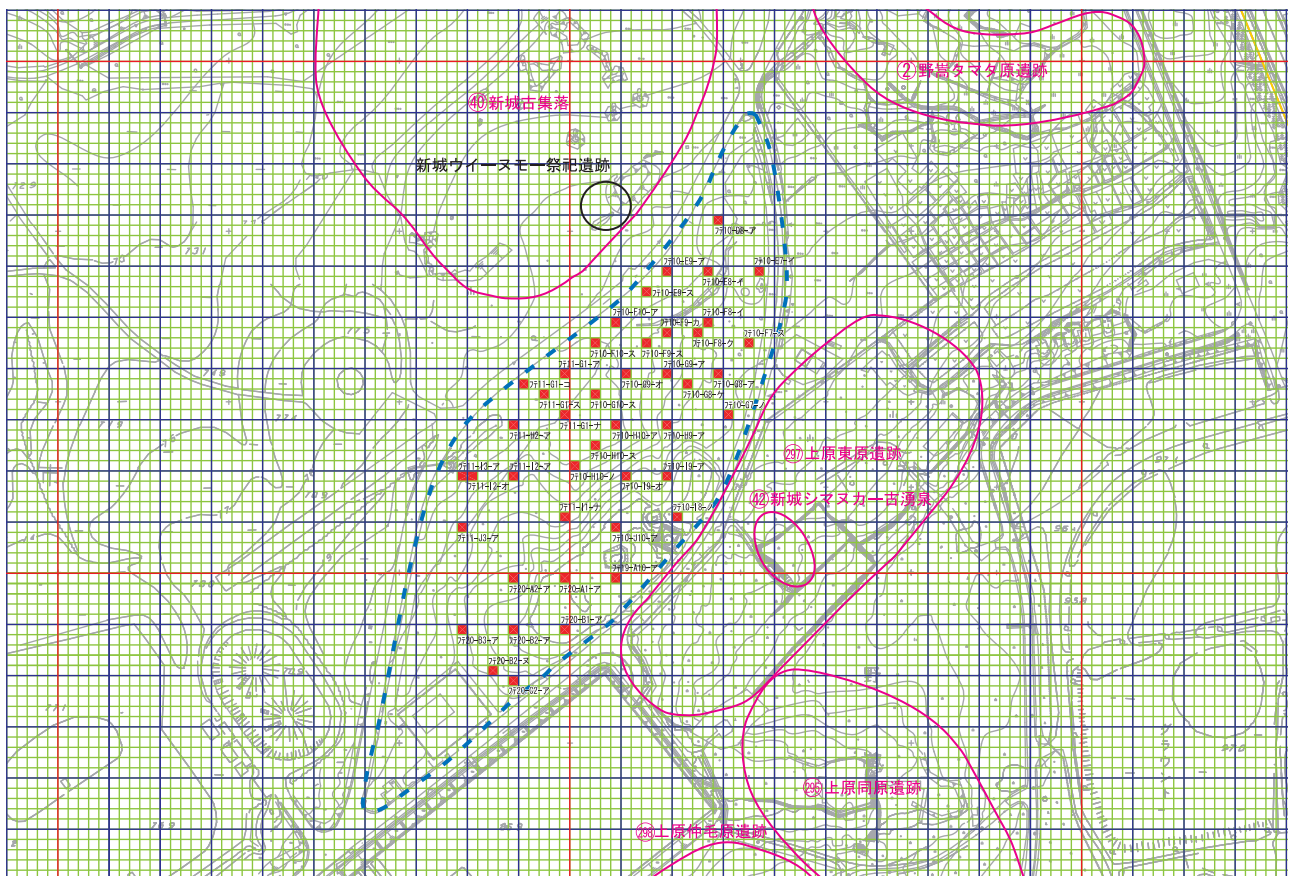
調査敷地は普天間飛行場基地内の北東部で、滑走路の北東延長線上に位置し、宜野湾市新城區に所在する。面積は約4.1haである。野嵩ゲートから延びる管理道路に囲まれており、周囲に民間及び公共の施設などはない。

調査敷地は標高80.7～89.1mを測り、南側は小丘陵となる。南東側を頂としてやや急斜面を作るが、特に大きな起伏はなく、北側は概ね平坦となる。植生については、西側の一部を除いてほぼ全体をギンネム・クワ・ホルト・リュウキュウハゼ・ススキなどの二次灌木が密集する。

調査区内には、遺跡の包蔵地は確認されていない。ただし、北方には近世の典型的な碁盤目型集落である新城古集落遺跡、東方には上原東原遺跡が接する。また、新城古集落と当該調査区との間は宜野湾並松街道が縦断する。さらに、北東70m程の距離にはグスク時代の生産遺跡が想定される野嵩タマタ原遺跡が、南方70～130mの範囲には上原同原遺跡や上原仲毛原遺跡、中原同原遺跡がそれぞれ位置する。



第14図 第5期試掘調査範囲（昭和20年）



第15図 第5期調査区 周辺遺跡分布図

## 第2節 調査の成果

### [1] 基本層序

平成13年度より実施している試掘調査の成果から、調査区全体に共通して大きく8つの層序が確認されており、これらを当該地域の基本層序として設定している。

今回の試掘調査も、これまでの試掘調査の成果を基にして、いわゆるⅡ層を4つの時期に区分した。これは、第4期試掘調査での報告にもあるように、野嵩タマタ原遺跡やフテ43地区における谷地形の堆積層の調査成果を基準として、土地改変や遺構などに由来する不整合面やその他の層相観察所見、出土遺物の年代観、年代測定などを加味して設定したものであり、「ユニット」と呼称して丸囲いの算用数字①～④で表した。各層序の特徴は以下の通りである。なお、各試掘坑の層名に用いたⅠ・Ⅱ層の枝番は、その試掘坑において堆積する層序を便宜的に表したものであり、必ずしも他の試掘坑と対応するものではない。各試掘坑におけるⅡ層の対応関係は、ユニット番号を参考にされたい。

Ⅰ層：盛土や攪乱層で表層には腐食土壌が堆積。Ⅰ層内には瓶・缶・コンクリート片・ビニール等を含む。

Ⅱ層：基地接收以前の旧表土や旧耕作土。塊状の褐色（鈍い黄褐色）砂質シルト層。炭化物や微細な焼土片を含み、空隙が多い。Ⅱ層は畑地耕作土の性格を有し、特に谷地形ではⅡ層が厚く堆積し、土地改変や遺構等に由来する不整合面やその他層相観察所見、出土遺物の年代観、年代測定値等を加味して4つに時期区分した。年代測定を実施した箇所については本章以降に詳細を述べる。

ユニット①：戦前～基地接收後に相当。上層は基地接收後の黙認耕作土、下層が近代の耕作土。灰褐色砂質シルトで基質の均質度は高い。炭化物、焼土粒を僅かに含む。

ユニット②：近世相当の耕作土。褐色～灰褐色の砂質シルトで、上位層に比してやや粘質土が高い。炭化物や焼土粒等の混在物も多くなり、根痕等も認められる。

ユニット③：中世相当の耕作土。暗灰色～黒灰色の砂質シルト～シルトで腐食が多い。炭化物粒、焼土粒、マンガン斑などの集中が見られ、混在物も多い。下層のほぼ同レベルで植栽痕と想定されるピットが検出される傾向にある。

ユニット④：古代～中世初期相当期の耕作土。灰黄褐色～鈍い黄褐色のシルト～粘土質シルトで、全体的に腐食が多く焼土粒も多く含まれ、根痕が著しく多い。

Ⅲ層：塊状をなす褐色の砂質シルト層。下位のⅣ層に比して泥質で、団粒構造の発達も良好。Ⅳ層との層界には凹凸やⅢ層より充填された根痕も見られ、マンガン斑の濃集も認められる。ただし、本調査区では確認されていない。

Ⅳ層：明黄褐色（褐色）を呈し、上方が細粒化をなす塊状の砂質シルト。

Ⅴ層：明黄褐色（明褐色）の砂質シルト。Ⅴ層はⅥ層に比して非常に泥質で、団粒構造の発達も良好。Ⅵ層との層界は凹凸することもあるが、Ⅳ層との層界は比較的平坦。

Ⅵ層：明黄褐色を呈し、僅かに上方細粒化する塊状砂質シルト。側方の層厚変化が著しい。Ⅵ層は最も砂質な堆積層で、Ⅴ・Ⅵ層は下位に存在するⅧ層と、その直上のⅦ層に伴う大きな起伏を埋積するように堆積する。地域によっては土質などによってⅥa～Ⅵc層の3層に細分される。

Ⅶ層：暗褐色の砂質粘土質シルト。基盤層の起伏に沿って堆積し、起伏に富む。

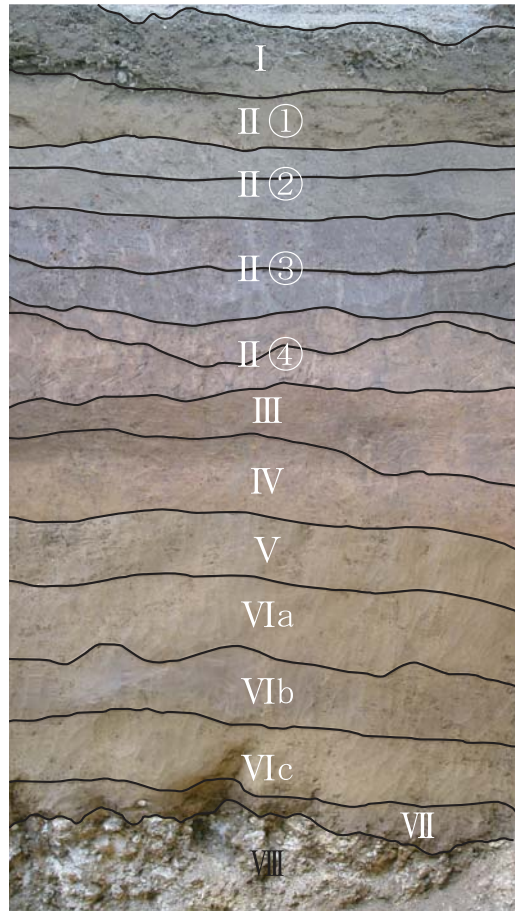
Ⅷ層：灰白色を呈する琉球層群の石灰岩。表面に容食痕が認められ、最上部では風化が進行する。

Ⅸ層：灰オリーブ色。島尻層群の泥岩風化層。塊状や小角片の泥岩特有の風化が顕著。本調査区では確認されていない。

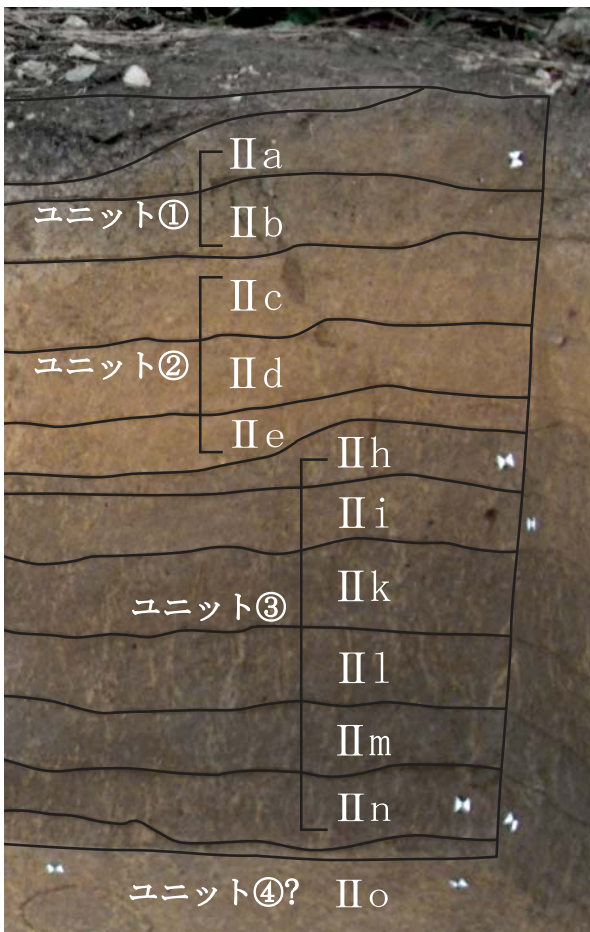
Ⅹ層：灰色を呈する島尻層群を構成する泥岩。本調査区では確認されていない。

第3表 基本層序の土色一覧

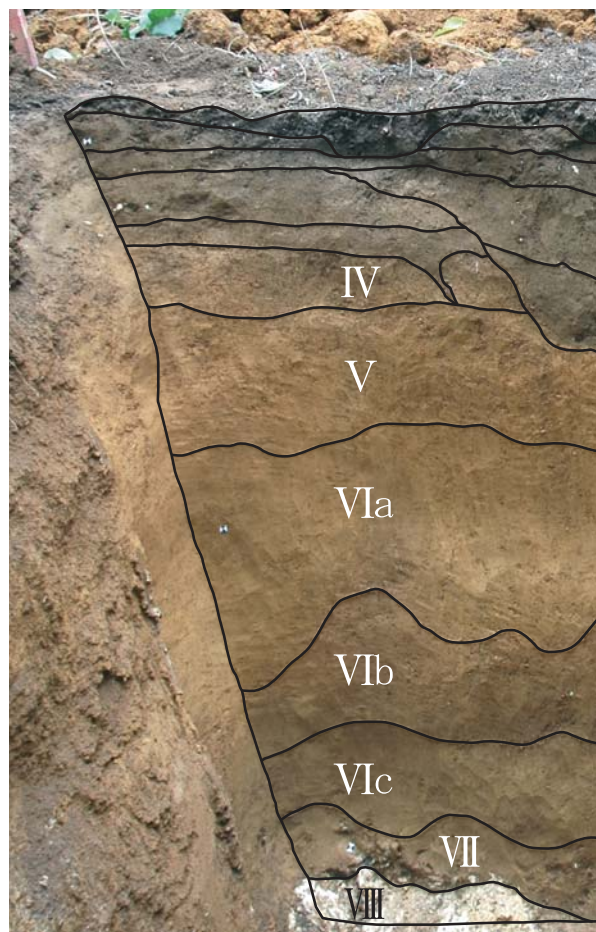
層序	土色	備考			
I層	2.5YR 4/3~4/6	にぶい赤褐色~赤褐色	表土。腐食層。 1b層以下は除外。		
	5YR 2/1	黒褐色			
	7.5YR 3/1~4/4	黒褐色~褐色			
	10YR 3/1~3/4	黒褐色~暗褐色			
II層	10YR 4/1~4/3	褐灰色~にぶい黄褐色	石灰岩の小礫を多く含む。 炭化物、腐食、マンガン粒、焼土など。		
	5YR 4/3	にぶい赤褐色			
	7.5YR 4/2~4/4	灰褐色~褐色			
	7.5YR 5/4	にぶい褐色			
	II層	10YR 4/2~4/3	灰黄褐色~にぶい黄褐色	炭化物、腐食、マンガン粒、焼土など。	
		2.5YR 4/3	にぶい赤褐色		
		7.5YR 3/2~3/3	黒褐色~褐色		
		7.5YR 4/3~4/4	褐色		
		II層	10YR 4/2~4/4	灰黄褐色~褐色	炭化物、腐食、マンガン粒、焼土など。 色調はII層で最も暗い。
			7.5YR 3/2~3/4	黒褐色~灰褐色	
			7.5YR 4/2~4/3	灰褐色~褐色	
			10YR 4/2~4/4	灰黄褐色~褐色	
II層	7.5YR 3/2~4/3	黒褐色~褐色	炭化物、腐食、マンガン粒、焼土など。 ユニット③に比べて色調やや濃い。		
III層	7.5YR 4/3~4/6	褐色	マージ。		
IV層	5YR 5/6	明赤褐色	マージ。		
	7.5YR 4/4~4/6	褐色			
V層	5YR 5/6	明赤褐色	マージ。		
	7.5YR 4/4~5/8	褐色~明褐色			
VI層	5YR 5/4~5/6	にぶい赤褐色~明赤褐色	マージ。		
	7.5YR 4/4~4/6	褐色			
	7.5YR 5/3~5/6	にぶい褐色~明褐色			
	7.5YR 6/4	にぶい橙色			
	10YR 5/4	にぶい黄褐色			
VII層	5YR 5/6	明赤褐色	マージ。		
	7.5YR 3/3~3/4	暗褐色			
	7.5YR 4/3~4/4	褐色			
	7.5YR 5/4~5/6	にぶい褐色~明褐色			
	10YR 4/4	褐色			
VIII層	10YR 7/1	灰白色	基盤層。		
IX層	2.5YR 5/2~5/3	灰赤色~にぶい赤褐色	基盤層。		
X層	2.5YR 5/1	赤灰色	基盤層。		



第16図 基本層序(合成画像柱状図)



第17図 第5期調査区における堆積状況画像柱状図



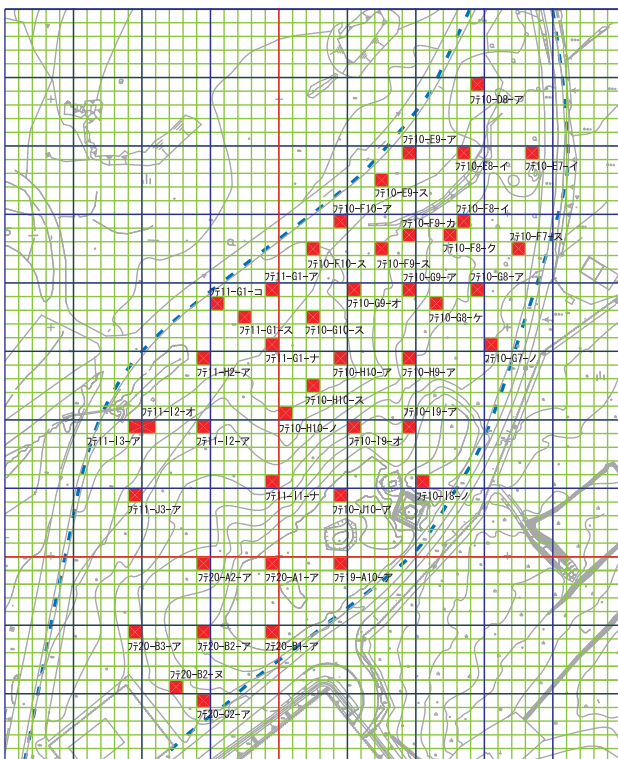
## [2] 調査の概要

第5期試掘調査は、4 m四方の試掘坑を重機掘削により43箇所実施した。遺構はこの内の4箇所で見出されている。この内、3箇所ではピットが確認されているが、いずれも性格不明の遺構である。また、1箇所では壁面で溝状遺構を検出した。遺構の検出層位は、性格不明ピットがいずれもⅡ層のユニット③、溝状遺構がⅡ層のユニット①である。遺物は、沖縄産の陶器が2点得られたのみである。

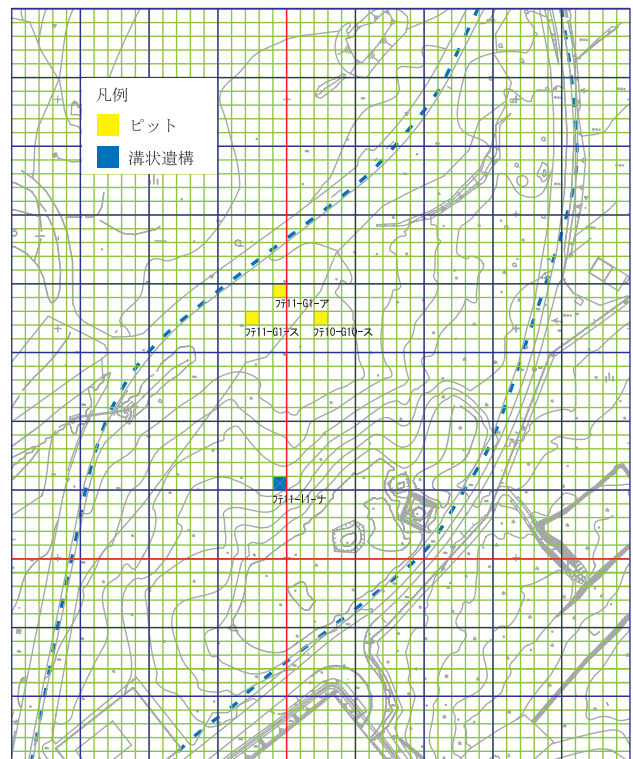
明治36年の土地利用図や昭和20年の航空写真から、当該調査区は戦前まで新城古集落の前面に広がる畑地として利用されていたことが窺える(第14図)。そのため、近世から近代の耕作土が堆積することが予想された。概ね耕作土と想定できるⅡ層は、当該調査区内から22箇所を確認されており、第23図のような分布状況が確認された。加えて、これまでの調査から中世に比定できるユニット③や、これを遡ることが推測されるユニット④についても、その分布が5箇所を確認された(第22図)。

いわゆるマーヅ以下の基本層序については、Ⅲ層が攪乱を受けずに堆積して残る箇所は見られず、泥岩とその風化層も確認されていない。さらに、調査区の南東を中心とする南側の大部分では、米軍接收後における大規模な土地改変が行われており、Ⅱ層以下の基本層序が確認できた箇所は僅かであった。

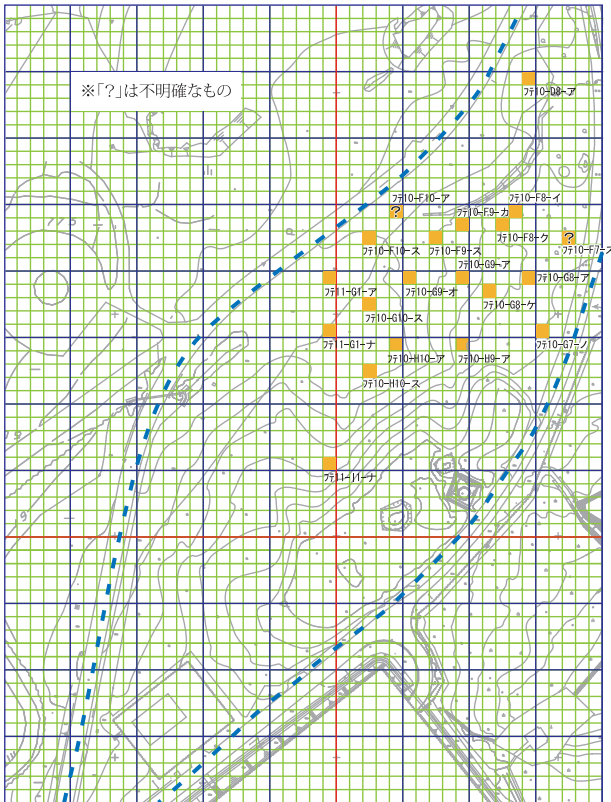
このように、当該調査区では試掘坑の約1/3が戦後の造成によって大きく攪乱を受けており、旧地形の把握が困難であったものの、琉球石灰岩(Ⅷ層)とそれを基盤とするいわゆるマーヅ(Ⅳ～Ⅶ層)の堆積状況やその標高から、調査区のほぼ中央に幅95 m前後で、比高差3 m以上の迫地と考えられる凹地が確認された(本章第4節参照)。今回、確認された3箇所の遺構は、この迫地に厚く堆積したⅡ層より検出されている。この迫地が北西-南東に軸を持って延びる可能性もあるが、南西側が大きく攪乱を受けている上、北西側は未調査であるため、今回の調査では言及できない。ただし、平成17年度に行われた第4期試掘調査の成果では、上原東原遺跡においても凡そ北西-南東に軸を持って本調査区の方に傾斜することが確認されているため、これとの関連が考慮される。この迫地と考えられる凹地状の地形については、Ⅱ層の堆積状況を踏まえて第4節で考察する。以下に、特徴的な成果が得られた調査箇所について詳述する。



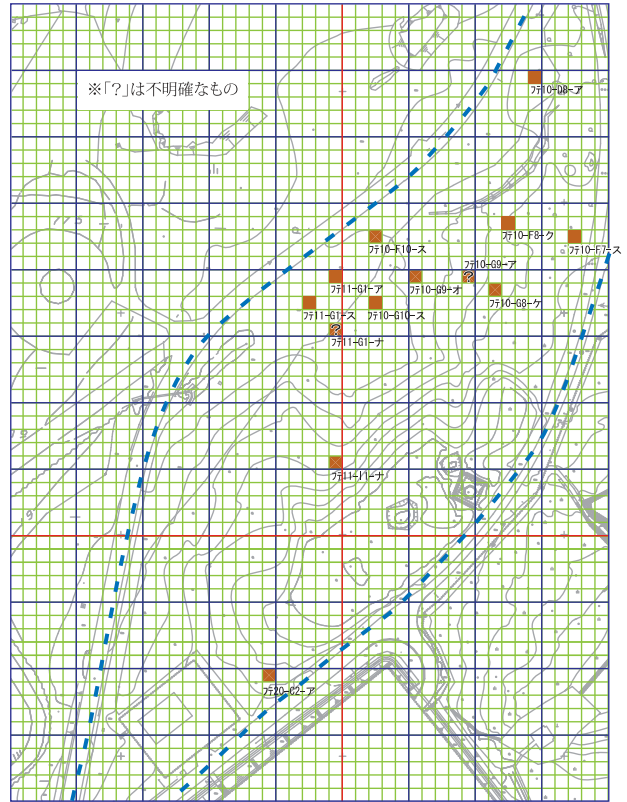
第18図 第5期調査区 試掘調査実施箇所



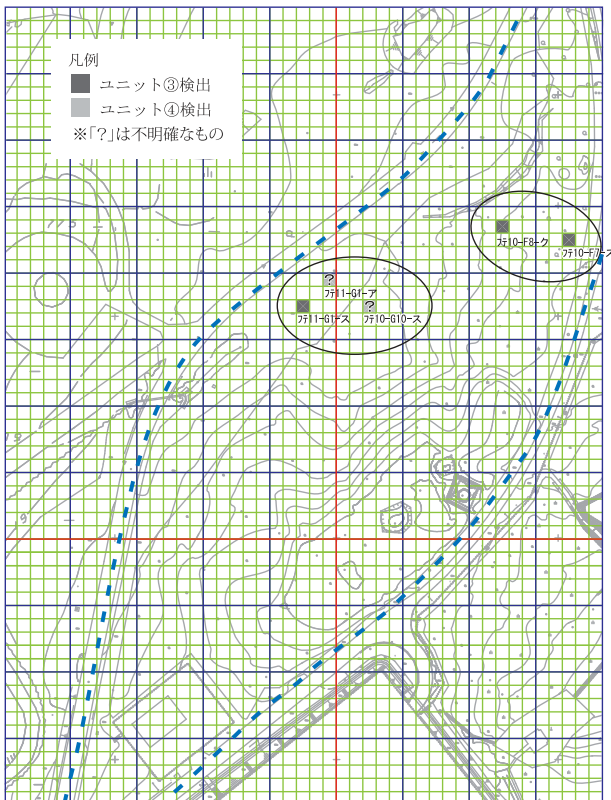
第19図 第5期調査区 遺構検出状況



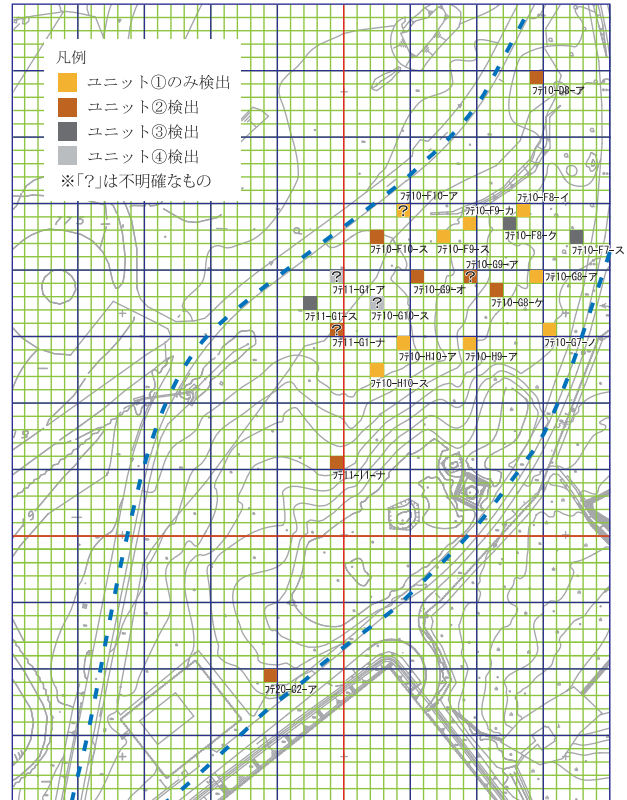
第20図 II層ユニット①の分布状況



第21図 II層ユニット②の分布状況



第22図 II層ユニット③・④の分布状況



第23図 第5期 II層検出状況

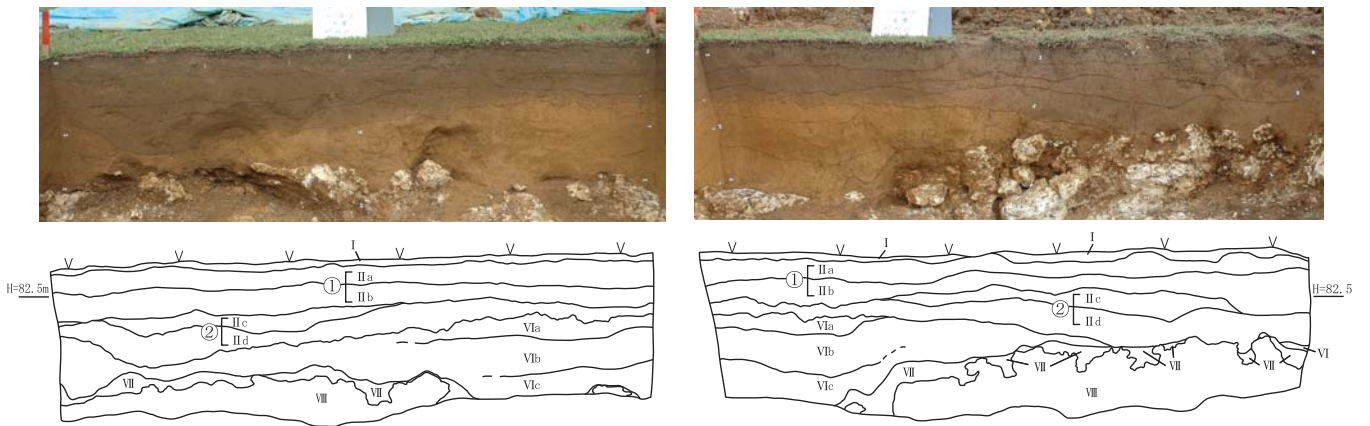
フテ 10-D8-ア

宜野湾市字新城の小字新城原に所在し、新城古集落遺跡の包蔵地から 35 m程の距離に位置する。芝生の下にⅡ層が堆積することから、Ⅱ層は削平されている可能性がある。

Ⅱ層は a～d の 4 枚が確認されており、Ⅱ b 層とⅡ c 層の層界でユニット①・②に分けられる。Ⅱ d 層の下面は、基盤層（Ⅷ層）が傾斜する辺りで明確に凹凸する。Ⅵ層は a～c に細分できるが、明瞭ではない。

フテ 10-E9-ア

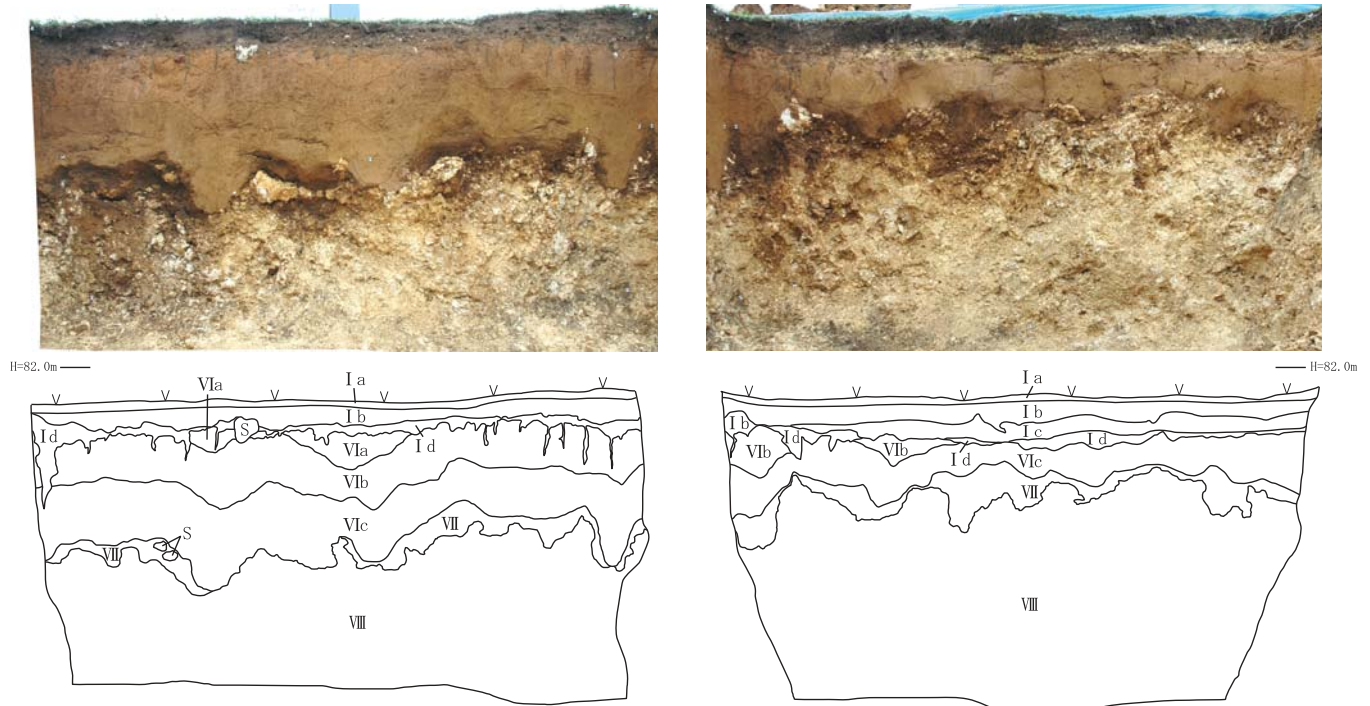
宜野湾市字新城の小字新城原に所在し、新城古集落遺跡の包蔵地から 30 m程の距離に位置する。Ⅱ層は確認できないが、戦前は新城集落の前面に広がる畑地であったことから、戦後の造成によってⅡ層が削平されたと考えられる。マージはⅥ層とⅦ層が造成層の直下に堆積する。Ⅵ層は明確に a～c に細分でき、これらは基盤層（Ⅷ層）の隆起に沿って堆積する。基盤層（Ⅷ層）は、フテ 10-E7-イから約 2 m程傾斜しており、当試掘坑では西に向かって約 0.8 m下がることを壁面から観察できる。



北壁断面

フテ10-D8-ア

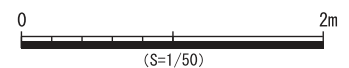
東壁断面



北壁断面

フテ10-E9-ア

東壁断面



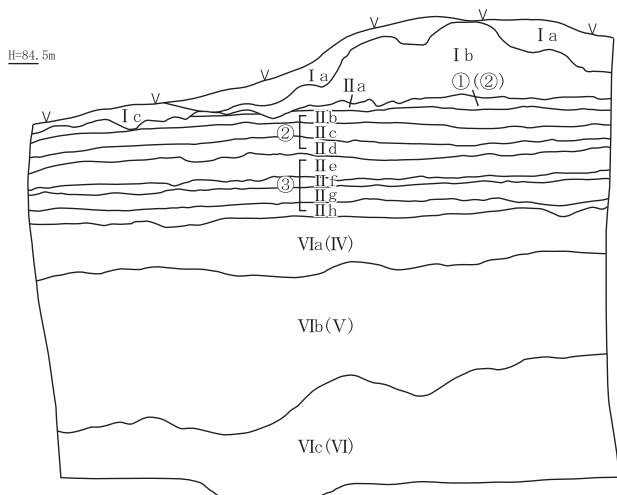
第 24 図 各試掘坑断面図① フテ 10-D8-ア・フテ 10-E9-ア

フテ 10-F7-ス

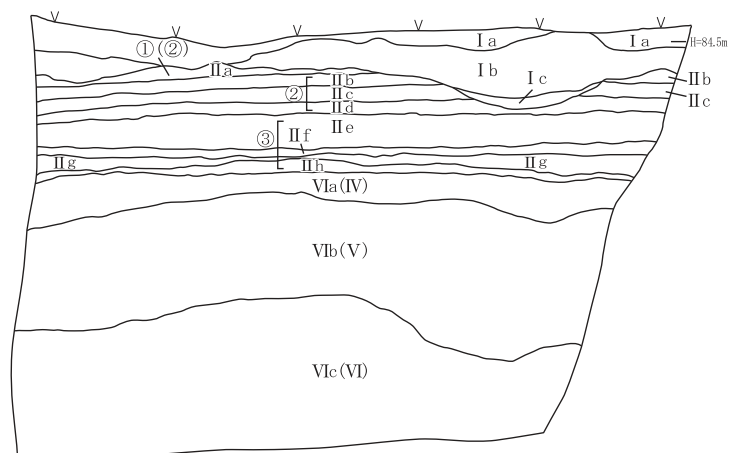
宜野湾市字新城の小字東原に所在し、上原東原遺跡の包蔵地から 35 m 程の距離に位置する。客土が盛土されており（I a・b 層）、その下に本来の表土（I c 層）が僅かに確認できる。II 層は、当調査区においては比較的厚く堆積し、計 8 枚確認された。II a 層がユニット①、II b～d 層がユニット②、II e～h がユニット③の時期を想定している。ただし、II a 層はユニット②の可能性も考えられる。ユニット①の時期に堆積した II 層の多くは、I 層によって削平されたと考えられる。全て水平堆積で、II e 層は下面が若干波打つように凹凸しており、耕作の痕跡が窺える。

マーヅは a～c に細分可能な VI 層が厚く堆積する。VI a 層は、II 層によって削平される。なお、II h 層は II 層と VI 層の暫移層である。マーヅはマンガンの影響によって、にぶい赤褐色～暗赤褐色を呈す。VI a 層と VI b 層の下面は、概ね同様の起伏で堆積しており、基盤層（VIII 層）の起伏が想定できる。

標高約 82 m まで掘削したが、基盤層（VIII 層）を確認することはできなかった。一方、当試掘坑の南西に位置するフテ 10-G8-アでは、基盤層（VIII 層）を標高約 83 m で検出しており、その傾斜は北東方向を示す。そのため、当試掘坑周辺の基盤層（VIII 層）は、北東ないし東方向へ緩やかに傾斜する可能性が考えられる。



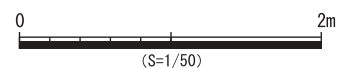
北壁断面



東壁断面

フテ10-F7-ス

第 25 図 各試掘坑断面図② フテ 10-F7-ス



### フテ 10-F8-イ

宜野湾市字新城の小字東原に所在する。I層からの攪乱などは受けておらず、腐植土層の下にII層が堆積する。II層はa～cの3枚が確認されており、全てユニット①の時期に比定した。いずれも、特徴的な腐食を多く含む粘質のシルト層である。

マージはII層による攪乱を受けており、VI～VII層が僅かに残るのみである。基盤層（VIII層）の標高は約84 mで、当調査区において最も高い。前述したように、フテ 10-G8-アからフテ 10-F7-スへ傾斜する可能性があるが、周囲の基盤層（VIII層）の標高などを考慮すると、丘陵と言える程の高まりを形成しているとは言えず、極めて緩やかな斜面を形成したと思われる。

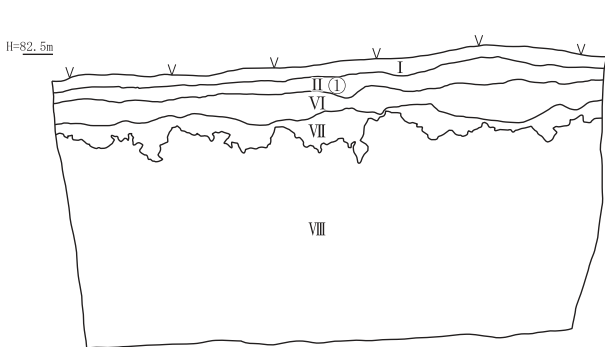
### フテ 10-F8-ク

宜野湾市字新城の小字東原に所在する。北東に隣接するフテ 10-F8-イと同様に、腐植土層の下にII層が堆積する。現標高もフテ 10-F8-イと変わらない。しかし、基盤層（VIII層）は南西方向に傾斜しているため、フテ 10-F8-イのそれに比べて0.5～1.0 m程低く、II層が比較的厚く堆積する。

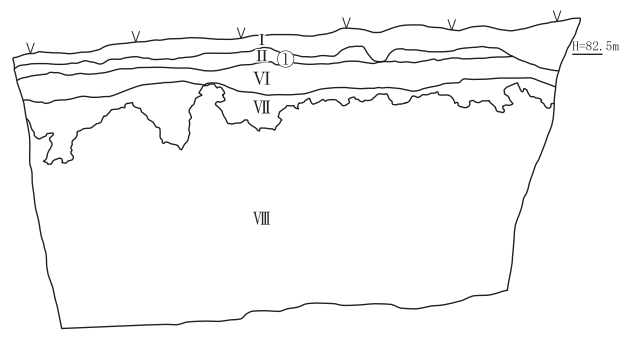
II層は計7枚確認された。II a～d層は近世以降、II e～g層は中世（グスク時代）の耕作土を想定することができる。特に、II g層の下面は小刻みに凹凸しており、耕作された可能性が高いと言える。VI層は厚く堆積するが、細分はできない。

### フテ 10-F9-カ

宜野湾市字新城の小字東原に所在し、新城集落から南東方向に伸びる筋道に位置する。II層は、薄い腐植土層の下に堆積する。II層は1枚のみで、フテ 10-F8-イと同様に粘質が強い。VI層はII層によって削平されたと思われ、堆積は薄い。石灰岩であるVIII層は、風化のため軟質である。



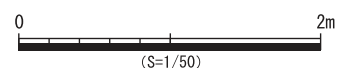
北壁断面



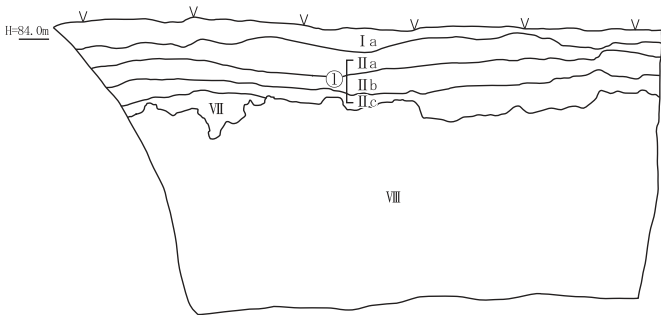
東壁断面

フテ10-F9-カ

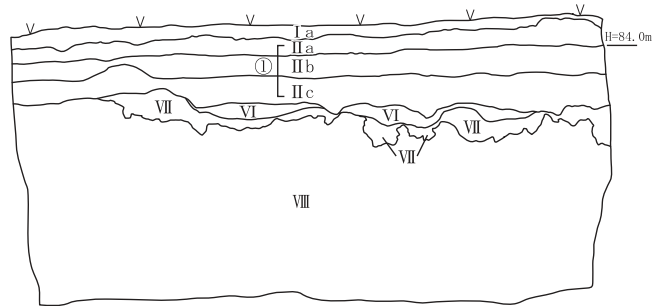
第 26 図 各試掘坑断面図③ フテ 10-F9-カ





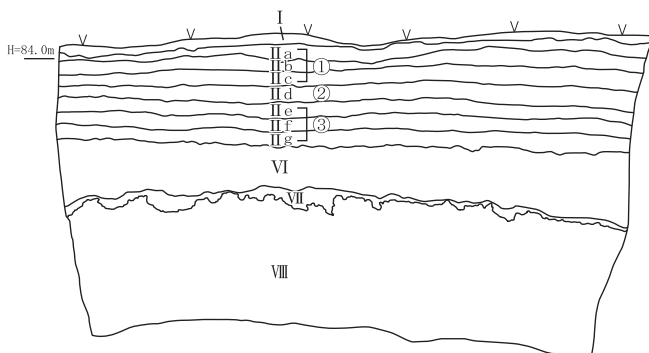


北壁断面

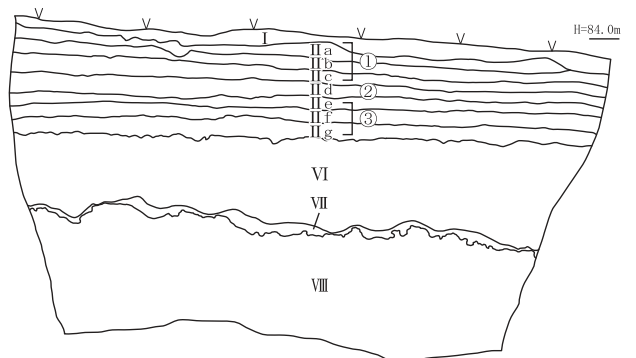


東壁断面

フテ10-F8-イ



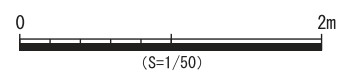
東壁断面



南壁断面

フテ10-F8-ク

第 27 図 各試掘坑断面図④ フテ 10-F8-イ・フテ 10-F8-ク



### フテ 10-F9-ス

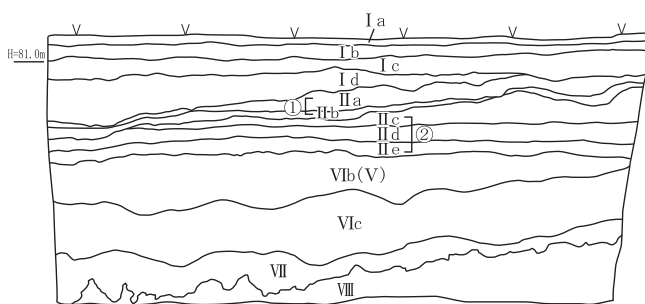
宜野湾市字新城の小字東原に所在する。Ⅱ層は、薄い腐植土層の下に計4枚堆積する。これらは、全てユニット①の時期に比定できる。マージはⅥ～Ⅶ層が堆積する。いずれもⅡ層による削平を受けており堆積は薄い。基盤層（Ⅷ層）は南に傾斜しており、その比高差は約0.5 mである。この傾斜に沿うようにして、Ⅱ層によって削平されたⅥ層が東壁で確認できる。

### フテ 10-F10-ア

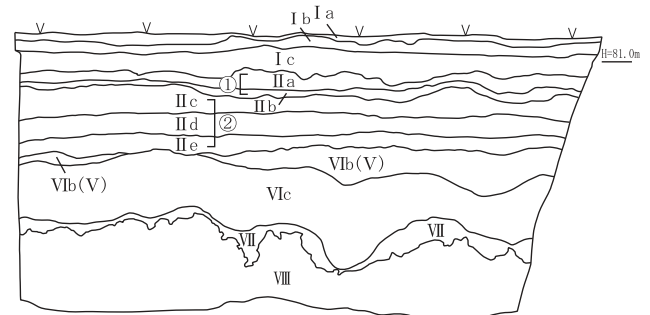
宜野湾市字新城の小字新城原に所在し、新城古集落遺跡の包蔵地から35 m程の距離に位置する。基盤層（Ⅷ）層の標高などから迫地の縁辺部にあたると思われる。Ⅱ層は計2枚で、いずれも近世以降の耕作土が想定できる。基盤層（Ⅷ層）は西に傾斜しており、その比高差は約0.6 mを測る。また、当試掘坑から約50 m離れたフテ 10-F8-イの基盤（Ⅷ層）からの比高差は約3.0 mで、極めて緩やかな傾斜と言える。なお、当試掘坑とフテ 10-E9-ア・フテ 10-E9-スは、いずれも基盤層（Ⅷ層）が西へ傾斜する。

### フテ 10-F10-ス

宜野湾市字新城の小字新城原に所在し、新城古集落遺跡の包蔵地から40 m程の距離に位置する。Ⅱ層は基地造成層の下に堆積する。計5枚を確認することができ、Ⅱ a～b層をユニット①の時期に、Ⅱ c～e層をユニット②の時期に比定した。Ⅵ層はⅡ層による削平を受けており、Ⅵ a層を確認することはできない。Ⅵ b層とⅥ c層は基盤層（Ⅷ層）の起伏に沿って堆積する。基盤層（Ⅷ層）は南西方向に傾斜する。



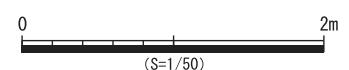
北壁断面

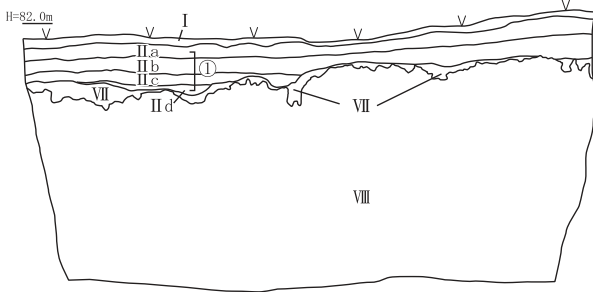


東壁断面

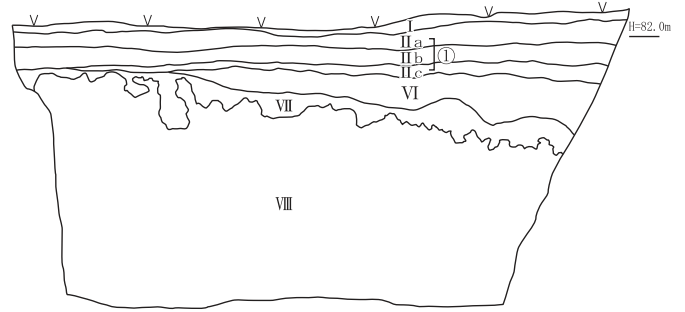
フテ10-F10-ス

第 28 図 各試掘坑断面図⑤ フテ 10-F10-ス



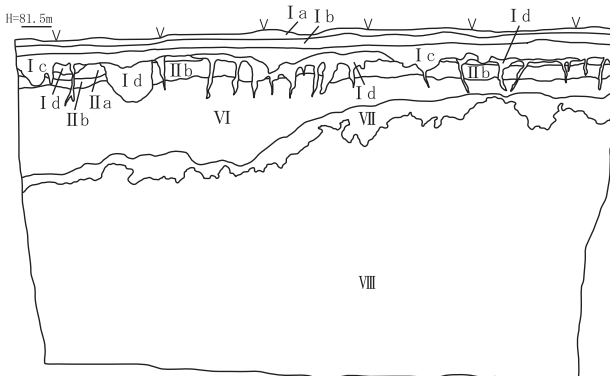


北壁断面

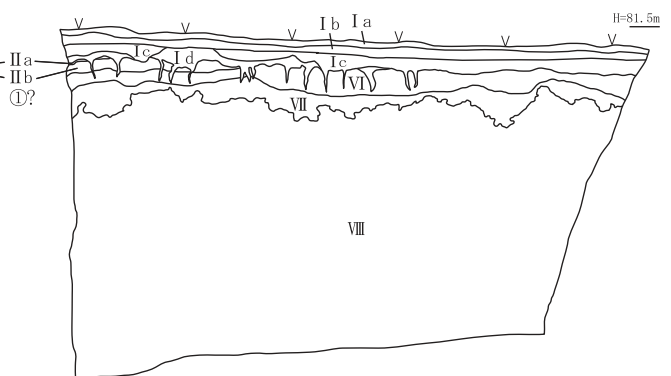


東壁断面

フテ10-F9-ス



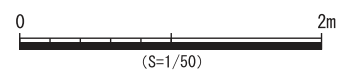
北壁断面



東壁断面

フテ10-F10-ア

第 29 図 各試掘坑断面図⑥フテ 10-F9-ス・フテ 10-F10-ア



フテ 10-G7-ノ

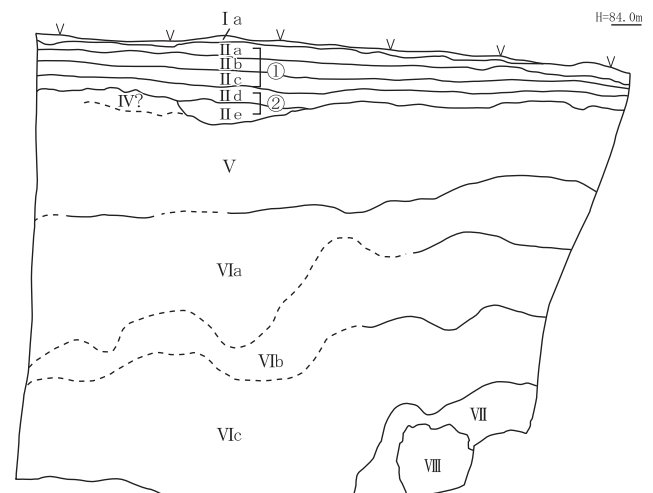
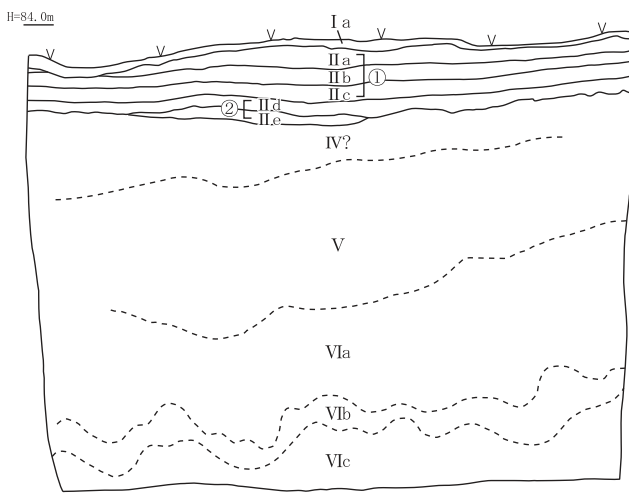
宜野湾市字新城の小字新城原に所在し、上原東原遺跡の包蔵地から 15 m 程の距離に位置する。II 層は、薄い腐植土層の下に計 3 枚堆積する。いずれもユニット①の時期に比定できる。マージはIV層あるいはV層～VI層が検出されている。IV層あるいはV層と考えられる層は、マンガンの影響で変色しており、VI層との層界は明瞭ではない。南壁と西壁の境には、水の吸い込み口と思われる穴が開いており、マンガンの沈着はこれが影響していると考えられる。基盤層（VIII層）は検出できなかった。

フテ 10-G8-ア

宜野湾市字新城の小字東原に所在し、上原東原遺跡の包蔵地から 30 m 程の距離に位置する。II 層は腐植土層の下に計 3 枚堆積する。いずれもユニット①の時期に比定できるものである。マージはV～VII層が検出されており、VI層はa～cに細分できる。また、V層・VIa層はII層によって削平される。マージは、いずれも基盤層（VIII層）に沿って堆積しており、北東方向に傾斜する。

フテ 10-G8-ケ

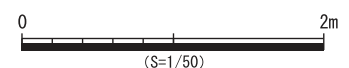
宜野湾市字新城の小字東原に所在する。II 層は、薄い腐植土層の下に計 5 枚堆積する。II a～c 層をユニット①の時期に、II d～e 層をユニット②の時期に想定した。マージは、マンガン沈着の影響で層界は明瞭ではないものの、IV～VII層が堆積すると思われる。基盤層（VIII層）は南壁の西側に一部検出されているため、東方に傾斜していると思われるが明確ではない。迫地の縁辺部にあたりと考えられる。



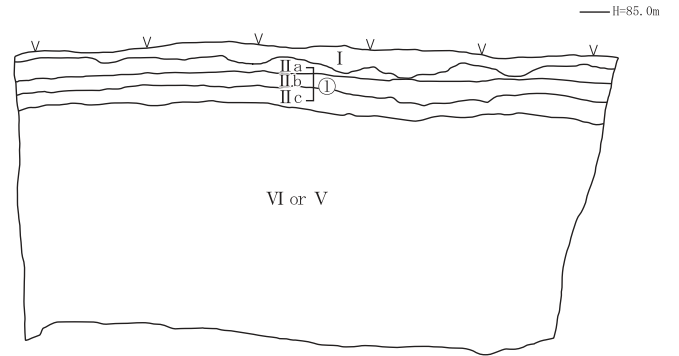
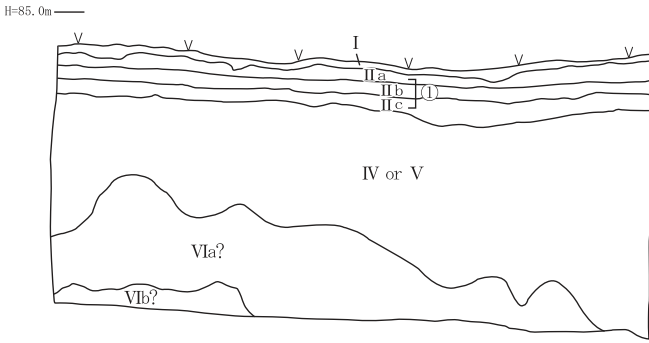
東壁断面

フテ10-G8-ケ

南壁断面



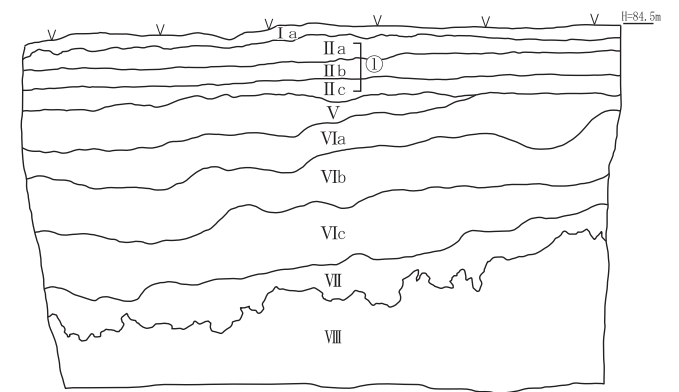
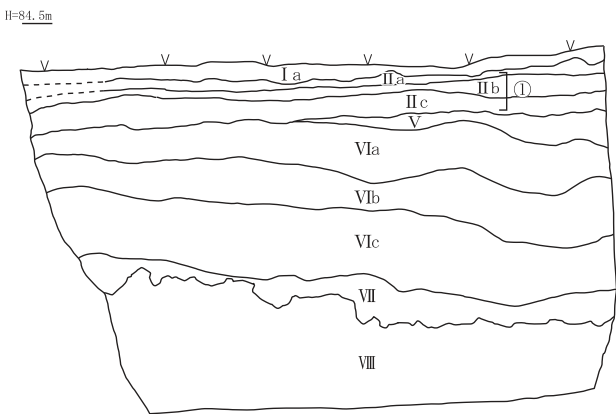
第 30 図 各試掘坑断面図⑦ フテ 10-G8-ケ



南壁断面

フテ10-G7-ノ

西壁断面

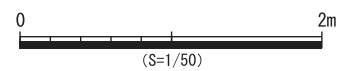


北壁断面

フテ10-G8-ア

東壁断面

第 31 図 各試掘坑断面図⑧ フテ 10-G7-ノ・フテ 10-G8-ア



フテ 10-G9-A

宜野湾市字新城の小字東原に所在する。II層は、薄い腐植土層の下に計4枚堆積する。いずれも、近世以降の耕作土が想定できる。当試掘坑は、ユニット②の分布域の中央付近に位置しており（第20図・第21図）、ユニット③・④の2つの分布域から外れた場所に位置する。

マージは、II層による攪乱を受けており、確認できるものはVI～VII層である。VI層はa～cに細分できるが、一部でその層界は不明瞭である。ただし、VI層はいずれも基盤層（VIII層）の起伏に概ね沿って堆積すると思われる。基盤層（VIII層）は、やや南方向へ傾斜しており、その標高などから、迫地の緑辺部にあたと考えられる。

フテ 10-G9-オ

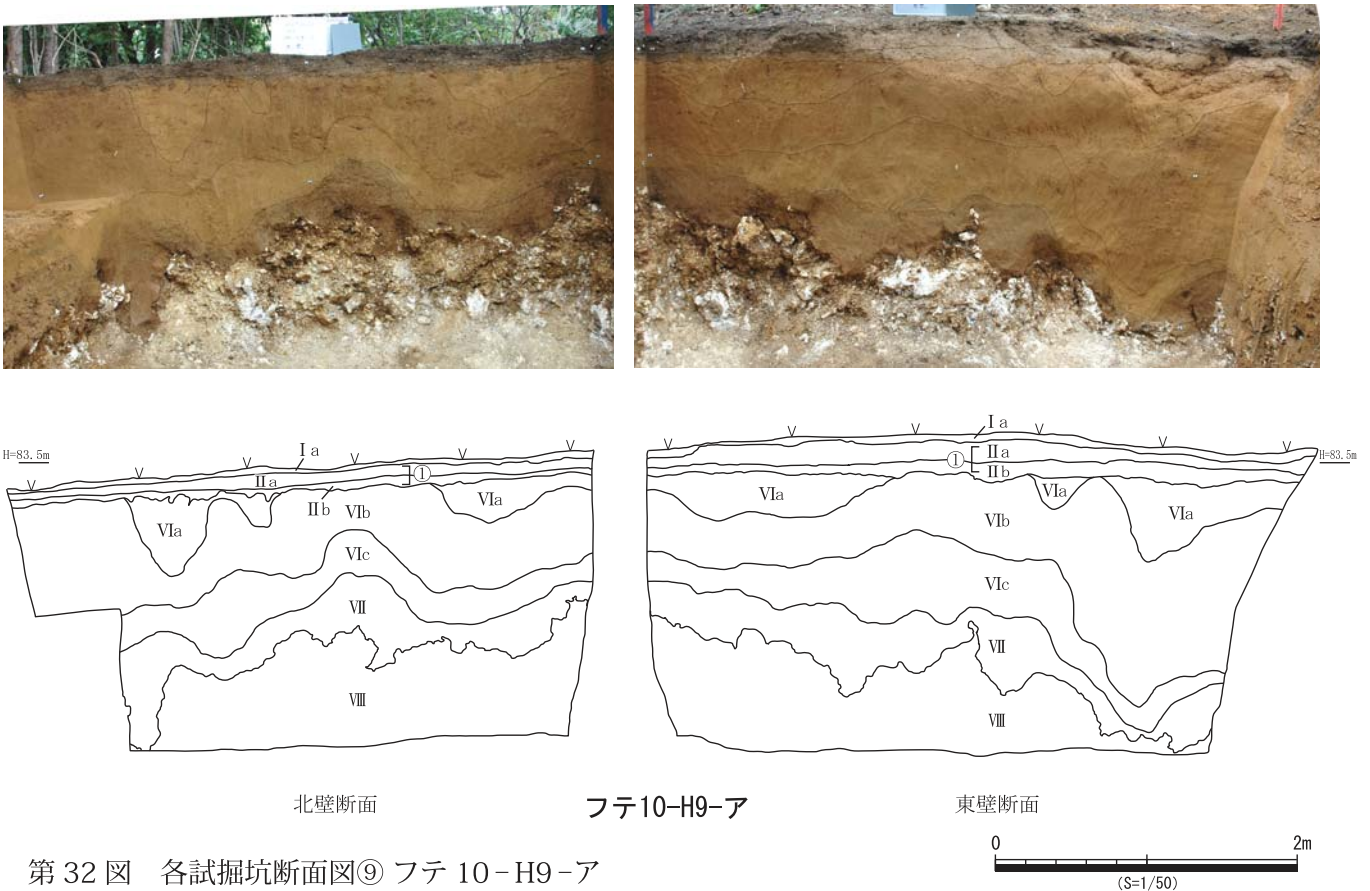
宜野湾市字新城の小字東原に所在する。II層は計4枚確認でき、II a層をユニット①、II b～d層をユニット②の時期に比定した。マージはVI～VII層が薄く堆積しており、いずれもII層によって削平されている。

フテ 10-F9-スから南方向へ傾斜する基盤層（VIII層）は、当試掘坑周辺で西方にやや向きを変えて極めて緩やかに傾斜する。

フテ 10-H9-A

宜野湾市字新城の小字東原に所在する。迫地の東縁辺部にあたり、II層は薄い。堆積する計2枚の層は、ともにユニット①の時期である。マージはII層による削平を受けており、VI～VII層が基盤層（VIII層）に沿って堆積する。VI層はa～cに細分できる。基盤層（VIII層）標高などから、迫地の緑辺部にあたと考えられる。

当試掘坑より南方は大規模な造成が行われており、旧地形を推測することはできないが、基盤層（VIII層）は南西方向に傾斜しているため、凹地状の地形は少なくともフテ 10-I9-オまで続いていた可能性がある。なお、当試掘坑における基盤層（VIII層）の比高差は約0.7 mを測る。



第 32 図 各試掘坑断面図⑨ フテ 10-H9-A



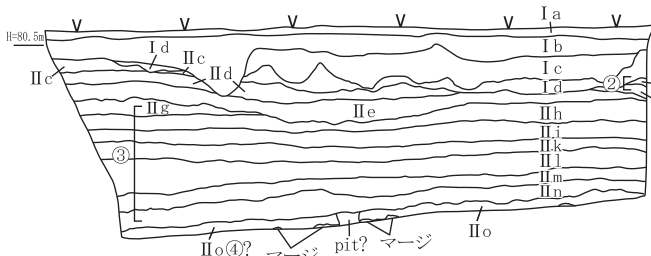
フテ 10-G10-ス

宜野湾市字新城の小字東原に所在する。迫地の底部付近に位置し、Ⅱ層が厚く堆積する。Ⅱ層は、計 13 枚を確認することができ、a～b層をユニット①、c～e層をユニット②、f～n層をユニット③、o層をユニット④の時期にそれぞれ比定した。ただし、Ⅱo層はユニット③の可能性もあり、明確ではない。Ⅱf層以下は、概ね水平に堆積するが、Ⅱe層は、Ⅱf～h層を攪乱して堆積する。Ⅱe層とその下位は不整合である。また、Ⅱn層下面では Pit と思われる落ち込みが確認されたが、性格は不明である。Pit と思われる落ち込みは、マーヅを掘り込む形で検出された。年代測定の結果、11 世紀末～12 世紀中頃の値が得られている。なお、遺物は出土していない。

試掘坑下端の標高は当調査で最も低く、約 79.1 mを測るが基盤層（Ⅷ層）は未検出である。また、遺構の検出面でマーヅを検出したが、層名は特定できない。

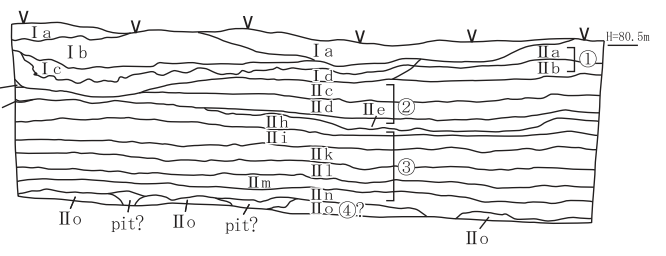


平面図



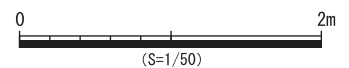
北壁断面

フテ10-G10-ス  
(北・東・平面)



東壁断面

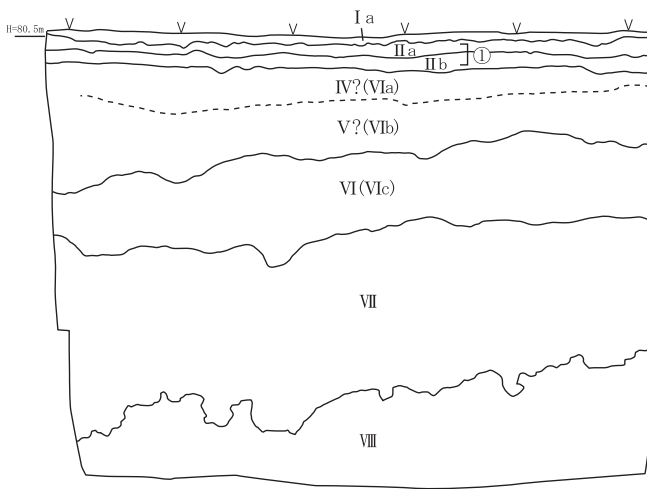
第 35 図 各試掘坑断面図・平面図① フテ 10-G10-ス (北・東・平面)





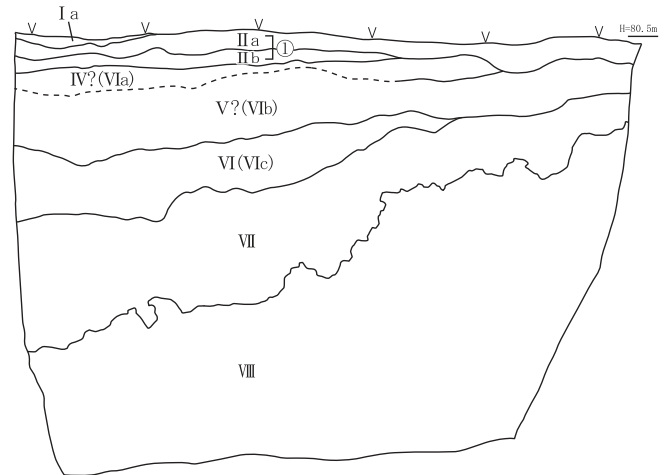
フテ 10-H10-ア

宜野湾市字新城の小字東原に所在する。II層は計2枚で、いずれもユニット①の時期に比定できるものである。マージは厚く堆積するが、マンガンによる影響のため、VII層を除いて不明確である。基盤層（VIII層）は北東に傾斜するが、迫地の範囲を考慮すると（第 60 図）、この傾斜は一時的な勾配と思われる。

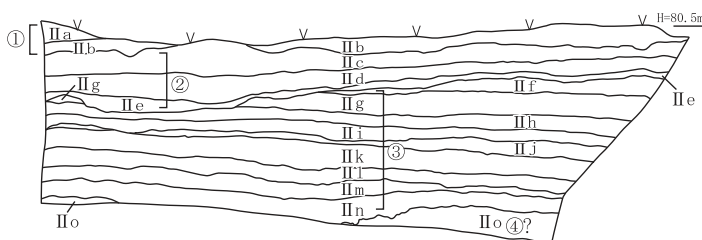


東壁断面

フテ10-H10-ア



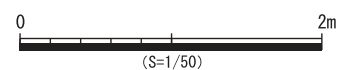
南壁断面



南壁断面

フテ10-G10-ス(南)

第 36 図 各試掘坑断面図⑫ フテ 10-H10-ア・フテ 10-G10-ス(南)



フテ 10-H10-ス

宜野湾市字新城の小字東原に所在する。II層は、薄い腐植土層の下に計3枚堆積する。いずれもユニット①の時期と考えられる。マージはVI層あるいはV~VII層が堆積する。上層は、II層によって削平される。

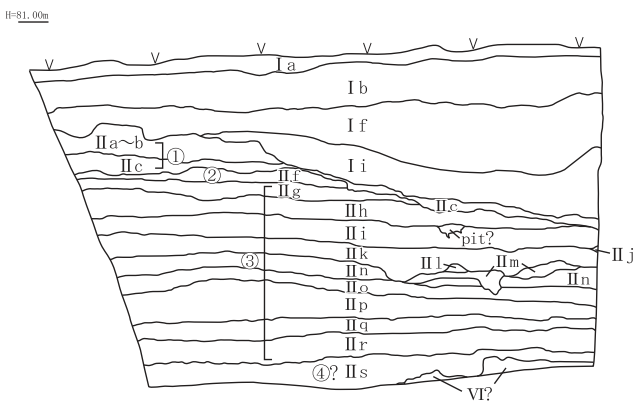
フテ 11-G1-ア

宜野湾市字新城の小字新城原に所在する。また、新城古集落遺跡の包蔵地から 50 m程の距離で、戦前の新城集落南東側を北東 - 南西に伸びる宜野湾並松街道に位置する。

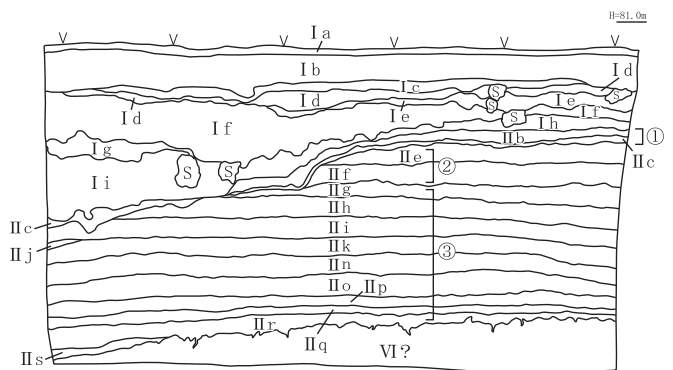
当試掘坑は迫地底部付近に位置しており、谷を埋めるようにしてII層は厚く堆積する。II層は計19枚が確認されており、それぞれ、a~c層をユニット①、d~f層をユニット②、g~r層をユニット③、s層をユニット④の時期に想定した。ただし、II s層はユニット③の時期の可能性も考えられる。II d層以下は概ね水平に、あるいは地形に沿って堆積するが、II c層はII d~i層を大きく掘り込む。また、II k層も、II l~n層を一部で掘り込んで堆積する。遺構は、西壁のII h層下面で Pit と思われる掘り込みが確認できる他、II r層下面でも性格不明の Pit が検出された。II s層の年代測定の結果は 15 世紀半ば~ 16 世紀前半の値が得られている。なお、II f層からは灰釉碗の破片が1点得られている。



図版6 遺物検出状況



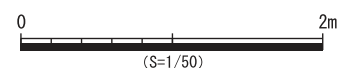
西壁断面

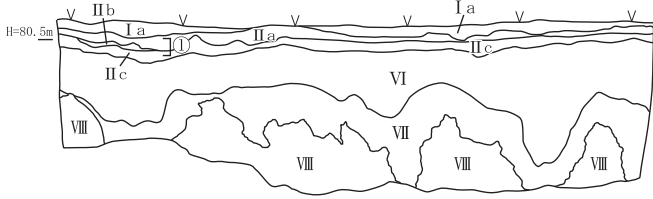


北壁断面

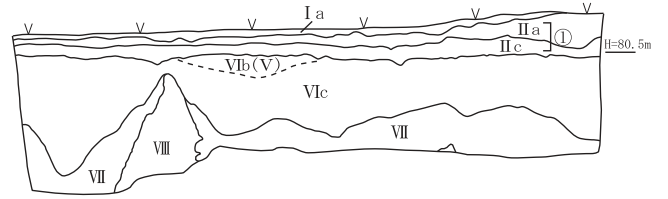
フテ11-G1-ア  
(西・北)

第 37 図 各試掘坑断面図⑬ フテ 11-G1-ア (西・北)



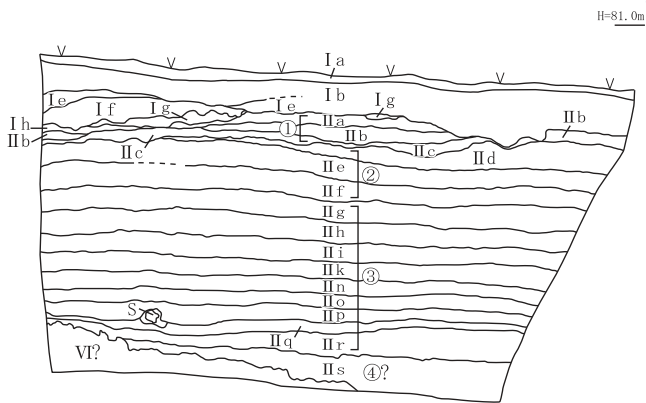


北壁断面

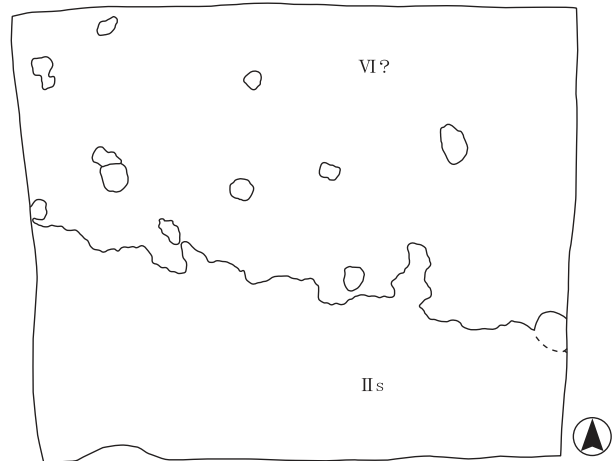


東壁断面

フテ10-H10-ス



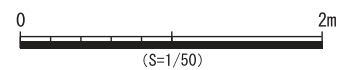
東壁断面



平面図

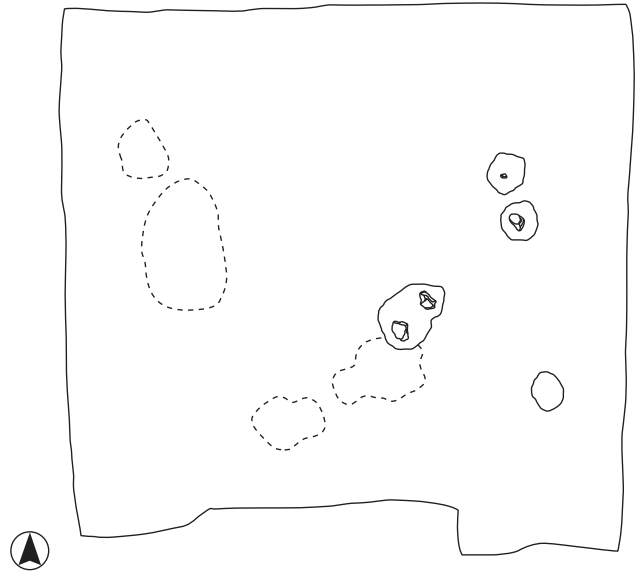
フテ11-G1-ア  
(東・平面)

第 38 図 各試掘坑断面図・平面図⑭ フテ 10-H10-ス・フテ 11-G1-ア (東・平面)

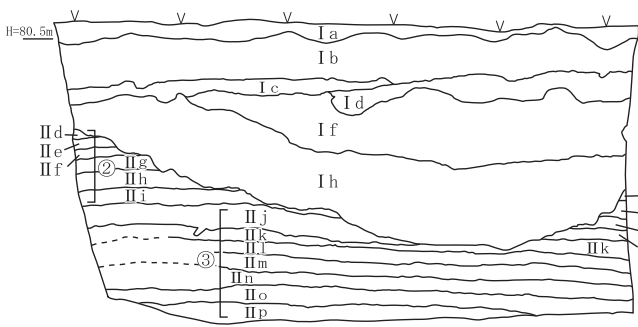


フテ 11-G1-ス

宜野湾市字新城の小字新城原に所在する。迫地の底部付近に位置しており、Ⅱ層が厚く堆積するが、Ⅰ層によって大きく攪乱を受けており、ユニット①の時期に比定できる層は確認できない。Ⅱ a～Ⅱ i 層をユニット②、Ⅱ j～Ⅱ q 層をユニット③の時期に比定した。Ⅱ層は概ね水平に堆積し、下面が小刻みに波打つ箇所が散見できる。遺構は、試掘坑下端平面で Pit が検出された。6 基あるいは 4 基の Pit には風化した石灰岩の礫が入るが、性格は不明である。検出された Pit の 1 つは、平面形が多角形を呈して見える。

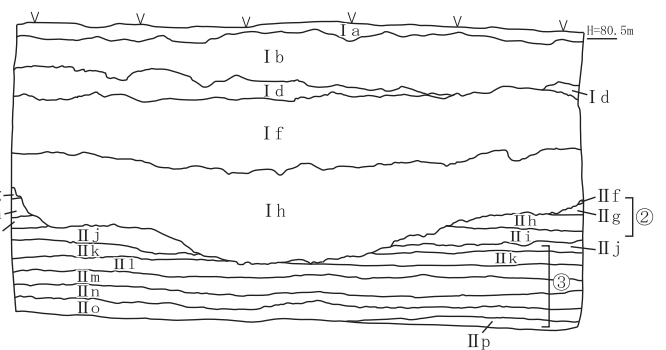


平面図



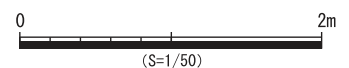
西壁断面

フテ11-G1-ス  
(西・北・平面)

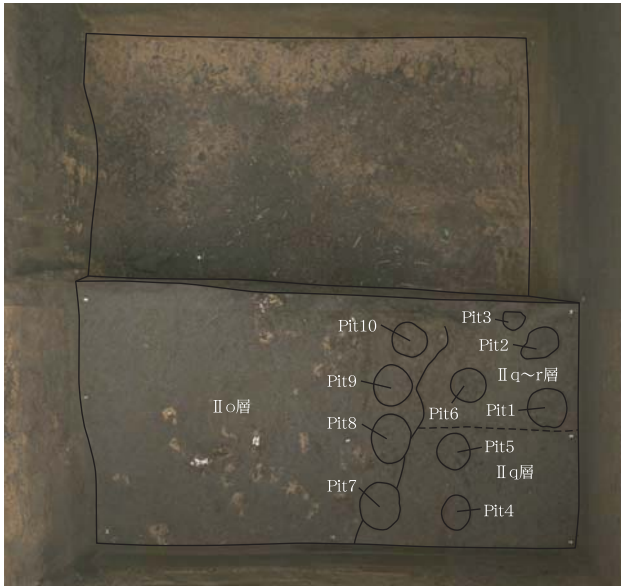


北壁断面

第 39 図 各試掘坑断面図・平面図⑮フテ 11-G1-ス (西・北・平面)



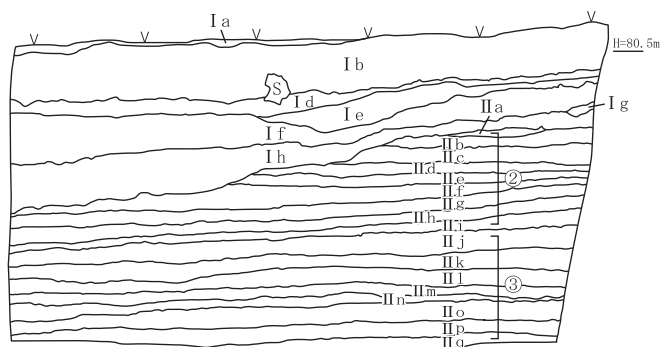
第4期試掘調査では、6地区のフテ 10-A4-タにおいて、風化して表面が粘土化した状態の石灰岩（基盤層ではない）に伴って Pit 群が検出されている（第40図）。これらは列状を成して検出されており、植栽痕が想定される。当試掘坑において検出された Pit は列状にはならず、植栽痕を想定することは難しいが、風化して粘土化した石灰岩を伴う点で共通する。



第40図 フテ 10-A4-タ遺構検出状況



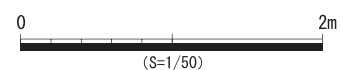
第41図 フテ 10-A4-タ試掘坑の位置と第5期試掘調査の主な遺構分布状況



東壁断面

フテ11-G1-ス(東)

第42図 各試掘坑断面図①⑥ フテ 11-G1-ス (東)



フテ 11-G1-ナ

宜野湾市字新城の小字東原に所在する。迫地の底部付近に位置するが、II層は薄く、計4枚が堆積するのみである。II c層までがユニット①、II d層がユニット②の時期に比定できるが、II d層もユニット①の時期を遡らない可能性もある。また、II d層下面は小刻みに凹凸し、VI層を掘り込む。

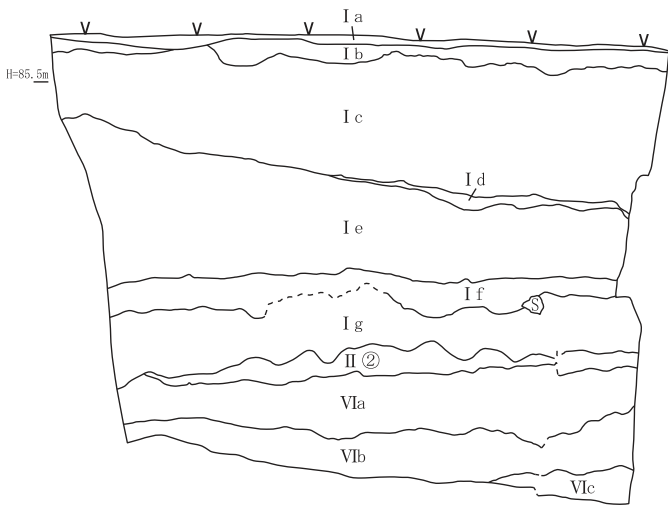
フテ 11-11-ナ

宜野湾市字新城の小字東原に所在する。II層は計6枚堆積し、a～f層をユニット①、g～h層をユニット②の時期に想定した。II c層下面には溝状の掘り込みが確認できる。この遺構が利用されていたと思われるユニット①の時期には、宜野湾並松街道から南東方向に伸びる筋道が設けられているため、これとの関連が考慮される。マージは、IV～VII層の計6枚が検出された。

フテ 20-C2-ア

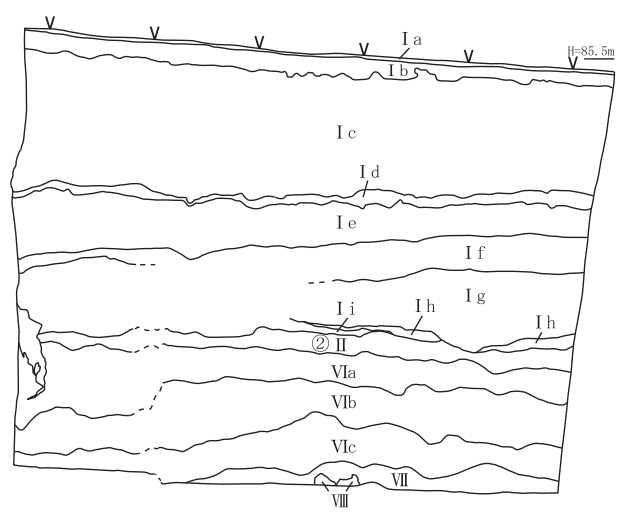
宜野湾市字新城の小字東原に所在する。調査区南側の大規模な土地改変が行われた地域に位置しており、大部分を基地接收後の造成によって攪乱を受けるが、II層が僅かに残る。時期は、ユニット②を想定した。炭化物による年代測定では、18世紀後半の値が得られている。

当試掘坑は、第15図などの等高線が示すように、小丘陵の裾に位置する。この小丘陵は全体が客土によって形成されており、基地造成時に人工的に作られたものである（第48図・第56図）。

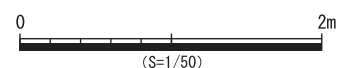


北壁断面

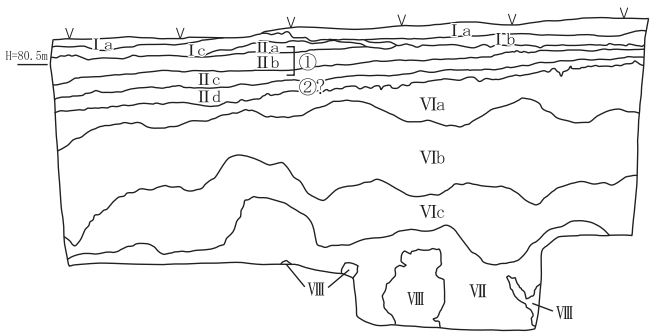
フテ20-C2-ア



東壁断面

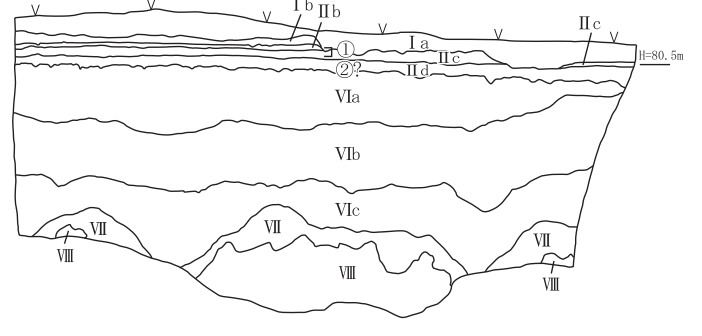


第43図 各試掘坑断面図⑱ フテ 20-C2-ア

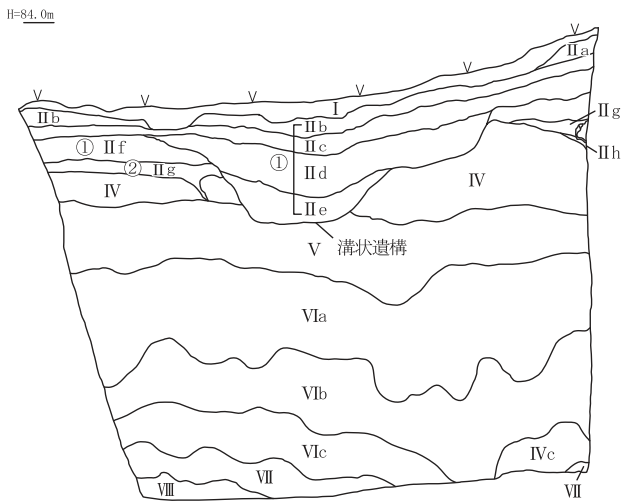


東壁断面

フテ11-G1-ナ

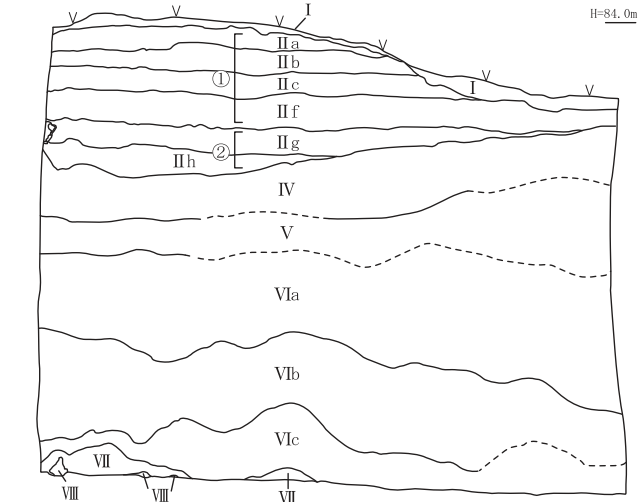


南壁断面



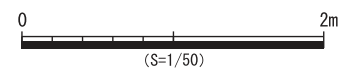
東壁断面

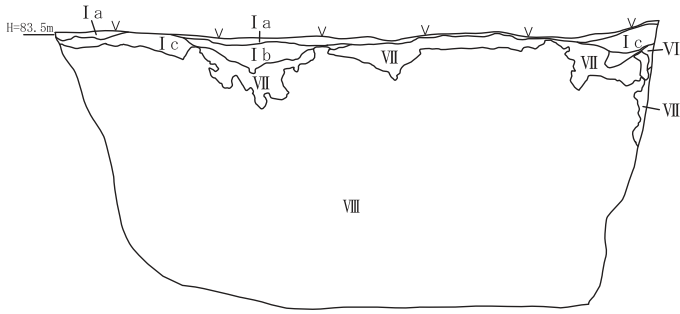
フテ11-I1-ナ



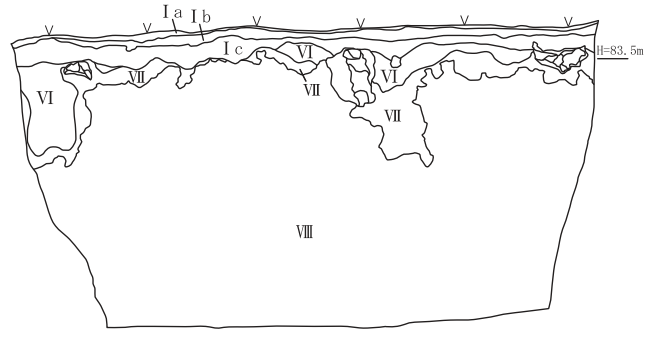
南壁断面

第 44 図 各試掘坑断面図⑱ フテ 11-G1-ナ・フテ 11-I1-ナ



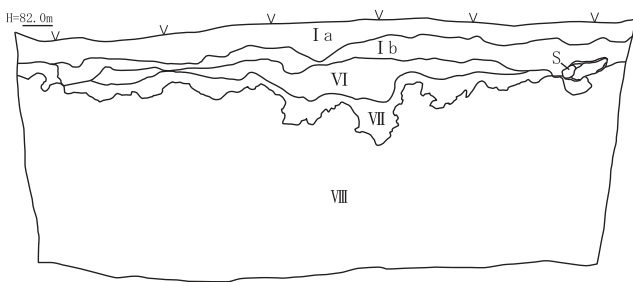


北壁断面

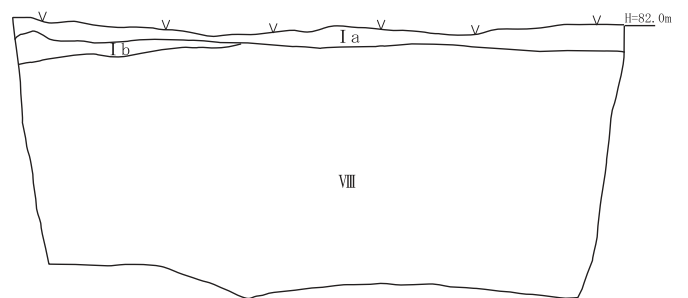


東壁断面

フテ10-E7-イ



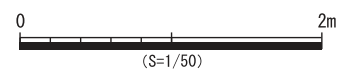
北壁断面



東壁断面

フテ10-E8-イ

第 45 図 各試掘坑断面図⑨ フテ 10-E7-イ・フテ 10-E8-イ



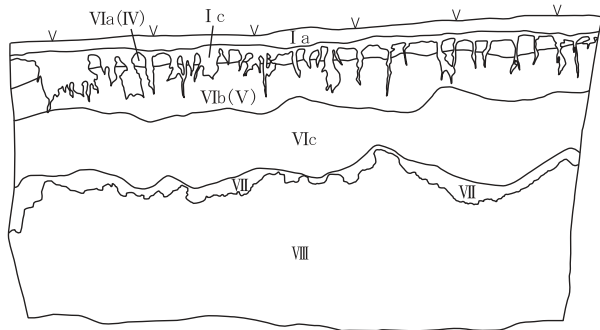




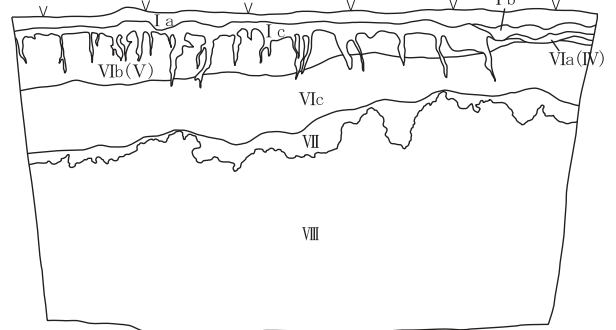
H=82.0m



H=82.0m

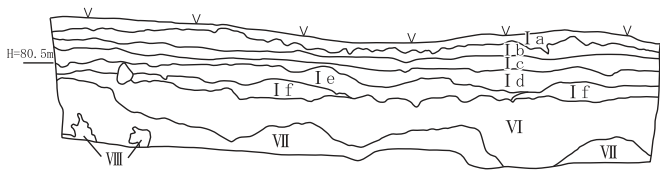


北壁断面

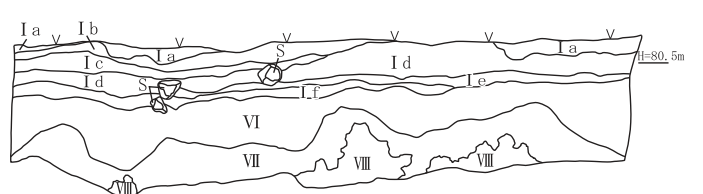


東壁断面

フテ10-E9-ス



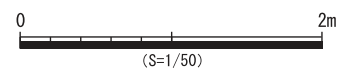
南壁断面

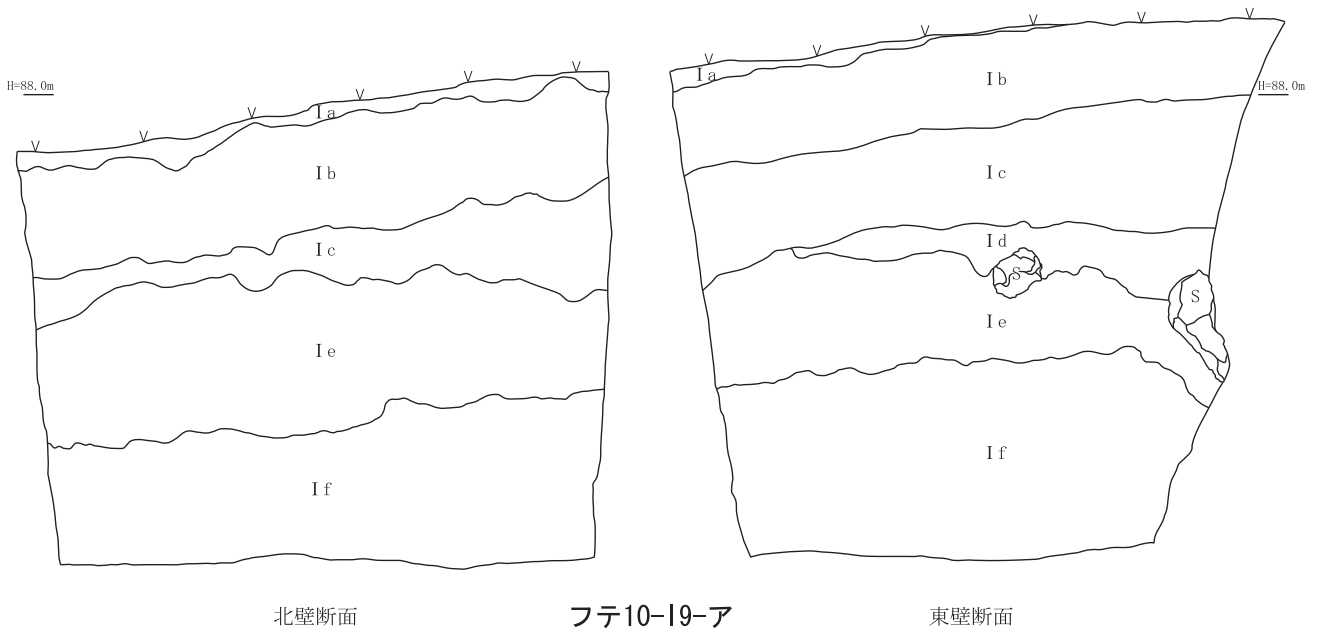


西壁断面

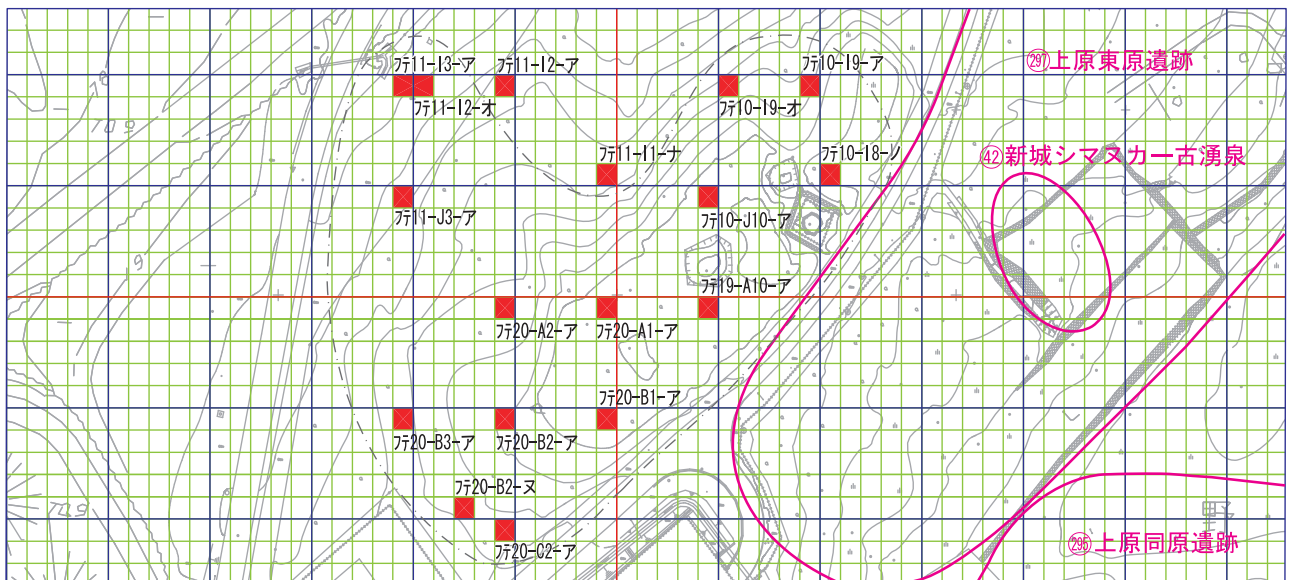
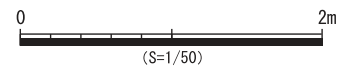
フテ10-H10-ノ

第 46 図 各試掘坑断面図②フテ 10-E9-ス・フテ 10-H10-ノ

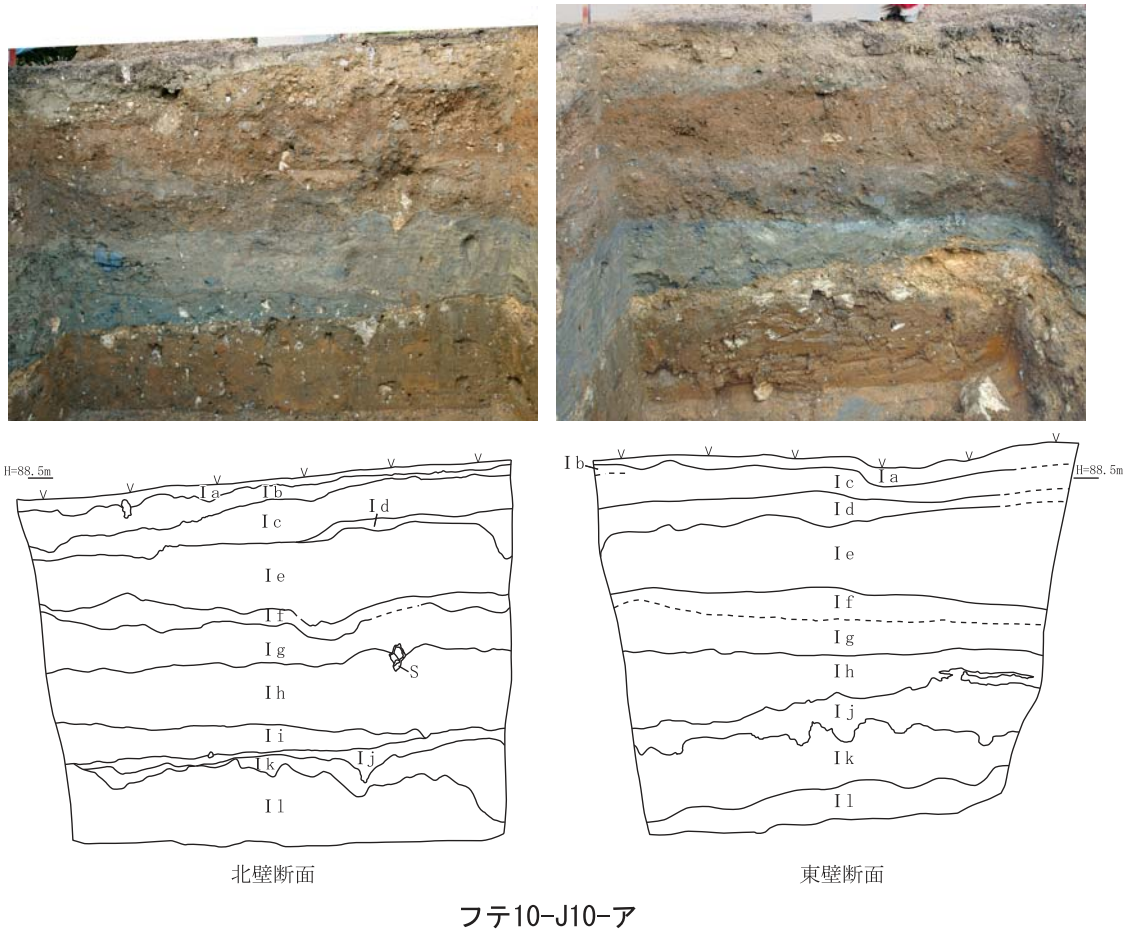
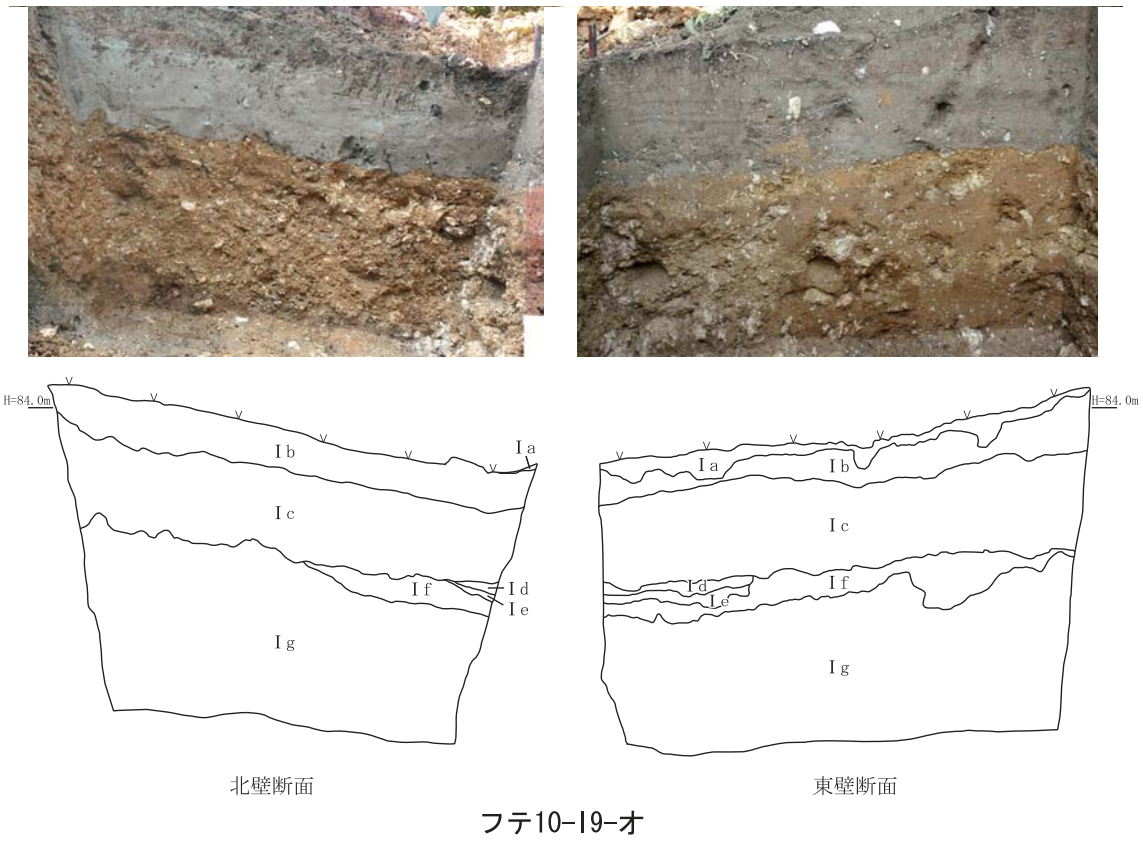




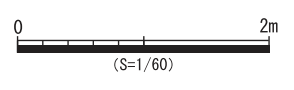
第 47 図 各試掘坑断面図② フテ 10-19-A



第 48 図 第 5 期調査区 米軍接收後における大規模土地改変推定範囲



第 49 図 各試掘坑断面図② フテ 10-19-オ・フテ 10-J10-ア

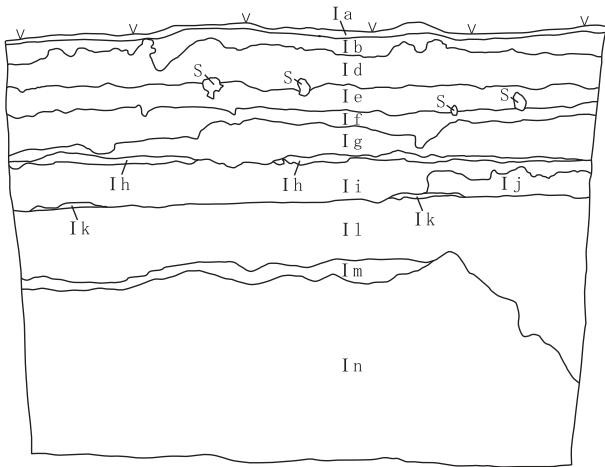




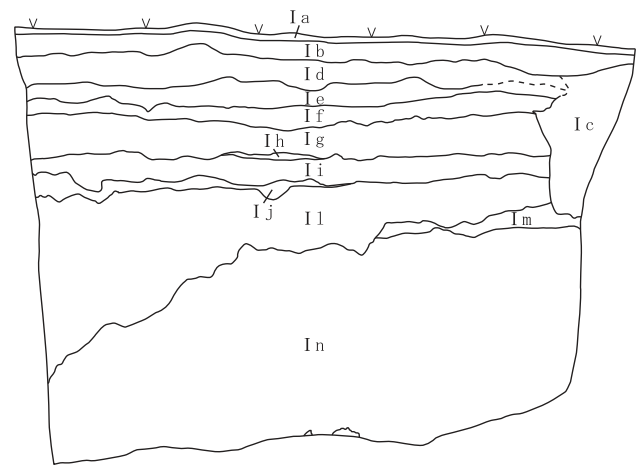
H=81.00m



H=81.00m

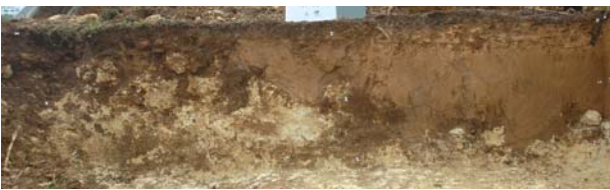


北壁断面



東壁断面

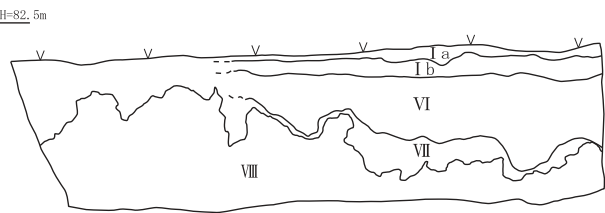
フテ11-G1-コ



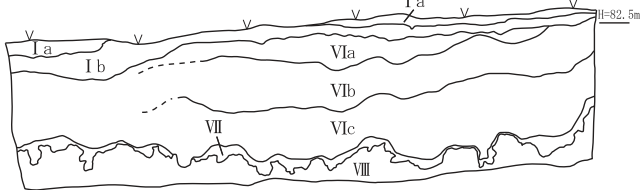
H=82.5m



H=82.5m



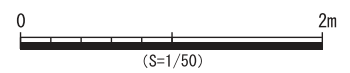
北壁断面

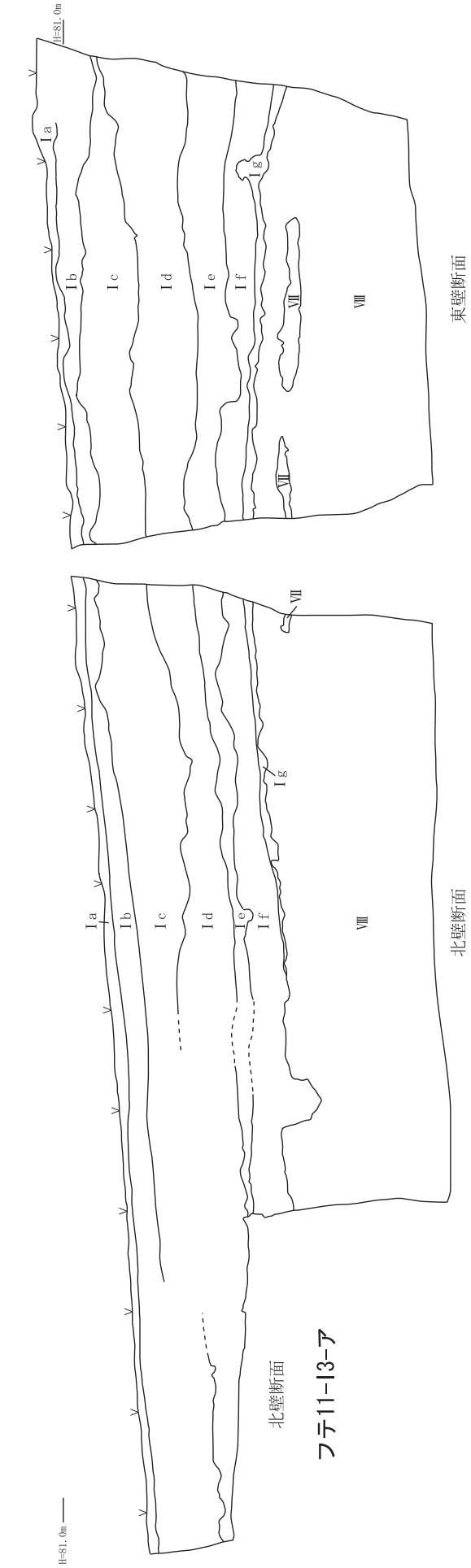


東壁断面

フテ11-I2-ア

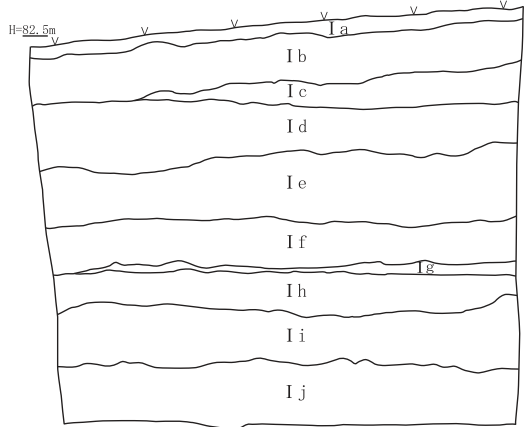
第 50 図 各試掘坑断面図③フテ 11-G1-コ・フテ 11-I2-ア



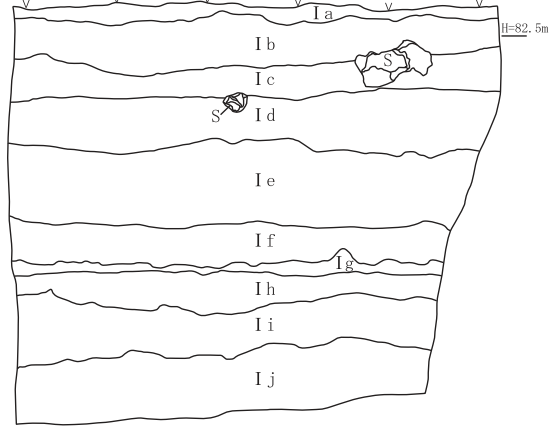


フテ11-12-オ

第51図 各試掘坑断面図②(フテ11-12-オ～フテ11-13-ア)

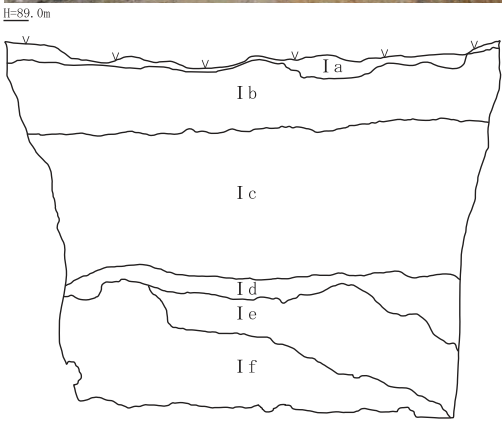


北壁断面

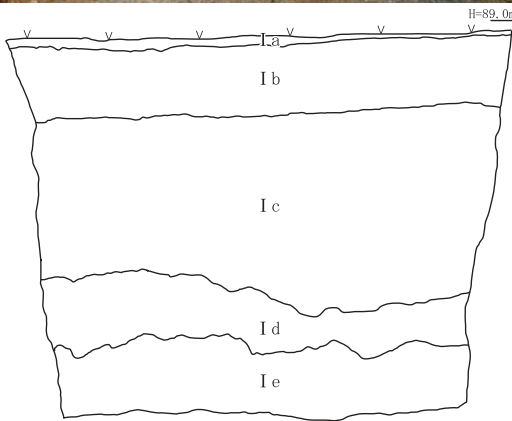


東壁断面

フテ11-J3-ア



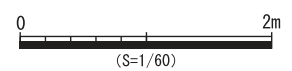
北壁断面



東壁断面

フテ19-A10-ア

第 52 図 各試掘坑断面図㊸フテ 11-J3-ア・フテ 19-A10-ア

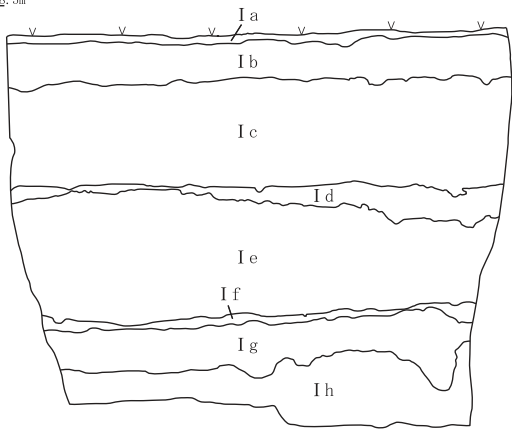




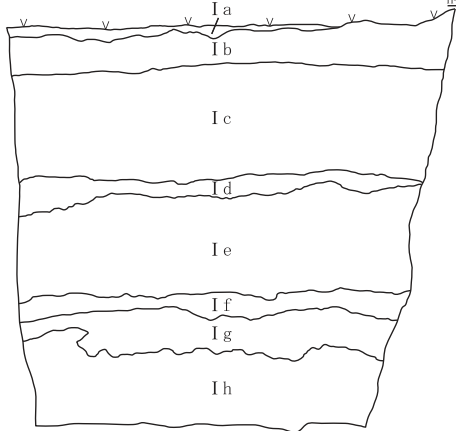
H=88.5m



H=88.5m



北壁断面



東壁断面

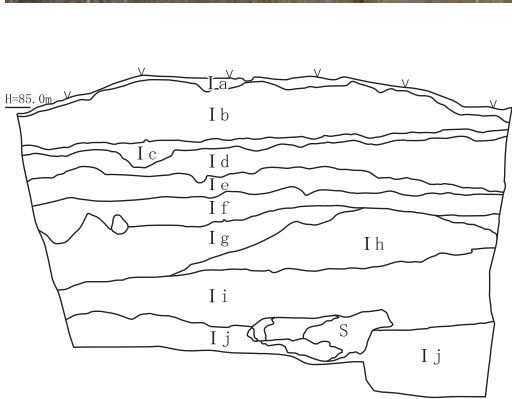
フテ20-A1-ア



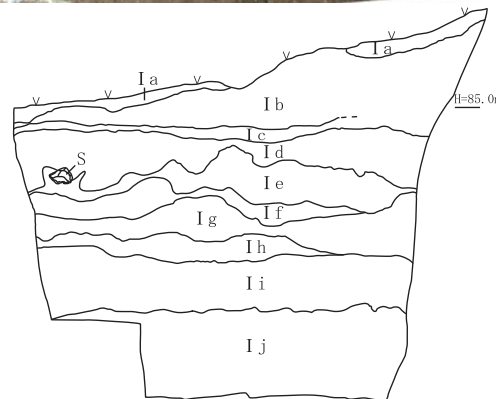
H=85.0m



H=85.0m



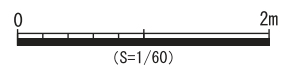
北壁断面

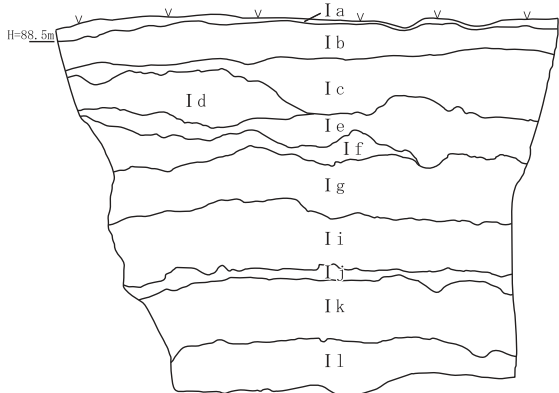


東壁断面

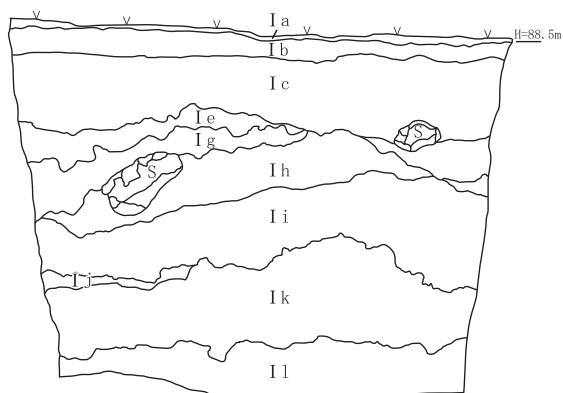
フテ20-A2-ア

第 53 図 各試掘坑断面図㊸ フテ 20-A1-ア・フテ 20-A2-ア



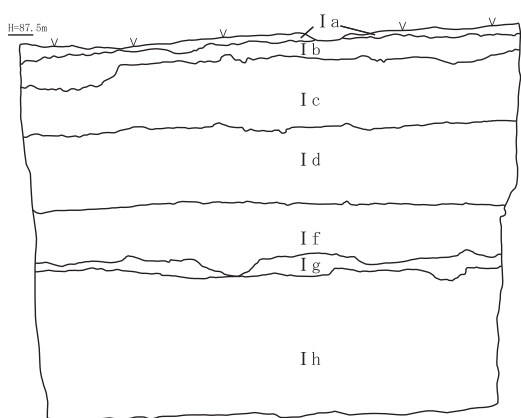


北壁断面

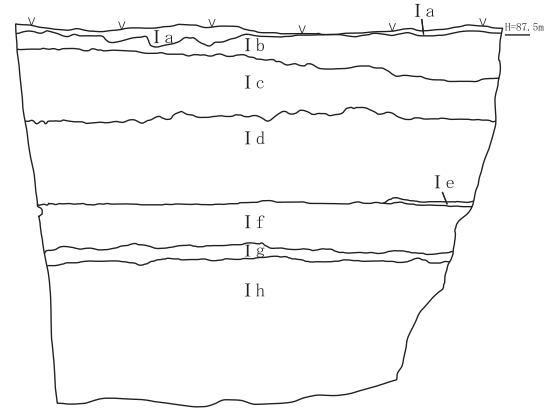


東壁断面

フテ20-B1-ア



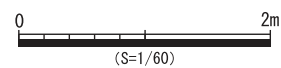
北壁断面



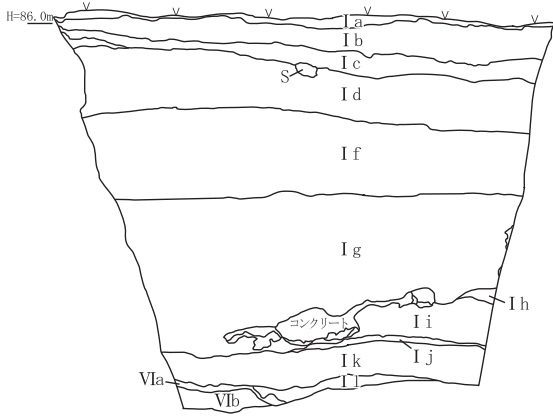
東壁断面

フテ20-B2-ア

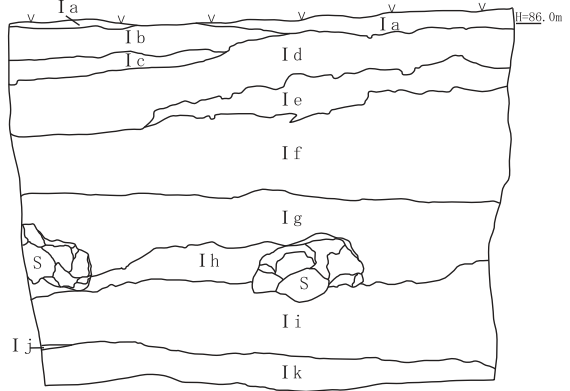
第 54 図 各試掘坑断面図⑦ フテ 20-B1-ア・フテ 20-B2-ア





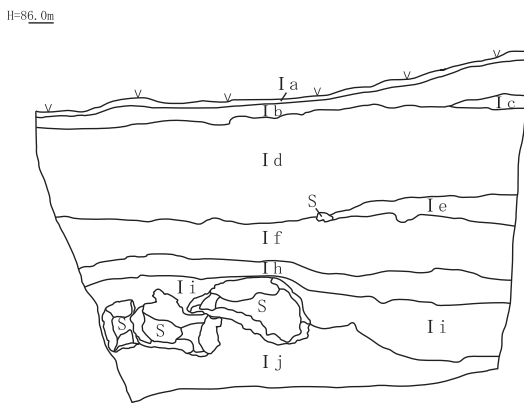


南壁断面

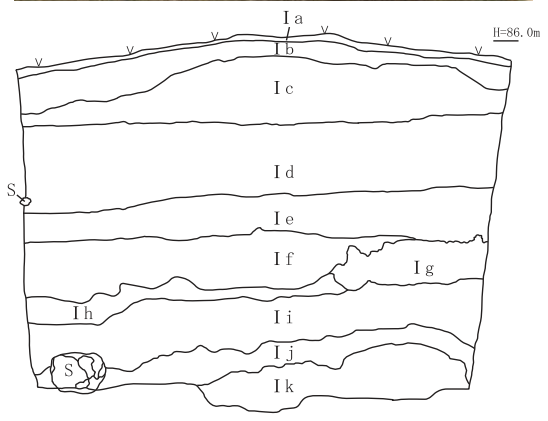


西壁断面

フテ20-B2-ヌ



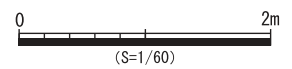
北壁断面



東壁断面

フテ20-B3-ア

第 55 図 各試掘坑断面図⑧フテ 20-B2-ヌ・フテ 20-B3-ア



第4表 第5期試掘調査データ一覧a

グリッド名	規格(m)		座標			調査 壁面	深度 (cm)	層及び層厚 ( )は層厚、単位はcm	マンガン変	検出基盤層 石灰岩	遺構・遺物・その他
	4×4		x	y	z						
フテ10-D8-ア	○	旧	x	27490	83.053	北・東	96	I 0～-5(5)、II a-5～-23(18)・II b-23～-35(12) II c東壁中央-21～-45(24)・II d-35～-43(8) VIa-43～-51(8)・VIb-51～-72(21)・VIc-72～ VII東壁右-65～-75(10)、VIII-東壁右75～		○	ユニット ① II a～ II b層 ② II c～ II d層
			30906	27490							
			30906	27486							
			30910	27486							
			31346.641	27305.745							
フテ10-E7-イ	○	旧	30880	27514	83.908	北・東	189	I a0～-3(3)・I b東壁右-1～-9(8)・I c-3～-15(12) VI-15～-31(16)、VII-31～-83(52)、VIII-83～		○	
			30876	27514							
			30876	27510							
			30880	27510							
			31316.641	27329.745							
フテ10-E8-イ	○	旧	30880	27484	82.312	北・東	163	I a0～-14(14)・I b-14～-31(17) VI北壁中央-28～-57(29)、VII北壁右-34～-83(49) VIII-31～		○	
			30876	27484							
			30876	27480							
			30880	27480							
			31316.641	27299.745							
フテ10-E9-ア	○	旧	30880	27460	82.088	北・東	203	I a0～-4(4)・I b-4～-17(13)・I c東壁右-16～-26(10) I d-17～-27(10)、VIa北壁中央-26～-51(25) VIb-27～-49(22)・VIc-49～-86(37)、VII-86～-93(7) VIII-93～		○	
			30876	27460							
			30876	27456							
			30880	27456							
			31316.641	27275.745							
フテ10-E9-ス	○	旧	30868	27448	82.064	北・東	201	I a0～-9(9)・I b東壁右-7～-14(7)・I c-9～-14(5) VIa(IV)東壁右-14～-17(3)・VIb(V)-14～-48(34) VIc-48～-90(42)、VII-90～-98(8)、VIII-98～		○	
			30864	27448							
			30864	27444							
			30868	27444							
			31304.641	27263.745							
フテ10-F7-ス	○	旧	30838	27508	84.948	北・東	290	I a0～-23(23)・I b-23～-40(17)・I c北壁左0～-6(6) II a-40～-48(8)・II b-48～-58(10)・II c-58～-67(9) II d-67～-73(6)・II e-73～-87(14)・II f-87～-92(5) II g-92～-105(13)・II h-105～-110(5) VIa(IV)-110～-142(32)・VIb(V)-142～-208(66) VIc(VI)-208～	黒マージ VIa～ VIc		ユニット ①(②) II a層 ② II b～ II d層 ③ II e～ II h層
			30834	27508							
			30834	27504							
			30838	27504							
			31274.641	27323.745							
フテ10-F8-イ	○	旧	30850	27484	84.320	北・東	178	I a0～-8(8)、II a-8～-17(9)・II b-17～-29(12) II c-29～-44(15)、VII北壁左-50～-58(8)、VIII-44～		○	ユニット ① II a～ II c層
			30846	27484							
			30846	27480							
			30850	27480							
			31286.641	27299.745							
フテ10-F8-ク	○	旧	30842	27478	84.394	南・東	211	I 0～-5(5)、II a-5～-15(10)・II b-15～-25(10) II c-25～-38(13)・II d-38～-51(13)・II e-51～-60(9) II f-60～-68(8)・II g-68～-78(10)、VI-78～-127(49) VII-127～-129(2)、VIII-129～		○	ユニット ① II a～ II c層 ② II d層 ③ II e～ II g層
			30838	27478							
			30838	27474							
			30842	27474							
			31278.641	27293.745							
フテ10-F9-カ	○	旧	30844	27460	82.708	北・東	180	I 0～-7(7)、II-7～-15(8)、V-15～-28(13) VII-28～-40(12)、VIII-40～		○	ユニット ① II層
			30840	27460							
			30840	27456							
			30844	27456							
			31280.641	27275.745							
フテ10-F9-ス	○	旧	30838	27448	82.389	北・東	179	I 0～-5(5)、II a-5～-15(10)・II b-15～-30(15) II c東壁右-30～-40(10)・II d北壁中央-49～-56(7) VI東壁右-40～-72(32)、VII(II e)北壁左-29～-32(3) VII-30～-44(14)、VIII-44～		○	ユニット ① II a～ II d層
			30834	27448							
			30834	27444							
			30838	27444							
			31274.641	27263.745							
フテ10-F10-ア	○	旧	30850	27430	81.773	北・東	230	I a0～-4(4)・I b-4～-10(6)・I c-10～-19(9) I d-19～-23(4)・II a-23～-24(1)・II b-24～-32(8) VI-32～-42(10)、VII-42～-60(18)、VIII-60～		○	ユニット ①? II a～ II b層
			30846	27430							
			30846	27426							
			30850	27426							
			31286.641	27245.745							

第5表 第5期試掘調査データ一覧b

グリッド名	規格(m) 4×4	座標			調査 壁面	深度 (cm)	層及び層厚 ( )は層厚、単位はcm	マンガン変	検出基盤層 石灰岩	遺構・遺物・その他
		x	y	z						
フテ10-F10-ス	○	旧	30838	27418	81.439	北・東	177		○	ユニット ① II a～II b層 ② II c～e層
			30834	27418						
		30834	27414							
		30838	27414							
		31274.641	27233.745							
フテ10-G7-ノ	○	旧	30794	27494	84.994	南・西	188		黒マージ IVorV	ユニット ① II a～II c層
			30790	27494						
		30790	27490							
		30794	27490							
		31230.641	27309.745							
フテ10-G8-ア	○	旧	30820	27490	84.596	北・東	227		○	ユニット ① II a～II c層
			30816	27490						
		30816	27486							
		30820	27486							
		31256.641	27305.745							
フテ10-G8-ケ	○	旧	30812	27472	84.204	南・東	296		○	ユニット ① II a～II c層 ② II d～II e層
			30808	27472						
		30808	27468							
		30812	27468							
		31248.641	27287.745							
フテ10-G9-ア	○	旧	30820	27460	82.928	北・東	193		○	ユニット ① II a～II b層 ② ? II c～II d層
			30816	27460						
		30816	27456							
		30820	27456							
		31256.641	27275.745							
フテ10-G9-オ	○	旧	30820	27434	81.210	北・西	88		○	ユニット ① II a層 ② II b～II d層
			30816	27434						
		30816	27430							
		30820	27430							
		31256.641	27249.745							
フテ10-G10-ス	○	旧	30808	27418	80.844	北・東・ 南・ プラン	115			II n層～pit? ユニット ① II a～II b層 ② II c～II e層 ③ II f～II n層 ④ ? II o層
			30804	27418						
		30804	27414							
		30808	27414							
		31244.641	27233.745							
フテ10-H9-ア	○	旧	30790	27460	83.849	北・東	190		○	ユニット ① II a～II b層
			30786	27460						
		30786	27456							
		30790	27456							
		31226.641	27275.745							
フテ10-H10-ア	○	旧	30788	27430	80.687	南・東	293		黒マージ IV? (VIa)～ V?(VIb)	ユニット ① II a～II b層
			30784	27430						
		30784	27426							
		30788	27426							
		31224.641	27245.745							
フテ10-H10-ス	○	旧	30778	27418	80.929	北・東	102		○	ユニット ① II a～II c層
			30774	27418						
		30774	27414							
		30778	27414							
		31214.641	27233.745							
フテ10-H10-ノ	○	旧	30764	27404	81.082	南・西	77		○	ユニット ① II a～II c層
			30760	27404						
		30760	27400							
		30764	27400							
		31200.641	27219.745							

第6表 第5期試掘調査データ一覧c

グリッド名	規格(m) 4×4	座標			調査 壁面	深度 (cm)	層及び層厚 ( )は層厚、単位はcm	マンガン変	検出基盤層 石灰岩	遺構・遺物・その他
		x	y	z						
フテ10-18-ノ	○	旧	30734	27464	88.986	南・西	274	I a0~-5(5)・I b-5~-23(18)・I c-23~-57(34) I d-57~-74(17)・I e-74~-88(14)・I f-88~-131(43) I g-131~-138(7)・I h-138~-181(43) I i-181~-187(6)・I j-187~-209(22)・I k-209~	○	
			30730	27464						
		30730	27460							
		30734	27460							
		31170.641	27279.745							
フテ10-19-ア	○	旧	30760	27460	88.471	北・東	320	I a0~-14(14)・I b-14~-70(56)・I c-70~-145(75) I d-104~-136(32)・I e-145~-210(66)・I f-210~	○	
			30756	27460						
		30756	27456							
		30760	27456							
		31196.641	27275.745							
フテ10-19-オ	○	旧	30760	27434	83.835	北・西	223	I a0~-5(5)・I b-5~-34(29)・I c-34~-95(61) I d-95~-104(9)・I e-104~-110(6) I f-110~-122(12)・I g-122~	○	
			30756	27434						
		30756	27430							
		30760	27430							
		31196.641	27249.745							
フテ10-110-ア	○	旧	30730	27430	88.900	北・東	296	I a0~-3(3)・I b-3~-12(9)・I c-12~-39(27) I d-39~-77(38)・I e-77~-107(30) I f-107~-118(11)・I g-118~-152(34) I h-152~-213(61)・I j-213~-227(14) I k-227~-288(61)・I l-288~	○	
			30726	27430						
		30726	27426							
		30730	27426							
		31166.641	27245.745							
フテ11-G1-ア	○	旧	30820	27400	81.078	北・東・西 ・プラン	東壁左 210	I a0~-4(4)・I b-4~-27(23) I c東壁中央-28~-40(12)・I d北壁中央-29~-43(14) I e-27~-40(13)・I f-40~-48(8) I g東壁左-37~-48(11)・I h-48~-52(4) I i西壁右-66~-113(47)・II a東壁中央-38~-48(10) II b-52~-57(5)・II a~b西壁左-54~-69(15) II c-57~-61(4)・II d東壁右-64~-78(14) II e-61~-74(13)・II f-74~-92(18)・II g-92~-105(13) II h-105~-119(14)・pit?西壁右-116~-126(10) II i-119~-131(12)・II j北壁左-130~-135(5) II k-131~-145(14)・II l西壁中央-142~-148(6) II m西壁右-140~-162(22)・II n-145~-156(11) II o-156~-164(8)・II p-164~-172(8)・II q-172~-175(3) II r-175~-179(4)・II s東壁右-204~-VI?-179~	○	II層 沖縄産施釉陶器 碗(底部付近)1 II h層~pit? II r層~pit? ユニット ①II a~II c層 ②II d~II e層 ③II g~II r層 ④? II s層
			30816	27400						
		30816	27396							
		30820	27396							
		31256.641	27215.745							
フテ11-G1-コ	○	旧	30814	27376	81.038	北・東	289	I a0~-5(5)・I b-5~-20(15)・I c東壁右-29~-127(98) I d-20~-40(20)・I e-40~-50(10)・I f-50~-58(8) I g-58~-88(30)・I i-88~-97(9)・I j-97~-113(16) I l-113~-235(122)・I n-235~	○	
			30810	27376						
		30810	27372							
		30814	27372							
		31250.641	27191.745							
フテ11-G1-ス	○	旧	30808	27388	80.878	北・東・西	東壁左 195	I a0~-5(5)・I b-5~-35(30)・I c西壁左-43~-52(9) I d-35~-45(10)・I e東壁右-20~-24(4) I f-45~-77(32)・I g東壁右-36~-41(5) I h-77~-110(33)・II a東壁右-53~-60(7) II b東壁右-52~-64(12)・II c東壁右-64~-78(14) II d東壁右-78~-82(4)・II e東壁右-82~-87(5) II f-110~-113(3)・II g-113~-120(7) II h-120~-132(12)・II i-132~-138(6) II j-138~-146(8)・II k-146~-155(9) II l-155~-165(10)・II m-165~-171(6) II n-171~-183(12)・II o-183~-192(9)・II p-192~ II q東壁右-191~	○	II o層?~Pit? ユニット ②II a~II i層 ③II j~II q層
			30804	27388						
		30804	27384							
		30808	27384							
		31246.641	27191.745							
フテ11-G1-ナ	○	旧	30794	27400	81.168	南・東	東壁 中央 204	I a0~-9(9)・I b-9~-18(9)・I c東壁左-20~-27(7) II a東壁中央-15~-24(9)・II b-18~-21(3) II c-21~-26(5)・II d-26~-31(5)・VIa-31~-64(33) VIb-64~-105(41)・VIc-105~、VII南壁中央-123~ VIII南壁中央-143~	○	ユニット ①II a~II c層 ②? II d層
			30790	27400						
		30790	27396							
		30794	27396							
		31230.641	27215.745							
フテ11-H2-ア	○	旧	30790	27370	80.683	北・東	北壁右 148	I a0~-12(12)・I b-12~、VIII北壁右-155~	○	
			30786	27370						
		30786	27366							
		30790	27366							
		31226.641	27185.745							
フテ11-II-ナ	○	旧	30734	27400	84.306	南・東	294	I 0~-5(5)・II a-5~-17(12)・II b-17~-25(8) II c-25~-45(17)・II d-42~-61(19)・II f-61~-76(15) II g-76~-81(5)・IV-81~-124(43)・V-124~-149(25) VIa-149~-199(50)・VIb-199~-273(74) VIc-273~-287(14)・VII-287~、VIII-296~	○	II c層~溝状遺構 ユニット ①II a~II f層 ②II g~II h層
			30730	27400						
		30730	27396							
		30734	27396							
		31170.641	27215.745							

第7表 第5期試掘調査データ一覧d

グリッド名	規格(m)		座標			調査 壁面	深度 (cm)	層及び層厚 ( )は層厚、単位はcm	マンガン変	検出基盤層 石灰岩	遺構・遺物・その他
	4×4		x	y	z						
フテ11-12-ア	○	旧	30760	27370	82.590	北・東	96	I a0~-8(8)・I b-8~-19(11)、VIa東壁中央-17~-43(26) VIb東壁右-2~-27(25)・VIc東壁右-27~-58(31) VI北壁左-19~-68(49)・VII-69~-72(3)、VIII-72~		○	
			30756	27370							
			30756	27366							
			30760	27366							
			31196.641	27185.745							
フテ11-12-オ ~フテ11-13-ア	○	旧	30760	27344	80.850	北・東	293	I a0~-10(10)・I b-10~-20(10)・I c-20~-61(41) I d-61~-98(37)・I e-98~-124(26)・I f-124~-139(15) I g-139~-147(8)、VII-174~-179(5)、VIII-147~		○	
			30756	27344							
			30756	27336							
			30760	27336							
			31196.641	27159.745							
フテ11-13-ア	○	旧	30730	27340	83.000	北・東	331	I a0~-9(9)・I b-9~-41(32)・I c-41~-75(34) I d-75~-108(33)・I e-108~-165(57) I f-165~-201(36)・I g-201~-213(12) I h-213~-229(16)・I i-229~-287(58)・I j-287~		○	
			30726	27340							
			30726	27336							
			30730	27336							
			31166.641	27155.745							
フテ19-A10-ア	○	旧	30700	27430	89.114	北・東	298	I a0~-6(6)・I b-6~-65(59)・I c-65~-190(125) I d-190~-246(56)・I e-246~・I f東壁左-201~		○	
			30696	27430							
			30696	27426							
			30700	27426							
			31136.641	27245.745							
フテ20-A1-ア	○	旧	30700	27400	88.634	北・東	316	I a0~-8(8)・I b-8~-40(32)・I c-40~-123(83) I d-123~-150(27)・I e-150~-219(69) I f-219~-234(15)・I g-234~-249(15)・I h-249~		○	
			30696	27400							
			30696	27396							
			30700	27396							
			27211.745	27211.745							
フテ20-A2-ア	○	旧	30700	27370	85.206	北・東	東壁右 310	I a0~-12(12)・I b-12~-17(5)・I c-17~-22(5) I d-22~-67(45)・I e-67~-69(2)・I f-69~-84(15) I g-84~-102(18)・I h-102~-112(10)・I i-112~-169(57) I j-169~		○	
			30696	27370							
			30696	27366							
			30700	27366							
			31136.641	27185.745							
フテ20-B1-ア	○	旧	30670	27400	88.931	北・東	285	I a0~-8(8)・I b-8~-29(21)・I c-29~-81(52) I d北壁左-47~-73(26)・I e-81~-115(33) I f北壁左-77~-121(44)・I g-115~-162(47) I h東壁右-122~-138(16)・I i-162~-203(41) I j-203~-219(16)・I k-219~-268(49)・I l-268~		○	
			30666	27400							
			30666	27396							
			30670	27396							
			31106.641	27215.745							
フテ20-B2-ア	○	旧	30670	27370	87.828	北・東	303	I a0~-8(8)・I b-8~-21(13)・I c-21~-77(56) I d-77~-144(67)・I e東壁右-138~-143(5) I f-144~-183(39)・I g-183~-193(10)・I h-193~		○	
			30666	27370							
			30666	27366							
			30670	27366							
			31106.641	27185.745							
フテ20-B2-ヌ	○	旧	30644	27356	86.367	南・西	288	I a0~-3(3)・I b-3~-29(26)・I c-29~-48(19) I d-48~-88(40)・I e西壁右-36~-50(14) I f-88~-137(49)・I g-137~-202(65) I h-202~-219(17)・I i-219~-255(36) I j-255~-258(3)・I k-258~、I l南壁中央-280~-302(22) VIa南壁左-282~-286(4)・VIb-286~		○	
			30640	27356							
			30640	27352							
			30644	27352							
			31080.641	27171.745							
フテ20-B3-ア	○	旧	30670	27340	86.072	北・東	260	I a0~-7(7)・I b-7~-35(28)・I c-35~-45(10) I d-47~-114(67)・I e-114~-138(24) I f-138~-181(29)・I g東壁右-137~-168(31) I h-181~-201(20)・I i-201~-242(41)・I j-242~ I k東壁中央-219~		○	
			30666	27340							
			30666	27336							
			30644	27352							
			31106.641	27155.745							
フテ20-C2-ア	○	旧	30640	27370	86.147	北・東	288	I a0~-1(1)・I b-1~-14(13)・I c-14~-107(93) I d-107~-111(4)・I e-111~-152(41) I f-152~-162(10)・I g-162~-182(20) I h東壁右-200~-209(9)、II-201~-207(6) VIa-207~-261(54)・VIb-261~-279(18)・VIc-279~ VII東壁右-300~、VIII東壁中央-291~		○	II層 沖繩産無釉陶器 壺または甕(胴)1 ユニット ②II層
			30636	27370							
			30636	27366							
			30640	27366							
			31076.641	27185.745							

### 第3節 自然科学分析の成果

#### [1] 目的と分析方法の選択

分析対象とする地点は、第15図に示した、フテ20-C2-ア、フテ11-I1-ナ、フテ10-H10-ア、フテ11-G1-ア、フテ10-G10-ス、フテ11-G1-スの6地点である。

フテ20-C2-アは埋土・盛土であるI層が厚く堆積し、その下位にII層、VI層、VII層が認められる。フテ11-I1-ナ、フテ10-H10-アは、I層、II層はそれほど厚く累重せず、IV層～VII層のマージが厚く堆積する。また、フテ11-I1-ナではII層中に溝が検出されている。フテ11-G1-ア、フテ10-G10-ス、フテ11-G1-スは、いずれの地点もII層が厚く累重し、10～15枚に細分されている。

これらの地点から、土壌試料、炭化材試料、岩石試料を採取しており、それらを分析試料として放射性炭素年代測定7点、花粉分析・微粒炭分析17点、微細物分析19点、土壌理化学分析6点、岩石薄片作成鑑定1点を実施する。分析試料の詳細、及び分析項目一覧を第8表に示す。

#### [2] 調査地域の地形層序

調査地域は、中位段丘下位面に位置し、北東から南西に長い10m程度の小高い丘を呈しており、南東側には上位面に向かう斜面が存在している。

第8表 18年度基地内調査の分析試料及び分析項目一覧

地点	壁名	層位	試料名	試料	分析項目*					備考
					14C	花粉	微細	土理	岩石	
フテ20-C2-ア	北壁	II層		炭化物	1					
フテ11-I1-ナ	東		溝上部	炭化物			1			
フテ11-I1-ナ	東		溝下部	炭化物			1			
フテ10-H10-ア	西壁	VIII層		石灰岩					1	風化進行
フテ11-G1-ア	東壁	IIq層	14	炭化物	1					
フテ11-G1-ア	東壁	IIs層	16	炭化物	1					
フテ11-G1-ア	東壁	IIe層	5	土壌		1	1			
フテ11-G1-ア	東壁	IIf層	6	土壌		1	1	1		
フテ11-G1-ア	東壁	IIg層	7	土壌		1	1			
フテ11-G1-ア	東壁	IIh層	8	土壌		1	1			
フテ11-G1-ア	東壁	IIi層	9	土壌		1	1			
フテ11-G1-ア	東壁	IIk層	10	土壌	1	1	1	1		
フテ11-G1-ア	東壁	IIn層	11	土壌		1	1			
フテ11-G1-ア	東壁	IIo層	12	土壌		1	1			
フテ11-G1-ア	東壁	IIp層	13	土壌		1	1			
フテ11-G1-ア	東壁	IIq層	14	土壌		1	1			
フテ11-G1-ア	東壁	IIr層	15	土壌		1	1	1		
フテ11-G1-ア	東壁	IIs層	16	土壌		1	1	1		
フテ11-G1-ア	東壁	ピット	ピット	土壌	1	1	1	1		
フテ10-G10-ス	南壁	IIo層	14	土壌	1	1	1			
フテ10-G10-ス		ピット	ピット2	土壌	1	1	1	1		
フテ11-G1-ス	東壁	IIn層	14	土壌	1	1	1			
フテ11-G1-ス	東壁	IIp層	17	土壌	1	1	1			
合計点数					9	17	19	6	1	

\*：14C：放射性炭素年代測定、花粉：花粉分析・微粒炭分析、微細：微細物分析  
土理：土壌理化学分析、岩石：岩石薄片作成鑑定

試掘調査の結果から南東部は、客土からなり、現地形は人工改変による丘が形成されている（第56・57図）。一方、北西側は平坦な地形を呈し、石灰岩（Ⅷ層）の上位に現地表面（Ⅰ層）と薄いマージ（Ⅶ・Ⅵ層）が累重している状態で、削平による人工改変を受けている。このように調査地域全体として、盛り土、切り土という大規模な改変を受けているようであり、これまでの1～4期の試掘調査の結果からも、周囲一帯は同様の改変が伺える。一部、改変の影響が少ない東側の状況を見ると、南東に向けた緩やかな斜面が見られ、旧地形は中段段丘の上位面に向けた斜面の立ち上がりであることが伺える。

調査地域中央部には、Ⅱ層が厚く累重する箇所が見られ、その状況から南東から北西側に向けた埋没谷が存在している。その堆積物の様相から、調査地北東側に位置する野嵩タマタ原遺跡と同様な埋没谷と考えられ、ピット等の遺構もこの埋没谷内から検出されている。

### [3] 結果

#### (1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第9表に、暦年較正結果を第10表に示す。試料の測定年代（補正年代）は、フテ20-C2-アのⅡ層が $180 \pm 30$ BP、フテ11-G1-アのⅡk層が $840 \pm 30$ BP、Ⅱp層が $330 \pm 30$ BP、Ⅱs層が $470 \pm 30$ BP、フテ10-G10-スのⅡo層が $570 \pm 30$ BP、ピットが $830 \pm 30$ BP、Ⅱp層が $690 \pm 30$ BPの値を示す。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、及び半減期の違い（ $^{14}\text{C}$ の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ 双方の値を計算する。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差を $\sigma$ として計算させた結果、フテ20-C2-アのⅡ層はcalAD 1,667-1,951、フテ11-G1-アのⅡp層は1,513-1,635、Ⅱs層は1,425-1,444、Ⅱk層は1,175-1,251、フテ10-G10-スのⅡo $_{1,322-1,409}$ calAD 1,322-1,409、ピットはcalAD 1,191-1,256、Ⅱn層はcalAD 1,278-1,378である。

第9表 放射性炭素年代測定結果

地点名	試料名	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	測定番号
フテ20-C2-ア	Ⅱ層	炭化材	$180 \pm 30$	$-23.60 \pm 0.61$	$160 \pm 20$	IAAA-72617
フテ11-G1-ア	Ⅱk層	炭化材(土付)	$840 \pm 30$	$-18.34 \pm 0.78$	$730 \pm 20$	IAAA-72620
フテ11-G1-ア	Ⅱp層	炭化材(土付)	$330 \pm 30$	$-6.49 \pm 0.54$	$30 \pm 30$	IAAA-72618
フテ11-G1-ア	Ⅱs層	炭化材(土付)	$470 \pm 30$	$-25.52 \pm 0.78$	$480 \pm 30$	IAAA-72619
フテ10-G10-ス	Ⅱo層	炭化材(土付)	$570 \pm 30$	$-4.43 \pm 0.32$	$240 \pm 30$	IAAA-72622
フテ10-G10-ス	ピット	炭化材(土付)	$830 \pm 30$	$-14.17 \pm 0.55$	$650 \pm 20$	IAAA-72623
フテ11-G10-ス	Ⅱn層	炭化材(土付)	$690 \pm 30$	$-6.31 \pm 0.49$	$380 \pm 30$	IAAA-72625

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2) BP年代値は、1,950年を基として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

第 10 表 暦年較正結果

地点名	試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.					
			$\sigma$	cal AD 1,667 - cal AD 1,682	cal AD 1,737 - cal AD 1,757	cal AD 1,761 - cal AD 1,783	cal AD 1,796 - cal AD 1,803	cal AD 1,936 - cal AD 1,951			cal BP 283 - 268	cal BP 213 - 193	cal BP 189 - 167	cal BP 154 - 147	cal BP 14 - 1
フテ20-C2-ア	II層	181± 25	$\sigma$	cal AD 1,667 - cal AD 1,682	cal AD 1,737 - cal AD 1,757	cal AD 1,761 - cal AD 1,783	cal AD 1,796 - cal AD 1,803	cal AD 1,936 - cal AD 1,951	cal BP 283 - 268	cal BP 213 - 193	cal BP 189 - 167	cal BP 154 - 147	cal BP 14 - 1	0.202	IAAA-72617
				0.232	0.284	0.088	0.195	0.205	0.596	0.199					
				$2\sigma$	cal AD 1,658 - cal AD 1,692	cal AD 1,728 - cal AD 1,811	cal AD 1,919 - cal AD 1,952	cal BP 292 - 258	cal BP 222 - 139	cal BP 31 - 2	0.205	0.596	0.199		
			$2\sigma$	cal AD 1,175 - cal AD 1,227	cal AD 1,233 - cal AD 1,239	cal AD 1,248 - cal AD 1,251	cal BP 775 - 723	cal BP 717 - 711	cal BP 702 - 699	0.874	0.088	0.037			
				cal AD 1,162 - cal AD 1,260	cal BP 788 - 690	1.000									
				1.000											
フテ11-G1-ア	IIk層	835± 27	$\sigma$	cal AD 1,513 - cal AD 1,530	cal AD 1,538 - cal AD 1,600	cal AD 1,617 - cal AD 1,635	cal BP 437 - 420	cal BP 412 - 350	cal BP 333 - 315	0.161	IAAA-72618				
				0.649	0.190										
			$2\sigma$	cal AD 1,484 - cal AD 1,642	cal BP 466 - 308	1.000									
				1.000											
フテ11-G1-ア	IIs層	427± 28	$\sigma$	cal AD 1,425 - cal AD 1,444	cal BP 525 - 506	1.000									
				cal AD 1,412 - cal AD 1,452	cal BP 538 - 498	1.000									
フテ10-G10-ス	IIo層	572± 25	$\sigma$	cal AD 1,322 - cal AD 1,348	cal AD 1,392 - cal AD 1,409	cal BP 628 - 602	cal BP 558 - 541	0.611	IAAA-72622						
				0.389											
			$2\sigma$	cal AD 1,307 - cal AD 1,362	cal BP 643 - 588	0.614									
				cal AD 1,385 - cal AD 1,418	cal BP 565 - 532	0.386									
フテ10-G10-ス	ビット2	826± 25	$\sigma$	cal AD 1,191 - cal AD 1,196	cal AD 1,207 - cal AD 1,256	cal BP 759 - 754	cal BP 743 - 694	0.067	IAAA-72623						
				0.933											
			$2\sigma$	cal AD 1,169 - cal AD 1,261	cal BP 781 - 689	1.000									
フテ11-G1-ス	IIh層	686± 26	$\sigma$	cal AD 1,278 - cal AD 1,298	cal AD 1,371 - cal AD 1,378	cal BP 672 - 652	cal BP 579 - 572	0.829	IAAA-72625						
				0.171											
			$2\sigma$	cal AD 1,270 - cal AD 1,310	cal BP 680 - 640	0.713									
				cal AD 1,360 - cal AD 1,387	cal BP 590 - 563	0.287									

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である。
- 5) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第 11 表 花粉分析・微粒炭分析結果

種 類	11-G1-ア東壁														10-G10-ス南壁		11-G1-ス東壁	
	試料番号	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	ビット	14	ビット2	14	17
木本花粉																		
マツ属複雑管束亜属	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属(その他)	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
コナラ属アカガシ亜属	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属ームクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サカキカズラ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉																		
イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のイネ科	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	1	2	1	-	-	-	-	1
カヤツリグサ科	-	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
セリ科	-	2	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	-	1	2	3	-	-	2	1	7	1	2	8	16	-	2	13	21	
キク亜科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明花粉	-	-	1	1	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	2	1
シダ類胞子																		
シダ類胞子	6	8	10	13	3	4	7	3	4	12	5	9	8	-	7	24	77	
合 計																		
木本花粉	3	8	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	
草本花粉	0	5	4	6	0	0	3	2	7	2	3	10	17	0	2	14	22	
不明花粉	0	0	1	1	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	2	1	
シダ類胞子	6	8	10	13	3	4	7	3	4	12	5	9	8	0	7	24	77	
総計 (不明を除く)	9	21	15	20	3	4	10	6	11	14	8	19	25	0	9	39	99	
1ccあたりの微粒炭量[個]	3500	1900	6900	6300	3900	5000	8700	2200	5400	9600	3300	4700	700	1500	700	8400	14600	

1) 微粒炭量については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている



## (2) 花粉分析・微粒炭分析

結果を第 11 表に示す。いずれの試料においても花粉化石の産出状況は悪く、定量解析が行えるだけの個体数を得ることが出来なかった。検出された種類をみると、木本花粉ではマツ属(マツ属複雑管束亜属を含む)、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属—ムクノキ属、アカメガシワ属、サカキカズラ属が、草本花粉ではイネ属以外のイネ科、カヤツリグサ科、セリ科、ヨモギ属、キク亜科が、わずかに認められるのみである。なお、微粒炭量は、700-14,600 個/cc と、試料により差が認められる。

## (3) 微細物分析

結果を第 12 表に示す。フテ 11-G1-アの試料番号 6 からイネの穎 1 個が確認され、炭化している。種実以外では、炭化材(最大径 6.5mm 程度)、不明炭化物(木材組織が確認されない部位・種類不明の炭化物)、植物片などが回収された。以下に、同定された種実の形態的特徴等を記す。

### ・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎(果)の破片が検出された。炭化しており黒色。長楕円形でやや扁平。胚乳を包む穎(果)は、完形ならば長さ 6-7.5mm、幅 3-4mm、厚さ 2mm 程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と 1 対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は 5 脈、内穎は 3 脈をもち、共に舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲穂を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。破片は基部の果実序柄部で、大きさ 1mm 以下。

## (4) 土壌理化学分析

結果を第 13 表に示す。pH(H<sub>2</sub>O) は、II 層各層は 7.0-7.4 を示し、ピット覆土はそれより若干低い 6.8-6.9 を示す。有機炭素量、全窒素量では、II 層の中でも上位の II f、II k 各層は下位の II r、II s 各層に比べていずれもやや低い値を示す。すなわち、上位の II 層各層の有機炭素量は約 0.5%、全窒素量は 0.07-0.08% であり、下位の II 層各層の有機炭素量は約 0.8%、全窒素量は 0.08-0.09% を示す。C/N 比は II k 層が 10 であるほかは、各層ともに 7-8 である。ピットの覆土試料の有機炭素量および全窒素量は、上述した下位の II 層各層の値に近似する。C/N 比は 7-8 である。腐植酸の形態は、II f 層および 11-G1-アのピットが P/Rp 型を示すほかは、いずれも B 型であった。

第 12 表 微細物分析結果

地点名	壁名	層位	試料名	分析量	炭化材 (乾燥重量)	炭化材 最大径	炭化材以外の 分類群・部位・個数	分析残渣 (乾燥重量)
フテ11-I1-ナ	東壁		溝上部					
フテ11-I1-ナ	東壁		溝下部					
フテ11-G1-ア	東壁	II a層	5	429g	0.03g	6.5mm		13.20g
フテ11-G1-ア	東壁	II b層	6	411g	0.01g	1.5mm	イネ 穎(破片・炭化)1個	6.45g
フテ11-G1-ア	東壁	II c層	7	742g	0.04g	5.5mm		12.31g
フテ11-G1-ア	東壁	II d層	8	482g	0.03g	4.5mm		4.84g
フテ11-G1-ア	東壁	II e層	9	738g	0.03g	2.5mm		11.64g
フテ11-G1-ア	東壁	II f層	10	621g	0.01g	3.5mm		3.59g
フテ11-G1-ア	東壁	II g層	11	592g	0.04g	4.5mm	不明炭化物3個	6.04g
フテ11-G1-ア	東壁	II h層	12	687g	0.02g	3.3mm	不明炭化物1個	6.88g
フテ11-G1-ア	東壁	II i層	13	512g	0.03g	4.2mm		4.92g
フテ11-G1-ア	東壁	II j層	14	482g	<0.01g	2mm		9.24g
フテ11-G1-ア	東壁	II k層	15	534g	0.02g	4mm		8.51g
フテ11-G1-ア	東壁	II l層	16	592g	<0.01g	2.5mm		5.81g
フテ11-G1-ア	東壁		ピット	302g	0.01g	2mm		12.03g
フテ10-G10-ス	南壁		14	362g	0.01g	3mm		6.05g
フテ10-G10-ス			ピット2	511g	0.02g	4.5mm		11.52g
フテ11-G1-ス	東壁		14	691g	0.03g	4.5mm	植物片4個	11.18g
フテ11-G1-ス	東壁		17	521g	0.01g	5.5mm	植物片3個	26.64g

第 13 表 土壤理化学分析結果

試料名	土色	pH (H <sub>2</sub> O)	有機 炭素 (%)	全窒素 (%)	C/N	腐植		全鉄 Fe <sub>t</sub> (%)	DCB可溶鉄 Fe <sub>d</sub> (%)	酸性シュウ酸塩 可溶鉄 Fe <sub>o</sub> (%)	活性度 Fe <sub>o</sub> /Fe <sub>d</sub>	結晶化指数 (Fe <sub>d</sub> -Fe <sub>o</sub> ) /Fe <sub>t</sub>
						M I	腐植酸 型					
フテ11-G1-ア IIb層	10YR 4/4 褐	7.4	0.52	0.07	7	2.15	P/R p	3.96	2.64	0.38	0.14	0.57
フテ11-G1-ア II f層	10YR 3/4 暗褐	7.3	0.53	0.07	8	1.87	B	3.66	2.40	0.42	0.18	0.54
フテ11-G1-ア II k層	10YR 3/3 暗褐	7.0	0.79	0.08	10	1.72	B	3.66	2.50	0.46	0.18	0.56
フテ11-G1-ア II l層	10YR 3/3 暗褐	7.0	0.75	0.09	8	1.80	B	4.31	2.97	0.43	0.14	0.59
フテ10-G10-ス ピット	10YR 4/4 褐	6.9	0.68	0.10	7	2.07	P/R p	5.60	3.93	0.42	0.11	0.63
フテ10-G10-ス ピット2	10YR 3/4 暗褐	6.8	0.77	0.10	8	1.84	B	5.52	3.80	0.47	0.12	0.60

備考)

- (1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。
- (2) C/N：有機炭素量/全窒素量
- (3) 全鉄(Fe<sub>t</sub>)：蛍光X線分析による。
- (4) 活性度：Fe<sub>o</sub>/Fe<sub>d</sub>
- (5) 結晶化指数：(Fe<sub>d</sub>-Fe<sub>o</sub>)/Fe<sub>t</sub>
- (6) N. D.：検出限界以下

全鉄含量は、II層各層は約4%、ピット覆土は約6%であり、ピット覆土に鉄分が多く含まれる傾向が認められる。また、酸性シュウ酸塩可溶鉄量とジチオナイトクエン酸可溶鉄量から、土壤中の鉄分のほとんどが、造岩鉱物の風化により遊離した遊離酸化鉄の状態ですらに土壤中に含まれている。遊離酸化鉄の活性度はいずれの試料も0.1-0.2の範囲内にあり、結晶化指数は0.5-0.6を示す。

#### (5) 岩石薄片作成鑑定

偏光顕微鏡下の観察では岩石の構成鉱物および組織の記載岩石学的な特徴を明らかにした。各構成物の量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量(>50%)、中量(20~50%)、少量(5~20%)、微量(<5%)およびきわめて微量(<1%)という基準で目視により判定した。顕微鏡鑑定に際しては下方ポーラーおよび直交ポーラー下で撮影した写真(図版7)を添付した。以下に試料の観察記載結果を述べる。

岩石名：石灰岩

岩石の組織：碎屑状組織 (clastic texture)

鉱物片

石英：少量存在し、粒径最大0.41mmの他形で粒状~破片状を呈し、一部、弱い波動消光を示すものもある。

カリ長石：きわめて微量存在し、粒径最大0.32mmの他形で板状~破片板状を呈し、無双晶を呈する。

斜長石：きわめて微量存在し、粒径最大0.28mmの他形で板状~破片板状を呈し、一部、弱い集片双晶を示すものもある。

黒雲母：微量存在し、粒径最大0.31mmの他形で板状を呈し、淡褐色~褐色の多色性を示す。やや風化の進んでいるものが多い。

緑簾石：きわめて微量存在し、粒径最大0.08mmの他形で不定形柱状~不定形状を呈し、淡黄色を示す。

ジルコン：きわめて微量存在し、粒径最大0.15mmの他形で柱状を呈し、やや円磨されている。

化石片

石灰質化石：多量存在し、粒径最大1.20mmで、有孔虫が主体となっており、その他、石灰藻、貝などが認められる。スパーライトによって置換されているものが散見される。

岩片

多結晶石英：きわめて微量存在し、粒径0.18~0.35mmで亜角礫状を呈し、石英の集合からなる。

基質

セリサイト：きわめて微量存在し、粒径最大0.05mmの他形で針状~繊維束状を呈して、点在する。

緑泥石：きわめて微量存在し、粒径最大0.03mmの他形で繊維束状を呈し、淡緑色~淡褐色を示す。

炭酸塩鉱物：中量存在し、粒径最大0.52mmの他形で不定形状を呈し、大部分は粒径0.02mm以下のマイクロスパーライトが主体となっている。粗粒のものは主に、化石片を置換している。

水酸化鉄：微量存在し、隠微晶質で褐色を呈し、化石片や基質を汚染している。

#### 孔隙

中量存在し、孔径最大 4.3mm、不定形球状～不定形状を呈して散在する。碎屑片の脱落孔も含まれるが、大部分は初生的なものと判断される。

### [4] 考察

#### (1) 年代観

フテ 20-C2-アは、整地層・盛土である I 層が厚く堆積し、その下位に II 層、VI 層、VII 層が認められる。II 層は VI 層を削平して存在していることから、この  $180 \pm 30\text{BP}$  という年代は、本トレンチ周辺での土地改変に伴う年代を示しているといつて良い。

フテ 11-G1-アにおいては、補正年代で下位より、II s 層が  $470 \pm 30\text{BP}$ 、II p 層が  $330 \pm 30\text{BP}$ 、II k 層が  $840 \pm 30\text{BP}$  となっている。これらの中で上位に位置する II k 層が一番古い年代を示していることから、地層の累重関係が逆転している。このうち測定試料のうち最上の II k 層が  $840 \pm 30\text{BP}$  という結果は、これまでの普天間基地内の埋没谷の年代測定結果でいうならば、下部にあたる年代であり著しく古い。一方、II s 層が  $470 \pm 30\text{BP}$ 、II p 層が  $330 \pm 30\text{BP}$  の年代は、これまでの埋没谷中位にあたる結果と調和したものとつて良い。したがつて、II k 層は、後代の攪乱の可能性が指摘される。

フテ 10-G10-ス、フテ 11-G1-スの堆積層の年代もグスク時代から近世の年代を示し、北東側に位置する、野嵩タマタ原遺跡の埋没谷の年代観とも調和したものである。フテ 11-G10-スのピットもグスク時代の値を示し、野嵩タマタ原遺跡のポット状遺構と同様な値を示し、ピットの用途も含めた今後の調査が期待される。

#### (2) 古植生

花粉分析の結果からは花粉化石がほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。わずかに検出された花粉化石は、花粉外膜が破損・溶解していることから、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失したと考えられる。

わずかに認められた種類をみると、海岸や平地、林縁、代償植生等に生育するとされるマツ属(沖縄ではリュウキュウマツが一般的)や、暖温帯性常緑広葉樹林の構成要素であるアカガシ亜属、アカメガシワ属、サカキカズラ属等などが検出される。草本類では、いわゆる人里植物とされるイネ科(イネ属以外)、カヤツリグサ科、セリ科、ヨモギ属、キク亜科が検出される。ただし、当時の周辺域の植生については、花粉化石の検出数が著しく少ないので、花粉の保存が良好だとされる周辺の湿地堆積物等の調査を行い、あらためて検討を行いたい。なお、微細物分析において、栽培種であるイネの穎が検出されていることから、本調査地域周辺で稲作が行われている可能性が想定される。

#### (3) 土壤特性

これまでに当社では、宜野湾市普天間飛行場基地内において、琉球石灰岩からなる段丘の表層に形成された土壤(いわゆる島尻マーヅ)について、土壤理化学分析例を蓄積しつつある(パリノ・サーヴェイ株式会社,2005;2006;2007)。同事例では、段丘上に形成された土壤を主に色調と粒径による層相から、上位より I-VII 層までの層位に分層している。このうち、I 層は現表土、盛土、造成土であり、II 層は鈍い黄褐色～暗褐色を呈する旧表土、旧耕作土、III 層以下は概ね褐色を呈するいわゆるマーヅであり、粘土分あるいは砂分の多少と色調の若干の違いにより、上記の分層がなされている。これまでの分析結果では、II 層と III 層以下との間に比較的明瞭な土壤理化学性の違いが認められている。

今回のフテ 11-G1-ア東壁で認められた II 層各層のうち、上位の II f 層、II k 層の特性は、有機炭素量や全窒素量および腐植の形態において、これまでの普天間飛行場基地内における II 層の値と近似している。下位の

Ⅱr層、Ⅱs層およびピットの覆土は、結果でも述べたように、有機炭素量が若干高い傾向にあると言える。これら各層とピットにおいては、有機物の供給量がやや多くなるような環境にあったことが推定される。

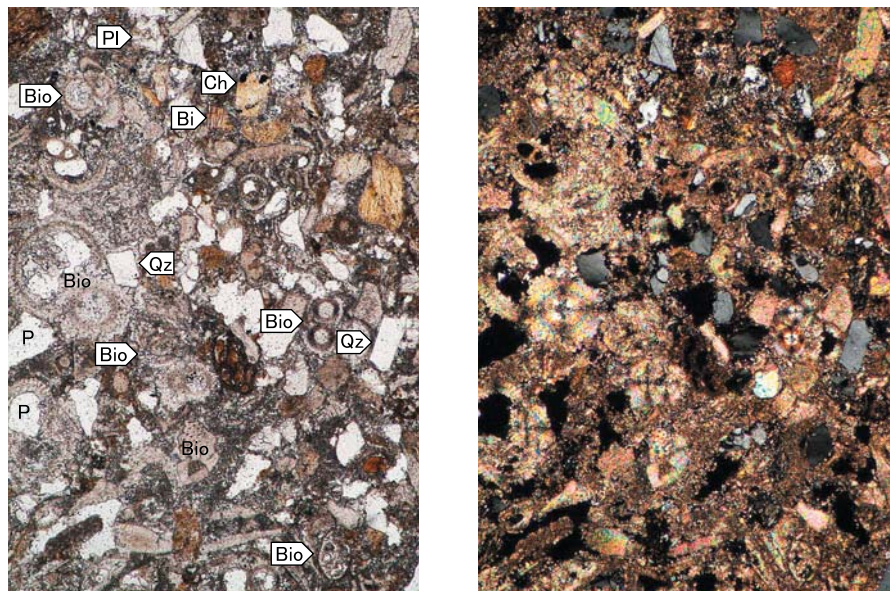
また、今回のⅡ層各層の遊離酸化鉄の状態は、これまでのⅡ層の分析値(活性度は0.1未満、結晶化指数は0.8-0.9)に比べると、活性度は若干高く、結晶化指数は若干低い傾向にある。このことは、今回のⅡ層各層の方が、結晶質の遊離酸化鉄(ヘマタイトやゲータイトなど)の割合が若干少ない

ことを示している。一般に結晶質の遊離酸化鉄は、より風化が進行するとより多く生成することから、今回のⅡ層各層は、これまでのⅡ層に比べて、やや風化の進行程度が遅いすなわちやや新しい層位である可能性があると考えられる。

なお、松井(1988)は、日本のような温帯湿潤地域における土壌層位のA層(腐植の集積する最上位の層位)のC/N比は8-12であり、赤黄色土のA層およびB層(A層の下位の土壌層位であり、腐植をほとんど含まない層位)の腐植酸の型はRp型であることを述べている。さらに、永塚(1973)は、遊離酸化鉄の活性度が0.4以下かつ結晶化指数が0.5以上である土壌は赤色土に分類されることを示している。これらの特性と比較すると、普天間飛行場基地内におけるⅡ層は、赤色土のA層に相当するといえる。

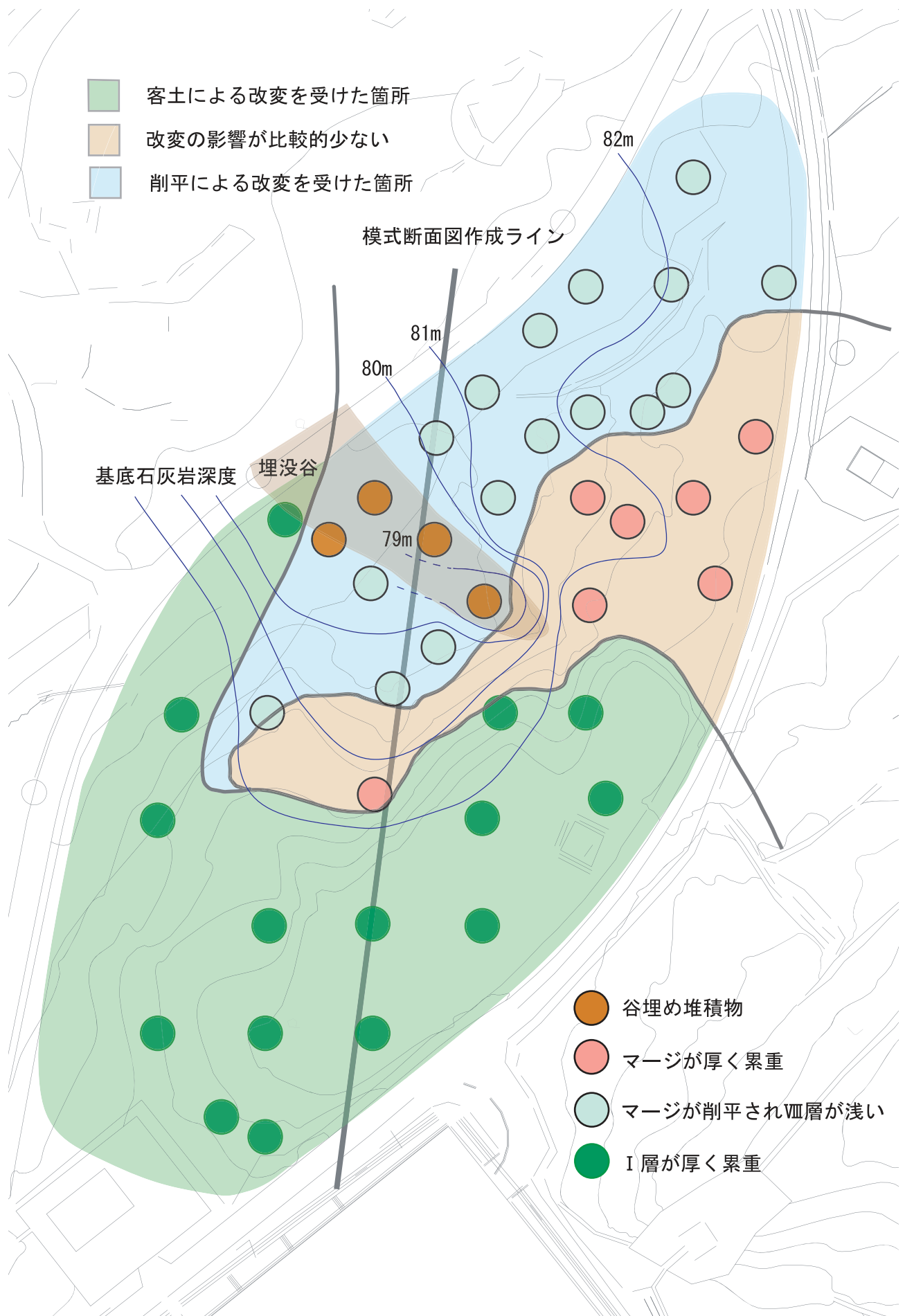
#### (4) 基盤石灰岩の状況

一方、フテ10-H10-アのⅧ層である石灰岩は、有孔虫殻を主体とした砂質石灰岩に分類されるが、粗粒の石灰藻や貝殻片なども含み、初生的とされる孔隙も比較的多く認められることから、いわゆる「粟石石灰岩」に近い特性を示す。一般に沖縄本島では、粟石石灰岩は港川石灰岩または牧港石灰岩などと呼ばれ、いずれも低位段丘の構成層として認められている(木崎編,1985)。また、上原(2000)は、宜野湾市に分布する低位段丘は、那覇石灰岩により構成されており、牧港石灰岩は認められないとしている。今回の試料は、中位段丘上から採取されており、粟石石灰岩の定義からははずれるが、その組織が粟石石灰岩に類似する石灰岩として捉えておくべきであろう。したがって、例えば、より緻密な組織の泥質石灰岩などに比べれば、風化の影響は、より顕著に認められると言える。現地調査時に、「軟質石灰岩」として認識されたのは、このような岩石の組織に起因すると思われる。

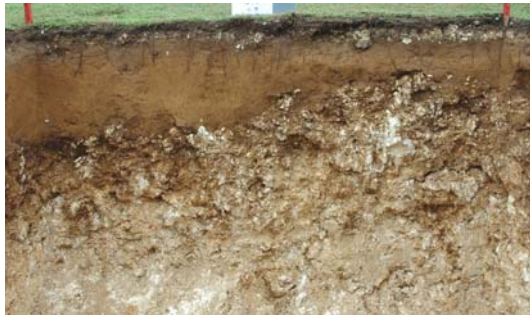


1.石灰岩(10-H10-ア西壁Ⅷ層)  
Qz:石英. PI:斜長石. Bi:黒雲母. Ch:緑泥石. Bio:石灰質化石. P:孔隙.  
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

図版7 岩石顕微鏡写真



第 56 図 試掘坑の基底および累重様式の平面分布



フテ10-F10-ア



フテ10-G10-ス



フテ10-H10-ノ



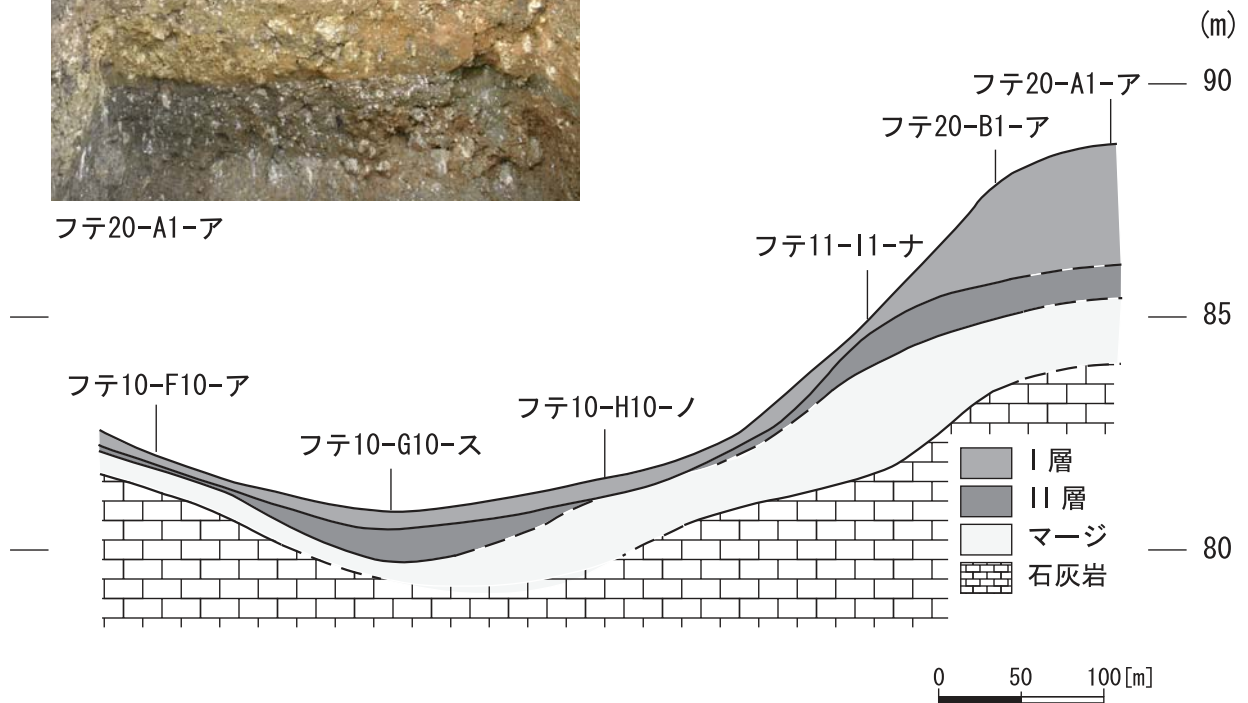
フテ20-A1-ア



フテ11-I1-ナ



フテ20-B1-ア



第 57 図 調査範囲の地形と各地点の状況

#### 第4節 小結

以上、前節までに平成18年度に実施した普天間飛行場基地内の試掘調査による遺跡発掘事前総合調査の成果について報告した。本節では、この成果を整理して今後の課題を検討したい。

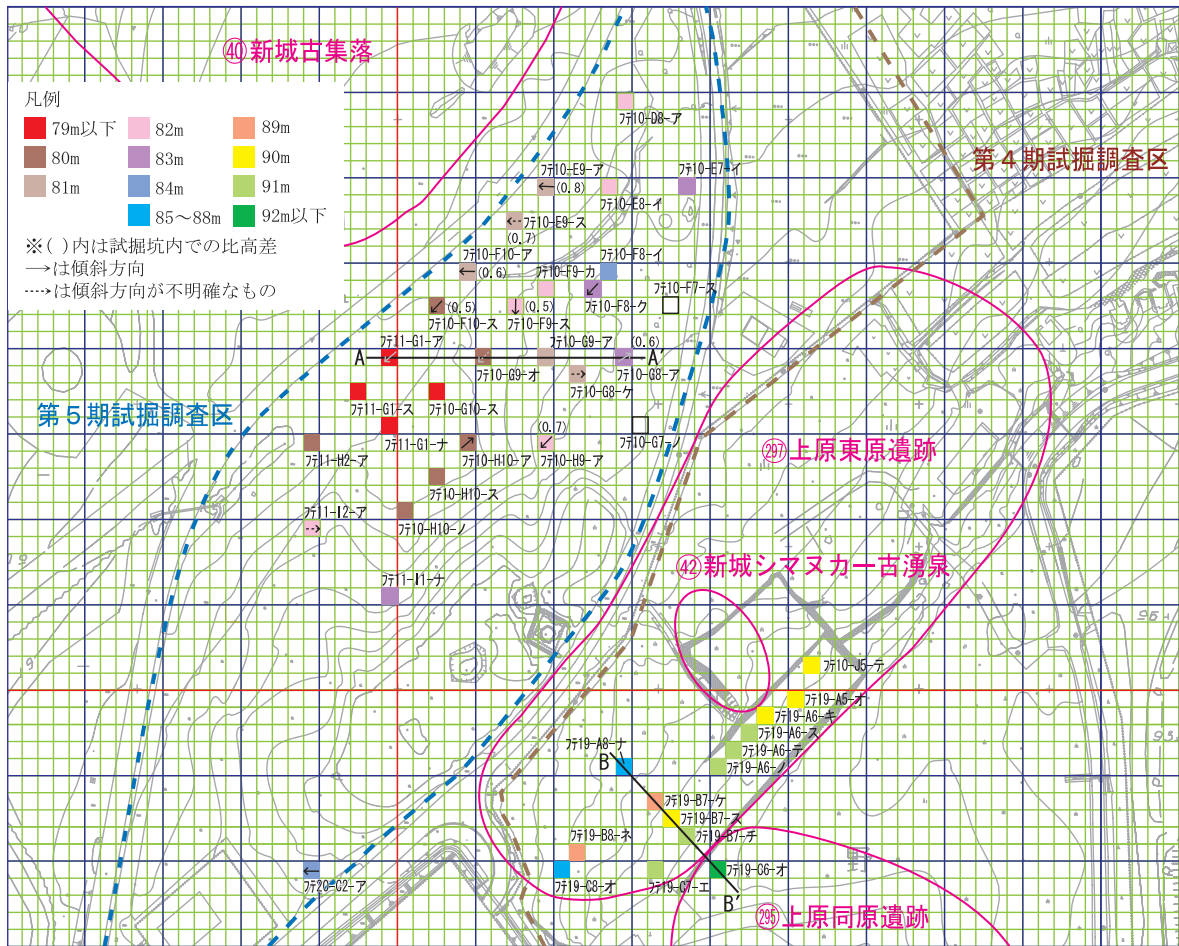
当該調査区は、昭和20年の航空写真や明治36年の土地利用図から、遅くとも近世から畑地として利用された可能性が推察できる。試掘調査の結果、米軍接收後の基地造成によって、Ⅱ層以下の堆積が確認できない試掘坑を除けば、全体の約73%でⅡ層の堆積が確認された。その多くは、近世以降の堆積層(ユニット①・ユニット②)であり、当該調査区が新城集落前面に位置することから、当該集落の畑地として利用されたことが窺える。新城集落は農業を主な生業としており、サトウキビやサツマイモ・大豆などを栽培する農家が多く、中には稲作を営んだ農家もあったという(宜野湾市史編集委員会編1985)。微細物分析の結果、フテ11-G1-AのⅡb層(ユニット①)からイネの穎が検出されており、戦前の土地利用を知る上で興味深い。

当該調査区で確認されたⅡ層は、概ねユニット①・②であるが、ユニット③・④も僅かに確認することができた。これまでの試掘調査の成果から、ユニット③は中世に比定でき、ユニット④は中世を遡る可能性が考えられる。これらは、既に第22図に示したように、東西に分かれて分布する。ユニット④と思われる堆積層は西側で確認されたが、この周囲は当該調査区において基盤層(Ⅷ層)の標高が最も低く、周囲の基盤層(Ⅷ層)や、いわゆるマージの堆積状況などから、迫地を形成していた可能性が考えられる。また、第4期試掘調査では、上原東原遺跡の包蔵地内から第5期試掘調査区へ基盤層(Ⅷ層)が傾斜することが確認されているため、この地形的な関連も考慮する必要がある。

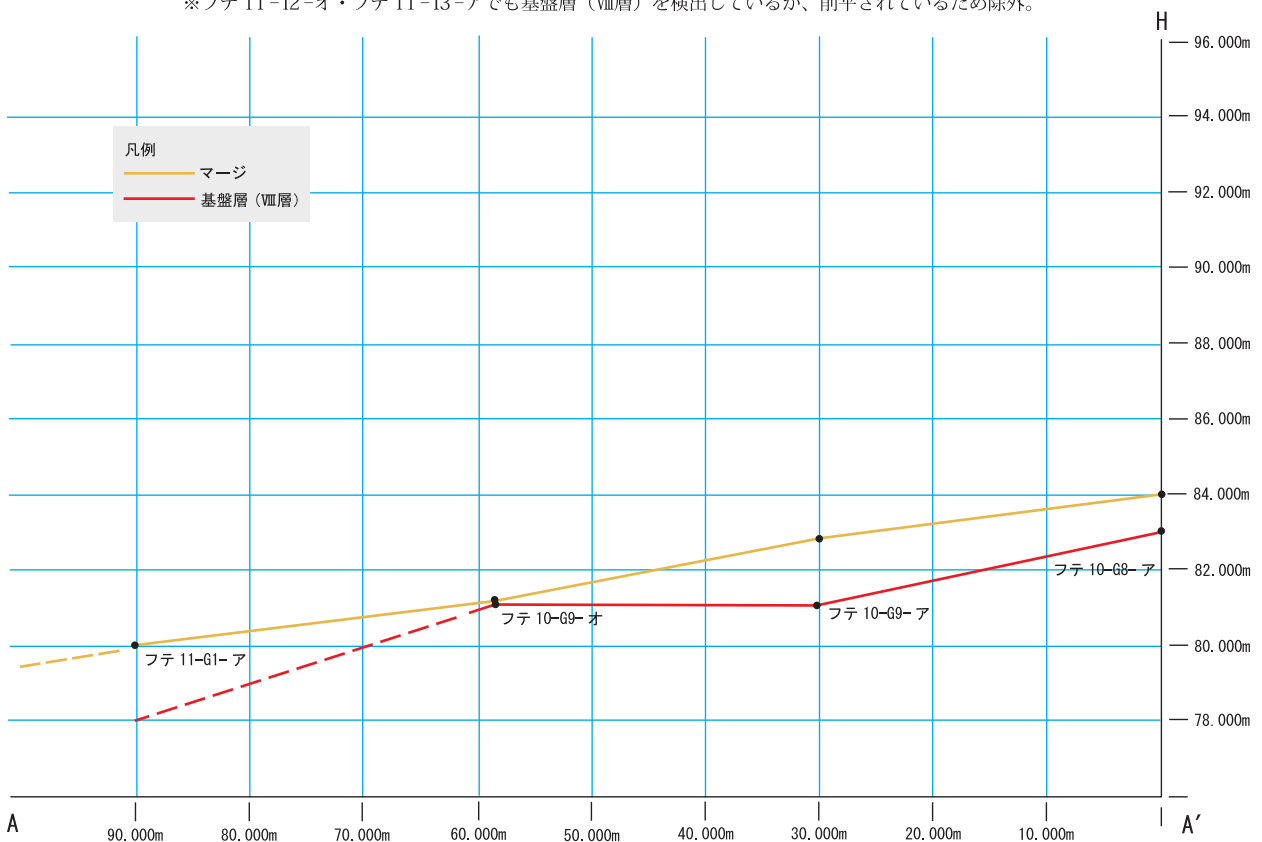
当該調査の大きな目的の1つは、琉球石灰岩層とマージの堆積状況から旧地形を復元することによって、埋蔵文化財包蔵地を推定することである。琉球石灰岩層の起伏が旧地形を示すことは、いくつかの物理探査による分析からも指摘されている。そのため、当該調査区と第4期調査区で確認された基盤層(Ⅷ層)の標高などを基にして、旧地形の復元を試みた(第58図～第61図)。これらによれば、調査区一帯は上原東原遺跡の包蔵地から緩やかに傾斜しており、標高81m前後から凹地を形成することがわかる。そして、これまでの調査成果にみえる傾向通り、生産関連が想定される遺構はこの凹地に厚く堆積したⅡ層から検出された。なお、物理探査による分析結果からも、フテ11-G1-A周辺に落ち込み状の地形が確認されている。

今回の調査では、ユニット③・④?が堆積する西側では、以上のように特徴的な地形を復元することができた。一方、ユニット③が堆積する東側では、明確な旧地形を復元することはできない。ただし、フテ10-F7-スにおける堆積状況や、フテ10-G8-Aで確認された基盤層(Ⅷ層)の傾斜方向から、フテ10-F8-イ・フテ10-F8-クの周辺から東方向に傾斜して、凹地を形成する可能性が考えられる。なお、フテ10-G7-ノでは基盤層(Ⅷ層)を確認することができなかったが、その調査成果からフテ10-G8-Aよりも基盤層(Ⅷ層)の標高が低くなると考えられる。そのため、この凹地の規模は当該調査区では少なくとも40m前後の範囲に及ぶことが推測される。加えて、平成16年～17年度における野嵩タマタ原遺跡西側での確認調査からも、旧地形が当該地域に向けて傾斜する可能性が示唆されているため、注意が必要である。

ユニット③・④?が堆積する迫地は、第60図に示すように、当該調査区を越えて西方向へ延びると考えられる。そのため、遺構の拡がり把握するために当該迫地周辺の確認調査の実施が必要である。また、ユニット③が堆積する東側でも、遺構が検出される可能性は高いと思われる。そのため、旧地形の把握を含めた当該地域の精査が求められる。なお、当該試掘調査では4ヶ所で遺構が確認されたが、物理探査による分析の結果、フテ10-H9-Aの1m程南東に、第60図に示した等高線に平行するようにして、石積みと思われる構造物が確認されている。周辺環境などから埋設管の可能性は低いいため、今後確認が必要である。

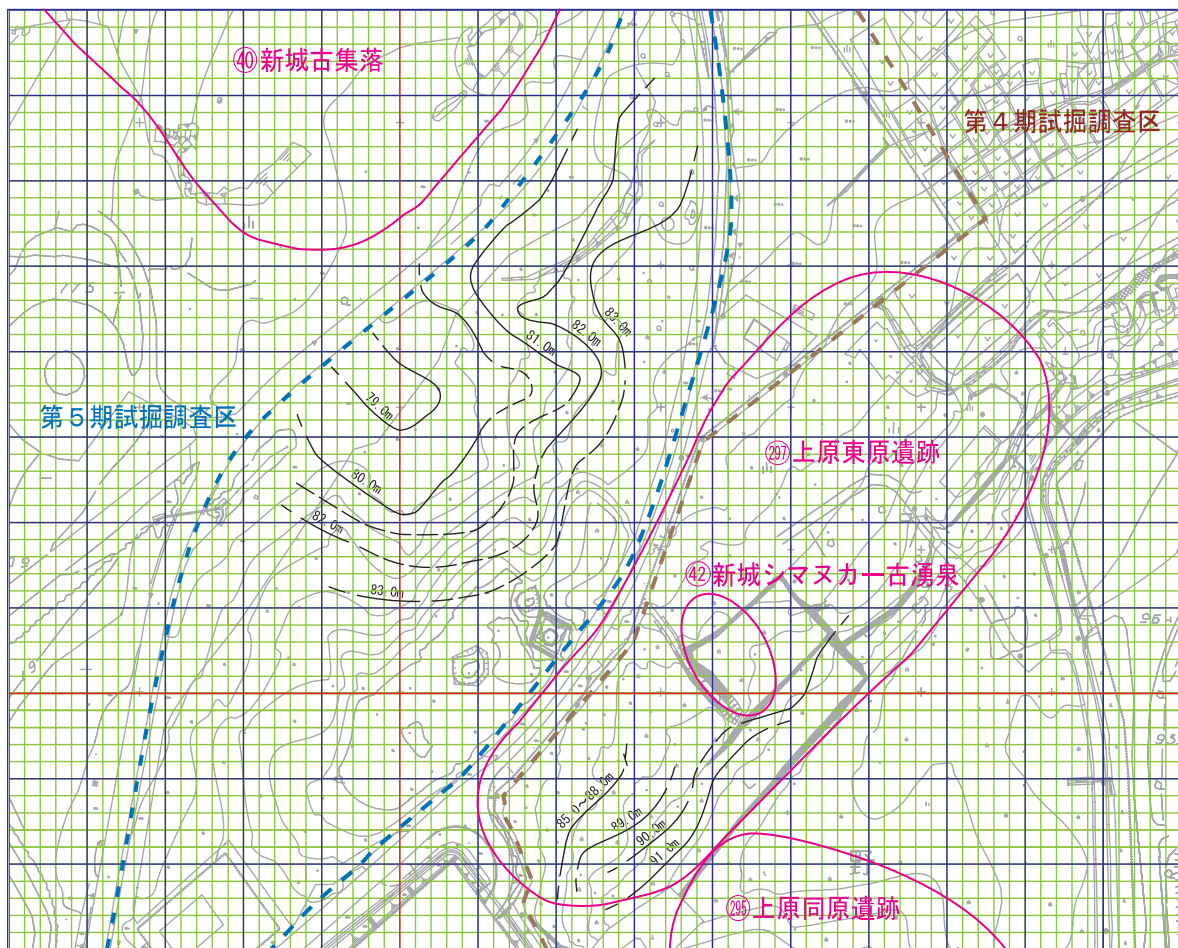


第 58 図 第 5 期試掘調査区におけるⅧ層の標高と傾斜方向  
 ※フテ 11-12-オ・フテ 11-13-アでも基盤層 (Ⅷ層) を検出しているが、削平されているため除外。

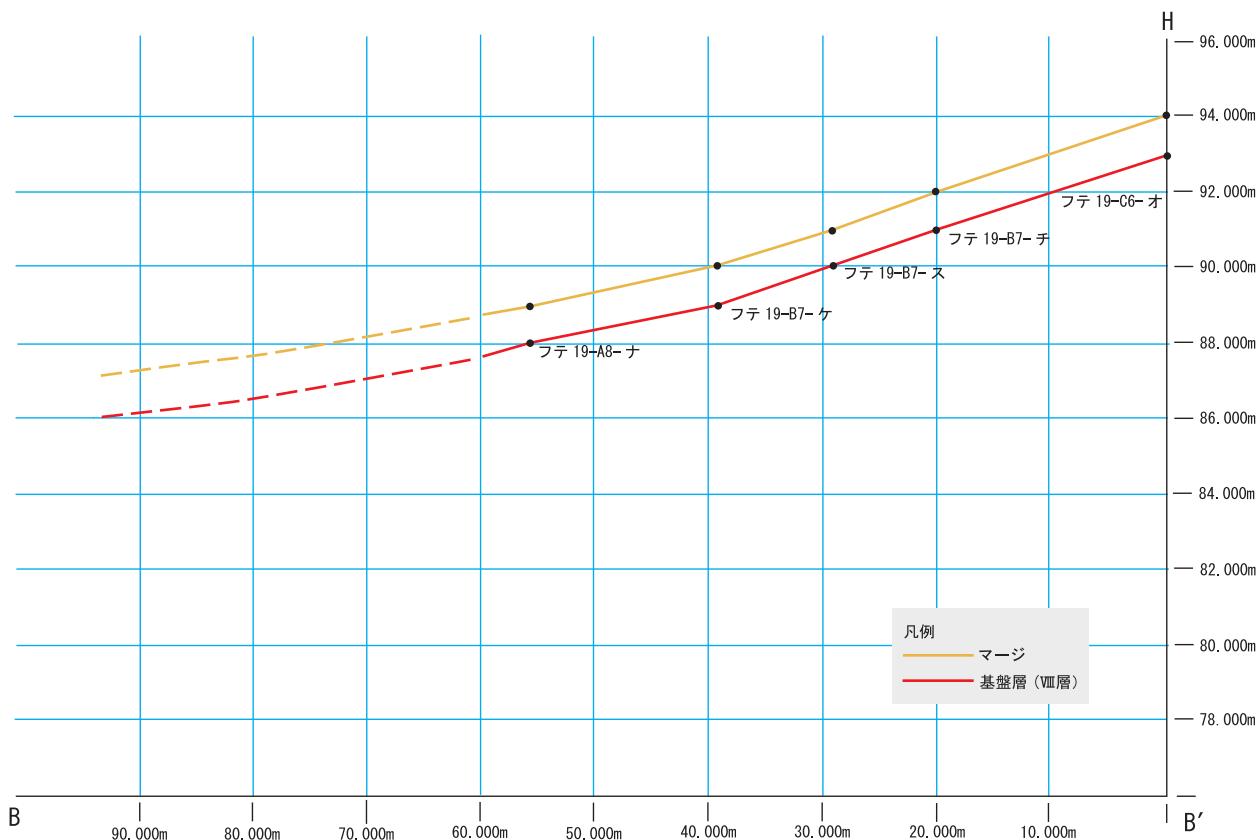


第 59 図 第 5 期試掘調査区における基盤層 (Ⅷ層) 及びマージの堆積状況





第 60 図 第 5 期試掘調査区におけるⅧ層推定コンター



第 61 図 上原東原遺跡南側における基盤層 (Ⅷ層) 及びマージの堆積状況

(『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』第 85 図を参考に作成)



遠景（南東から）



近景 1（西から）



近景 2（東から）



調査区西側 掘削状況



フテ 10-G9-ア 記録作業



フテ 10-J10-ア 土層の観察



フテ 10-G10-ス



フテ 11-G1-ア



フテ 11-G1-ス

図版 10 第 5 期調査区 遺構検出状況

## 第V章 第6期試掘調査報告

### 第1節 敷地分析と周知の遺跡

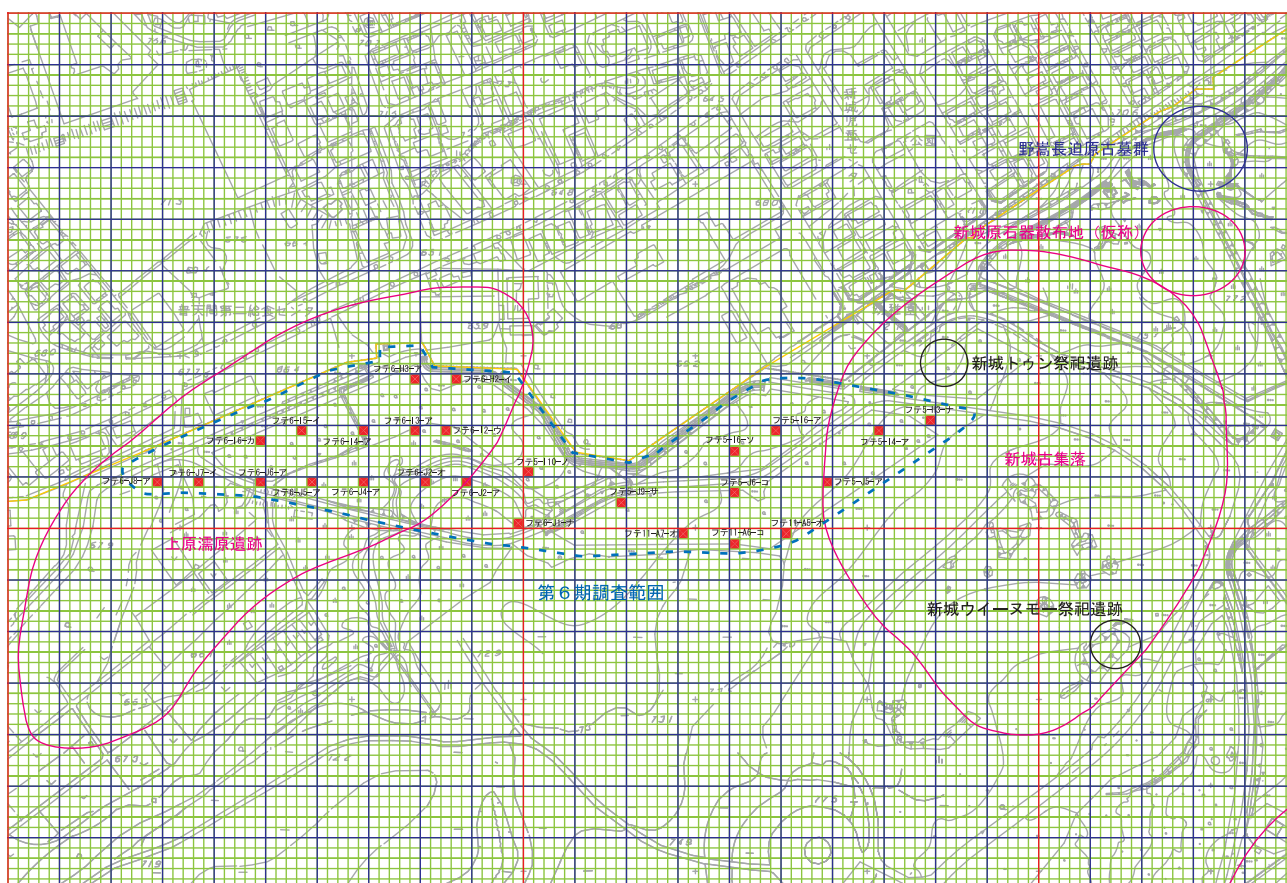
第6期試掘調査を実施した地域は、第13図、第62図の普天間飛行場基地内北側にある黙認耕作地東側の緑地帯から芝地部分で、新城区の新城原と前原、上原区の濡原を中心とした地域、民間地とフェンス1枚を通して接しており、調査地すぐ北側には普天間第二小学校が所在する。東側の新城側は普天間飛行場の滑走路とほぼ同じ標高73m前後のレベルで、北西側の上原側は新城側より傾斜して約7m低い地域である。

調査地緑地帯のほとんどは那覇防衛施設局（現沖縄防衛局）が植林したガジュマルや夾竹桃などで、整然と並んでいる。一部地域には米軍によるとおもわれる造成土が厚く堆積する箇所が見られ、そこには森が自然発生的に密生しており、ハゼやホルトなどが繁茂している。

調査地周辺には第62図のように近世の遺跡である新城古集落遺跡、新城タウン祭祀遺跡、新城ウィーヌモー祭祀遺跡、貝塚時代から近世期の上原濡原遺跡が周知の遺跡として確認されている。

新城古集落遺跡は近世琉球王府時代の碁盤目型集落で、それ以前はキャンプ瑞慶覧の下殿に住んでいたのが、近世に移り住んだと伝えられていると佐喜真興英「シマの話」の中で記述がある。現在は戦後米軍の飛行場建設に伴って、造成された後の屋敷林の一部と思われるガジュマルが見られるのみである。1979年より継続的に実施した市内文化財分布調査によって発見され、1992年送油管敷設工事に伴って本発掘調査が行われ、石列や溝等の当時の遺構が検出されている。新城タウン祭祀遺跡、新城ウィーヌモー祭祀遺跡は新城集落の拝所を中心とした遺跡とされ、所在地は古老の伝承によるものである。

上原濡原遺跡は貝塚時代中期からグスク時代・近世期の生産遺跡とされ、1991年に送油管敷設工事の事前の試掘調査によって発見された。翌年の工事に伴う本発掘調査では、畝間状遺構、土坑、炭だまり等の生産に関わるとおもわれる遺構群が検出され、貝塚時代中期の土器も出土している。この遺跡一帯は周囲より低まった地域であり、名称のとおり降雨時には周囲からの水が集中して押し寄せて冠水し、3、4日は水が引かない状態となる。



第62図 第6期調査区試掘箇所と周辺遺跡分布図

## 第2節 調査の成果

### [1] 調査概要

第6期試掘調査は、4m四方の試掘調査坑を重機により26箇所掘削した。

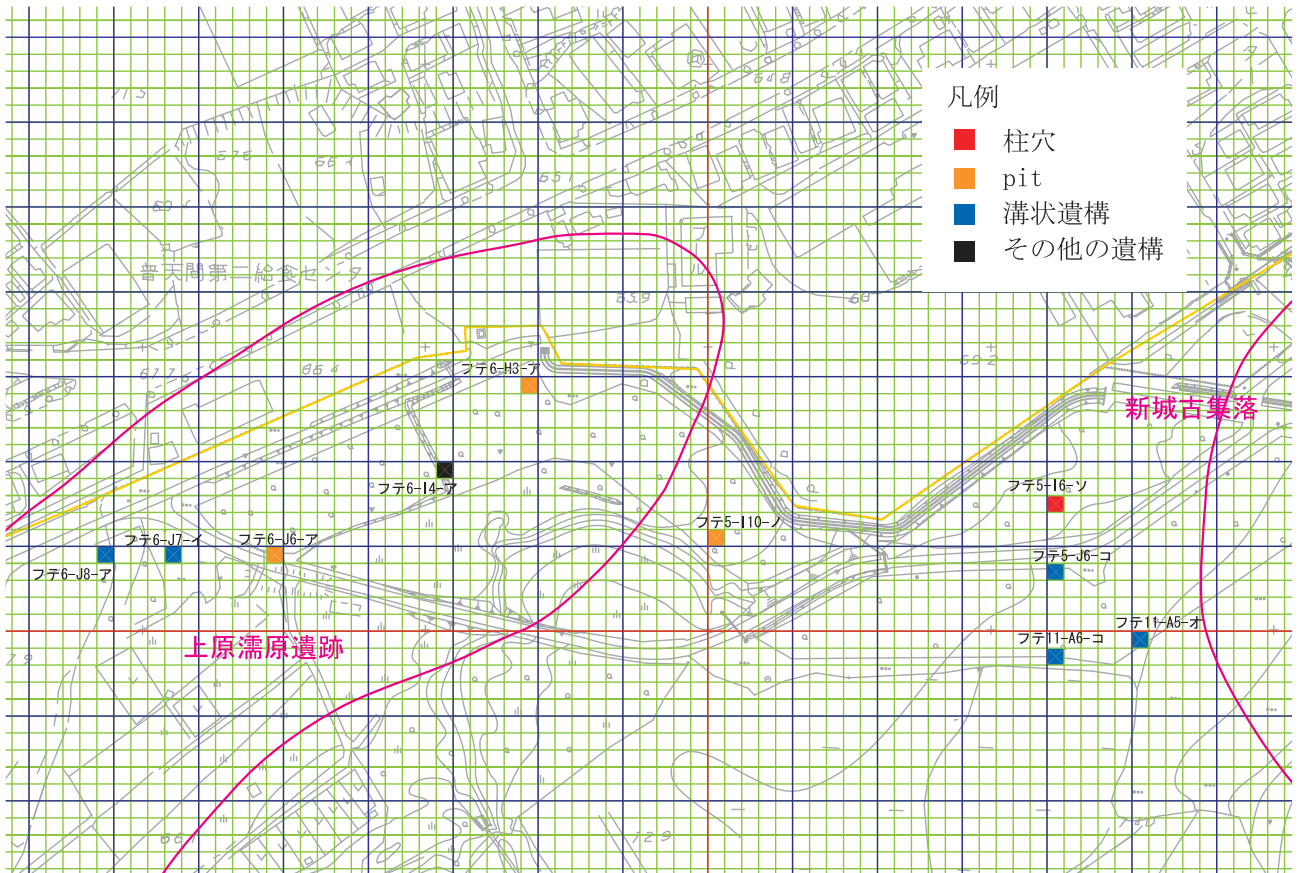
上記、試掘調査を実施した箇所は地形状況と遺構、遺物と包含層等より、2地域に分類できる。ひとつは普天間第二小学校の南側で新城古集落遺跡周辺の第63図の第一地区の10試掘調査箇所と普天間第二小学校西側の上原濡原遺跡周辺の第63図の第二地区の16試掘調査箇所である。新城古集落側の第一地区の試掘調査坑は、飛行場建設による大規模な造成・攪乱を受けており、包含層は基本的に単層で、遺構は造成の影響もあって上面に僅かな包含層を残し残存している状況である。地形的にも第二地区より6、7mほど高まりに位置し、ほぼ平坦である。普天間第二小学校西側、上原濡原遺跡の第二地区の試掘調査坑は周辺より低まった地域のためか造成等の影響はほとんどなく、表面に近代の排水溝と見受けられるものもある。包含層は複数あり、遺構、包含層ともによく保存されている。

26箇所の試掘調査坑のうち遺構は10箇所より検出されている。第64図に示している。道など土地区面に伴うと思われる溝状遺構が5箇所、屋敷の柱穴が1箇所より、植栽痕と思われる円形のピットが2箇所、性格不明な階段状遺構が1箇所（フテ6-I4-A）より、また、畑等を耕した耕作跡と思われる不定形なピット群が2箇所より検出されている。上原濡原側の第二地区では2箇所の試掘調査坑フテ6-I4-A（階段状遺構と炭だまり遺構）、フテ5-I10-N（溝状遺構と耕作痕等のピット）で遺構が重複して検出されている。時期的には貝塚時代中期から近世、琉球王府時代までさかのぼるとおもわれる。

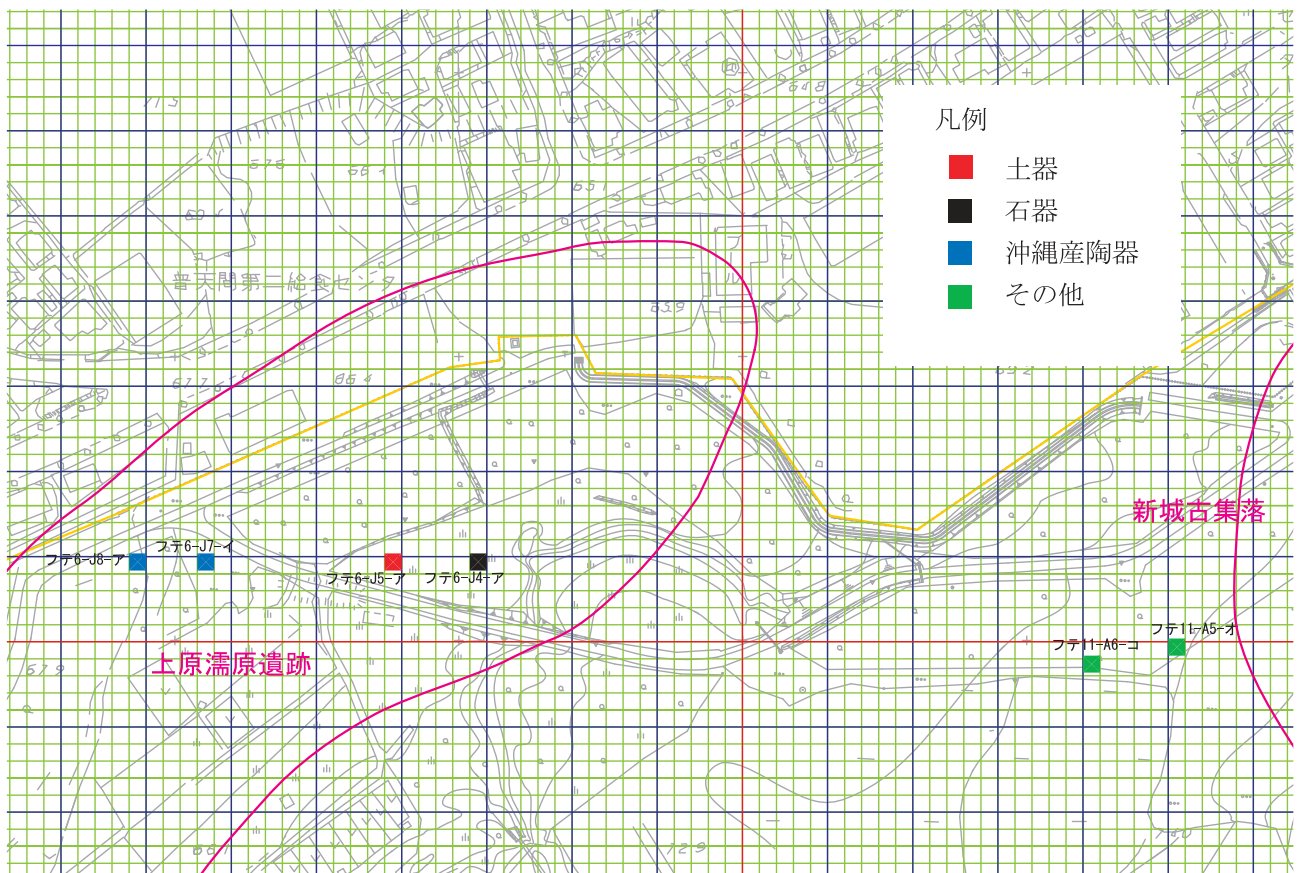
遺物は第65図に示した包含層から出土したものは、貝塚時代中期と思われる土器が10数点（フテ6-J5-A）と石皿1点、沖縄産陶器が3点で、徳利、瓦等のそのほかの遺物は攪乱から出土している。



第63図 第6期調査区 試掘調査箇所



第64図 第6期調査区試掘調査 遺構検出状況



第65図 第6期調査区試掘調査 遺物出土状況

## [2] 基本層序

試掘調査した第6期第一地区の基本層序は第68図①のように、まず表土下約50cmから1m、試掘坑によっては2mまでは戦後米軍によるものとおもわれるコーラルの層や拳大のセメント片や琉球石灰岩が混じった造成した層序が共通しており、フテ11-A6-コや11-A5-オには新城古集落の屋敷の一部である瓦等がみられ、造成はかなり大規模・広範囲に実施している。これまでの「基地内Ⅰ・Ⅱ」の試掘調査報告書を参照するとⅠ層となろう。各試掘坑ではⅠa、Ⅰb層等と表記している。次に褐色や灰・茶褐色の砂質シルトで炭化物・焼土粒を含む。貝塚時代からグスク・近世・近代とおもわれる層序で「基地内Ⅰ・Ⅱ」よりⅡ層となる。大半の試掘坑にみられないことから、造成等により削り取られたものとおもわれる。断面図等にはⅡa、Ⅱb等として表記している。「基地内Ⅱ」では更にⅡ層をユニット①・②と細分しにしているが、本地区では①に該当するものとおもわれる。Ⅲ層からⅦ層はマージと呼称され、Ⅷ層は基盤層の琉球石灰岩である。

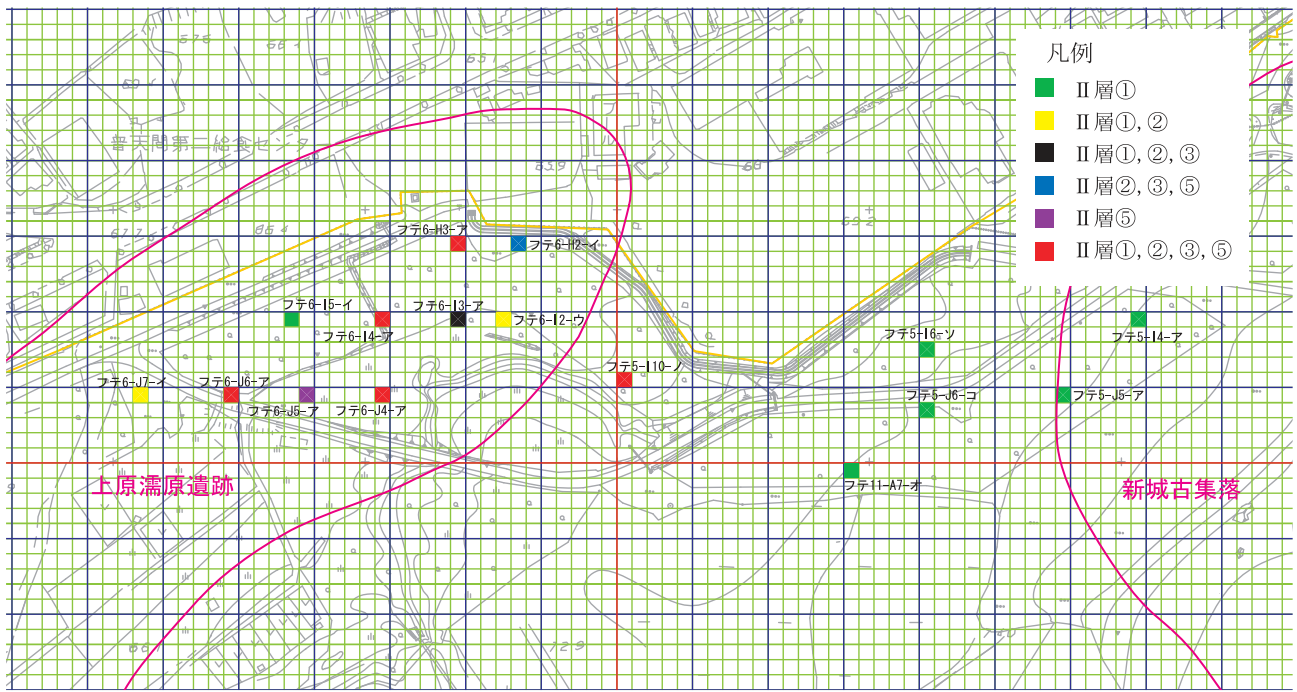
第6期第二地区の基本層序は第68図②に示している。表土から戦後造成土のⅠ層とされる層序は30cmから50cmの厚さがあり、石灰岩が多く混ざる粘りのない層序である。全試掘坑にみられる。戦前から近代・近世とされる層序はほぼ地区全域にみられ、またこの地区では「基地内Ⅱ」の細分した層序が見られる。ユニット①は砂質シルトで褐色、茶褐色で焼土粒や石灰岩碎片が混ざっている。②は褐色、灰褐色を呈し砂質シルト層で粘質が高くなる。炭化物、焼土粒も上層より多くなる。次に黒褐色・暗褐色土の砂質シルトが地区の中央と西側にみられる。グスク時代（中世）とされる層序で、フテ5-I10-ノでは耕作痕、フテ6-I4-アではこの層序で階段状遺構が検出されている。「基地内Ⅱ」ではユニット③としている。更に黄褐色の粘質シルトで地区中央と西側にみられ、フテ6-J5-アでは貝塚時代中期とおもわれる土器が出土し、フテ6-I4-アでは炭だまりが検出されている。「基地内Ⅱ」のユニット④と似ているが、腐食、焼土粒はここではみられないので⑤とする。（以後、「基地内Ⅱのユニット①から④」は①層、②層、③層、⑤層とする。）

それ以下のⅢ層は第一地区と共通であるが第二地区中央部はⅧ層が露出せず⑤が続いていることから、ドリーネ等の窪地や谷地が想定される。



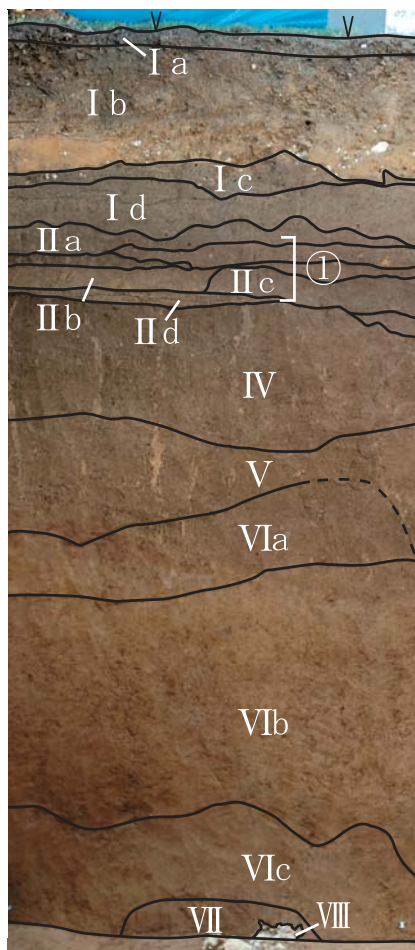
第66図 第6期調査区 試掘調査箇所（背景は昭和20年）



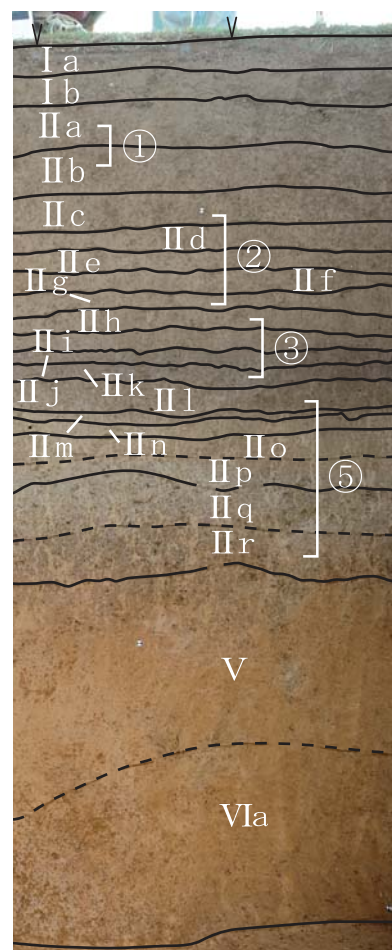


第67図 第6期調査区試掘調査 II層検出状況

①<第一地区>



②<第二地区>



第68図 第6期調査区における堆積状況画像柱状図①、②

[3] 各試掘調査坑

試掘調査を実施した試掘坑について、特徴的な箇所について述べる。試掘調査坑すべての詳細については第14表～第16表aからcに一括して記載した。(試掘坑写真は正射投影化したオルソ画像を基本としている。)

<第一地区>

新城区の新城原と前原の標高 73 m から 74 m の全体的にはほぼ平坦な地形で、新城古集落遺跡が確認されており、1992 年の送油管敷設工事の際に、本発掘調査を実施し、石列や溝等の集落跡が検出され、多くの遺物が出土している。

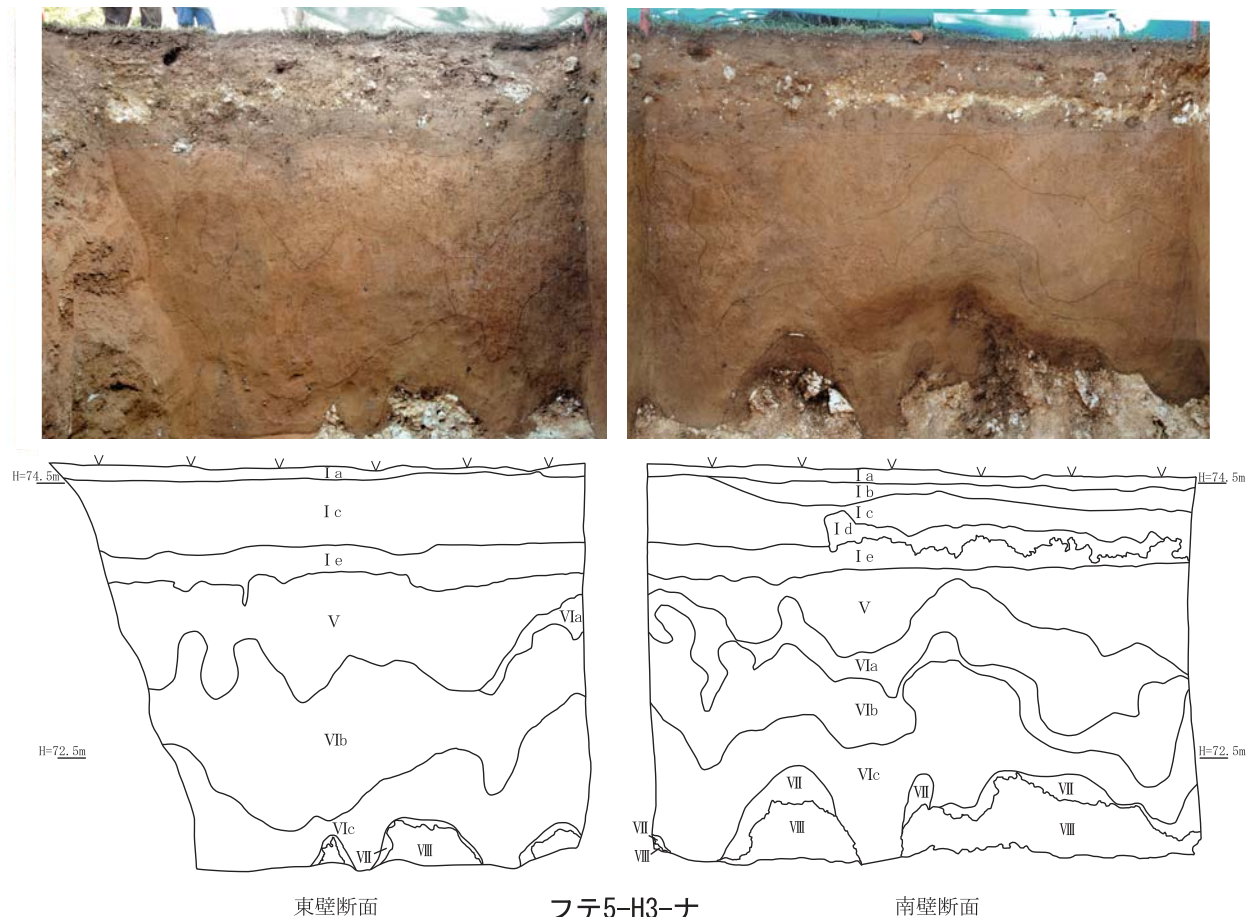
試掘調査坑の一部は遺跡の範囲に位置し、この地区では 10 箇所の試掘調査を実施している。普天間飛行場建設の大規模な造成を受けているが、今回の試掘調査で遺跡範囲外でも溝等の遺構が検出されている。



第 69 図 第 6 期試掘調査 第一地区

フテ5-H3-ナ

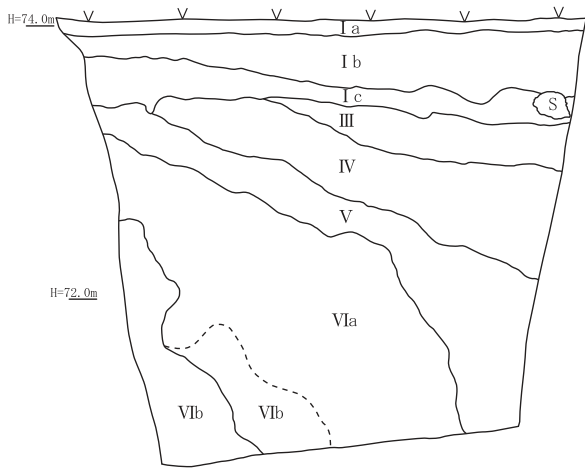
新城の新城原、新城古集落遺跡内の西側に位置する。石灰岩岩盤及び各マージの状況からほぼ平坦面で、谷地形等の凹凸はみられない。米軍による飛行場建設の造成層とおもわれる I a から I e 層がみられる。試掘坑より北側に 3 m は工事に伴う遺構等の検出された場所であるため、本来マージの上面には II 層が堆積していたとおもわれる。



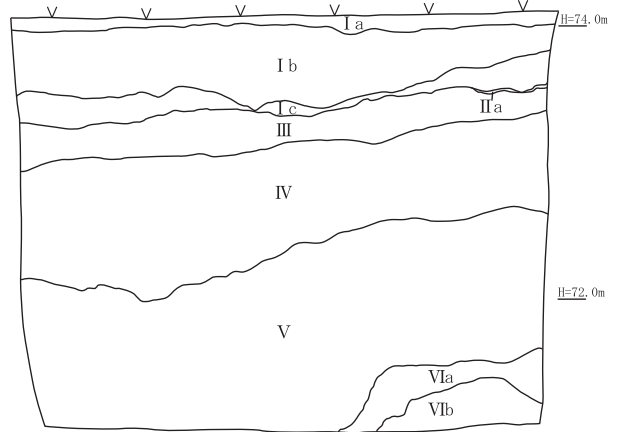
第 70 図 各試掘坑断面図① フテ 5-H3-ナ

フテ5-14-ア

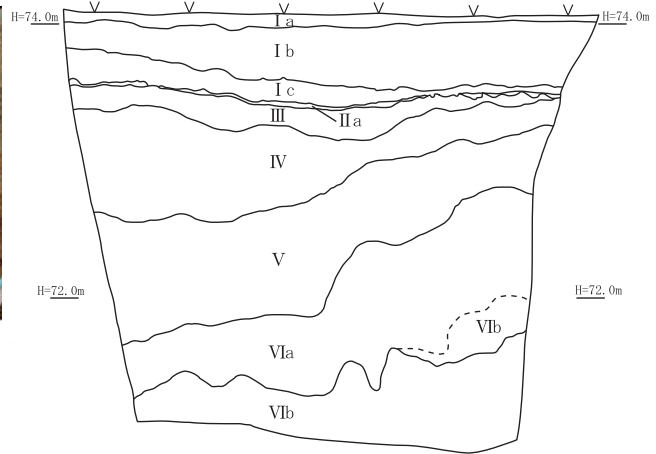
新城の新城原、新城古集落遺跡内の西側に位置する。南壁・北壁・東壁では石灰岩岩盤及び各マーゼの状況から北東へ傾斜している。戦前は屋敷付近で、若干くぼんでいる地形であった。表層下からは米軍による飛行場建設の造成層であるI aからI c層がみられ、若干ではあるが新城古集落の包含層とおもわれるII a層が残存している。



北壁断面



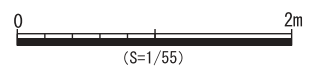
東壁断面



南壁断面

フテ5-14-ア

第71図 各試掘坑断面図②フテ5-14-ア



フテ5-16-ア

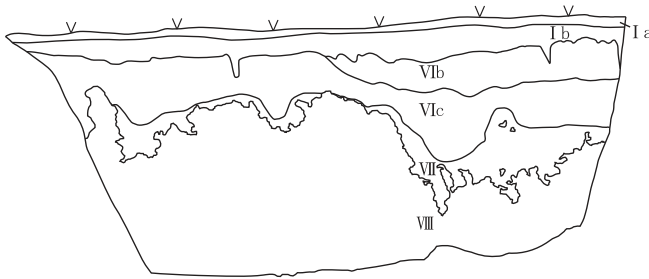
新城の前原、新城古集落遺跡範囲外の西側に位置する。現在はガジュマル等を植栽した平坦な地域で、戦前は屋敷地周辺であった。北壁・東壁ともに琉球石灰岩岩盤とマージ層はより旧地形はほぼ平坦であったとおもわれる。表層以下20cmは造成層である。



H=73.0m

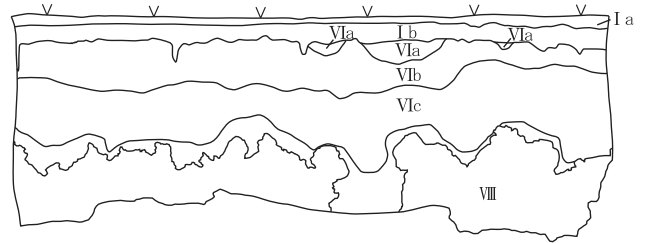


H=73.0m



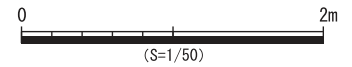
北壁断面

フテ5-16-ア



東壁断面

第72図 各試掘坑断面図③ フテ5-16-ア



フテ5-J5-ア

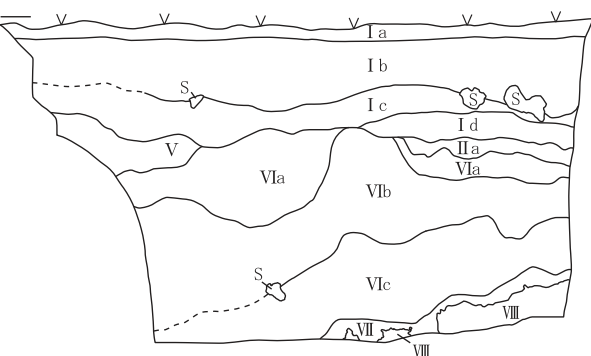
新城の前原、新城古集落遺跡範囲内に位置する。北壁の琉球石灰岩岩盤とマージ層より旧地形は東から西へ若干の傾斜をなす。表層下80cmは造成層で、北東側に若干であるがII a層が確認できる。



H=74.0m

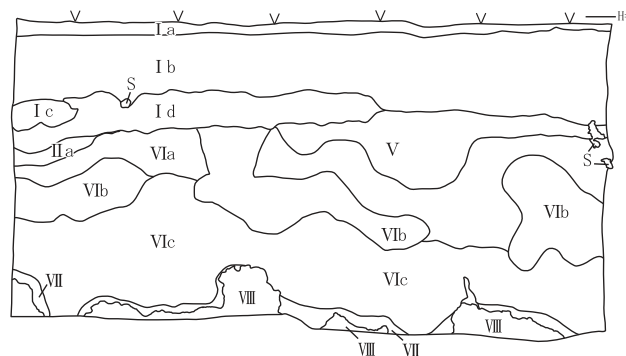


H=74.0m



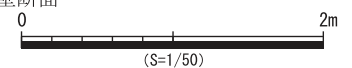
北壁断面

フテ5-J5-ア



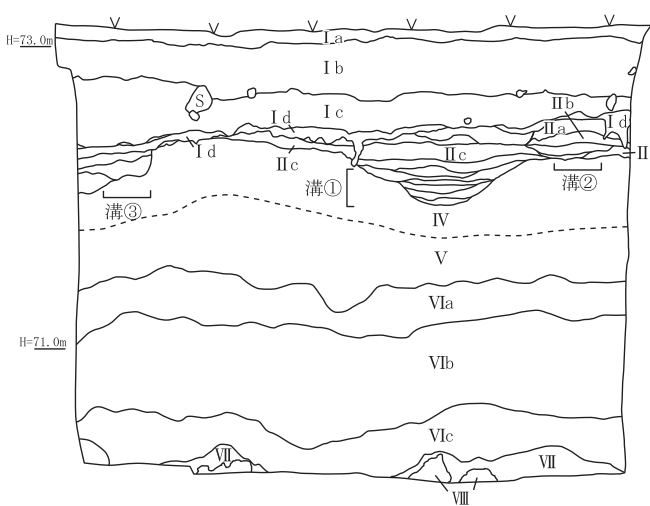
東壁断面

第73図 各試掘坑断面図④ フテ5-J5-ア

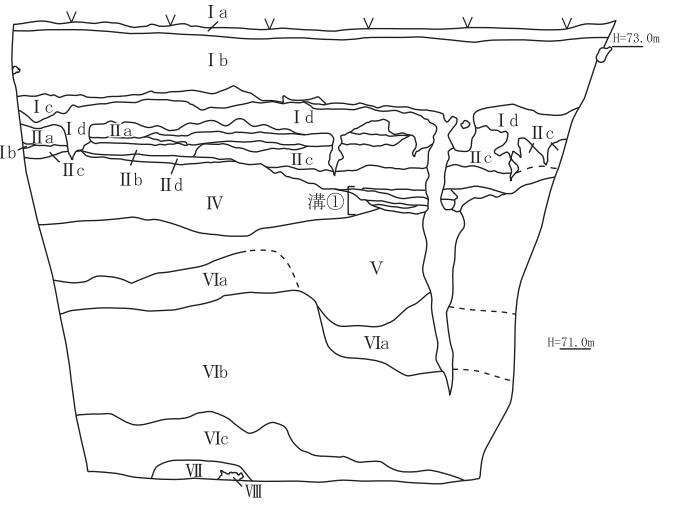


フテ 5-J6-コ

新城の前原、新城古集落遺跡範囲外の西側に位置する。南壁・西壁の琉球石灰岩盤とマージ層より旧地形はほぼ平坦で、地表下 80 cm は造成層をなしている。その下位層は II a から II c 層が 30 cm ほど堆積している。南壁の中央よりやや西側に深さ 30cm とその西側に深さ 10 cm の溝状遺構①、②と、南側に溝状遺構③が検出されている。西壁の中央やや北側にも深さ 30cm ほどの溝状遺構が検出している。南壁の溝状遺構①と西壁の溝状遺構は同一の遺構で、溝状遺構底はマンガンの固結で固く、その直上はラミナ状に堆積している。明治 36 年の土地利用図中の道と検出された溝状遺構が重なることから、新城集落内の里道脇の側溝であるとされる。



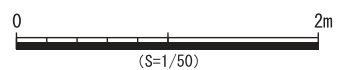
南壁断面



西壁断面

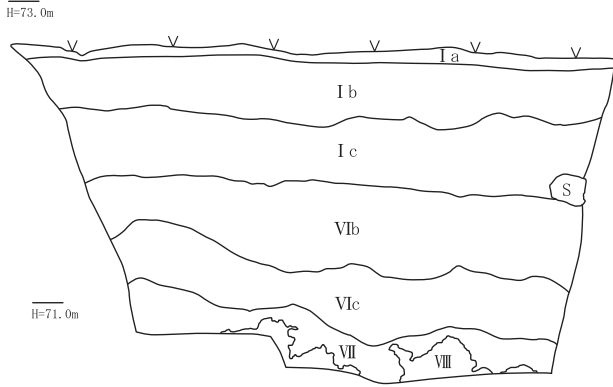
フテ5-J6-コ

第 74 図 各試掘坑断面図⑤ フテ 5-J6-コ

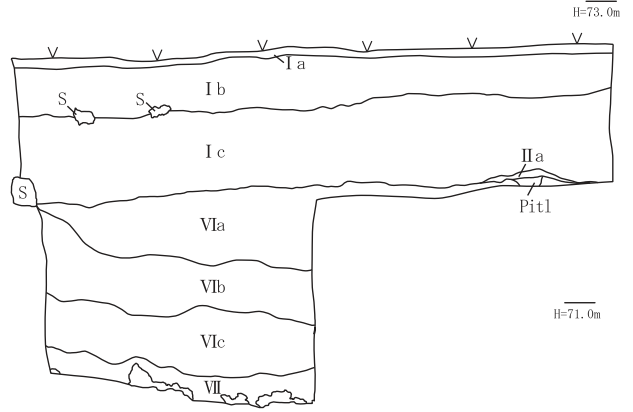


フテ5-16-ソ

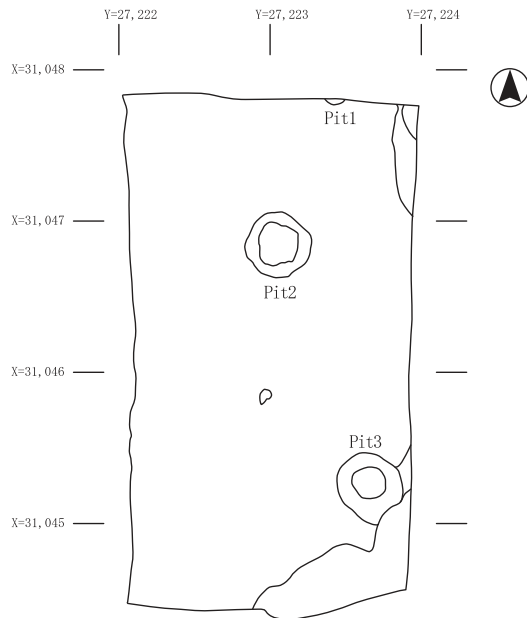
新城の前原、新城古集落遺跡範囲外の西側に位置する。戦前は新城集落内にあった。西壁・北壁ともに琉球石灰岩岩盤とマージ層より旧地形はほぼ平坦であったとおもわれる。表層下1mは造成層で、若干東側にII a層がみられる。ピットが3基検出されており、その内の2基（Pit 2、3）は二重円で、外円の直径はいずれも約40cmで、Pit 2の内円は30cm、Pit 3の内円は20cmでいずれも柱穴とおもわれる。Pit 1は一部しか確認できないため不明である。Pit 1・2間は1.2m、Pit 1・3間は2.7m、Pit 2・3間は1.8mを測る。



西壁断面

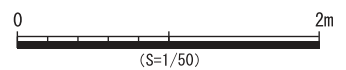


北壁断面



フテ5-16-ソ

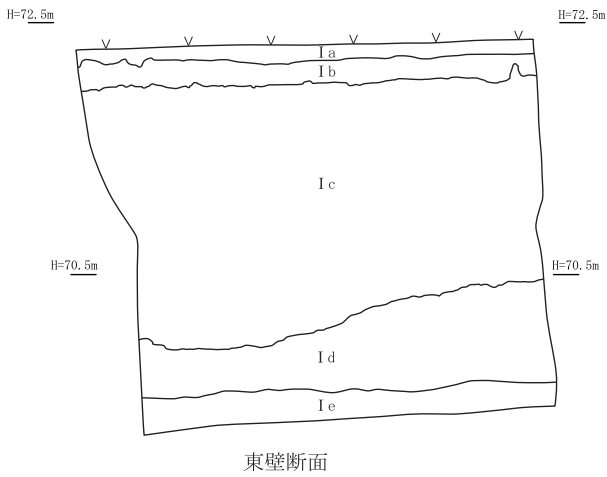
平面図



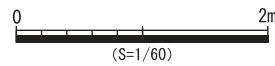
第75図 各試掘坑断面図・平面図⑥フテ5-16-ソ

フテ5-J5-ア

新城の前原、新城古集落遺跡範囲外の西側に位置する。地表より2mは送油間敷設工事のコーラル層で、その下層は還元状態での変色が見られ、異臭がする。



フテ5-J9-サ



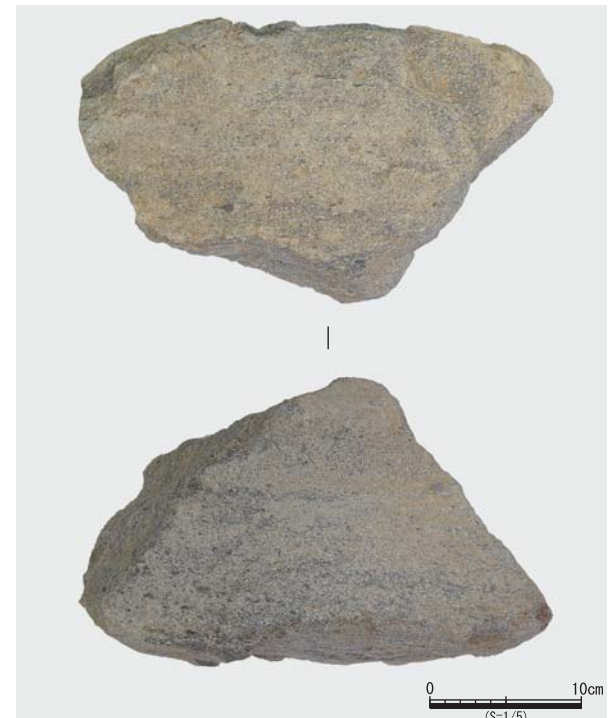
第76図 各試掘坑断面図⑦フテ5-J9-サ



図版11 フテ11-A6-コ出土遺物



図版12 土器(フテ6-J5-ア II m層出土)



図版13 石器(フテ6-J4-ア II i層出土)

フテ 11-A5-オ

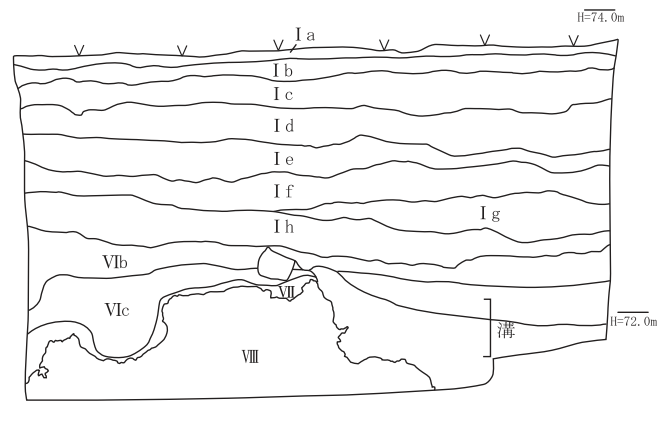
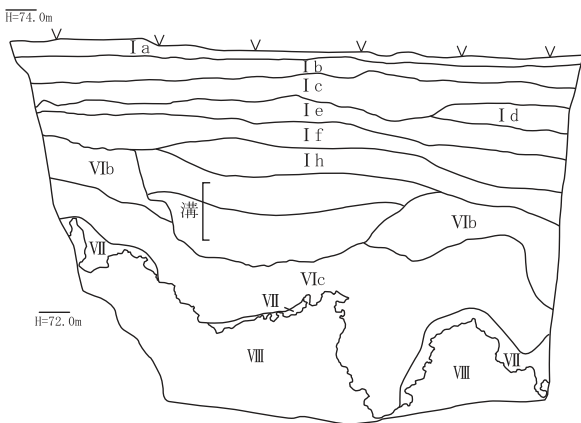
新城の新城原、新城古集落遺跡範囲外の西側に位置する。西壁の琉球石灰岩盤とマーヅ層より旧地形は南から北へ傾斜をなし、北壁ではほぼ平坦である。一見、表層まで造成層とおもわれたが、堆積層を検証すると地表下 2m まで造成層をなしている。西壁中央に深さ約 60 cm、北壁東側に深さ 80cm の溝状遺構が確認できる。溝内は造成による埋土である。明治 36 年の土地利用図中の道と検出された溝状遺構が重なることから、新城集落内の里道脇の側溝であるとおもわれる。

フテ 11-A6-コ

新城の前原、新城古集落遺跡範囲外の西側に位置する。戦前は新城古集落内に位置している。西壁・北壁の琉球石灰岩盤とマーヅ層より旧地形はほぼ平坦で、北壁地表下 1.2 m と西壁 2.5m は造成層をなしている。I d 層下面には屋敷屋根の瓦がみられ、西壁中央に重機による削平した痕跡がみられ、造成のすさまじさを物語っている。北壁の東側には溝状遺構がみられる。これも明治 36 年の土地利用図中の道と重なることから、新城集落内の里道脇の側溝であるとおもわれる。

フテ 11-A7-オ

新城の前原、新城古集落遺跡範囲外の西側に位置する。北壁・東壁の琉球石灰岩盤とマーヅ層より旧地形はほぼ平坦で、北壁・東壁地表下 1 m はコーラルで、さらに 1 m 下位層も造成層をなしている。造成は北壁ではマーヅ層を削平しながら埋めていき、北壁東側と東壁に 20 から 30cm ほどの厚さで II a、b 層が堆積している。

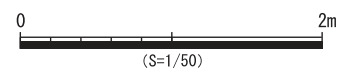


西壁断面

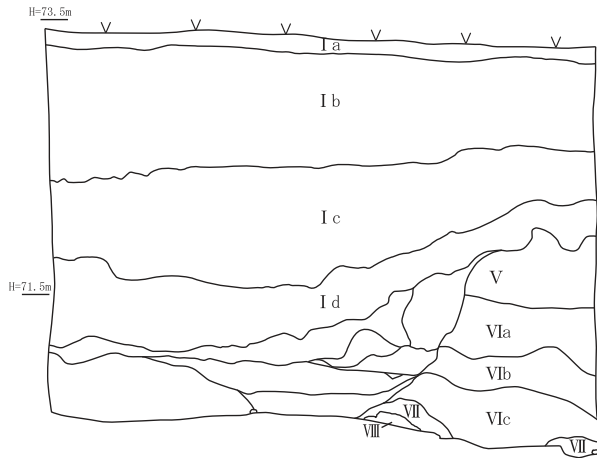
北壁断面

フテ11-A5-オ

第 77 図 各試掘坑断面図⑧ フテ 11-A5-オ

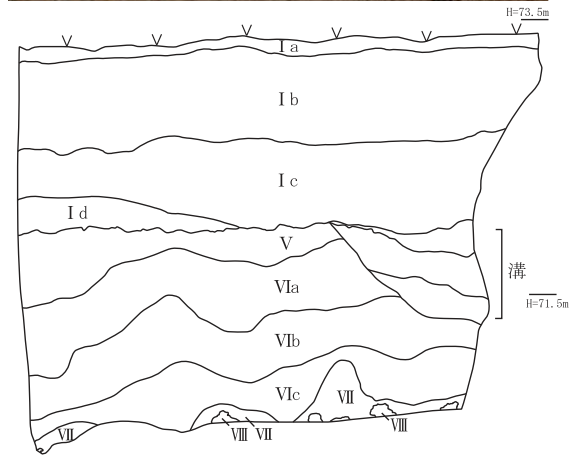




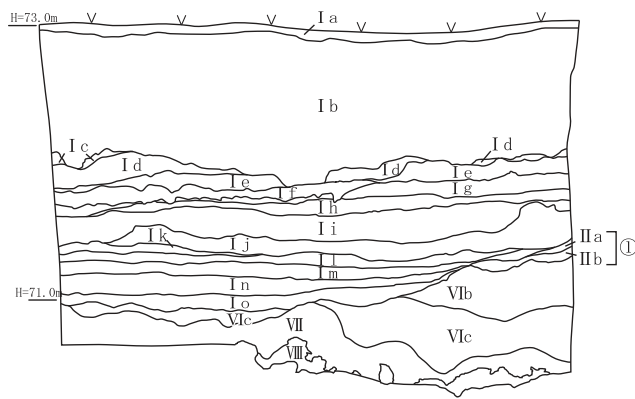


西壁断面

フテ11-A6-コ

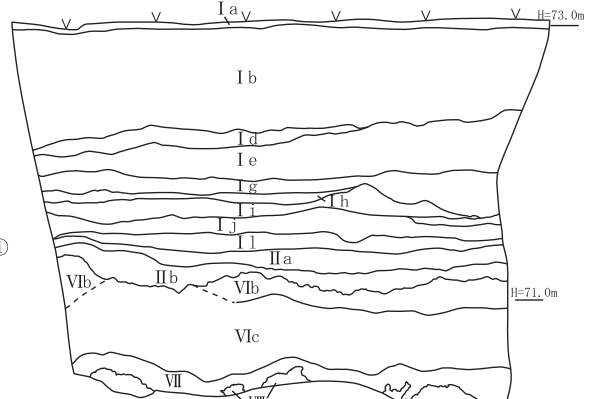


北壁断面



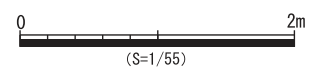
北壁断面

フテ11-A7-オ



東壁断面

第 78 図 各試掘坑断面図⑨ フテ 11-A6-コ・フテ 11-A7-オ



## <第二地区>

上原区の濡原の標高 66 m から 67 m の全体的に平坦な地形で、上原濡原遺跡が確認されており、1992 年の送油管敷設工事の際に、本発掘調査が実施され、畝間状遺構、土坑、炭だまり、耕作痕等の生産にかかわる遺構群が検出されている。

試掘調査坑の一部はこの遺跡の範囲に位置し、この地区では 16 箇所の試掘調査を実施している。この地域は低まった地域で普天間飛行場建設の造成の影響は少ない。今回の試掘調査では遺跡範囲内で溝、階段状遺構、炭だまり等の遺構が検出されている。



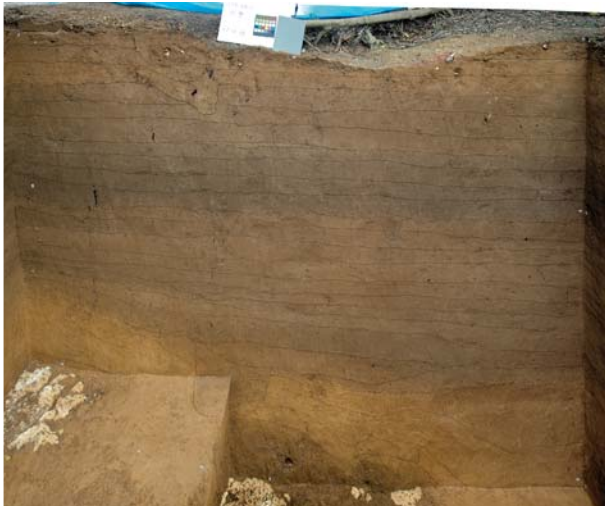
第 79 図 第 6 期試掘調査 第二地区

### フテ 5-110-ノ

上原の小字は濡原内で、上原濡原遺跡の東側の範囲外に位置する。ほとんど造成による影響はない。南壁・西壁の琉球石灰岩盤とマーシ層より旧地形は北西側に傾斜する地形である。地形分類図等から検討すると、幅広い谷が北東から南西方向にかけてあったものと推定され、本試掘坑は推定される谷中央部の南側に位置している。遺構は表層付近に溝状遺構と中位層から下位層にピットが確認されている。

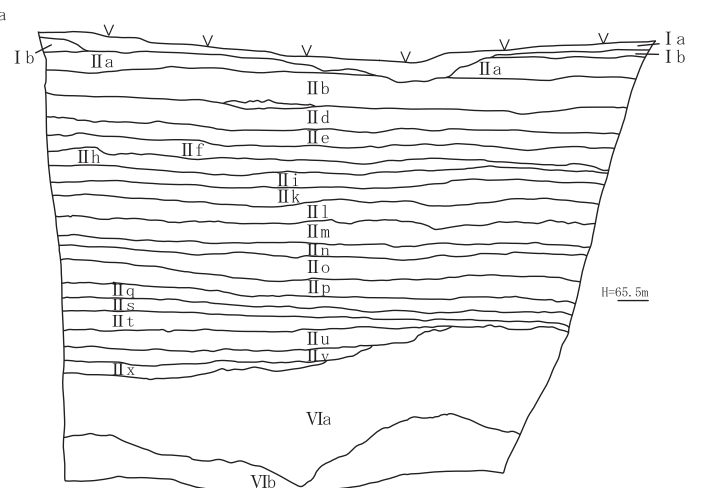
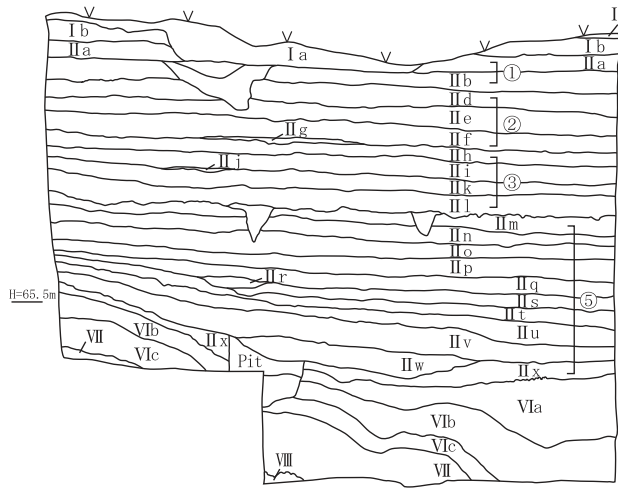
表面には南東から北西方向に溝が確認でき、また、南壁では表層の I b 層下面を切る形で溝が確認できる。地表下すぐの 10cm から近代相当の①層が約 20 cm の厚みで見られ、土壌は均質でマーシ粒はみられない。南壁の II b 層ではそれを切る形で溝がみられる。西壁には確認できないが、明治 36 年土地利用図では南側に水路があったことが窺え、水路角と重なることから、南壁 II b 層にみられる溝は土地利用図の水路跡と推定される。続いて約 40cm の厚さで②層が確認でき、焼土粒、マーシ粒、炭の混入が多い。③層は下位にいくほど暗褐色の色調が濃くなる。腐食が多く、マーシ粒、焼土等が混入する。II L 層と II m 層間是不整合で、II L 層下面からは断面が逆三角形のピットが検出される。これまでの調査状況などから鋤等の耕作具痕とおもわれる。③層以下は粘土質シルトで粘質がつよくなる。II s 層はラミナが確認でき、砂質シルトである。色調は褐色で、ここも下位にいくほど色調が濃くなる。基本層序の項目でも述べたが、「基地内 II」の第 4 期試掘調査では、この堆積層は④としたが、焼土・炭化物等が混ざらないため第 6 期では⑤層としている。II x 層の下面からは直径約 30 cm、深さ 20 cm のピットが検出している。ピット内はシルト質粘土である。断面は半円状になる。通常、この形状と敷地等から植栽痕と想定されるが、1 基しか確認していないため、他の性格等も考えられる。

層序全体はほぼ水平堆積の状況を呈しているが、マーシ直上の⑤層は東側では薄く堆積し、西側は厚く堆積する傾向があり谷地形を埋める形で堆積していった状況がみられ、ピットがマーシを掘り込んでいた状況もあり、周囲からの土砂が谷を埋めていく早い時期から人による開発等が行われており、それが、継続的に繰り返されて、③層の時期にも耕作等が行われて、ほぼ平坦になってくるものと推定され、②層、①層の時期には水路等の施設が新設されたものとおもわれる。



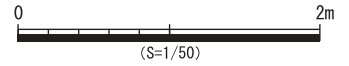
H=67.5m

H=67.5m



南壁断面

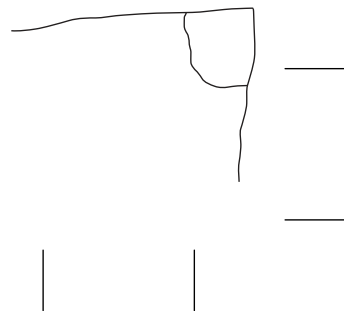
西壁断面



Y=27,102.5      Y=27,103.0

X=31,030.5

X=31,030.0

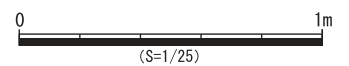


Pit 平面図

フテ5-I10-ノ

Pit断面

H=65.0m



第 80 図 各試掘坑断面図・平面図⑩フテ5-I10-ノ

### フテ 6-H2-イ

上原の小字は濡原内で、上原濡原遺跡の北西側の範囲内に位置する。東壁に基地造成跡がみられ、また、近年の排水路きり回し工事による掘り返した跡がみられる。東壁・南壁の琉球石灰岩盤とマージ層の傾斜等より旧地形は北北東側に傾斜する地形とみられ、本試掘坑は推定される谷中央部より南側に位置するものとおもわれる。

層序はフテ 5-I10-ノと似た状況であるが、①層はないが、③層が厚く堆積し、はほぼ平坦な堆積状況である。ピットは確認できなかったが、II g 層と II h 層の層間は不整合で、丹念に検討を重ねれば、ピットの検出も可能であったとおもわれる。⑤層は薄く、北へ若干傾斜し、北側へいくほど厚く堆積傾向である。

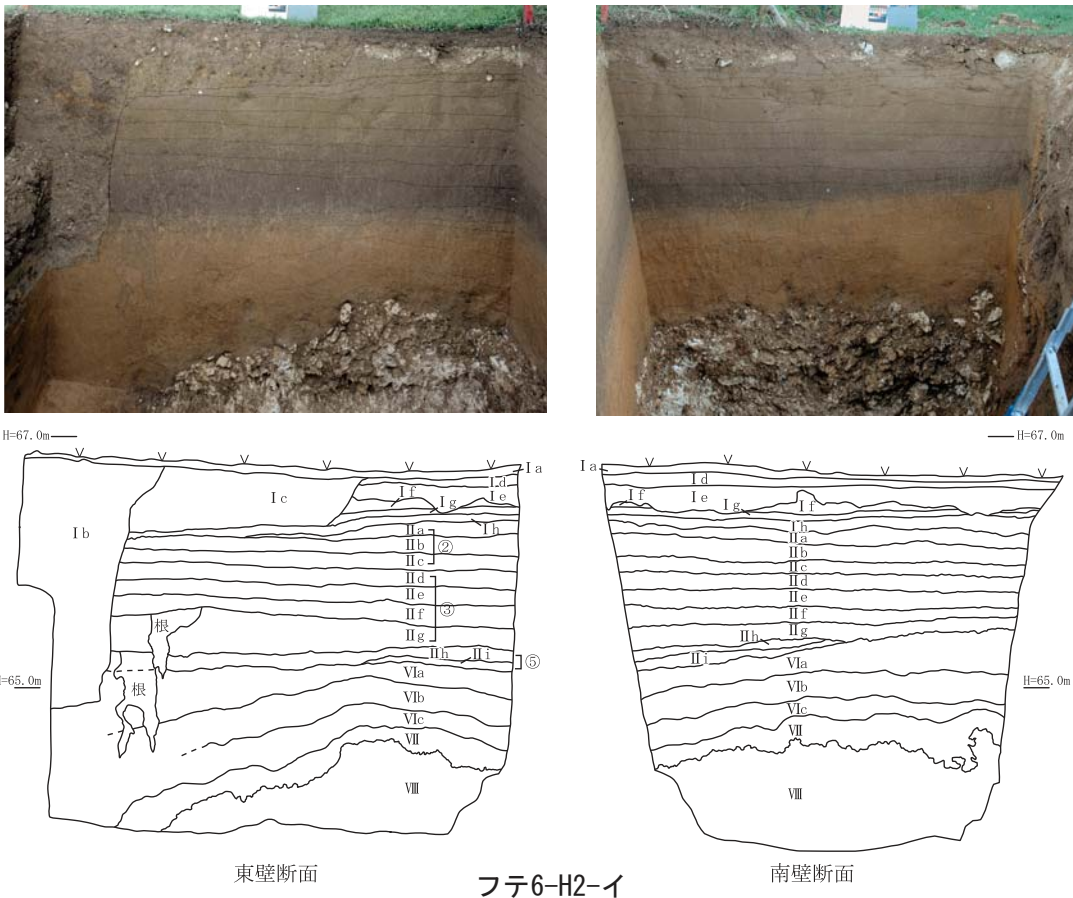
### フテ 6-H3-ア

上原の小字は濡原内で、上原濡原遺跡の北西側の範囲内に位置する。造成による影響はほとんどない。東壁・南壁の琉球石灰岩盤とマージ層より旧地形は東側に若干傾斜する地形とみられる。本試掘坑は推定される谷中央部のほぼ北に位置するものとおもわれる。

層序はフテ 6-H2-イと似た状況である。①層は確認でき、東壁の②層 II f 層下面より II g 層を切り半円状のピットが確認できる。③層は暗褐色で、II g 層はマージが多く混入している。はほぼ平坦な堆積状況である。北壁でマージを削平する形で⑤層が堆積しており、造成が行われた可能性が示唆される。

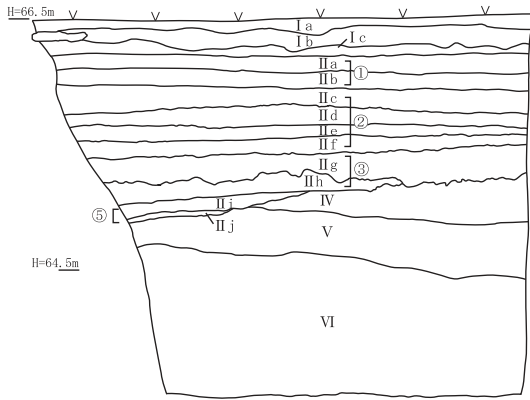
### フテ 6-I2-ウ

上原の小字は濡原内で、上原濡原遺跡の西側の範囲内に位置する。造成による影響はほとんどない。西壁・北壁の琉球石灰岩盤とマージ層より旧地形は北西側に若干傾斜する地形とみられる。本試掘坑は推定される谷中央部の南に位置するものとおもわれる。

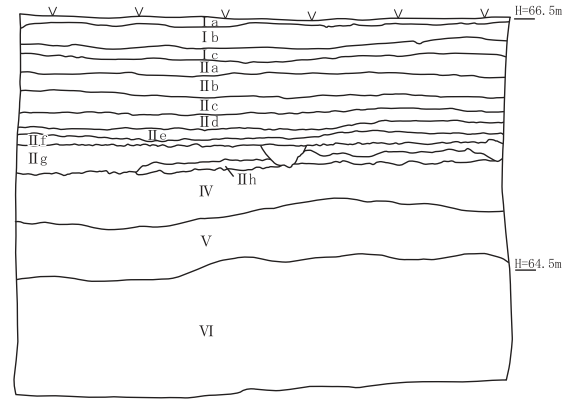


第 81 図 各試掘坑断面図①① フテ 6-H2-イ

0 2m  
(S=1/60)

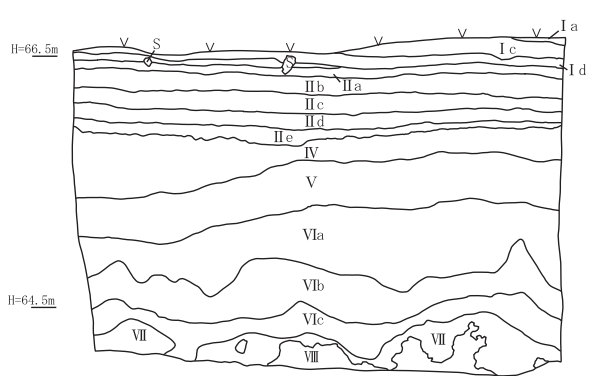


北壁断面



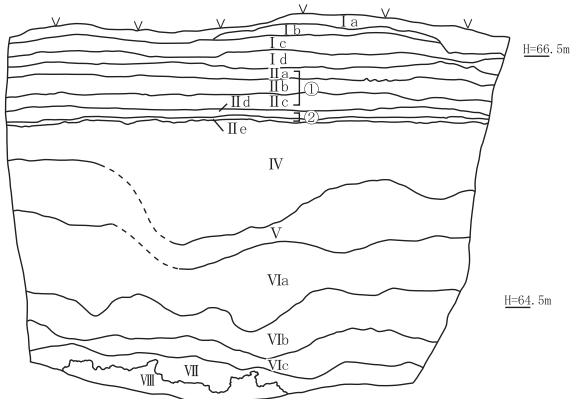
東壁断面

フテ6-H3-ア



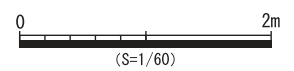
西壁断面

フテ6-I2-ウ



北壁断面

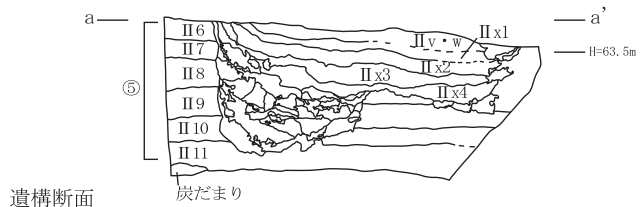
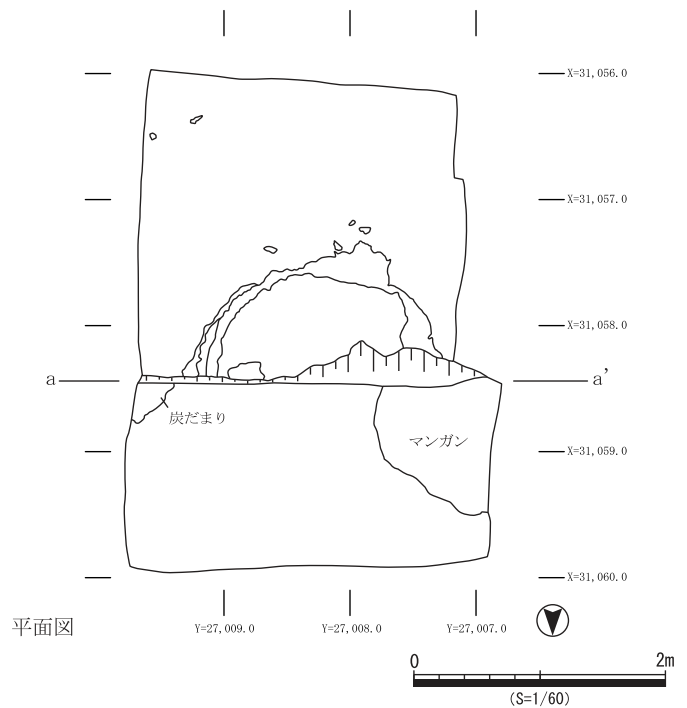
第 82 図 各試掘坑断面図⑫ フテ 6-H3-ア・フテ 6-I2-ウ



フテ6-14-ア

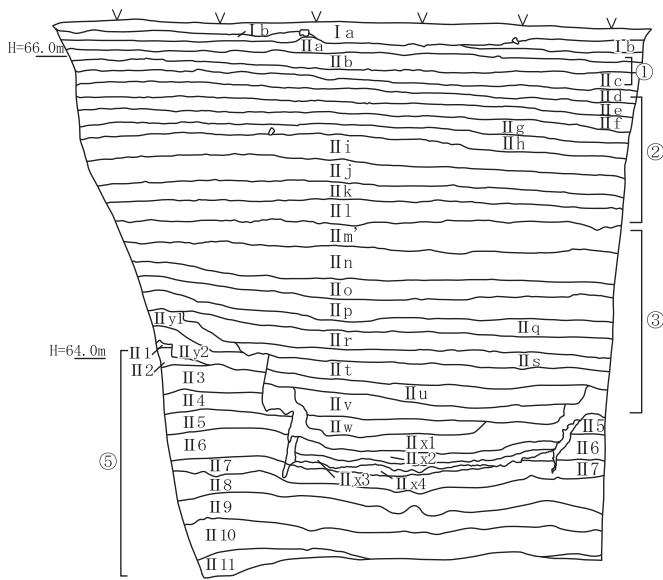
上原の小字濡原内で、上原濡原遺跡の範囲内の中央部に位置する。全周囲の壁面に琉球石灰岩盤及びマー  
ジ層ともに露出していない。試掘坑は上原濡原遺跡の推定される谷中央部に位置するものとおもわれる。本  
試掘坑から遺構は性格が不明な階段状遺構とその下位層より炭だまりが検出されている。

表層は飛行場建設の造成層で、20 cmほどの厚みである。①層はシルト質砂で厚さは約 30cm を測る。②  
層は 1 m 程の厚さで堆積し、上層は①の影響もあって砂混じりであるが、基本的には粘土質シルトである。  
II i 層は細かい空隙があり、下層の II k・1 層はしまっている。②層下面の II l 層と③層上面の II m 層間  
は不整合である。③層は 1.5 m ほど厚く堆積している。腐食が多く、粘土質シルトである。本層では南壁 II n'  
層から⑤層を掘り込む形で、断面が階段状の土坑が検出されている。平面は試掘坑を飛び出し、正確な形、  
規模ともに不明であるが、II u 層のレベルの平面図から楕円ないしは円形に近いものと推察される。深さは  
約 1.2 m を測る。段は 4 段あり、南側 1 段目、2 段目上面の幅は 1 m から 2 m と広く、3 段目、4 段目間  
は 20cm ほどの幅で狭く、段の高さは約 15 から 25 cm である。段と段の内側角の各所には板をはめたか植  
物根痕か不明な痕跡がみられる。遺構底面は北壁では鍋底状であるが、遺構断面では半円状となっている。  
何度か掘り込んだ痕がみられ、長い期間使用されていることが窺える。③層は全体的に暗褐色土であるが、  
階段状遺構の下位層は更に黒くなる。層序は続いて⑤層があり、黄褐色で粘土質シルトで③層より粘質が強  
くなる。この⑤層の II 11 層下面より炭だまりも検出されている。試掘坑隅で検出されているため、形・規  
模ともに不明である。

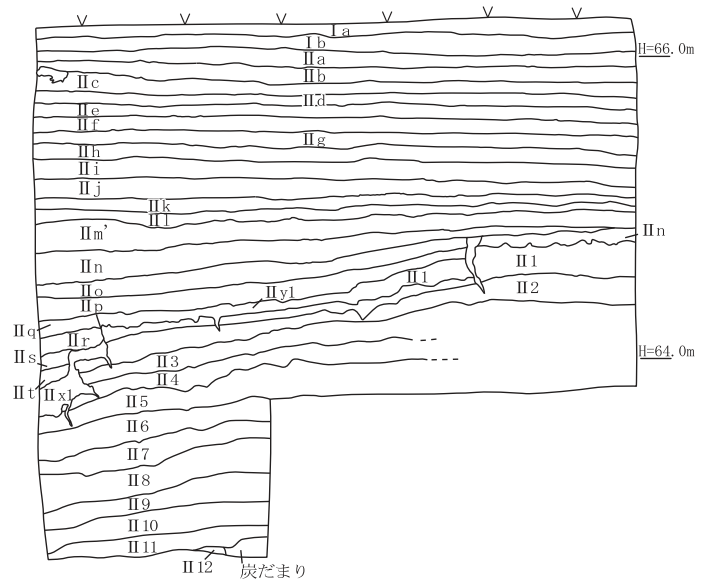


フテ6-14-ア  
(遺構断面・平面)

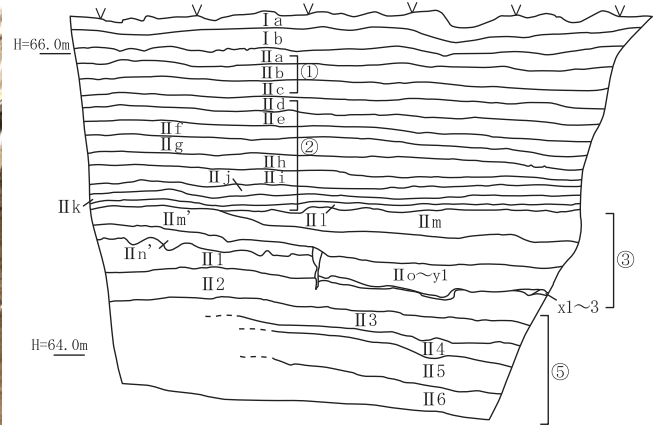
第 83 図 各試掘坑断面図・平面図⑬ フテ 6-14-ア (遺構断面・平面)



北壁断面



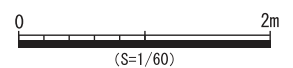
東壁断面



南壁断面

フテ 6-14-ア  
(北・東・南)

第 84 図 各試掘坑断面図⑭ フテ 6-14-ア (北・東・南)



フテ 6-15-イ

上原の小字は濡原内で、上原濡原遺跡のほぼ中央に位置する。北壁・東壁の琉球石灰岩盤とマーヅ層より旧地形は平坦な地形とみられる。

層序は I 層が約 80cm 堆積し、①である II a 層もみられる。ほぼ水平な堆積である。

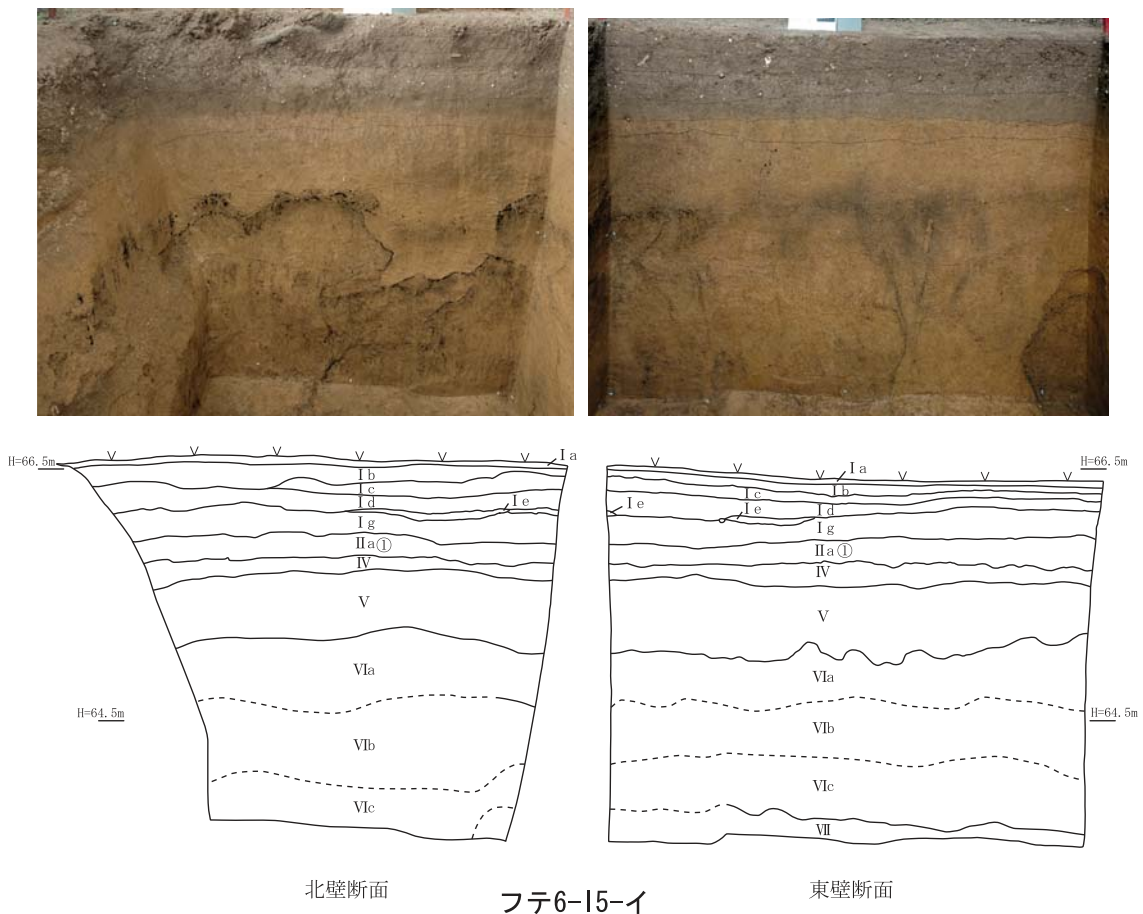
フテ 6-16-カ

上原の小字は濡原内で、上原濡原遺跡のほぼ中央に位置する。北壁・東壁の琉球石灰岩盤とマーヅ層より旧地形は平坦な地形とみられる。層序は I 層のみが堆積する。

フテ 6-J4-ア

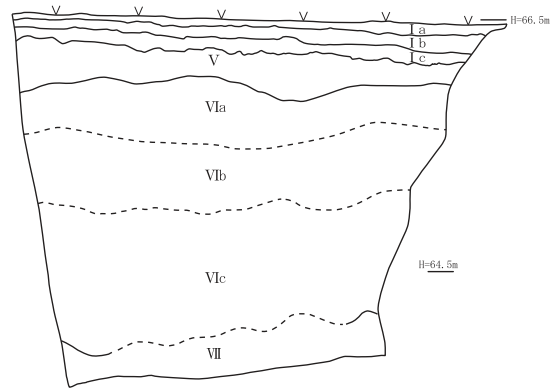
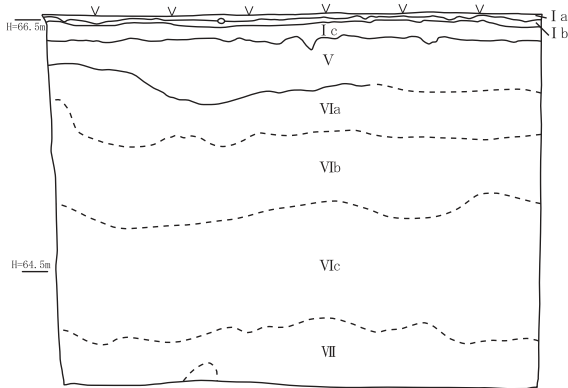
上原の小字濡原内で、上原濡原遺跡のほぼ中央に位置する。北壁・東壁の琉球石灰岩盤とマーヅ層より旧地形は北西側に傾斜する地形とみられる。

層序は第二地区の基本層序である。戦後の I 層はもちろん、II 層である①層から⑤層がみられる。層序全体はほぼ水平に堆積している。③層内とその前後の層序は不整合で、II i 層の下面より図版 13 に示した砂岩製とおもわれる石皿が出土している。



第 85 図 各試掘坑断面図⑮ フテ 6-15-イ

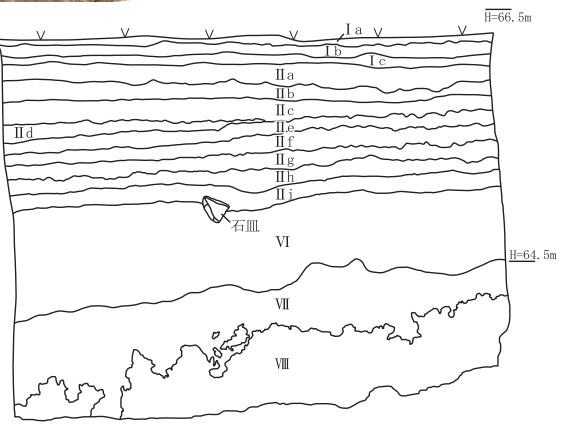
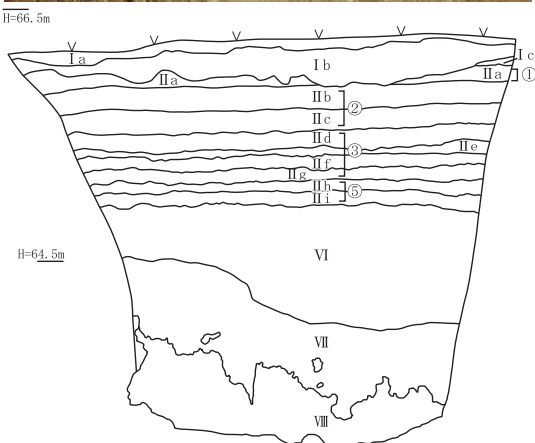




北壁断面

フテ6-I6-カ

東壁断面

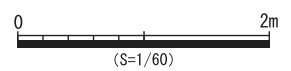


北壁断面

フテ6-J4-ア

東壁断面

第 86 図 各試掘坑断面図⑩ フテ 6-I6-カ・フテ 6-J4-ア



### フテ6-J5-ア

上原の小字濡原内で、上原濡原遺跡のほぼ中央に位置する。3 m以上掘削したが、両壁面ともに琉球石灰岩盤とマーヅ層にも到達できず、旧地形を推定することはできないが、上原濡原遺跡の推定される谷地形の中央部に位置するものとおもわれる。

層序はブルーシートが確認でき、近年に攪乱された埋土が大半で、送油間敷設ラインが近いため、1992年の本発掘調査した跡とも考えられる。北壁東側と東壁に⑤層のみがみられ、その上位層である①、②、③は確認できない。⑤層はフテ6-I4-アの⑤と同一で、粘土質シルトである。全体的に黄褐色土で下位層は若干褐色がかり、炭化物や焼土粒などはみられない。試掘坑最下層のⅡm層からは図版12に示した貝塚時代中期とおもわれる土器が10数点出土している。

### フテ6-J7-イ

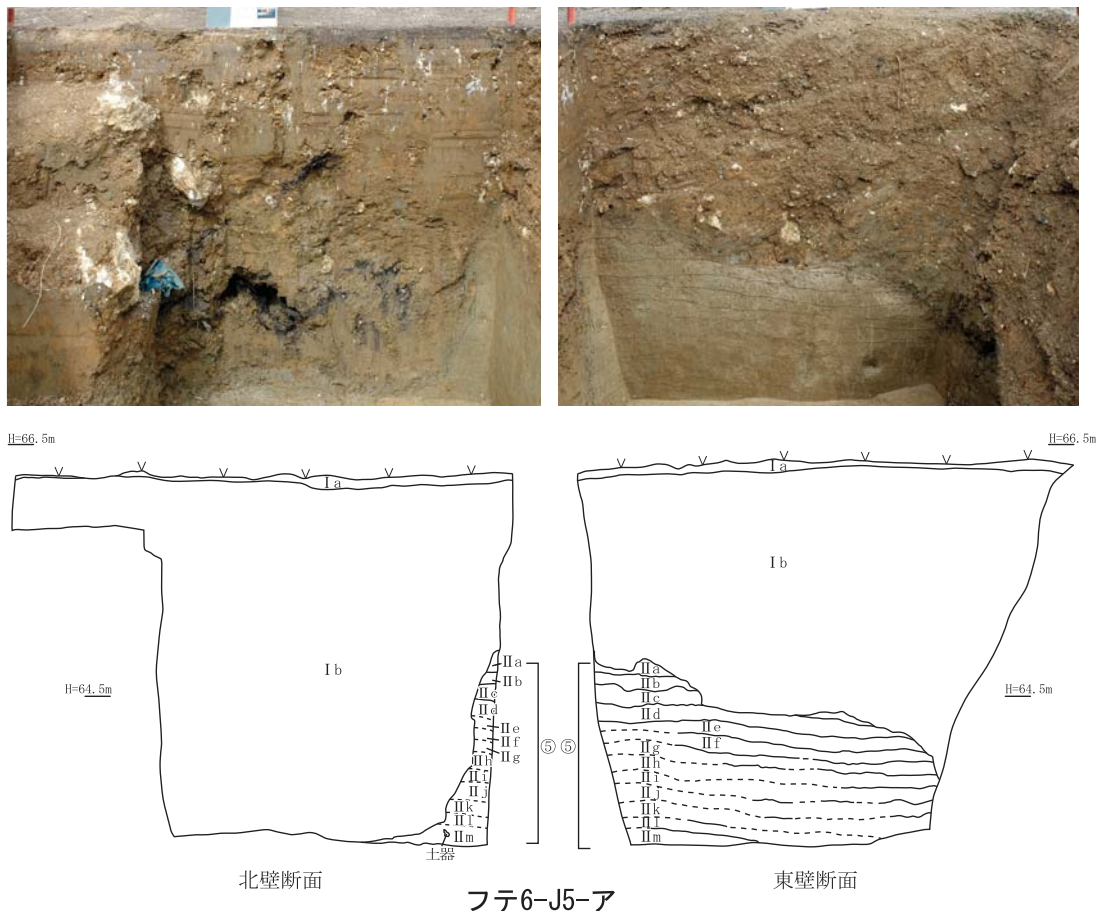
上原の小字濡原内で、上原濡原遺跡の西側に位置する。両壁面の琉球石灰岩盤とマーヅ層より、旧地形はほぼ平坦である。

層序はⅠ層が約40cmあり、①層、②層も堆積している。東壁に北側は傾斜があり南側は緩やかに立ち上がる溝が確認でき、北壁では中央に窪んだ層序もみられる。明治36年の土地利用図中の里道が付近にみられることから、里道脇の側溝である可能性がある。

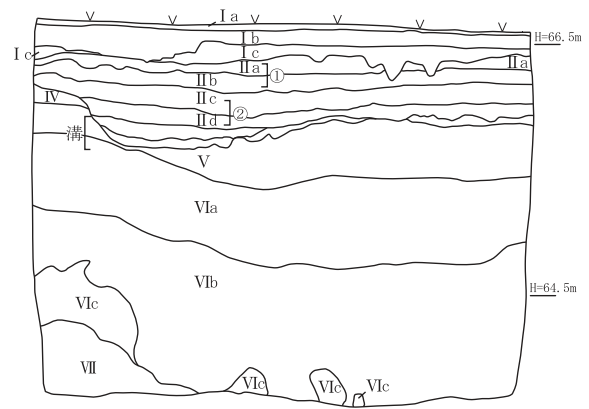
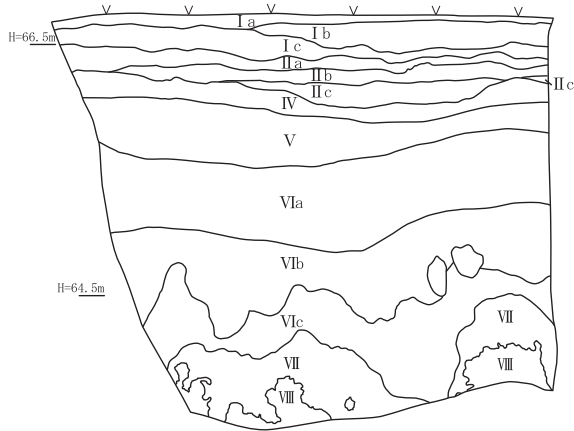
### フテ6-J8-ア

上原の小字濡原内で、上原濡原遺跡の西側に位置する。両壁面の琉球石灰岩盤とマーヅ層より、旧地形はほぼ平坦である。

層序はⅠ層のみが堆積し、北壁西側には植栽用の土坑がみられる。東壁の南側には溝状遺構が急な立ち上がりでみられる。溝状遺構は明治36年の土地利用図中の里道と水路の場所に試掘坑が重なっており、里道脇の排水路である可能性がある。



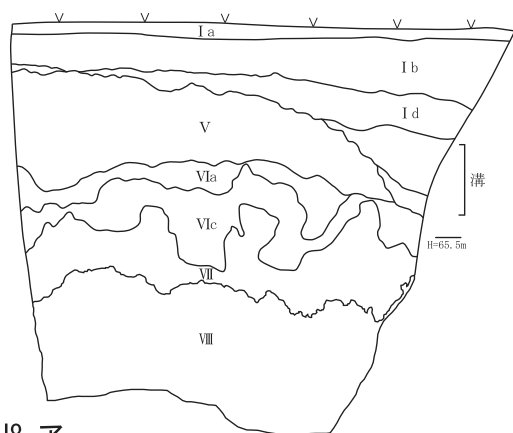
第 87 図 各試掘坑断面図①② フテ6-J5-ア



北壁断面

フテ6-J7-イ

東壁断面

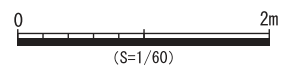


北壁断面

フテ6-J8-ア

東壁断面

第 88 図 各試掘坑断面図⑱ フテ 6-J7-イ・フテ 6-J8-ア

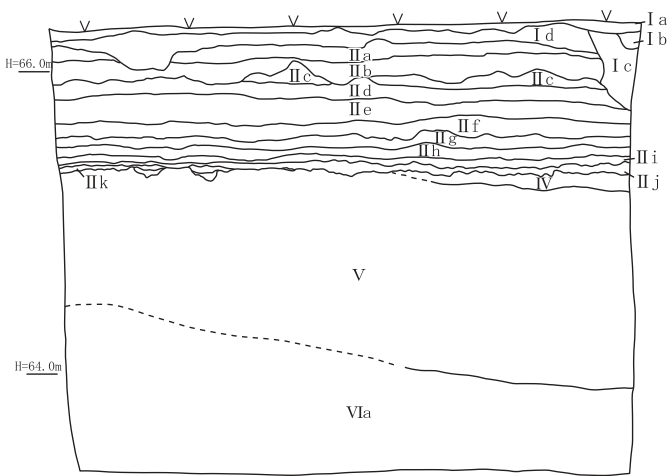


フテ 6-J6-ア

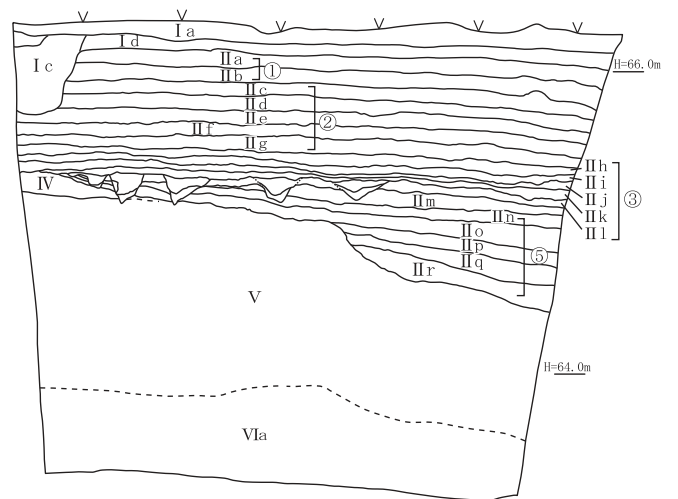
上原の小字濡原内で、上原濡原遺跡の中央部に位置する。琉球石灰岩盤は露出してない。壁面のマージ層より、旧地形は南東側へ傾斜するものとおもわれる。

本試掘坑からは不定形なピット群が検出されている。

表層は飛行場建設の造成層で、20 cmほどの厚みである。上原濡原遺跡に共通している①層、②層、③層、⑤層ともに確認できる。①層は厚さは約 20cm を測る。北壁、東壁に溝らしきものがみられるが、近年に掘削したものである。②層は 60 cm 程の厚さで堆積し、層間は若干不整合で、②層下面の II g 層と③層上面の II i 層間は上位層間より不整合である。③層は約 30 cm の厚さがあり、黒ないしは暗褐色土であるが、下層は赤褐色がかかる。II j 層下面より断面が逆三角形のピットが多く検出される。深さは 20 cm を測るものもあり、深い。また、ピット内は 2 層に分層できる。平面形は三角形であったり、楕円で細長いものと不定形である。北西から南東方向に並ぶ傾向がみられる。これまでの調査状況などから、鋤等の耕作痕とおもわれる。⑤層は北壁、南壁では水平方向に堆積しているが、東、西壁では北側へ傾斜を伴って堆積する。北側に厚く堆積する傾向がみられる。東壁ではマージ層である V 層を掘り込むような堆積である。



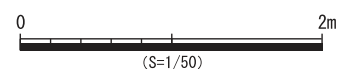
北壁断面

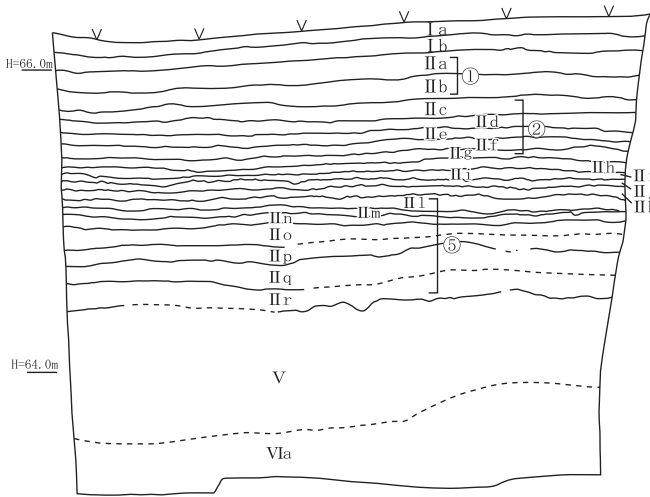


東壁断面

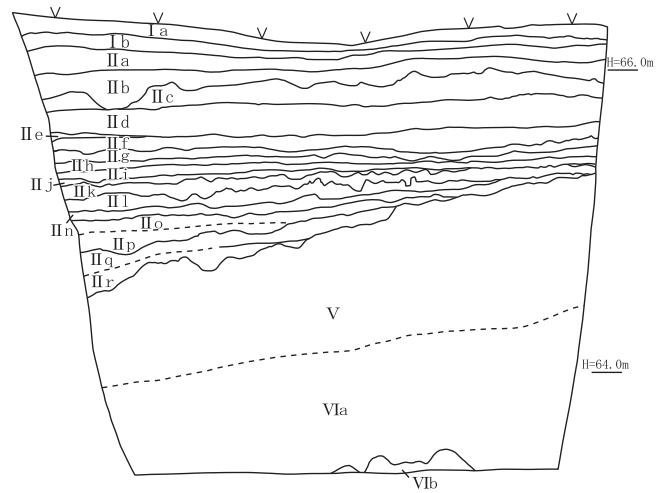
フテ6-J6-ア  
(北・東)

第 89 図 各試掘坑断面図⑨ フテ 6-J6-ア (北・東)

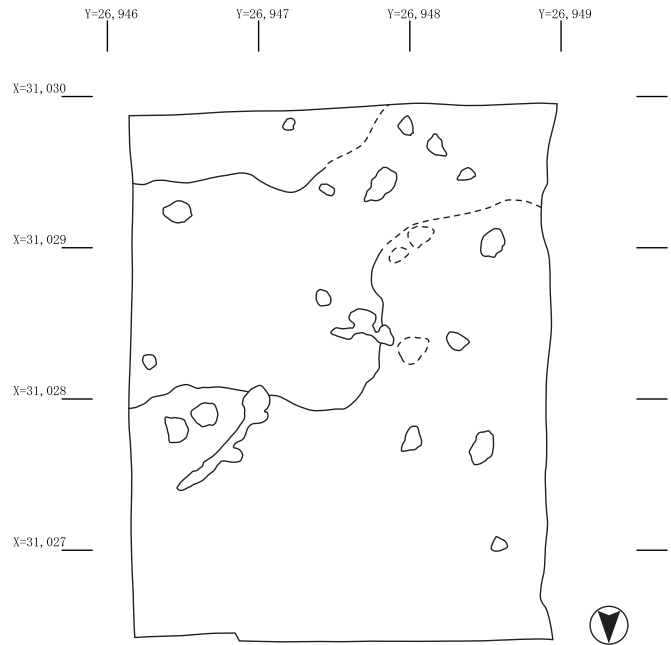




南壁断面



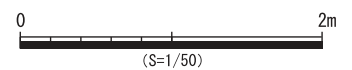
西壁断面



平面図

フテ6-J6-ア  
(南・西・平面)

第90図 各試掘坑断面図・平面図②⑩ フテ6-J6-ア (南・西・平面)



フテ6-J1-ナ・フテ6-J2-ア・フテ6-J2-オ

いずれも上原の小字濡原内で、標高70mから71mの若干高まった丘陵上に位置する。図版の試掘状況でも確認できるように基地建設の米軍による造成土が確認できる。試掘調査箇所が3箇所とも近傍にあることから丘陵全体が造成層であろう。



フテ6-J1-ナ



フテ6-J2-ア



フテ6-J2-オ



第91図 各試掘坑②フテ6-J1-ナ・フテ6-J2-ア・フテ6-J2-オ

第14表 第6期試掘調査データ一覧a

グリッド名	規格 (m) 4	座標			調査 壁面	深度 (cm)	層及び層厚 ( )は層厚、単位はcm	マンガン変	検出基盤層 石灰岩	遺構・遺物・その他
		x	y	z						
フテ5-H3-ナ	○	31060	27340	74.633	南・東	280	I a0~-10(10)・I b南壁右-13~-31(18) I c-10~-58(48)・I d南壁中央-35~-59(24) I e-58~-80(22)、V-80~-95(15) VIa-95~-123(28)・VIb-123~-170(47) VIc-170~-269(99) VII-269~-272(3)、VIII-272~		○	
		31064	27340							
		31064	27336							
		31060	27336							
フテ5-14-ア	○	31060	27310	74.050	北・東	297	I a0~-9(9)・I b-9~-57(48)・I c-57~-77(20) II a南壁左-54~-56(2)、III-77~-112(35) IV-112~-190(78)、V-190~ VIa東壁右-246~-286(40)・VIb-286~			ユニット ① II a層
		31060	27306							
		31056	27306							
		31056	27310							
フテ5-16-ア	○	31060	27250	72.726	北・東	139	I a0~-7(7)・I b-7~-36(29) VIa東壁中央-15~-31(16)・VIb-36~-41(5) VIc-41~-73(32)、VII-73~-83(10)、VIII-83~		○	
		31060	27246							
		31056	27246							
		31056	27250							
フテ5-16-ソ	○	31048	27220	72.612	北・西	208	I a0~-6(6)・I b-6~-38(32)・I c-38~-96(58) II a北壁中央-82~-88(6)、Pit1北壁中央-88~-94(6) VIa-96~-98(2)・VIb-98~-155(57)・VIc-155~-190(35) VII-190~-206(16)、VIII-206~		○	II a層~柱穴3基 ユニット ① II a層
		31044	27220							
		31044	27224							
		31048	27224							
フテ5-110-ノ	○	31030	27100	67.247	南・西	296	I a0~-3(3)・I b-3~-13(10)、II a-13~-25(12) Pit1a南壁中央-20~-31(11)・b南壁中央-22~-52(30) II b-25~-40(15)・II d-40~-56(16)・II e-56~-68(12) II f-68~-79(11)・II g南壁中央-66~-72(6) II h-79~-88(9)・II i-88~-100(12) II j南壁中央-88~-91(3)・II k-100~-108(8) II l-108~-121(13)、Pit2南壁中央-115~-139(24) Pit3-118~-135(17)、II m-121~-134(13) II n-134~-141(7)・II o-141~-150(9) II p-150~-165(15)・II q-165~-174(9) II r南壁中央-160~-168(8)・II s-174~-184(10) II t-184~-197(13)・II u-197~-207(10) II v-207~-217(10)・II w南壁中央-210~-228(18) Pit4a南壁中央-202~-225(23)・b南壁中央-228~-249(21) II x-217~-225(8)・VIa-225~-267(42)・VIb-267~ VIc南壁中央-251~-266(15) VII南壁中央-250~-290(40) VIII南壁中央-290~		○	II層~耕作具痕 II v層~耕作具痕 ユニット ① II a~b層 ② II d~g層 ③ II h~l層 ⑤ m~x層
		31030	27104							
		31034	27104							
		31034	27100							
フテ5-J5-ア	○	31030	27280	73.935	北・東	197	I a0~-11(11)・I b-11~-57(46)・I c-57~-72(15) I d-72~-85(13)、II a-85~-97(12) V 東壁右-65~-74(9)、VIa-97~-105(8) VIb-105~-131(26)・VIc-131~-165(34) VII-165~-172(7)、VIII-172~		○	ユニット ① II a層
		31030	27276							
		31026	27276							
		31026	27280							
フテ5-J6-コ	○	31018	27220	73.139	南・西	296	I a0~-11(11)・I b-11~-48(37)・I c-48~-57(9) I d-57~-67(10)・I g西壁右-76~-95、II a-67~-78(11) II b-78~-82(4)・II c-82~-88(6)、IV-88~-134(46) V-134~-171(37)、VIa-171~-193(22) VIb-193~-260(67)・VIc-260~、VII南壁右-277~ VIII南壁右-282~		○	I層~溝状遺構 ② II d層~溝状遺構 ①、③ ユニット ① II a~c層
		31018	27224							
		31022	27224							
		31022	27220							
フテ5-J9-サ	○	31012	27160	72.380	南・東	306	I a0~-14(14)・I b-14~-32(18)・I c-32~-230(198) I d-230~-276(46)・I e-276~			
		31016	27160							
		31016	27156							
		31012	27156							
フテ6-H2-イ	○	31090	27064	66.846	南・東	244	I a0~-8(8)・I b東壁左-2~-200(198) I c東壁中央-8~-61(53)・I d-8~-16(8) I e-16~-34(18)・I f東壁中央-25~-37(12) I g-34~-40(6)・I h-40~-45(5)、II a-45~-55(10) II b-55~-73(18)・II c-73~-85(12)・II d-85~-100(15) II e-100~-111(11)・II f-111~-130(19) II g-130~-148(18)・II h-148~-157(9) II i-157~-164(7)、VIa-164~-187(23) VIb-187~-208(21)・VIc-208~-227(19) VII-277~-243(16)、VIII-243~		○	ユニット ② II a~c層 ③ II d~g層 ⑤ II h~i層
		31090	27060							
		31086	27060							
		31086	27064							

第15表 第6期試掘調査データ一覧b

グリッド名	規格 (m) 4	座標			調査 壁面	深度 (cm)	層及び層厚 ( )は層厚、単位はcm	マンガン変	検出基盤層 石灰岩	遺構・遺物・その他
		x	y	z						
フテ6-H3-ア	○	31090	27040	66.510	北・東	302	I a0~-12(12)・I b-12~-24(12)・I c-24~-32(8) II a-32~-47(15)・II b-47~-61(14)・II c-61~-79(18) II d-79~-91(12)・II e-91~-96(5)・II f-96~-104(8) II g-104~-126(22)・II h北壁左-133~-151(18) II i北壁左-151~-162(11)・II j北壁左-162~-164(2) IV-126~-165(39)、V-165~-210(45)、VI-210~	○		II f~Pit ユニット ① II a~b層 ② II c~d層 ③ II g~h層 ⑤ II i~j層
		31090	27036							
		31086	27036							
		31086	27040							
フテ6-12-ウ	○	31060	27052	66.597	北・西	257	I a0~-5(5)・I b北壁中央-8~-18(10)・I c-16~-24(8) II a-24~-32(8)・II b-32~-48(16)・II c-48~-59(11) II d-59~-68(9)・II e-68~-70(2)、IV-70~-97(27) V-97~-138(41)、VIa-138~-201(63) VIb-201~-225(24)・VIc-225~-249(24)、VII-249~ VIII北壁中央-257~	○		ユニット ① II a~c層 ② II d~e層
		31056	27052							
		31056	27056							
		31060	27056							
フテ6-13-ア	○	31060	27040	66.375	北・東	264	I a0~-7(7)・I b7~-13(6)・I c東壁右-23~-28(5) I d-13~-23(10)、II a-23~-40(17)・II b-40~-57(17) II c-57~-72(15)・II d-72~-79(7)・II e-79~-85(6) II f-85~-97(12)・II g-97~-105(8)、V-105~-129(24) VIa-129~-172(43)・VIb-172~-190(18) VII-190~-192(2)、VIII-192~	○		ユニット ① II a~c層 ② II d~e層 ③ II f~g層
		31060	27036							
		31056	27036							
		31056	27040							
フテ6-14-ア	○	31060	27010	66.284	北・東	351	I a0~-7(7)・I b7~-15(8)、II a-15~-22(7) II b-22~-29(7)・II c-29~-41(12)・II d-41~-49(8) II e-49~-58(9)・II f-58~-69(11)・II g-69~-76(7) II h-76~-86(10)・II i-86~-99(13)・II j-99~-112(13) II k-112~-120(8)・II l-120~-130(10) II m'-130~-149(19)・II n-149~-170(21) II n'東壁右-131~-140(9)・II o-170~-179(9) II o~y1南壁右-166~-183(17)・II p-179~-195(16) II q-195~-206(11)・II r-206~-219(13) II s-219~-228(9)・II t-228~-240(12) II u北壁中央-234~-248(14) II v北壁中央-241~-257(16) II w北壁中央-256~-268(12)・II x1-239~-258(19) II x2北壁中央-268~-270(2) II x3北壁中央-279~-285(6) II x4北壁中央-287~-294(7) II y1北壁左-186~-196(10) II y2北壁左-196~-207(11)・II 1北壁左-206~-210(4) II 2北壁左-210~-222(12)・II 3北壁左-222~-240(18) II 4北壁左-240~-253(13)・II 5-258~-268(10) II 6-268~-285(17)・II 7-285~-294(9) II 8-294~-318(24)・II 9-318~-339(21) II 10-339~-345(6)・II 11-345~・II 12東壁中央-343~			I n層~ 階段状遺構 II 11層~炭溜り ユニット ① II a~c層 ② II d~l層 ③ II m'~II y2層 ⑤ II 1~11層
		31060	27006							
		31056	27006							
		31056	27010							
フテ6-15-イ	○	31060	26974	66.520	北・東	298	I a0~-3(3)・I b-3~-8(5)・I c-8~-19(11) I d-19~-35(16)・I e-35~-40(5)・I g-40~-62(22) II a-62~-78(16)、IV-78~-90(12)、V-90~-149(59) VIa-149~-192(43)・VIb-192~-237(45) VIc-237~-272(35)、VII-272~	○		ユニット ① II a層
		31060	26970							
		31056	26970							
		31056	26974							
フテ6-16-カ	○	31054	26950	66.539	北・東	296	I a0~-5(5)・I b-5~-10(5)・I c-10~-21(11) V-21~-62(41)、VIa-62~-95(33)・VIb-95~-150(55) VIc-150~-258(108)、VII-258~	○		
		31054	26946							
		31050	26946							
		31050	26950							
フテ6-J1-ナ	○	31000	27100	72.114	南・東	300	I a(壁面崩壊の為調査中止)			
		31004	27100							
		31004	27096							
		31000	27096							
フテ6-J2-ア	○	31030	27070	71.050	北・東	300	I a・I b・I c・I c'(壁面崩壊の為調査中止)			
		31030	27066							
		31026	27066							
		31026	27070							
フテ6-J2-オ	○	31030	27040	70.139	北・西	300	I a・I b・I c・I d・I e・I f・I g・I h (壁面崩壊の為調査中止)			
		31026	27040							
		31026	27044							
		31030	27044							



第16表 第6期試掘調査データ一覧c

グリッド名	規格 (m) 4	座標			調査 壁面	深度 (cm)	層及び層厚 ( )は層厚、単位はcm	マンガン変	検出基盤層 石灰岩	遺構・遺物・その他
		x	y	z						
フテ6-J4-ア	○	31030	27010	66.175	北・東	300	I a0～-4(4)・I b-4～-13(9)・I c-13～-20(7) II a-20～-34(14)・II b-34～-50(16)・II c-50～-68(18) II d-68～-82(14)・II e-82～-92(10)・II f-92～-100(8) II g-100～-112(12)・II h-112～-125(13) II i-125～-138(13)、VI-138～-226(88) VII-226～-290(65)、VIII-290～		○	II i層より石皿 ユニット ① II a層 ② II b～c層 ③ II d～g層 ⑤ II h～i層
		31030	27006							
		31026	27006							
		31026	27010							
フテ6-J5-ア	○	31030	26980	66.273	北・東	295	I a0～-5(5)・I b-5～-141(136)、II a-141～-158(17) II b-158～-167(9)・II c-167～-181(14) II d-181～-196(15)・II e-196～-205(9)・II f-205-214(9) II g-214～224(10)・II h-224～-238(14) II i-238～-247(9)・II j-247～-261(14) II k-261～-273(12)・II l-273～-282(9)・II m-282～		○	II m層 土器胴部片 20数点 (貝塚中期) ユニット ⑤ II a～m層
		31030	26976							
		31026	26976							
		31026	26980							
フテ6-J6-ア	○	31030	26950	66.323	北・東	298	I a0～-5(5)・I b-5～-16(11)・I c-16～-58(42) I d東壁右-20～-32(12)、II a東壁右-33～-45(12) II b東壁右-45～-58(13)・II c東壁右-58～-65(7) II d東壁右-65～-72(7)・II e-58～-66(8)・II f-66～-74(8) II g-74～-81(7)・II h-81～-87(6)・II i-87～-92(5) II j-92～-100(8)・II k東壁右-100～-115(15) II l東壁右-115～-119(4)・II m東壁右-119～-124(5) II n東壁右-124～-134(10)・II o東壁右-134～-149(15) II p東壁右-149～-162(13)・II q東壁右-162～-172(10) II r東壁右-172～-190(18)、IV-100～-112(12) V-112～-242(130)、VIa-242～・VIb西壁中央-288～		○	II k層～ Pit(クワ跡)多数 ユニット ① II a～b層 ② II c～g層 ③ II h～i層 ⑤ II n～r層
		31030	26946							
		31026	26946							
		31026	26950							
フテ6-J7-イ	○	31030	26914	66.693	北・東	297	I a0～-5(5)・I b-5～-23(18)・I c-23～-33(10) II a-33～-37(4)・II b-37～-46(9)・II c-46～-52(6) II d東壁右-68～-77(9)、IV-52～-67(15) V-67～-92(25)、VIa-92～-149(57)・VIb-149～-205(56) IVc-205～-245(40)、VII-245～、VIII北壁中央-256～		○	II d層～溝状遺構 II c層 沖縄産陶器 ユニット ① II a～b層 ② II c～d層
		31030	26910							
		31026	26910							
		31026	26914							
フテ6-J8-ア	○	31030	26890	67.177	北・東	299	I a0～-8(8)・I b-8～-32(24)・I c北壁左-38～-67(29) I d-32～-38(6)、V-38～-113(55) VIa-113～-149(36)・VIb北壁中央-110～-142(36) VIc-149～-182(33)、VII-182～-223(41)、VIII-223～		○	I d層～溝状遺構 I d層 沖縄産無釉陶器
		31030	26886							
		31026	26886							
		31026	26890							
フテ11-A5-オ	○	31000	27250	73.668	北・西	228	I a0～-6(6)・I b-6～-22(16)・I c-22～-35(13) I d-35～-52(17)・I e-52～-69(17)・I f-69～-91(22) I g北壁右-96～-113(17)・I h-91～-113(22) VIb-113～-168(55)・VIc-168～-184(16) VII-184～217(33) VIII-217～		○	I b層～瓦 I h層～溝状遺構
		30996	27250							
		30996	27254							
		31000	27254							
フテ11-A6-コ	○	30994	27220	73.276	北・西	296	I a0～-13(13)・I b-13～-77(64)・I c-77～-112(35) I d-112～-138(26)、V-138～-190(52) VIa-190～-240(50)・VIb-240～-272(32) VIc-272～-288(16)、VII-288～-294(6)、VIII-294～		○	I c層～溝状遺構 攪乱層 本土産磁器 徳利
		30990	27220							
		30990	27224							
		30994	27224							
フテ11-A7-オ	○	31000	27196	73.000	北・東	256	I a0～-6(6)・I b-6～-94(88)・I c北壁左-99～-108(9) I d-94～-99(5)・I e-99～-112(13) I f北壁左-127～-136(9)・I g-112～-123(11) I h-123～-131(8)・I i-131～-138(7) I j-138～-158(20)・I k北壁左-167～-172(5) I l北壁左-172～-179(7)・I m北壁左-179～-189(10) I n北壁左-189～-202(13)・I o北壁左-202～-209(7) II a-158～-165(7)・II b-165～-172(7) VIb-172～-209(37)・VIc-209～-249(40)、VII-249～ VIII北壁中央-233～		○	ユニット ① II a～b層
		31000	27192							
		30996	27192							
		30996	27196							

### 第3節 自然科学分析の成果

#### [1] 目的と分析手法の選択

第6期調査範囲は、東側を新城古集落、西側を上原濡原遺跡の範囲内にある。特に、上原濡原遺跡の範囲内に属する調査トレンチでは、階段状のような状況を呈する遺構や谷を埋めるマージの再堆積などが確認出来、縄文晩期頃とされる仲原式土器などが出土している。自然科学分析では、フテ6-I4-Aとフテ6-J5-Aを対象とし、遺構・堆積層の年代観、古環境、土壌特性に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、花粉分析・微粒炭分析、微細物分析、土壌理化学分析を実施した。

分析試料は、フテ6-I4-Aおよびフテ6-J5-Aの2地点より採取されている。フテ6-I4-Aは、I層、II層からなり、II層が厚く堆積して、マージ、石灰岩は確認出来ない。II層は上位より多数の分層がなされ、階段状の遺構の様を呈する堆積物が認められる。その下位には、黄褐色を呈する土層があり、谷埋め堆積物の本体と考えられ、その構造からマージの再堆積層と推測されている。トレンチ最下部から、炭溜まりが認められた。

分析に用いる土壌試料は、西壁下部のマージ再堆積と思われる土層、南壁の階段状遺構を挟んだ覆土より採取したブロック(50×15×15cm程度)を選択した。また、炭化物試料は、試料は、トレンチ最下部の炭溜まり、壁面中部に認められる階段状遺構様の覆土等より採取されている。

フテ6-J5-Aは、I層、II層に分層されており、I層は整地層及び前回の調査における埋土からなる。II層は上位からII a～II n層に分層されている。分析に用いる土壌試料は、試料番号2,4,8,10,11,12の7点を選択した。これらの試料を対象として、放射性炭素年代測定4点、花粉分析・微粒炭分析12点、微細物分析8点、土壌理化学分析3点、粒度分析3点を実施する。分析試料及び分析項目一覧を第17表に示す。

第17表 分析試料及び分析項目一覧

試料名	分析項目*				備考
	14C	花粉	微細	土理	
フテ6-I4-A	炭溜まり1	○		○	トレンチ最下部
	炭溜まり2	○			西壁ブロック
	炭溜まり3	○			
	炭化物1	○			階段状遺構覆土
	炭化物3	○			II s層
	中央土坑	○	○	○	
	マージ再堆積		○	○	西壁ブロック
	上位薄い黒		○	○	○
マージ再堆積直上黒		○	○	○	西壁ブロック
マージ再堆積		○		○	西壁ブロック
フテ6-J5-A	2		○		II d層
	4		○		II f層
	6		○		II h層
	8		○	○	II j層
	10		○	○	II i層
	11		○		II m層
	12		○	○	II n層
合計点数	6	12	8	3	

\*14C：放射性炭素年代測定、花粉：花粉分析・微粒炭分析、微細炭分析、土理：土壌理化学分析

#### [2] 調査地域の地形層序

調査範囲は、宜野湾市域に存在する更新世の段丘面のうち、中位段丘下位面(50～90m)に立地している。東側を新城古集落、西側を上原濡原遺跡の範囲内にある。

調査地西側は上原濡原遺跡の範囲内にあり、今回の試掘調査では谷を埋める堆積物が確認されている。この谷は、今回の調査結果から推測すると、現時点では、第92図・第93図ように蛇行している。また、宜野湾市史(自然編)に示される地形分類図では、溶食凹地となっていることから、ウバーレの可能性も指摘される。層序は、現地表面の下位に、近世からグスク時代と推測される、灰褐色～暗灰褐色の砂質シルトからなる耕作土、その下位に灰褐色シルト質粘土～粘土のマージの再堆積と推測される土層が累重している。このマージの再堆積土層からは、フテ6-J5-Aで、仲原式土器が出土し、先の調査でも、多くの遺構・遺物が検出されている。

調査区の中央部はI層が厚く累重している。現地表および旧地表面は調査区東側で高く、西側で低いため、

何らかの目的のために東側のレベルに合わせ盛り土をしたようである。

調査区東側も、改変による影響を受けている。北側は、マージが削平されており、緩やかな斜面を形成している。中央部は、マージが厚く累重し削平の影響は少ないが、その南側は、マージに及ぶ削平を受けているが、その後、土を入れ整地がなされている。I層とマージの境界を見る限り、時間的間隙はほとんどないものと推測される。

### [3] 結果

#### (1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第18表に、暦年較正結果を第19表に示す。試料の測定年代(補正年代)は、フテ6-I4-アの炭溜まり1が3,140 ± 30BP、炭化物1が350 ± 20BP、炭化物3が340 ± 20BP、中央土坑が480 ± 30BP、炭溜まり2が3,130 ± 40BP、炭溜まり3が3,160 ± 40の値を示す。

第18表 分析試料及び分析項目一覧

地点名	試料名	試料の質	補正年代 BP	δ 13C (‰)	測定年代 BP	測定機関番号
フテ6-I4-ア	炭溜まり1	炭化物	3,140 ± 30	-24.25 ± 0.42	3,120 ± 30	IAAA-72613
フテ6-I4-ア	炭溜まり2	炭化物	3,130 ± 40	-25.24 ± 0.67	3,130 ± 30	IAAA-72631
フテ6-I5-ア	炭溜まり3	炭化物	3,160 ± 40	-22.67 ± 0.87	3,120 ± 30	IAAA-72632
フテ6-I4-ア	炭化物1	炭化物	350 ± 20	-6.13 ± 0.44	40 ± 20	IAAA-72614
フテ6-I4-ア	炭化物3	炭化物	340 ± 20	-5.19 ± 0.51	20 ± 20	IAAA-72615
フテ6-I4-ア	中央土坑	炭化物	480 ± 30	-7.06 ± 0.44	190 ± 20	IAAA-72616

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2) BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第19表 暦年較正結果

地点名	試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (ca)						相対比	測定機関番号				
			σ	cal BC	1,440	-	cal BC	1,394			cal BP	3,390	-	3,344
フテ6-I4-ア	炭溜まり1	3,137 ± 28	σ	cal BC	1,493	-	cal BC	1,473	cal BP	3,443	-	3,423	0.052	IAAA-72613
				cal BC	1,463	-	cal BC	1,375	cal BP	3,413	-	3,325	0.889	
			2σ	cal BC	1,340	-	cal BC	1,319	cal BP	3,290	-	3,269	0.059	
				cal BC	1,440	-	cal BC	1,381	cal BP	3,390	-	3,331	0.899	
フテ6-I4-ア	炭溜まり2	3,126 ± 35	σ	cal BC	1,334	-	cal BC	1,323	cal BP	3,284	-	3,273	0.101	IAAA-72631
				cal BC	1,493	-	cal BC	1,475	cal BP	3,443	-	3,425	0.037	
			2σ	cal BC	1,461	-	cal BC	1,311	cal BP	3,411	-	3,261	0.963	
				cal BC	1,492	-	cal BC	1,478	cal BP	3,442	-	3,428	0.157	
フテ6-I4-ア	炭溜まり3	3,156 ± 36	σ	cal BC	1,458	-	cal BC	1,406	cal BP	3,408	-	3,356	0.843	IAAA-72632
				cal BC	1,503	-	cal BC	1,378	cal BP	3,453	-	3,328	0.973	
			2σ	cal BC	1,337	-	cal BC	1,321	cal BP	3,287	-	3,271	0.027	
				cal AD	1,482	-	cal AD	1,522	cal BP	468	-	428	0.442	
フテ6-I4-ア	炭化物1	351 ± 23	σ	cal AD	1,574	-	cal AD	1,626	cal BP	376	-	324	0.558	IAAA-72614
				cal AD	1,459	-	cal AD	1,529	cal BP	491	-	421	0.447	
			2σ	cal AD	1,543	-	cal AD	1,634	cal BP	407	-	316	0.553	
				cal AD	1,492	-	cal AD	1,524	cal BP	458	-	426	0.328	
フテ6-I4-ア	炭化物3	340 ± 24	σ	cal AD	1,558	-	cal AD	1,602	cal BP	392	-	348	0.471	IAAA-72615
				cal AD	1,612	-	cal AD	1,631	cal BP	338	-	319	2.000	
			2σ	cal AD	1,473	-	cal AD	1,635	cal BP	477	-	315	1.000	
				cal AD	1,423	-	cal AD	1,440	cal BP	527	-	510	1.000	
フテ6-I4-ア	中央土坑	483 ± 24	σ	cal AD	1,413	-	cal AD	1,446	cal BP	537	-	504	1.000	IAAA-72616
			2σ	cal AD	1,413	-	cal AD	1,446	cal BP	537	-	504	1.000	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIBREV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and P J Reimer)を使用。

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。

5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正は、測定誤差  $\sigma$ 、 $2\sigma$  双方の値を計算する。 $\sigma$  は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 $2\sigma$  は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$  の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差を  $\sigma$  として計算させた結果、フテ 6-I4-A の炭溜まり 1 は calBC 1,440-1,394、炭化物 1 は calAD 1,482-1,626、炭化物 3 は calAD 1,492-1,631、中央土坑は calAD 1,423-1,440、炭溜まり 2 は calBC 1,440-1,311、炭溜まり 3 は calBC 1,492-1,406 である。

### (2) 花粉分析・微粒炭分析

結果を第 20 表に示す。全体的花粉化石の産出状況が悪く、定量解析が行えるだけの個体数は得られなかった。フテ 6-I4-A の西壁下部ブロック、南壁ブロックの上位薄い黒、マーヅ再堆積から、わずかに草本花粉・シダ類孢子が検出されるのみであり、イネ属以外のイネ科、ヨモギ属、ミズワラビ属等が認められる。

フテ 6-I4-A の中央土坑、南壁ブロックのマーヅ再堆積直上黒、及びフテ 6-J5-A の 7 試料 (試料番号 2,4,6,8,10,11,12) は、無化石であった。

なお、微粒炭量は、フテ 6-I4-A の中央土坑で約 2,400 個 /cc、南壁ブロックの上位薄い黒で約 3,200 個 /cc、マーヅ再堆積直上黒で約 3,500 個 /cc とやや多く認められるのに対し、フテ 6-I4-A の西壁下部ブロック、南壁ブロックのマーヅ再堆積、フテ 6-J5-A の 7 試料からは、ほとんど検出されず、いずれも 100 個体未満 /cc であった。

### (3) 微細物分析

結果を第 21 表に示す。6-I4-A の西壁下部ブロック、南壁ブロックの上位薄い黒、マーヅ再堆積直上黒と、フテ 6-J5-A の試料番号 8 は、粒径 0.5mm の篩を通り抜ける泥主体で、炭化材や分析残渣は確認されなかった。他の試料からは炭化材が検出され、6-I4-A の炭溜まりで最も多い (1.19g、最大径 8mm 程度)。

第 20 表 花粉分析・微粒炭分析結果

種 類	フテ6-I4-A					フテ6-J5-A					
	中央 土坑	西壁 下部 ブロック	南壁 ブロック			東壁					
試料番号			上位 薄い黒	マーヅ 再堆積 直上黒	マーヅ 再堆積	2	4	6	8	10	11
草本花粉											
イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のイネ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
シダ類孢子											
ミズワラビ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子	-	1	2	-	3	-	-	-	-	-	-
合 計											
木本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
草本花粉	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0
シダ類孢子	0	1	3	0	3	0	0	0	0	0	0
総計	0	1	4	0	4	0	0	0	0	0	0
1ccあたりの微粒炭量[個]	2400	<100	3200	3500	<100	<100	<100	<100	<100	<100	<100

1)微粒炭量については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている

2)<100:100個体未満

その他に、植物片や昆虫などが微量回収された。

#### (4) 土壤理化学分析

理化学分析結果を第 22 表に示す。pH(H<sub>2</sub>O) は、7.2-7.3 を示し、3 点間での差異は小さい。有機炭素量、全窒素量および C/N 比では、上位薄い黒およびマーヅ再堆積直上黒は、それぞれ、0.8-0.9%、約 0.1%、9 という値を示す。マーヅ再堆積は、それら 2 点に比べて、有機炭素量はやや低い約 0.6% であるが、全窒素量はほぼ同量であるため、C/N 比はやや低い 5 を示す。また、腐植酸の形態は、上位薄い黒およびマーヅ再堆積直上黒は B 型とされたが、マーヅ再堆積では MI の測定は不能であった。

全鉄含量は、上位薄い黒およびマーヅ再堆積直上黒で約 4%、マーヅ再堆積はそれよりもやや高い 5% であった。また、酸性シュウ酸塩可溶鉄量とジチオナイトクエン酸可溶鉄量から、上位薄い黒およびマーヅ再堆積直上黒では土壤中の鉄分の多くが、造岩鉱物の風化により遊離した遊離酸化鉄の状態に土壤中に含まれており、マーヅ再堆積では鉄分の半分程度が遊離酸化鉄となっている。3 点の試料の遊離酸化鉄の活性度は 0.2-0.3 の範囲内にあり、結晶化指数は 0.4-0.5 を示す。

粒度組成では、上位薄い黒およびマーヅ再堆積直上黒の 2 点は、細砂約 30%、シルト約 30%、粘土 30-40% の軽埴土に分類され、マーヅ再堆積は、細砂約 10%、シルト約 40%、粘土約 50% の重埴土に分類される。

第 21 表 微細物分析結果

試料		分析量(g)	種類名	重量(g)	残渣(g)	備考
フテ6-I4-ア	炭溜まり	133	炭化材	1.19	7.85	最大径8mm
			植物片	0.02		
			昆虫	<0.01(2)		
	中央土坑	623	炭化材	0.02	7.35	最大径3.3mm
	西壁下部ブロック	172			無し	
フテ6-J5-ア	上位薄い黒	132			無し	南壁ブロック
			マーヅ再堆積直上黒	110		無し
	8	251			無し	
	10	196	炭化材	<0.01(5)	0.72	最大径0.8mm
	12	320	炭化材 植物片	0.01 <0.01(1)	4.64	最大径2.5mm

注) 重量0.01g未満は(個数)を併記している

第 22 表 土壤理化学分析結果

地点名	試料名	土色	pH (H <sub>2</sub> O)	有機炭素 (%)	全窒素 (%)	C/N	腐植		全鉄 (Fe <sub>t</sub> ) (%)	DCB 可溶鉄 (Fe <sub>d</sub> ) (%)	酸性シュウ酸塩可溶鉄 (Fe <sub>o</sub> ) (%)	活性度 (Fe <sub>o</sub> /Fe <sub>d</sub> )	結晶化指数 (Fe <sub>o</sub> -Fe <sub>d</sub> )/Fe <sub>t</sub>	粒度組成					
							MI	腐植酸型						粗砂 (%)	細砂 (%)	シルト (%)	粘土 (%)	土性	
フテ6-I4-ア	南壁 上位薄い黒	10YR3/4	暗褐	7.2	0.78	0.09	9	1.73	B	3.83	2.41	0.53	0.22	0.49	2.2	32.0	32.0	33.8	LiC
	マーヅ 直上黒	10YR3/3	暗褐	7.2	0.89	0.10	9	1.73	B	4.11	2.52	0.68	0.27	0.45	1.7	27.6	32.9	37.8	LiC
	再堆積 マーヅ再堆積	10YR4/4	褐	7.3	0.58	0.12	5	N.D.	-	5.47	2.76	0.73	0.26	0.37	0.1	11.4	35.0	53.5	HC

備考)

- (1) 土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。
- (2) C/N:有機炭素量/全窒素量
- (3) 全鉄(Fe<sub>t</sub>):蛍光X線分析による。
- (4) 活性度:Fe<sub>o</sub>/Fe<sub>d</sub>
- (5) 結晶化指数:(Fe<sub>o</sub>-Fe<sub>d</sub>)/Fe<sub>t</sub>
- (6) N.D.:検出限界以下

## [4] 考察

### (1) 年代観

堆積層の年代観を見ると、フテ 6-I4-アの炭溜まり 1-3 は、同一の遺構から出土した炭化材で約 3,100 年前 (calBC 1,440 ~ calBC 1,394、calBC 1,440 ~ calBC 1,311、calBC 1,492 ~ calBC 1,406) を示しまとまった値になった。フテ 6-I4-アの炭化物 1、炭化物 3、中央土坑は 15 世紀中頃 ~ 17 世紀中頃 (calAD 1,482 ~ calAD 1,626、calAD 1,492 ~ calAD 1,631、calAD 1,423 ~ calAD 1,440) と新しい値を示す。層位関係を見ると、炭化物 1、炭化物 3、中央土坑は、階段状遺構の様子を呈する遺構覆土から採取されているのに対し、炭溜まりは調査トレンチ最下部より採取されていることから、地層の累重関係と矛盾しない。炭溜まり 1-3 が採取された黄褐色を呈する土層は、調査所見からマーヅの再堆積層と推測されており、埋没谷内の主体となる堆積物となり、後述する土壤特性でもその結果を支持している。したがって、得られた年代は、再堆積の年代値を示していると推定される。また、遺構覆土の可能性が指摘される土壤は、いずれも同時期の年代を示すことから、遺構機能時の年代を示している可能性がある。フテ 6-J5-アにも見られる再堆積土層中からは、仲原式土器が出土していることから、その層位的関係も注目されることである。

## (2) 古植生

花粉分析の結果からは花粉化石がほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。わずかに検出された花粉化石は、花粉外膜が破損・溶解していることから、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失したと考えられる。

わずかに検出された種類をみると、イネ属以外のイネ科、ヨモギ属のみである。また、フテ6-I4-アの南壁ブロック上位薄い黒からは、水湿地に生育するミズワラビ属も検出されることから、周囲に水湿地も存在した可能性が指摘される。

一方、微細物分析の結果では、フテ6-I4-アの炭溜まり、中央土坑、フテ6-J5-アの試料番号10・12から種実遺体は検出されず、炭化材が検出されるのみである。検出された炭化材は、当時の遺跡周辺に生育していたものに由来すると考えられる。特に、フテ6-I4-アの炭溜まりは、樹種同定可能な大きさ(径4mm以上)を含む炭化材が多量検出されることから、今後は炭化材同定や年代測定を実施し、遺構の年代観や周辺植生、植物利用について総合的に検討することが望まれる。

## (3) 土壌特性

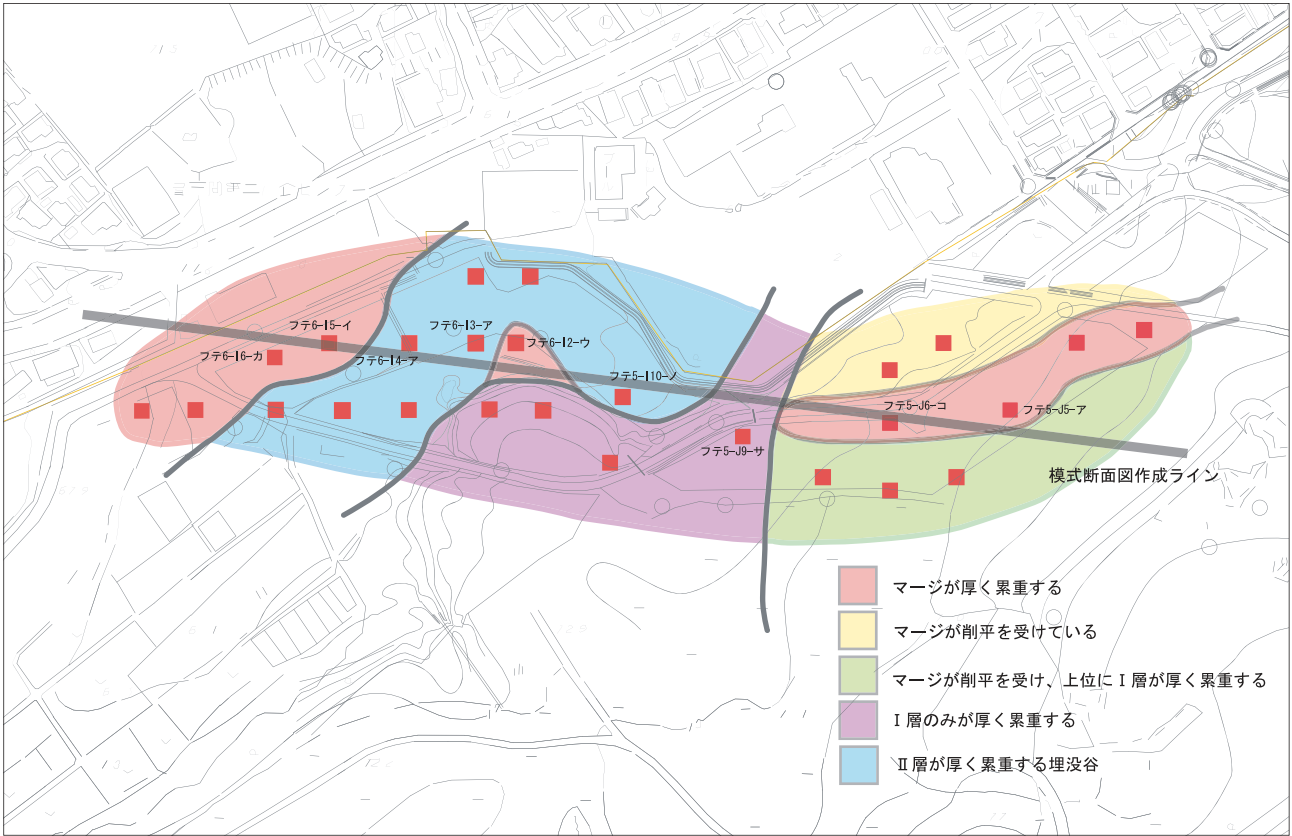
これまでに当社では、宜野湾市普天間飛行場基地内において、琉球石灰岩からなる段丘の表層に形成された土壌(いわゆる島尻マーヅ)について、土壌理化学分析例を蓄積しつつある(パリノ・サーヴェイ株式会社,2005,2006,2007)。同事例では、段丘上に形成された土壌を主に色調と粒径による層相から、上位よりI-VII層までの層位に分層している。このうち、I層は現表土、盛土、造成土であり、II層は鈍い黄褐色～暗褐色を呈する旧表土、旧耕作土、III層以下は概ね褐色を呈するいわゆるマーヅであり、粘土分あるいは砂分の多少と色調の若干の違いにより、上記の分層がなされている。これまでの分析結果では、II層とIII層以下との間に比較的明瞭な土壌理化学性の違いが認められている。

今回の試料のうち、上位薄い黒およびマーヅ再堆積直上黒の特性は、有機炭素量や全窒素量および腐植の形態において、これまでの普天間飛行場基地内におけるIII層以下の層よりは、II層の値に近似している。ただし、詳細に見れば、有機炭素量はこれまでのII層の値(0.6%前後)よりも若干高い傾向にあると言える。上位薄い黒およびマーヅ再堆積直上黒とされた各層位においては、有機物の供給量がやや多くなるような環境にあったことが推定される。

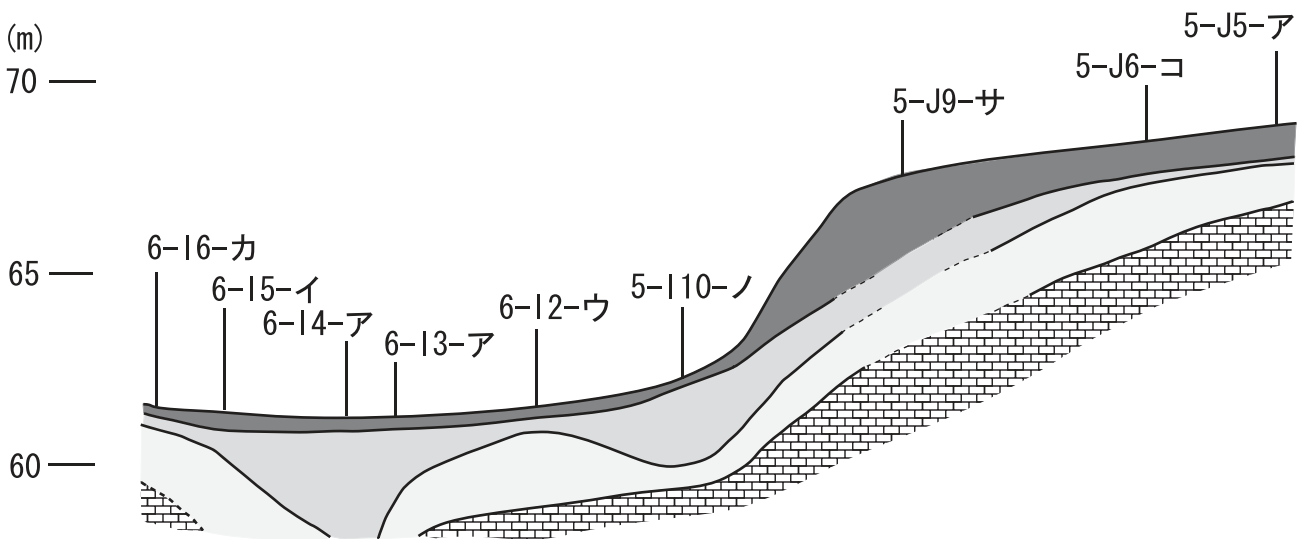
また、上位薄い黒およびマーヅ再堆積直上黒の遊離酸化鉄の状態は、これまでのII層の分析値(活性度は0.1未満、結晶化指数は0.8-0.9)に比べると、活性度は若干高く、結晶化指数は若干低い傾向にある。このことは、これらの層位の方が、結晶質の遊離酸化鉄(ヘマタイトやゲータイトなど)の割合が若干少ないことを示している。一般に結晶質の遊離酸化鉄は、より風化が進行するとより多く生成することから、これらの層位は、これまでのII層に比べて、やや風化の進行程度が遅い、すなわちやや新しい層位である可能性があると考えられる。

なお、松井(1988)によれば、日本のような温帯湿潤地域における土壌層位のA層(腐植の集積する最上位の層位)のC/N比は8-12であるとされている。また、永塚(1973)は、遊離酸化鉄の活性度が0.4以下、かつ結晶化指数が0.5以下である土壌は黄褐色森林土に分類されることを示している。これらの特性と比較すると、上位薄い黒およびマーヅ再堆積直上黒の各層は、黄褐色森林土のA層に相当するといえる。

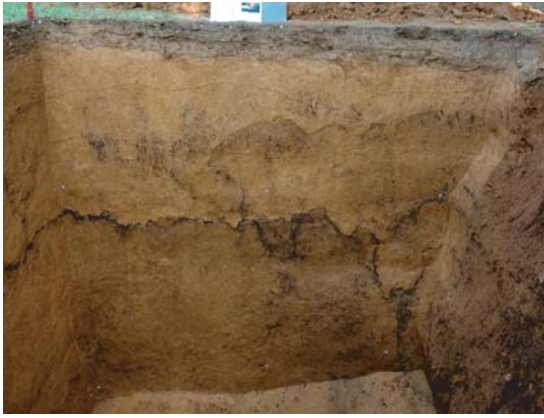
一方、マーヅ再堆積とされた試料の土壌特性は、マーヅに相当するIII層以下のこれまでの分析値に比べて、有機炭素含量(0.2%程度)とC/N比(2-3)において若干高い値を示す。ただし、MIの測定が不能であることは共通しており、特性としては、III層以下の層位に近いと言える。遊離酸化鉄の状態や粒度組成などは、これまでのIII層以下の層位にも認められている値の範囲にある。これらのことから、「マーヅ再堆積」とされた現地調査所見は、分析値からもほぼ支持される。



第92図 第6期試掘坑の基底および累重様式の平面分布



第93図 調査範囲の地形と各地点の状況 (1)



フテ6-I6-カ



フテ6-I2-ウ



フテ6-I5-イ



フテ5-J9-サ



フテ6-I4-ア



フテ6-I3-ア



フテ5-I10-ノ



フテ5-J6-コ

図版 14 調査範囲の地形と各地点の状況 (2)



#### 第4節 小結

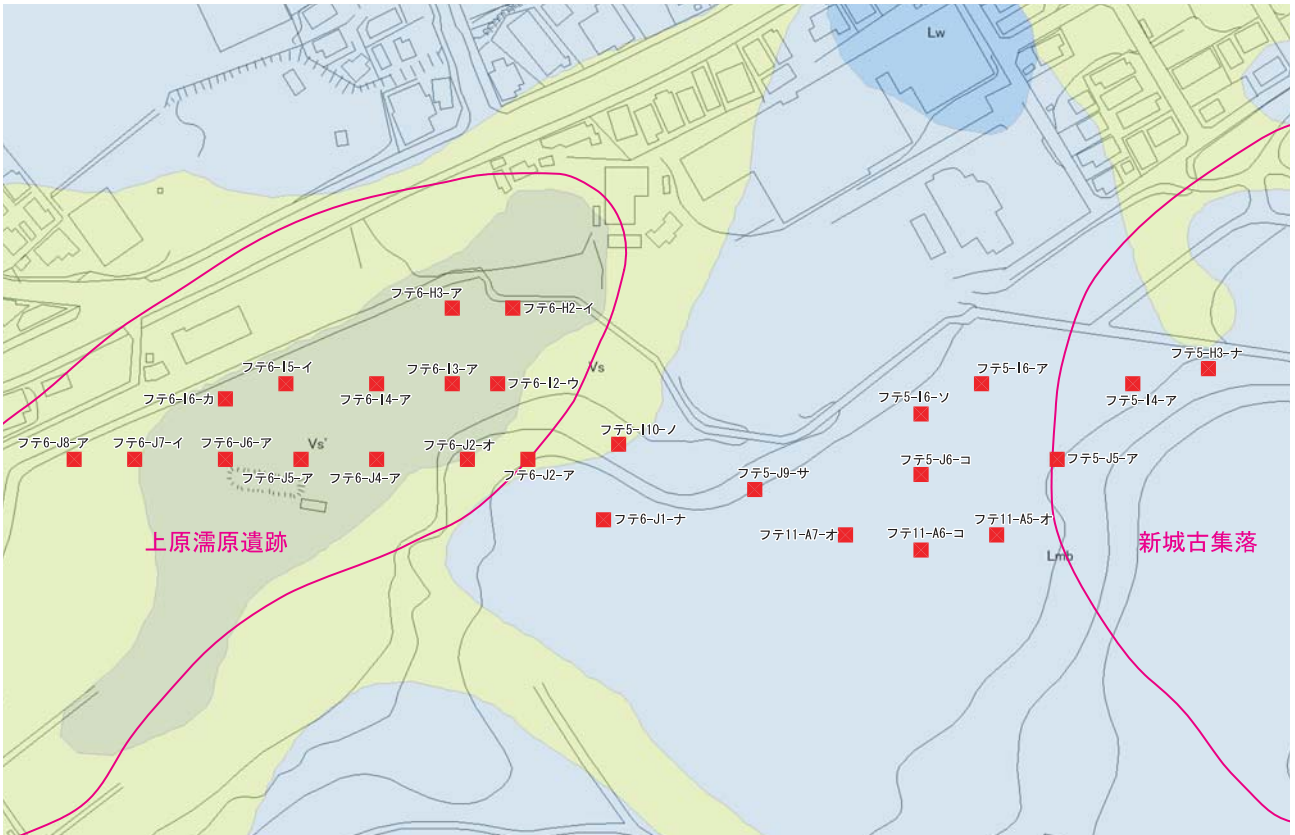
平成19年度に実施した試掘調査26箇所の成果について報告した。

第一地区は新城集落の北西側を試掘している。地形は集落周辺であったため戦前の地形図からも凹凸が無く、旧地形もマージや石灰岩盤からもほぼ平坦である。米軍による飛行場建設が大規模になされており、旧表土は一切無く、代わってコーラルやセメント片などが混ざる造成層がすべての試掘坑にみられた。また、瓦等が大量に混ざった造成層もあり、重機等により一気に屋敷を押しつぶして飛行場建設を実施したことが窺える。しかし、その中でも新城集落の屋敷跡である柱穴や集落のスージ（集落内の里道）脇の側溝とおもわれる溝状遺構が検出されており、それは明治36年の土地利用図でも確認されるものである。これらの検出された遺構は新城古集落遺跡の範疇のものと容易に予想され、これら遺構を覆うⅡ層もわずかではあるが広がっており、造成をのがれた遺構が残されている可能性が高い。

第二地区は調査区の西側、上原濡原遺跡一帯を調査した。周囲は低まった地域にあり、旧地形は各試掘坑のマージ、石灰岩岩盤からも谷地形を示すものである。上原濡原遺跡一帯の第二地区からは溝状遺構が2箇所より検出されている。これらも明治36年土地利用図の側溝ないしは排水路跡とおもわれる。耕作痕が検出された試掘坑と断面はいずれも半円形で性格不明なPitが検出された試掘坑が各2箇所あり、ほか1箇所からは段をいくつか伴った階段状遺構が検出されている。深さは約1.2mだが、全体的な規模、形ともわからず、性格不明な遺構である。これまで例をみないもので、自然科学分析では周辺に水湿地等の可能性が示唆され、興味深いものである。C14では15世紀中頃からのグスク時代を示しており、これまでの状況を支持するものである。階段状遺構は試掘調査では規模に限りがあるため、今回の調査では性格は判然とせず、今後調査区を広げて対応する必要がある。黄褐色土より検出された炭溜り遺構のC14では約3100年前で、出土した土器年代より古い結果が示されている。



第94図 明治36年土地利用図と試掘箇所



第95図 地形分類図と試掘箇所



第96図 検出遺構配置図(1992年と2007年試掘調査)



第6期試掘調査地遠景  
東より  
左の木々は新城古集落の屋敷林の名残



第6期試掘調査遠景  
南東より  
新城古集落位置より上原濡原を見る



第6期試掘調査近景  
北西より  
上原濡原より丘陵を見る

図版 15 第6期調査区 遠景・近景



第6期試掘調査状況  
重機による掘削状況



第6期試掘調査状況  
重機掘削後の壁面清掃



第6期試掘調査状況  
壁面断面図作成状況と  
自然科学分析調査状況

図版 16 第6期調整区 作業状況

## 第Ⅵ章 結 語

今回、平成 18 年度および平成 19 年度に実施した試掘調査の成果を述べてきた。これまでの成果を今一度まとめて、今後の課題等を明らかにして本報告書のまとめとしたい。

平成 18 年度に実施した第 5 期試掘調査は新城東原での 43 箇所を試掘調査で 4 箇所より遺構が検出されている。フテ 10-G10-ス、フテ 11-G1-コ、フテ 11-G1-スの 3 箇所からは不定形なピットが群で検出されている。これらピット群はいずれもグスク時代(中世)相当とされる黒褐色土の③層より検出されている。これまでの上原濡原遺跡やタマタ原遺跡等の基地内遺跡の調査状況を検討するとフテ 10-G10-ス、フテ 11-G1-コは③層とマージ層との不整合な状況からも鋤跡等の耕作痕であると考えられる。しかし、フテ 11-G1-スは風化した石灰岩礫が入り、上記の耕作痕とは考えられない。タマタ原遺跡で検出された植栽痕との関連性が指摘されるが、いまひとつ判然としない。1 箇所からはフテ 11-I1-ナより溝状遺構が検出されている。層序より近世から近代にかけての遺構とおもわれる。これらの地域は明治 36 年土地利用図、昭和 20 年空中写真、また、聞き取りからも近世から畑地として利用されている。調査区西側と南側は造成等により大規模な土地改変がなされており、詳細な状況は判然としない、しかし、北東側一帯は旧耕作土が残り、グスク時代と想定される包含層が確認できる箇所が偏ってみられ、それは、自然科学分析からも指摘されているとおり埋没谷と考えられ、上記遺構も検出されることから、新規遺跡もしくは上原東原遺跡の広がりと考えられることから、今後範囲確認調査等を実施する必要がある。

平成 19 年度に実施した第 6 期試掘調査は新城区の新城原、前原、上原濡原の 26 箇所を試掘調査で、10 箇所から遺構が検出している。新城古集落遺跡一帯の第一地区からは溝状遺構が 3 箇所より検出された。明治 36 年土地利用図と合致することから、いずれも新城集落内にはりめぐらされた道路脇の側溝と思われる。また、1 箇所より柱穴が 3 基検出されており、それぞれの間隔は 1 間もしくは 1 間半を測り新城集落の屋敷跡の一部とおもわれる。これらの検出された遺構の試掘坑は現在、把握している新城古集落遺跡の範囲外であり、遺跡は西側へ広がるものとおもわれる。範囲確認調査等を実施し確認する必要がある。

上原濡原遺跡の主要な遺構は今回の試掘調査と 1992 年の発掘調査においても最下層にみられる黄褐色土層とその上位層である黒褐色土層より検出されている。黄褐色土層中より炭だまり遺構も検出されている。過年度の発掘調査でも黄褐色土層からはこの遺構の他、畝間状遺構、土坑に伴って貝塚時代中期とおもわれる土器も出土し、今回の試掘調査でもそれとほぼ同様な成果となったが、炭溜りの C14 では約 3100 年前を示しており、矛盾する結果となっている。1992 年調査も含めての更なる検討が必要となろう。黒褐色土層より検出されている階段状遺構はこれまでの基地内遺跡の調査状況と C14 からグスク時代とされているが、規模、その性格は不明で詳細な調査が必要となろう。

上原濡原遺跡一帯の試掘調査では土地改変などは小規模なものにとどまっていることが判明している。各試掘坑のマージ、石灰岩盤ともに北ないしは南に傾斜する地形を示しており、これらの傾斜する先はフテ 6-I4-アとフテ 6-I5-アを結ぶ一帯と推測され、この一帯に検出された上記遺構を包含したⅡ層で特に③(黒褐色土層)、⑤(黄褐色土層)のマージが再堆積した埋没谷が存在する。これらは地形分類図の溶食凹地と重なることから、今回試掘調査を実施していない調査区西側の黙認耕作地にも当然遺跡が広がるものと推測される。また、フテ 5-I10-ノは溶食凹地からも外れるが、③、⑤層ともに確認できることから、南東側にも遺跡が広がる可能性がある。今後試掘調査ないしは範囲確認調査を実施し、遺跡範囲の把握の必要がある。

<参考文献>

- |                                |      |   |
|--------------------------------|------|---|
| 宜野湾市教育委員会                      | 1982 | 『宜野湾市の遺跡』 宜野湾市文化財調査報告書第 4 集                                     |
| 宜野湾市教育委員会                      | 1982 | 『宜野湾市史一市民の戦争体験記録一』 第 3 巻資料編 2                                   |
| 大城逸朗・新垣義夫                      | 1984 | 『洞穴』 宜野湾市文化財調査報告書第 6 集  |
| 宜野湾市史編集委員会編                    | 1985 | 『宜野湾市史 民俗』 第 5 巻 資料編 4  |
| 宜野湾市教育委員会                      | 1989 | 『土に埋もれた宜野湾』 宜野湾市文化財調査報告書第 10 集                                  |
| 宜野湾市史編集委員会編                    | 1991 | 『写真集ぎのわん』 宜野湾市史別冊   |
| 宜野湾市教育委員会                      | 1994 | 『宜野湾市史一通史編一』 第 1 巻  |
| 宜野湾市教育委員会                      | 1994 | 『真志喜森川原遺跡』 宜野湾市文化財調査報告書第 18 集                                   |
| 宜野湾市教育委員会                      | 1995 | 『大山岳之佐久原第一遺跡 新城古集落遺跡』<br>宜野湾市文化財調査報告書第 21 集                     |
| 宜野湾市教育委員会                      | 1995 | 「上原濡原遺跡発掘調査記録」 宜野湾市文化財保護資料第 43 集                                |
| 宜野湾市教育委員会                      | 1996 | 「野嵩タマタ原遺跡の畑址」『上原前原遺跡発掘調査記録』<br>宜野湾市文化財保護資料第 43 集                |
| 宜野湾市教育委員会                      | 1997 | 『宜野湾クシヌウタキ』 宜野湾市文化財調査報告書第 25 集                                  |
| 宜野湾市教育委員会                      | 1998 | 「大謝名カンジャーガマ岩陰遺跡の鍛冶関連遺物」<br>宜野湾市文化財調査報告書第 29 集                   |
| 宜野湾市教育委員会                      | 1998 | 『ぎのわん市の戦跡』  |
| 宜野湾市教育委員会                      | 2000 | 『宜野湾市史』 第 9 巻資料編 8 自然   |
| 宜野湾市教育委員会                      | 2001 | 『自然ガイドブック』  |
| 宜野湾市教育委員会                      | 2004 | 「基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」 宜野湾市文化財調査報告書第 36 集                             |
| 宜野湾市教育委員会                      | 2005 | 「埋蔵文化財自然科学分析調査基本マニュアル埋蔵文化財自然科学<br>分析導人調査業務報告」 宜野湾市文化財保護資料第 60 集 |
| 宜野湾市教育委員会                      | 2005 | 「嘉数テラガマ洞穴遺跡」 宜野湾市文化財調査報告書第 35 集                                 |
| 宜野湾市教育委員会                      | 2005 | 「基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」 宜野湾市文化財調査報告書第 38 集                             |
| 宜野湾市教育委員会                      | 2007 | 「基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」 宜野湾市文化財調査報告書第 39 集                             |
| 宜野湾市教育委員会                      | 2008 | 「基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」 宜野湾市文化財調査報告書第 41 集                             |
| 沖縄県教育委員会                       | 1993 | 「湧田古窯跡（Ⅰ）」 沖縄県文化財調査報告書第 111 集                                   |
| 沖縄県教育委員会                       | 1995 | 「湧田古窯跡（Ⅱ）」 沖縄県文化財調査報告書第 121 集                                   |
| 沖縄県立埋蔵文化財センター                  | 2001 | 「天界寺跡Ⅰ」 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 2 集                                 |
| 沖縄県立埋蔵文化財センター                  | 2002 | 「天界寺跡Ⅱ」 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 8 集                                 |
| 沖縄県立埋蔵文化財センター                  | 2002 | 「基地内文化財Ⅱ」 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 11 集                              |
| 沖縄県立埋蔵文化財センター                  | 2004 | 「基地内文化財Ⅲ」 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 24 集                              |
| 沖縄県立埋蔵文化財センター                  | 2006 | 「基地内文化財Ⅳ」 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 38 集                              |
| 沖縄県立埋蔵文化財センター                  | 2007 | 「渡地村跡」 臨港道路那覇 1 号線整備に伴う緊急発掘調査報告書<br>沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 46 集    |
| Gad El-Qady・西村 康・<br>金城亀信・牛島恵輔 | 2005 | 「沖縄県普天間地域の 3 次元物理探査法による遺跡探査」『物理探査』<br>第 58 巻第 5 号 物理探査学会        |

## 報告書抄録

ふりがな	きちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書籍	基地内埋蔵文化財調査報告書V							
福書名	基地内遺跡ほか発掘調査事業－普天間飛行場基地内一遺跡発掘事前総合調査(平成18・19年度試掘調査)							
巻次	－							
シリーズ名	宜野湾市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第44集							
編著者名	仲村 健・城間 肇・伊藤 圭・上田圭一・斎藤崇人・橋本真紀夫							
発行機関	沖縄県宜野湾市教育委員会							
所在地	郵便番号 901-2710 沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号 TEL 098-839-4430							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
普天間飛行場基地内所在の遺跡事前総合調査	沖縄県宜野湾市新城上原	4720		26° 16′ 40″  47″	H18 127° 46′  18″	2007 0213  2007 1012	H18 約41000㎡ H19 約31000㎡	大規模な開発が予想される 普天間飛行場内 試掘調査 平成18年度 (43箇所) 平成19年度 (26箇所)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新城古集落遺跡	集落跡	近世	柱穴 溝状遺構	土器 石器 沖縄産陶器		グスク時代の階段状遺構 貝塚時代中期の 炭だまり遺構  溝状遺構が多数検出		
上原濡原遺跡	生産遺跡	貝塚時代～中期	階段状遺構 炭だまり遺構 ピット群 溝状遺構					
要約	<p>平成18年度の試掘調査では新城集落の畑地と目される近世相当とグスク時代相当の層序の広がり確認されている。また、上原東原遺跡の迫地状の地形が広がっているとおもわれる。</p> <p>平成19年度の試掘調査では上原濡原遺跡より食糧生産に関わるとおもわれる階段状遺構が検出され、その下位層より過年度調査に検出された炭だまり遺構も検出される。また、現在把握している新城古集落遺跡の範囲外からも遺構が検出されている。</p>							

宜野湾市文化財調査報告書 第44集

## 基地内埋蔵文化財調査報告書V

基地内遺跡ほか発掘調査事業

－ 普天間飛行場基地内－

遺跡発掘事前総合調査  
(平成18・19年度試掘調査)

発行年 2009(平成21年)3月31日

編集発行 沖縄県宜野湾市教育委員会

住所 〒901-2710  
沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号

印刷 株式会社ちとせ印刷  
TEL 098-879-5814